

全学教育外国語に関する意識調査と
北大生の英語力の変化

外国語教育センター
外国語教育将来構想ワーキンググループ

河合 靖・清水賢一郎 編

北海道大学

全学教育外国語に関する意識調査と北大生の英語力の変化

河合 靖・清水賢一郎 編

北海道大学外国語教育センター

目 次

はしがき	1
河合 靖・清水賢一郎	
第1章 北大新入生の英語力の変化——1992年度・2002年度・2013年度の比較——	3
辻本 篤・河合 靖・園田勝英・土田映子・原田真見	
第2章 教員アンケートによる英語学習に関する意識調査(2013)——分析と考察——	11
原田真見・辻本 篤・河合 靖・園田勝英・土田映子	
第3章 1年次学生アンケートによる英語学習に関する意識調査(2013)——分析と考察——	33
土田映子・原田真見・辻本 篤・河合 靖・園田勝英	
第4章 高年次学生アンケートによる英語学習に関する意識調査(2013)——分析と考察——	55
河合 靖・園田勝英・土田映子・原田真見・辻本 篤	
第5章 英語Ⅱオンライン授業の現状と課題	71
園田勝英・土田映子・原田真見・辻本 篤・河合 靖	
第6章 教員アンケートによる初習外国語に関する意識調査(2013)——分析と考察——	83
寺田龍男・清水賢一郎・増田哲子	
第7章 1年次学生アンケートによる初習外国語に関する意識調査(2013)——分析と考察——	97
増田哲子・寺田龍男・清水賢一郎・	
第8章 高年次学生アンケートによる初習外国語に関する意識調査(2013)——分析と考察——	113
清水賢一郎・増田哲子・寺田龍男	
参考資料	
1. 英語習熟度テスト問題サンプル	131
2. 北海道大学全学教育英語カリキュラムに関するアンケート(教員アンケート)	132
3. 北海道大学全学教育初習外国語【英語以外】カリキュラムに関するアンケート(教員アンケート)	134
4. 北海道大学全学教育英語・初習外国語カリキュラムに関するアンケート(1年次学生アンケート)	136
5. 北海道大学全学教育英語・初習外国語カリキュラムに関するアンケート(高年次学生アンケート)	140

はしがき

本報告書は北海道大学の全学教育外国語（英語、及び英語以外）に関して教員・学生を対象に実施した意識調査（アンケート）の結果、並びに習熟度テストの結果を通じて明らかになった北大生の英語力の推移変化を報告し、その現状分析と課題認識から今後のあり方を考察するものである。

近年、大学をめぐる環境は実に激しい動きを見せている。外国語教育/学習についても例外ではない。特に「国際性の涵養」を根幹的理念の一つとして掲げる北海道大学において外国語教育はいかにあるべきかは、その基盤をなすものと言っても過言ではないだろう。そうした中、北海道大学外国語教育センターは、北大における外国語教育の責任部局として、これからの北大における外国語学習/教育のあるべき姿を遠望すべく、2013年4月、外国語教育将来構想ワーキンググループ（WG）を発足させた。

本WGでは、学士課程はもとより、大学院における外国語教育の展開をも視野に入れ、まさに文字どおり「全学」教育としての外国語教育のあり方について自ら積極的にイニシアチブをとってその将来像を構想し、カリキュラムデザインを検討することを任務とし、発足以来、大きく4つのプロジェクトに精力的に取り組んできた。①全学教育外国語科目（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、中国語、韓国語）の現状と課題の内部総括、②英語習熟度テストによる北大生の英語力の実態把握、③教員・学生へのアンケートによる外国語学習/教育に関する意識調査、④国内各大学の外国語カリキュラム・授業実践の視察調査、以上4つである。このうち①の内部総括は部内での議論の出発点として相互認識を高めるために実施したものでここでは割愛し、本冊では②と③について報告することとした。

まず、英語習熟度テストによる北大生の英語力の実態把握についてであるが、北大では、これまでも1992年度と2002年度に新1年生に対して同一の英語習熟度テストを実施し、英語力の推移を見てきた。新入生の英語力について技能別にどのような変化が見られるのかを調査することにより、その後の英語カリキュラムの改編や授業改善に役立ててきた。大学英語教育はこの20年で大きな変革をとげてきているが、特に近年は客観的な資料に裏打ちされた議論とそれにもとづいた教育改革が求められている。しかし、テストの種類が異なると、結果の比較が難しい。本学で実施してきた同一試験による英語習熟度調査は、まさに「定点観測」を可能にするという意味で非常に大きな意義をもつものである。前回の実施からほぼ10年が経過した時点で、今後の英語教育改善に向けた基礎資料とするため、今年度再び英語習熟度テストを実施した。その結果と1992年度および2002年度との比較考察を行ったのが本報告書の第1章である。そこからは、この約20年間における北大生の英語力の変化が如実に浮かび上がってくるだろう。

次に、教員・学生へのアンケートによる外国語学習/教育に関する意識調査については、同じく以前2002年度に、本学でも初めて当時の言語文化部カリキュラム検討委員会のもとで大規模なアンケート調査が実施され、報告書として刊行されている。今回はその継続調査ということになり、両者を比較分析することで、この10年ほどの認識の変化（と同時に、さほど変わっていない部分も含めて）が見事にあぶりだされている。特に今回は、前回も実施した2種類のアンケート（教員及び「必修」科目履修中の学生対象）に加え、さらにもう一つ、高年次学生、すなわち2年次～4年次の学部生と修士課程・博士後期課程の大学院生を対象とするアンケート調査も実施した。後者は知られる限り北大でも初めての試みであり、大学院課程をも含む「全学」外国語教育カリキュラムを構想するうえで貴重である。前回

2002年度の調査では、いままさに「必修」科目履修中の学生を対象としたが、渦中にある人間にはなかなか自身の姿や客観的な位置は見えないものだ。対して、高年次学生では、すでに「必修」単位を修得した後、一定の距離を置いて振り返ったときの認識を聞くことができる。しかもそれは教員とはまた別に、まだ学生として教育課程の階梯にある眼から見た認識であり、なかでも大学院在学中の立場で、いま大学院での研究に必要だと身をもって痛感している問題が切実に訴えかけられており、高い参考価値をもつものとなっている。

さらに本報告書では第5章として、英語Ⅱオンライン授業の現状と課題についても総括を行っている。前回2002年の調査時点では、英語のCALL授業はまだいくつかの演習授業におけるパイロット実施的な段階で、本格的に外国語科目の必修カリキュラムの重要組成部分には組み込まれていなかったが、現在それは英語Ⅱとして結実している。学生に対するアンケート結果、さらに担当教員へのヒアリング調査もまとめた今回の報告は、北大オリジナルの全学英語CALL授業実践として他大学からも注目度の高い英語Ⅱオンライン授業について、貴重な基礎資料となっていると言えよう。英語Ⅱでは併せて成績評価の重要な指標としてTOEFL-ITPを全学生に受験させており、それも本学学生の英語習熟度を把握するための重要な資料として利用されている。今後もそうした実証的なデータの蓄積と分析は必要であるため、機会を設けて継続的な調査を行い、カリキュラム編成へのフィードバックを期することとしたい。なお、CALL授業は初習外国語でもすでにドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語で必修科目の枠組みで全面的に実施されて安定運用が進んでおり、引き続きスペイン語、韓国語での導入に向けて検討中である。これについては機会を改めて報告することとしたい。

前回2002年度のアンケート調査、英語習熟度テストの結果は、2006年度（平成18年度）に行われた外国語教育のカリキュラム改編に活かされた。それから8年目を迎え、現行カリキュラムの評価・再検討に取り組むべき時期を迎えつつある。現在、本学では国際的に活躍できる人材の養成を目標に「新渡戸カレッジ」や「現代日本学プログラム課程」等の新たなカリキュラムもスタートしている。それらとも連携を図りながら、北大の「全学」教育外国語カリキュラムの将来ビジョンと具体的なカリキュラムデザインをプランニングし実行していくことが強く求められよう。その中核的役割はまさに外国語教育センターが責任部局として率先して担っていくべきものであり、WGでは今後も引き続き北大「全学」外国語教育の将来像を検討していくのでご期待願いたい。

なお、本冊で報告したアンケート調査や他大学視察等の研究調査項目は北海道大学総長室事業推進経費の支援を受けて実施されたものである。また、上記プロジェクト実施に当たり助言・協力を惜しまれなかった同僚諸氏、そしてアンケート結果の集計作業を支援してくれた大学院国際広報メディア・観光学院の院生の皆さんにもこの場を借りて感謝の意を表したい。

河合 靖 ・ 清水賢一郎

第1章

北大新入生の英語力の変化

——1992年度・2002年度・2013年度の比較——

外国語教育センター外国語教育将来構想WG 英語部会
辻本 篤・河合 靖・園田勝英・土田映子・原田真見

0. はじめに

北海道大学では、1992年度と2002年度に、新1年生に対して同一の英語習熟度テストを実施し、英語力の変化を見た。北大新入生の英語力がどのように異なり、技能別にどのような変化が見られるのか調査することにより、その後の英語カリキュラムの改編や授業の改善に役立ててきた。大学英語教育はこの20年で大きな変革をとげてきているが、特に近年は、主観的な印象だけではなくて客観的な資料に裏打ちされた議論とそれにもとづいた教育改革が求められてきている。しかし、習熟度テストの種類が異なると、結果の比較が難しい。本学で実施した同一試験による英語習熟度調査は、その意味で大きな意義があったと言える。英語習熟度テストを前回実施してからほぼ10年が経過した。今後の英語教育改善に向けた基礎資料とするために、今年度再び英語習熟度テストを実施した。本稿ではその結果を報告し、1992年度および2002年度との比較を行いたい。

1. 調査の方法

1.1. 受験者

北海道大学は、毎年2,600人ほどの新入生を迎える。1992年度には491人（文系142人、理系349人）、2002年度には536人（文系168人、理系368人）¹を対象に英語習熟度テストを実施した。2013年度の今回の調査では、481人の履修者（文系128人、理系353人）が対象となるように試験実施クラスを抽出した。入試制度の改編に伴い、入学者の英語クラス編成方法が年度間で異なるため、結果の解釈には注意が必要であるが、それによる影響ができるだけ少なくなるように配慮しながら試験実施クラスを選択した。そのうち443人（文系115人、理系328人）が受験した。このうち、遅刻による部分的な受験であることや明らかな外れ値で実態を反映していないと推測できることなどにより、4人のデータは分析から除外した。その結果、439人（文系115人、理系324人）の英語習熟度テストの結果を、前回、前々回との比較に用いた。それぞれの年度の受験者数内訳は、表1の通りである。

¹ 2002年度は、試験を前半後半の2回に分けて実施した。学部によっては同一クラスで実施できない場合があったので、前半後半を別々のクラスで実施した学部がいくつか出た。このため、表1のように前半の受験者総数は535人、後半の受験者総数は534人となっている。文系と理系で前半後半受験者数に人数差があるため、それぞれの最大人数を合算したここでの受験者合計は、全体の前半後半の受験者数と異なり536人となっている。

表 1 受験者数の内訳

2013 年度		2002 年度		1992 年度	
文学部・教育学部	29 人	文学部	43 人／44 人	文 I	44 人
法・経・文系総合	86 人	教育学部	45 人	文 II	54 人
		法学部	43 人／43 人	文 III	44 人
		経済学部	36 人／36 人		
小計	115 人	小計	167 人・168 人	小計	142 人
理系総合	328 人	理学部	35 人	理 I	106 人
		工・化／社	38 人	理 II	50 人
		工・情報	39 人	理 III	54 人
		工・物理	29 人	水産	45 人
		農学部	41 人	医進	43 人
		獣医学部	39 人	歯進	51 人
		水産学部	43 人／41 人		
		医学部	39 人／39 人		
		歯学部	26 人／26 人		
		薬学部	39 人		
小計	328 人	小計	368 人・366 人	小計	349 人
合計	443 人	合計	535 人・534 人	合計	491 人

注：2002 年度は、英語習熟度テストを聴解・語彙の前半と、構造・書取の後半に分けて実施した。同一クラスで 2 回実施できなかった学部については、[/] で分けて受験者数を表示している。また、小計・合計も同様に前半と後半の受験者数を分けてある。

2013 年度の文系総合は、1 年次終了時に文・教・法・経の文系 4 学部に進む全ての文系学生をクラス分けに際して均等に振り分けている。また理系総合も、1 年次終了時に理・工・農・獣医・水産・医・歯・薬の理系 8 学部に進む全ての理系学生を均等に振り分けている。したがって、2013 年度の英語習熟度テスト受験者は、前々回・前回とほぼ同じ受験者集団と言える。

1.2. 試験問題

前々回・前回の調査で使用した、D. Harris & L. Palmer 作成の Comprehensive English Language Test for Learners of English (CELT) を習熟度テストとして使用した。多肢選択問題で、聴解 50 問、語彙 75 問、構造 75 問からなっている。前々回・前回はこれに加えて書取テスト（調査者が独自に開発）を実施したが、音源および採点基準が残っていなかったことから今回は断念した。

1.3. 試験の実施と採点

5 月下旬に本学「英語 I」の授業内において、授業担当者の監督のもとに試験は実施された。問題用紙、マークシート、カセットテープの他に「実施の手引き」が入った封筒が授業担当者に配布され、「手引き」の指示に従って試験が行われた。前回は問題用紙の他に別紙で印刷された解答用紙に手書きで記号を解答したが、今回は市販のマークシートを使用した。聴解テストでは、前回と同じ音源を利用し、本学の普通教室に常設されている簡易 LL 設備がまだ稼働できる状態だったので、カセットテープにダビングして前回と同じ音声設備で実施した。指示も含めて 90 分の授業時間の枠内で全体を実施した。

試験終了後、回収したマークシートをスキャナで読み込み、解答を1問1点の200点満点でエクセルを使って機械採点した。クラスごとにセクション別得点および総得点を集計し、さらに文系・理系別、全体の平均点を算出した。なお、その後の統計的な分析にはSPSSを使用している。

2. 調査結果

2013年度の北海道大学1年生の英語習熟度テストの結果は、表2のとおりである。聴解テストの平均点は50点満点で27.2点(54.5%)。標準偏差が6.0で、最低点・最高点はそれぞれ13点、49点であった。語彙テストの平均点は75点満点で40.9点(54.5%)。標準偏差は8.1で、最低点が14点、最高点が66点であった。構造テストの平均点は75点満点で44.1点(58.8%)。標準偏差が11.7で、最低点が0点、最高点が69点であった。同じ75点満点でも、語彙は構造より平均点が低く、標準偏差も小さくなっている。すなわち、構造テストの方が語彙テストよりできがよかったが、得点のばらつきが大きかったことを示している。総得点の平均点は、200点満点で112.5点(56.2%)。標準偏差が20.4。最低点は42点、最高点は183点であった。得点分布の歪度を求めると、聴解、語彙、構造、総得点の順に、0.22、-0.21、-0.74、-0.37であった。正の値は正規曲線より左に、負の値は右に得点分布が偏っていることを示している。構造については正規曲線より右に偏っている(つまり、高い得点の方に分布が多い)傾向が強いが、他のセクションおよび総得点については、左右に若干の偏りはあるものの、ほぼ正規曲線に沿った分布になっているといえる。総得点の分布のヒストグラムを、図1に掲げておく。

表2 2013年度北大1年生英語習熟度テスト受験者全体の結果

	聴解 (/50)	語彙 (/75)	構造 (/75)	総得点 (/200)
受験者数	439	442	442	438
平均点	27.2	40.9	44.1	112.5
標準偏差	6.0	8.1	11.7	20.4
最低点	13	14	0	42
最高点	49	66	69	183

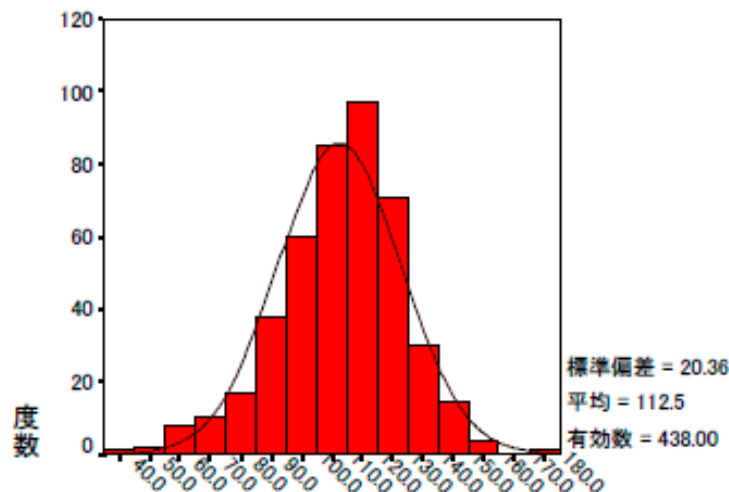


図1 2013年度北大1年生英語習熟度テスト総得点の得点分布

表3 2013年度北大1年生英語習熟度テスト結果内訳

系	学部	受験者数	聴解 (/50)	語彙 (/75)	構文 (/75)	総得点 (/200)
文系1	文・教	29	30.2	42.1	47.2	119.6
文系2	法・経・文総	28	26.5	41.8	44.8	113.0
文系3	法・経・文総	30	27.6	42.3	47.1	117.2
文系4	法・経・文総	28	26.5	44.7	46.9	118.1
文系全体		115	27.7	42.7	46.5	117.0
理系1	理系総合	35	28.2	42.5	36.8	107.5
理系2	理系総合	34	26.9	42.1	42.4	111.5
理系3	理系総合	33	26.8	40.3	43.3	110.4
理系4	理系総合	31	25.9	41.0	46.5	113.4
理系5	理系総合	28	27.1	40.2	44.9	112.1
理系6	理系総合	28	26.5	37.5	43.5	107.5
理系7	理系総合	38	27.0	40.6	45.6	114.4
理系8	理系総合	34	26.9	39.9	47.6	114.4
理系9	理系総合	35	28.9	39.8	43.5	112.1
理系10	理系総合	32	26.0	38.1	38.1	103.8
理系全体		328	27.1	40.3	43.2	110.9
全体		443	27.2	40.9	44.1	112.5

注：系別のクラスの通し番号は便宜的につけたもので、本学時間割上のクラス分けとは別のものである。

2013年度の英語習熟度テストの結果を、クラスごとに集計したセクション別および総得点の平均点は、表3のとおりである。文系クラスから抽出した4クラスの平均点は、聴解、語彙、構文、総得点の順に、27.7点(55.4%)、42.7点(56.9%)、46.5点(62.0%)、117.0点(58.5%)であった。理系10クラスの聴解、語彙、構文、総得点の平均点は27.1点(54.1%)、40.3点(53.7%)、43.2点(57.6%)、110.9点(55.4%)であった。文系が理系より全体的に高い得点傾向を示しているが、聴解、語彙、構文の中では構文のセクションがもっとも高い正解率となっている点が共通している。文系では聴解より語彙の正解率が高かったが、理系では聴解の方が語彙よりも高い正解率であった。

クラス間の差を見て見ると、文系では最も高い総得点の平均点が119.6点、最も低い平均点が113.0点で、6.6点の差があった。理系では、もっとも高い総得点の平均点が114.4点、もっとも低い平均点が103.8点で、その差が10.6点あった。文系の場合は、クラス編成の際の所属の母体が異なるので、入試時点での選抜枠の受験難易度が反映していることが考えられるのに対し、理系の場合は、すべての入学者を均等割りしてクラス編成していることになっているが、実際にはクラス間に英語力の差があることが見て取れる。ただし、14クラスの平均点の差について一元配置の分散分析を行った結果(F値=1.36, p=0.18)は、この差は統計的に有意とは言えないことを示していた。

3. 前回、前々回との比較

3.1. 総得点およびセクション別の推移

表4は、2013年度、2002年度、1992年度の英語習熟度テスト結果の比較である。セクションごとの平均点と正解率、および総得点の平均点の正解率を年度別に並べてある。

表4 北大1年生英語習熟度テスト結果の推移

	聴解 (/50)	語彙 (/75)	構造 (/75)	総得点 (/200)
2013年度	27.2 (54.5%)	40.9 (54.5%)	44.1 (58.8%)	112.5 (56.2%)
2002年度	26.8 (53.6%)	39.3 (52.4%)	50.4 (67.2%)	116.5 (58.3%)
1992年度	22.8 (45.6%)	38.7 (51.6%)	48.8 (65.1%)	110.3 (55.2%)

前回、前々回の試験結果の標準偏差が分からないので、平均点の差が統計的に有意かどうかは算出できない。ここでは、それぞれの推移を素点と正解率の平均で見て行くことにする。

聴解、語彙、構造の3セクションのなかでは、構造がもっとも正解率が高い傾向にあることは、3回の試験を通じて共通している。しかし、前回、前々回に比較して、今回は構造の正解率が落ち込んだことが見て取れる。ただし、前回は試験を2回に分けて実施しているのに対して、今回は3セクションを同じ日に行っている。構造のセクションは、前回2回目の最初に実施しているが、今回は最後に行っているため、受験者が疲労していた可能性がある。構造の歪度が他に比べて大きく、右に山が高くなって左になだらかに長く伸びていることから、疲れたり、時間がなくなったりという理由で解答を諦めた受験者が多かったのかもしれない。それにしても、前回の2002年度に比べて正解率が8.4%下降しているというのは、他のセクションの推移と比較して突出した変化である。3セクションのなかでは構造をもっとも得意としていると言っても、文法面の力が以前に比べて落ちて来ているのは否めない事実であろう。

構造とは逆に、聴解のセクションでは1992年度が45.6%の正解率だったが、2002年度に53.6%、2013年度に54.5%と継続的に上昇してきている。入試問題へのリスニングテストの導入や、学習指導要領の改訂による音声面の指導の変化、ならびに教育機器の発達やALT（外国語指導助手）の導入による母語話者の英語を直接聞く機会の増加など、入学前の英語教育をとりまく環境の変化が表れていると言えるのではないかと。

語彙のセクションも、微増ではあるが1992年度から少しずつ平均点が上昇してきている。一般的には学生の語彙力が下がり続けているように思われているが、少なくとも1992年から2013年度の21年間で見ると、本学の新入生の語彙力が落ちているという事実を見てとることはできない。しかし、平均点が上昇してきているとは言っても、正解率が51.6%（1992年度）から54.5%（2013年度）への増加というのは、変化の幅としてはそれほど大きいとは言えないだろう。

総得点の平均の推移を見ると、前回の2002年度の116.5点から2013年度の112.5点に下降している。しかし、1992年度の110.3点から見ると上昇している。変化の幅を正解率でみると、最高で58.3%（2002年度）、最低で55.2%（1992年度）なので、それほど大きく変動しているわけではない。

以上から、1992年度、2002年度および2013年度の英語習熟度テストの結果を比較して、北大新入生は聴解力が向上し、構造（文法面での英語力）が下降している傾向があることが推察できる。しかし、総合的に見ると21年間で英語力がそれほど大きく変化しているわけではないと言えるだろう。

3.2. 文系・理系ごとの比較

1992年度には、文Ⅰ・文Ⅱ・文Ⅲ・理Ⅰ・理Ⅱ・理Ⅲ・水産・医進・歯進の系・課程別の入試制度であった。また、2002年度には、学部別の入学選抜が行われていた。現在は、文系総合、理系総合を中心に、一部学部が学部別の入学者定員を設ける大括り入試が実施されている。新入生に対する英語のクラス編成も、こうした入試・教育制度の改編ともなって大きく変わって来ている。したがって、新入生の所属別にその英語力の推移を見るのが困難となっている。ここでは、文系、理系別に前回・前々回との比較を行う。文系については、2013年度の調査でも前2回の受験者群に相当する4学部と文系総合を網羅することができた。理系については、前回・前々回は、医学部、歯学部、水産学部が理系全体とは別に平均点を算出して考察されている。これに対して、現在の全学教育の英語クラス編成では、これらの3学部を含めたすべての理系学部に進む学生が均等にクラス分けされているので、前2回とまったく同じ条件での比較ができなくなっている。しかし、前回の英語習熟度テストの学部別の得点比較では、12学部あるうち、医学部が1番目、歯学部が8番目、水産学部が12番目となっており、上位、中位、下位からちょうど1つずつ抜く形になるので、平均点を算出する上では影響が小さいと判断できる。なお、前回、前々回の文系・理系の比較は、セクションごとの正解率でのみ行われている。そこで、表5のとおり、2013年度についてもセクション別の正解率を示した。

表5 文系・理系別に見る聴解・語彙・構造の正解率の推移

	文系正解率			理系正解率		
	聴解	語彙	構造	聴解	語彙	構造
2013年	55.4%	56.9%	62.0%	54.1%	53.7%	57.6%
2002年	52.9%	51.5%	64.2%	52.2%	52.3%	68.5%
1992年	47.5%	53.8%	67.9%	44.3%	49.8%	62.5%

注：ただし2002年と1992年は医学部、歯学部、水産学部を除く

聴解では、文系が1992年度に47.5%だったのが、2002年度52.9%、2013年度55.4%と毎回正解率を上げている。また理系でも、1992年度44.3%、2002年度52.2%、2013年度54.1%と同様に正解率が上がっている。特に、理系の聴解は今回語彙を上回っている。このように、文系でも、理系でも、聴解が正解率を上げて来ていることがわかる。これに対して、語彙や構造では上昇・下降の傾向が一定ではない。文系では構造が下降傾向を、理系では語彙が上昇傾向を一貫して示しているが、文系の語彙や理系の構造は上昇・下降の方向が一定していない。

文系でも理系でも、構造の正解率が今までで最低ではあるが、それでも聴解や語彙の正解率に比較するとまだ高いことが見てとれる。しかし、理系の構造の正解率は今回初めて60%を割った。2002年度の理系の構造は、文系の構造よりも高い正解率であった。この時の学部別の総得点平均順位では、獣医学部、薬学部、農学部が文系4学部を抑えて上位に入っており、反対に教育学部、経済学部はそれぞれ9番目、12番目と低迷していた。2002年度の理系の英語習熟度テストの結果がよかったのは、構造での正解率の高さによるものだったと推察できる。先に見たように、文系・理系あわせた全体でも構造の平均点、正解率が2002年から2013年にかけて下降しているが、北大の場合理系学生の方がはるかに多いために、理系でのこの構造正解率の落ち込みが影響したことになる。2013年度の英語習熟度テスト結果の特徴としては、2002年度に比べると文系では総合的には英語力が向上したのに対して、理系では下降しているらしいこと、特に理系の文法面での弱体化が顕著であると言えるだろう。

4. まとめ

2013年5月に実施した北海道大学の新入生に対する英語習熟度テストの結果を報告し、1992年度、2002年度に新入生に対して行った同じ試験の結果との比較を行った。一般的によく言われているように、音声面での英語力は上がったが文法の力は下がっているらしいことが、実施した試験の聴解と構造のセクション別正解率の推移から示唆された。しかし、語彙については微増ながら上昇しており、得られたデータからはこの21年間で新入生の語彙力が低下したとは言えない。北大新入生の2002年度から2013年度にかけての変化の特徴としては、2002年度には文系より理系の英語習熟度が高く、それは構造での正解率の高さが大きな要因になっていたのであるが、2013年度では理系で構造が大きく正解率を下げたことにより、総合的にも英語習熟度が下降することとなった。

以上から、北海道大学の英語教育に対する示唆として次のようなことが言えるだろう。中等教育でコミュニケーションを重視した英語教育が広まり、音声面での英語力が伸びた学生が入学してくる傾向はますます強くなっていくだろう。小学校での英語教育が始まり、中高での英語による英語授業が推進されるようになって、その傾向は強まるに違いない。しかし、反面、英語の構造に関する基礎的な理解があやふやな学生が増えてくることも予想される。聴解、語彙、構造の3セクションのなかではまだ構造がもっとも高い正解率を示しているとは言え、以前に比べるとはるかに正解率が下がっている。英語習熟度の低い学生のなかには、基本的な文法概念が理解できていないために、英語習熟度そのものが低くなってしまっている者が多くなっているのではないかと推察される。特に、理系の学生で11年前に比べてその傾向が強まっているのではないかと懸念される。これは、初級クラスや再履修クラスを担当する教員の実感とも一致するところがある。前回のカリキュラム改編では習熟度別クラス編成に踏み切ったが、その効果の検証だけでなく、今後、本格的な補修クラスについて考えて行く必要があるかもしれない。

聴解セクションの正解率が上昇してきているからと言って、50点満点で27.2点という平均点が満足できる数字と言うわけではない。語彙についても同様である。どちらも正解率で言えば54.5%にすぎない。今までの北大の英語カリキュラムが進めてきた、総合的な英語力の発達を目指した英語教育の増強をさらに進めて行く必要があるだろう。

今回の調査では、聴解、語彙、構造の3セクションがある英語習熟度テストを用いた。グローバル化、情報化が進む現代では、より総合的な英語運用能力が求められてきている。今回は読解に関する調査はできていないが、教員に対するアンケートや大学院生を含む高年次学生アンケートの結果によれば、専門課程における文献を読みこなす力の必要性は、本学のような研究大学ではやはり非常に重視され、読解力の向上は強く求められている。本学の英語Ⅱでは、TOEFL-ITPを全学生に受験させているので、そちらの読解に関する得点の推移も、本学学生の英語習熟度を理解する重要な資料となる。また、スピーキングやライティングを含んだ4技能総合型の英語習熟度テストの開発が進んできており、今後はそうした実証的なデータの蓄積も必要となってくるだろう。今後も機会を設けて継続的な調査分析を行い、カリキュラム編成へのフィードバックを期することとしたい。

第2章

教員アンケートによる英語学習に関する意識調査(2013)

—分析と考察—

外国語教育センター外国語教育将来構想 WG 英語部会

原田真見・辻本 篤・河合 靖・園田勝英・土田映子

0. はじめに

2002年(平成14年)、当時の言語文化部カリキュラム検討委員会は、外国語教育の新カリキュラム導入を見据え、全学教育における外国語教育のあり方について意見を聴取する全学規模のアンケート調査を実施した。その結果も反映しつつ2006年度(平成18年度)に新カリキュラムが導入されて8年目を迎え、カリキュラムの評価・考察に取り組むべき時期を迎えつつある。そこで、2013年(平成25年)4月に外国語教育センター内に発足した外国語教育将来構想ワーキング・グループでは、平成18年度以降のカリキュラムの評価を軸に、現在、そして今後、どのような外国語教育が必要とされているのか、再び教員の意見を広く調査すべく、11年ぶりに全学アンケートを実施することとした。

アンケートは、外国語教育センターとメディア・コミュニケーション研究院を除く19部局に対して実施した。現行カリキュラムを踏まえた上での調査であるため、設問項目は多少前回とは異なる部分がある。また、前回2002年のアンケート実施時から学内の部局編成が変わったため、前回の17部局とはアンケート対象部局が若干ずれているが、基本的には所属学生を持つ部局及び全学教育に大きくかかわっていると考えられる部局を選んだ。これら19部局に所属する講師以上の全教員および全学教育を担当していると確認された助教の計1346人にアンケート用紙を発送した。そのうち、アンケートの返送のあった回答者数は438人、平均で3割強の回収率となった。部局別では、獣医学研究科、歯学研究科、医学研究科の回答率が高く、また文系・理系別では理系の教員の回答率が高かった。

本章では、教員アンケートのうち、英語カリキュラムに関する部分について質問項目ごとに回答の分析を試みる。必要に応じ

表1 教員アンケート部局別回答者数

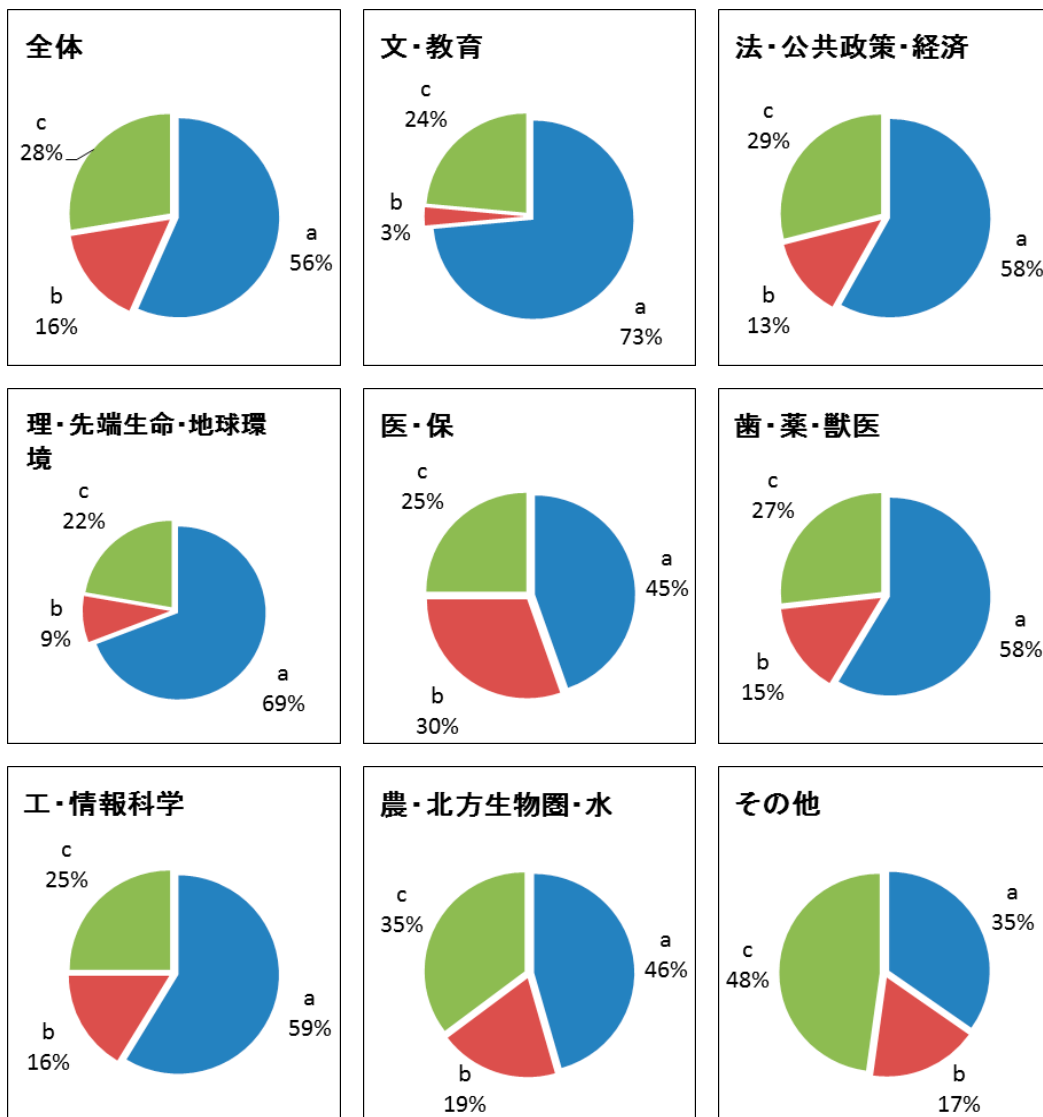
部局	教員数*	回答者数	回答者比率	グラフ略号
文学研究科	103	22	21.4	文・教育
教育学研究院	37	12	32.4	
法学研究科/公共政策学連携研究部	84	20	23.8	法・公共政策・経済
経済学研究科	51	11	21.6	
理学研究院/先端生命科学研究院	224	66	29.5	理・先端生命・地球環境
地球環境科学研究院	54	15	27.8	
医学研究科	110	42	38.2	医・保
保健科学研究院	52	14	26.9	
歯学研究科	39	18	46.2	歯・薬・獣医
薬学研究院	36	5	13.9	
獣医学研究科	32	18	56.3	工・情報科学
工学研究院	209	82	39.2	
情報科学研究科	79	22	27.8	農・北方生物圏・水
農学研究院/北方生物圏フィールド科学センター	119	45	37.8	
水産科学研究院	71	23	32.4	その他
情報基盤センター	11	2	18.2	
観光学高等教育センター	6	2	33.3	
留学生センター	12	2	16.7	
高等教育推進機構	17	9	52.9	
所属不明		8		
計	1346	438	32.5	

て、2002年のアンケート結果を引用しつつ、この11年間における傾向の変化についても触れることとする。なお、集計の際は、互いに結びつきの強い部局同士、または傾向の似通った部局同士をひとまとまりのカテゴリーとして区分し、それぞれのカテゴリーごとに分析を行った。回答者の実数が少ない情報基盤センター、観光学高等教育センター、留学生センター、高等教育推進機構は、所属不明の8回答とともに「その他」としてまとめている。【表1参照】

1.1. 全学授業担当経験について

問1. 全学教育科目のご担当の有無を記してください。

- a. 全学教育科目を担当している・過去に担当したことがある
- b. 全学教育科目を担当したことはない
- (c. 無回答)



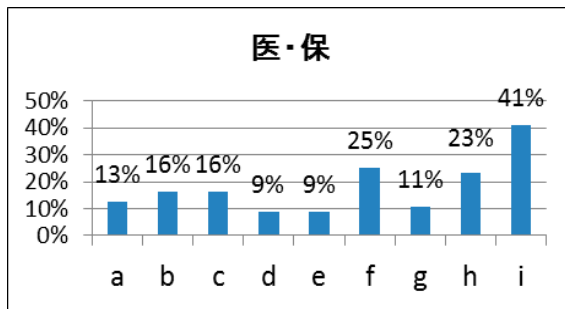
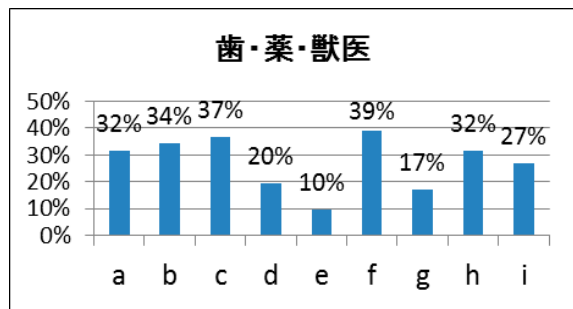
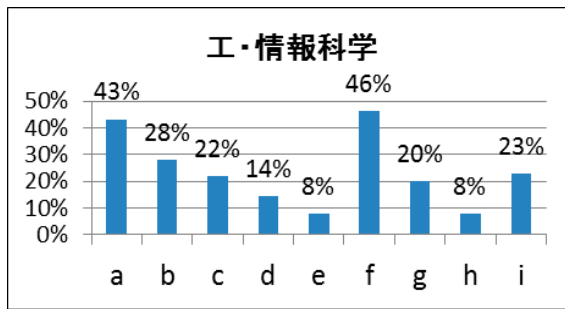
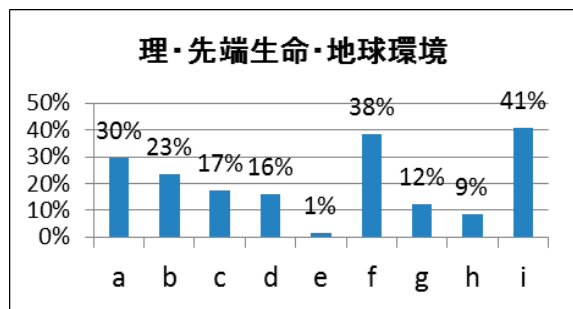
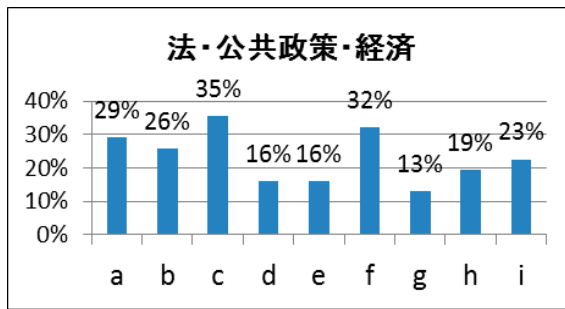
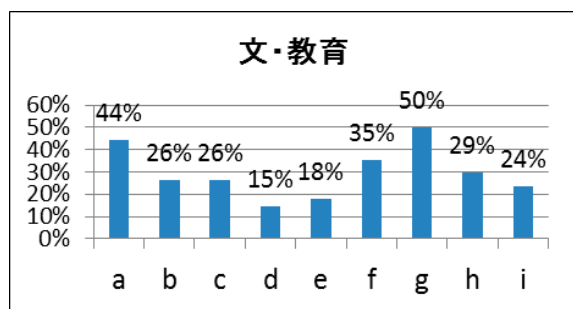
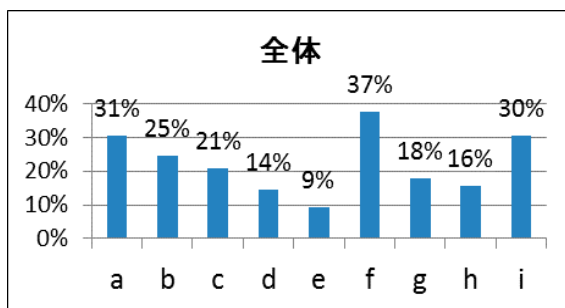
全学教育において何らかの科目を担当しているか否かは、全学教育に対する理解に少なからぬ影響があると考えられる。今回の調査では、各部局回答者の全学教育への関わりを知る一助として、全学教育科目の担当経験を尋ねた。その結果、回答者全体の5割以上の教員が全学教育科目の担当経験を持つことが確認された。換言すれば、それだけの割合の教員が、低学年時の学生たちの学習傾向を把握する機会を持っていると

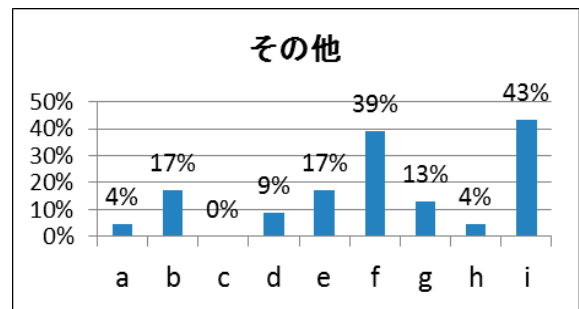
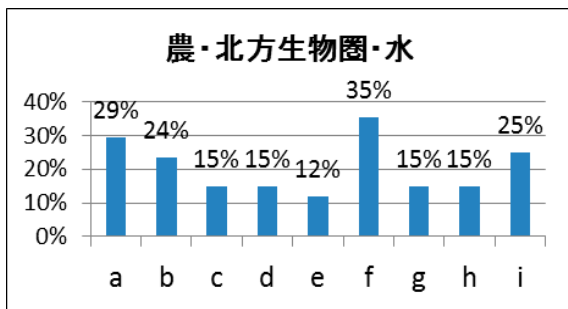
いえる。部局カテゴリー別では、5割を割り込んだのは、「その他」を除いては「医・保」および「農・北方生物圏・水」の2カテゴリーのみである。

1.2. 英語カリキュラムの認知度について

問2. ご担当学部における英語カリキュラムの現状についてご存知のことはどれですか。(複数回答可)

- a. 必修単位数
- b. 英語授業の開講期(どの期に何単位開講されているか)
- c. 英語開講科目の種類とその内容
- d. 英語科目のシラバス
- e. オンライン授業の実施
- f. TOEFL-ITPの実施
- g. 習熟度別クラス編成
- h. 英語の単位優秀認定制度
- i. 何も知らない





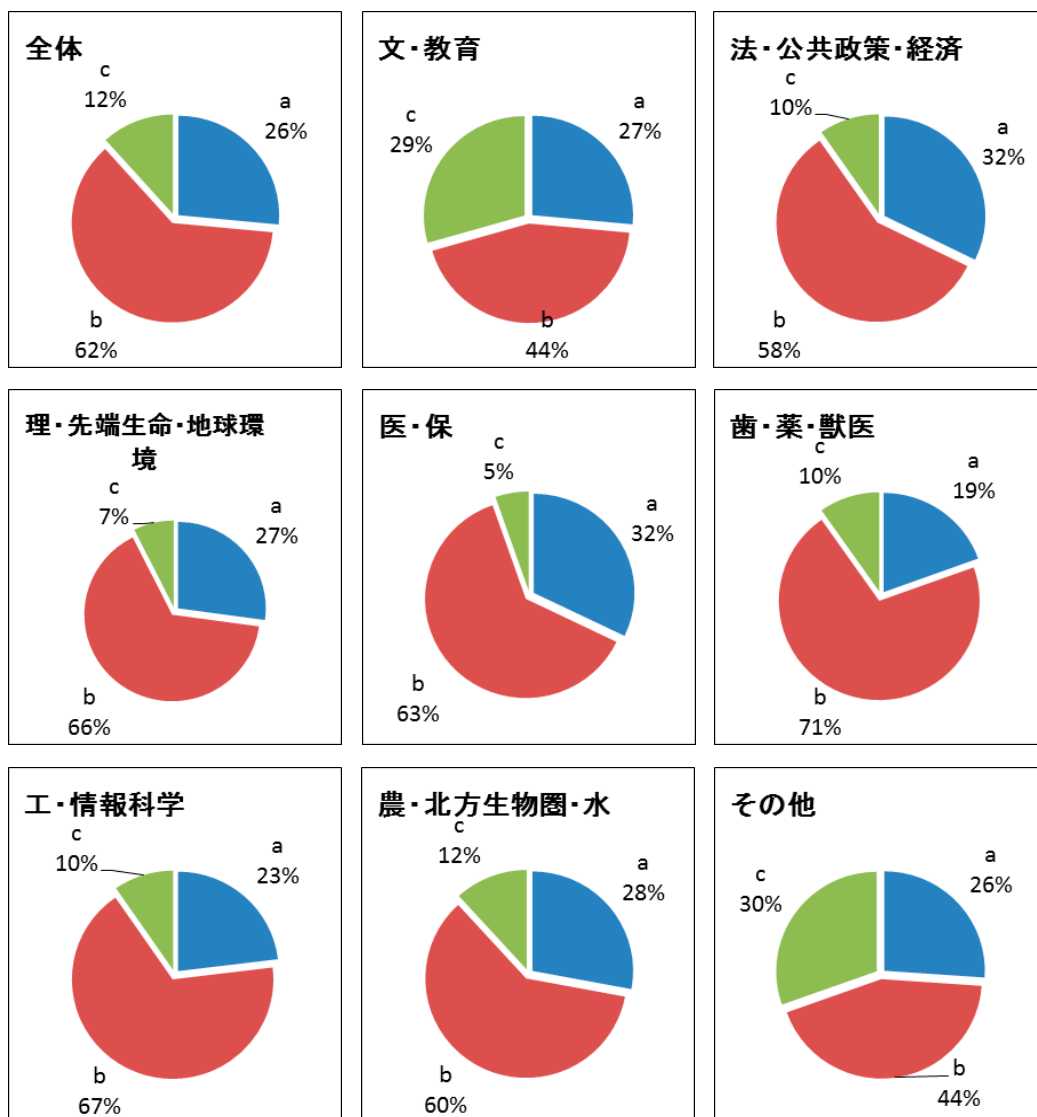
全体的な傾向をみてまず気になるのは、担当学部の英語カリキュラムについて「何も知らない」(i) 教員の比率が30%であり、前回2002年の調査時(33%)とあまり変化がない点である。部局別にみると特に「理・先端生命・地球環境」と「医・保」、「その他」においては4割を超える教員が英語カリキュラムの現状について何も知らない状態である。後の項で詳しくみるように、学生に英語をしっかりと身に付けさせるべきであるという教員の意識は低くないものの、全学教育での英語教育に対する関心は必ずしも高いとは言えない。この点を裏付けるように、現行カリキュラムで本格的に始まった「オンライン授業の実施」(e)を把握している教員は押しなべて少ない。オンライン授業「英語Ⅱ」は外国語教育を情報化し授業の標準化を進めると同時に他方では教員数の削減に対応しつつも英語演習のバラエティを増やす狙いで導入されたものである(詳細は本報告書第5章参照)。歴代担当教員が試行錯誤しつつ教材や授業運営方法を毎年更新して全1年生に向けて実施している大規模な授業であり、また他大学からも注目されている試みにもかかわらず、北大の教員間での認知度は概ね一番低い。しかし一方で、その英語Ⅱ内で実施され、1年次2学期以降の習熟度別クラス選択の指針となっている「TOEFL-ITPの実施」(f)を知る教員の割合が一番高い。TOEFL-ITPのスコアは学生が英語単位優秀認定を申請する際に利用できることにもなっており、GPAにも大きく関わってくることで、この認知度の高さの背景となっている可能性がある。いずれにしても、アンケート結果からは、それがどのような授業の組み立ての中で実施されているのかについての認識にまではつながっていないことがよく分かる。

実際に全学の英語教育(「英語演習」)に関わる機会の多い文系部局の教員は、英語カリキュラムについて何らかの知識を持っている割合が高い。理系部局では、「工・情報科学」そして特に「歯・薬・獣医」においてその割合が高い。グラフには明示していないが、a~h、すなわち英語カリキュラムについて何らかのことを(1つまたは複数)知っている割合は、全体平均が171%であるのに対し、「歯・薬・獣医」では220%である。これに比べ、上述の通り「何も知らない」(i)教員比率の高かった「医・保」は、何らかのことを知っている割合も「その他」を除く全カテゴリー中で最も低く(121%)、全般的に全学英語教育の知識が乏しいことが分かる。

1.3. 英語の履修時期について

問3. 学生に英語を履修させるのに望ましいかたちは次のうちどちらだとお考えですか。

- 低学年のうちに集中して履修させる
- 大学4年間ずっと継続して履修させる
- よくわからない



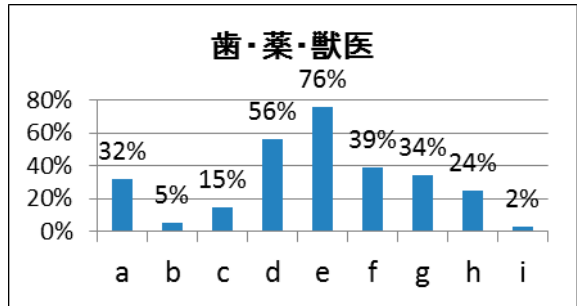
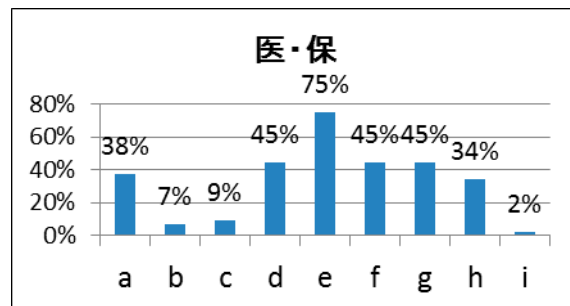
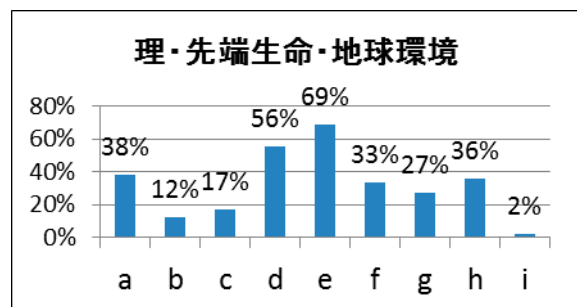
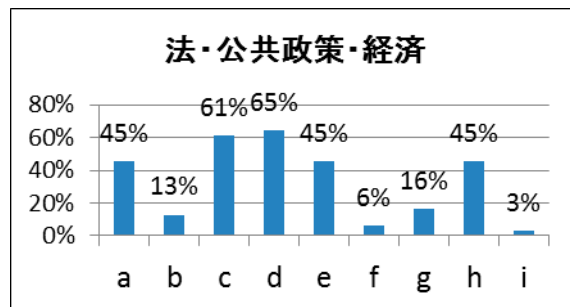
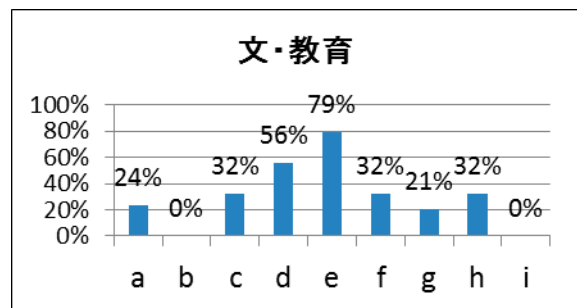
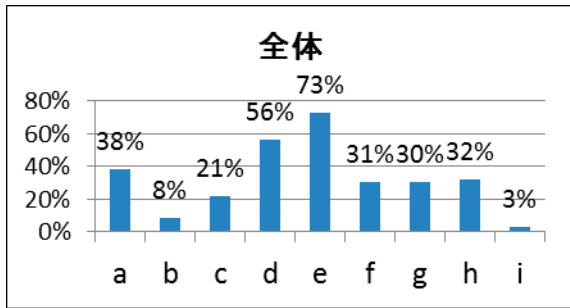
現行カリキュラムの内容把握の有無によらず、英語教育の更なる拡充を求める教員が多いことは、本項目に対する回答結果にも表れている。どの部局においても、英語は学部の4年間ずっと継続して履修させるのが望ましいと考えている教員が多数派である。質問の方式はやや異なるが、前回アンケート（学年ごとの必要性について質問・回答）では高学年での英語履修を適切と考える教員の割合が低学年のそれに比べおよそ半分であったことと比較すると、意識の違いは顕著である。現在では、専門課程に進んだ高学年においても英語と触れ続ける環境がより求められていると言えよう。

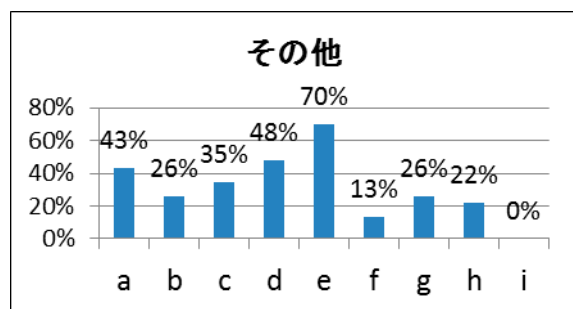
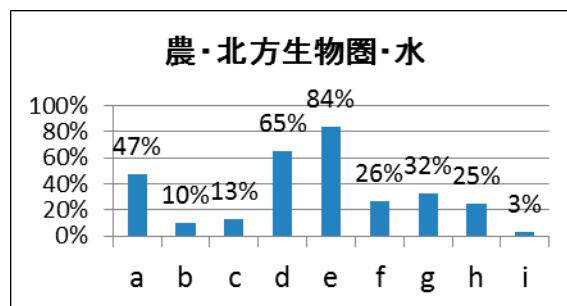
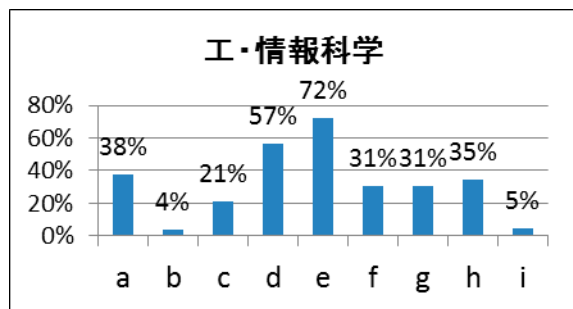
この点からみても、それぞれの部局の教員が英語カリキュラムについてある程度理解しておくことは必要である。たとえば「英語演習」は、全学年に開かれた授業である。現在は必修単位数の関係で低学年生を優先して履修させなければいけない事情があるとはいえ、高年次の学生の履修が可能なクラスもある。このような授業の履修を専門課程で積極的に勧めることも継続的な英語学習の一つの対応策として考えられるだろう。また、担当者の増員により「英語演習」のクラス数を増やすことができれば、学生に課す演習の単位数を増やしつつ、その履修期限を学部4年間に広げる、という方法もあり得るだろう。

1.4. 望ましい英語力について

問 4. 学部レベルにおいてはどのような種類の英語力を学生に身に付けさせたい、あるいは身につけさせなければならないとお考えですか。3つ選んでください。

- a. 海外旅行などで困らない程度の会話力
- b. 日本語字幕なしで映画やニュースを理解する力
- c. 時事的な記事を読みこなす力
- d. インターネットで英語資料を検索し情報収集する力
- e. 自分の研究に関する英語文献を読みこなす力
- f. 研究論文を英語で書く力
- g. 国際学会等で口頭発表する力
- h. 英語を使って人と議論したり交渉する力
- i. その他（自由記入用紙【英語】に具体的にご記入ください）





学部レベルで求められる英語力の種類として、「法・公共政策・経済」を除くすべての部局においてまず「自分の研究に関する英語文献を読みこなす力」(e)、続いて「インターネットで英語資料を検索し情報収集する力」(d)が挙げられている。つまり自律的な研究姿勢を確立する上での基礎となる能力が最も求められていると言える。2位の「インターネットで英語資料を検索し情報収集する力」(d)は、昨今の情報環境を踏ま

えて今回新たに設けた項目であるが、年々膨大化していく情報量を適切に処理分析し、自身の研究に必要なものを選び取っていく能力としての英語力に注目が集まっていることがわかる。この項目が加わったことにより、前回に比べ他選択肢の回答率が相対的に下がりししたもの、北大において、「研究に関する英語文献を読みこなす力」が研究上の“実用英語”であることに変わりはないようである。それとは対照的に、前回、医学部を除く全理系部局で2位に挙げられていた「研究論文を英語で書く力」(f)は軒並み回答率が下がった。また、前回同じように（こちらは全部局で）回答率の高かった「英語を使って人と議論したり交渉したりする力」(h)も相対的に回答率が低くなり、よりカジュアルな会話能力である、「海外旅行などで困らない程度の会話力」(a)と同程度、またはそれより低くなっている。ちなみに前は、この「海外旅行で困らない程度の会話力」の回答率は全体平均で5位であった。11年前は、読解力・発話力ともにより高度かつ専門的な能力を身につけることを求める意見が圧倒的であったが、今回は、少なくとも発話力に関しては“ほどほどでもよい”から、まずは研究の基礎力を優先させたい、との意識が垣間見える結果となった。

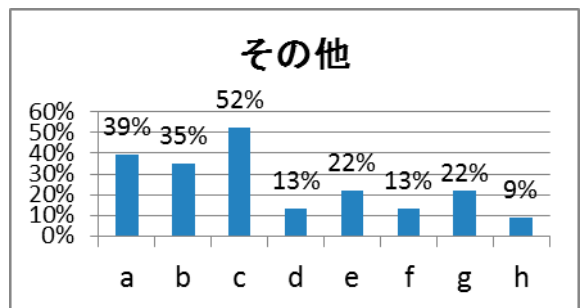
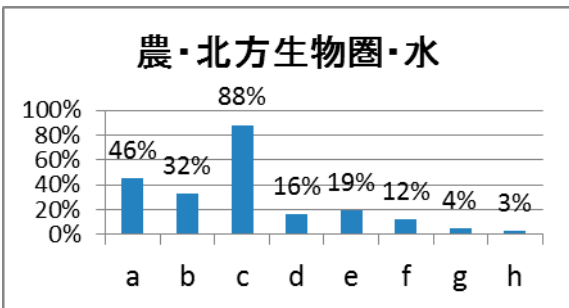
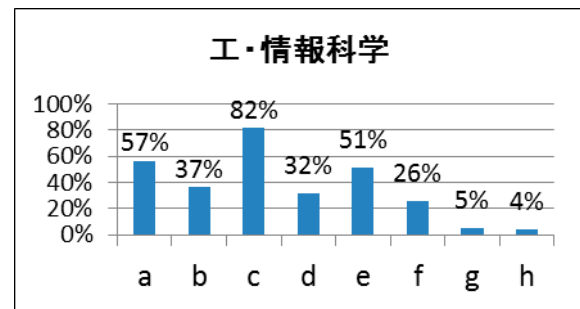
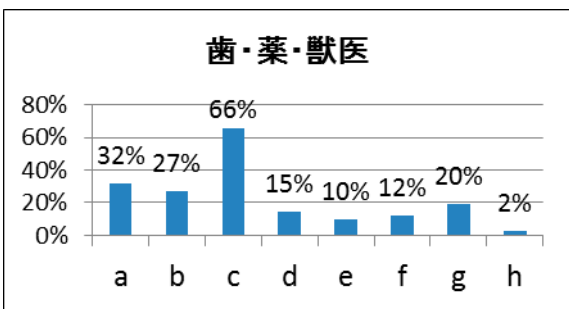
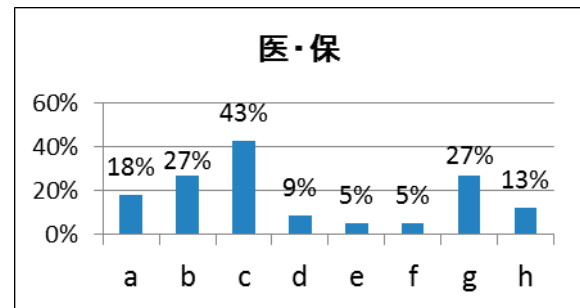
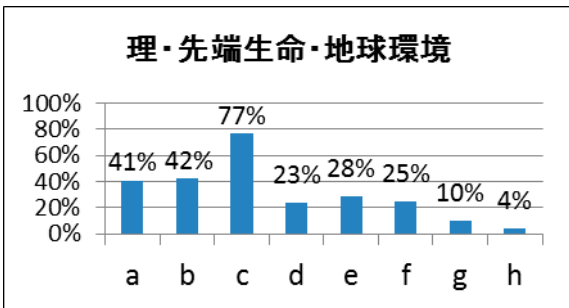
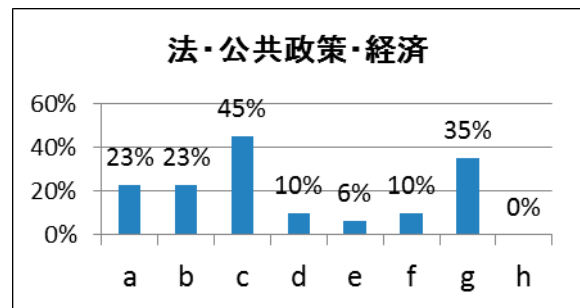
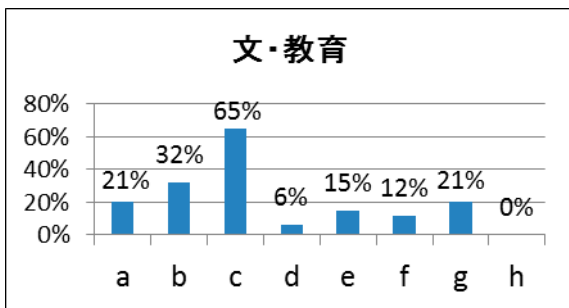
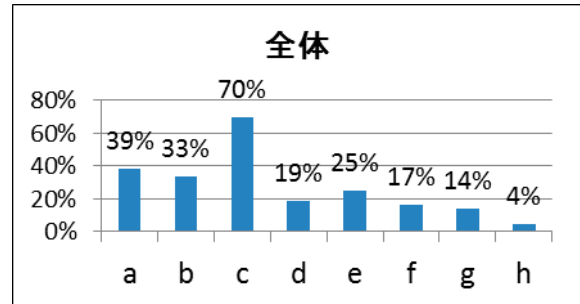
なお、理系部局では「時事的な記事を読みこなす力」(c)の回答率が低いのに対し、文系部局では比較的高いというのは、明らかにその志向する研究の性質の違いによるものである。特に「法・公共政策・経済」において顕著である。変化目まぐるしい社会の様々な様相を的確にとらえ、それについて議論できる能力が強く求められていることが分かる。

以上は、あらかじめ設定された選択肢の回答からうかがえる全体的な傾向であるが、「その他」(i)として自由に回答してもらった記述には、部局の別によらず、全般的な英語能力、特にコミュニケーション能力向上に対する希望が目につく。英語による研究の発表の他、留学生や外国人研究者との会話・議論といった、今や日常の研究生活において必要とされるコミュニケーションを念頭に置いた意見が散見された。

1.5. 専門教育における英語学習活動の実践について（現状）

問5. ご担当の授業（講義・ゼミ）の中で、英語を使ってどのような学習活動を行うことがありますか。（複数回答可）

- a. 教員自らが英語で講義を行う
- b. 授業のテーマに関わる（平易な）英語の記事や文章を読ませる
- c. 英語の専門書や研究論文を読ませる
- d. 英語でレポート・（小）論文を書かせる
- e. 英語で口頭発表をさせる
- f. 英語で議論をさせる
- g. 全くない
- h. その他（自由記入用紙【英語】に具体的に
ご記入ください）



各部署の教員が学生にどのような英語能力を身に付けさせたいと考えているかを確認したところで、次に、自らの授業において実践している英語を使った学習活動について考察する。問 4 において、「自分の研究に関する英語文献を読みこなす力」を重視する部署が多かったのと呼応するように、自らの授業内で実践している学習として「英語の専門書や研究論文を読ませる」(c) を挙げた教員がいずれの部署においても多かった。どちらかと言えば理系の部署においてその実践率が高い傾向にある。特に、英語コースの導入が進んでいる「工・情報科学」と「農・北方生物圏・水」においては実に 8 割を超える教員が授業内において英語文献を読ませている。これに準じて「授業のテーマに関わる（平易な）英語の記事や文章を読ませる」(b) 学習活動も各部署において一定の割合で実践されている。

また特筆すべきは、「教員自らが英語で講義を行う」(a) 授業が全体平均で約 4 割あるという点である。少ない部署においても回答者のうち 2 割前後の教員が英語での講義を行っており、またやはり「工・情報科学」と「農・北方生物圏・水」において半数前後が実践している点が目立つ。「工・情報科学」は他にも「英語で議論をさせる」(f) の回答率が 26%と、他部署に比べてかなり高い。実際、「工・情報科学」は、英語を使った何らかの学習活動を行っている率（「全くない」(g) を除いた総数）は、全体平均 206%に対し、288%と非常に高く、平均で 1 人当たり約 3 種類の活動実践を行っていることになる。「理・先端生命・地球環境」もそれに次いで実践率が高く（240%）、英語を用いた学習活動を満遍なく導入していることが分かる。

反対に、英語を用いた学習活動がもっとも少ないのは「法・公共政策・経済」と「医・保」であり、実践項目として一番多い「英語の専門書や研究論文を読ませる」(c) が回答者の 5 割を下回ったのはこの 2 部署のみである。また、英語を使った学習実践が「全くない」(g) 割合も、それぞれ 35%、27%と、他部署に比べて高い。

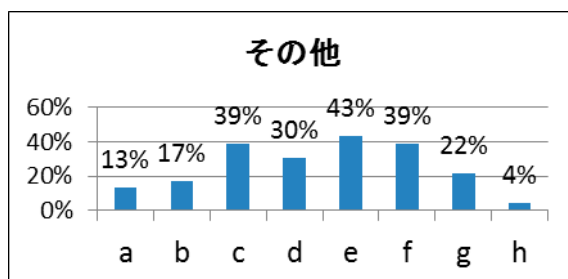
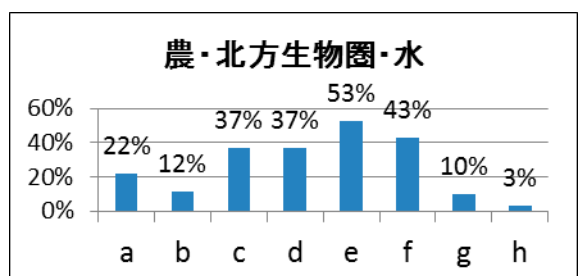
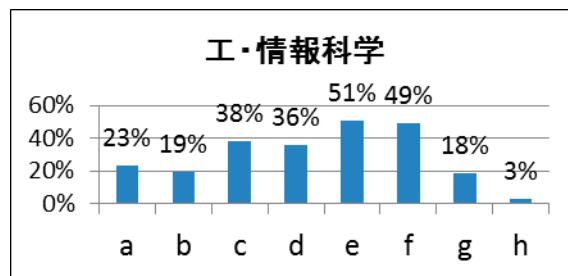
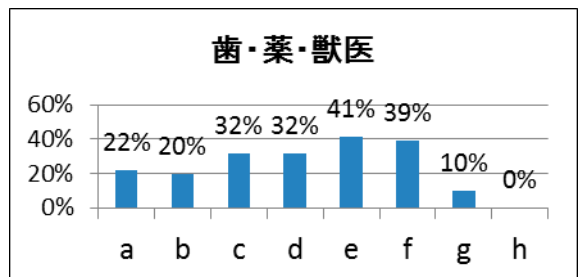
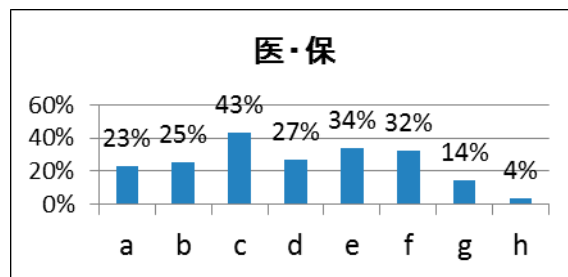
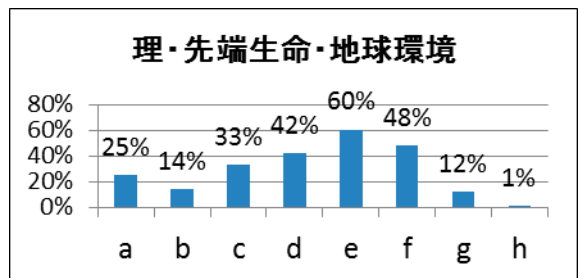
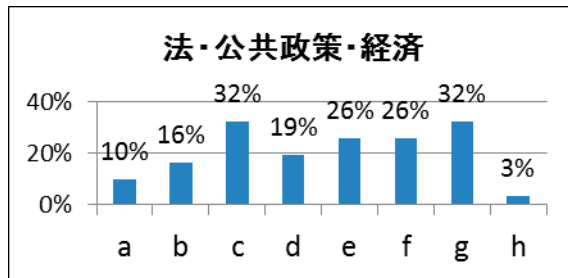
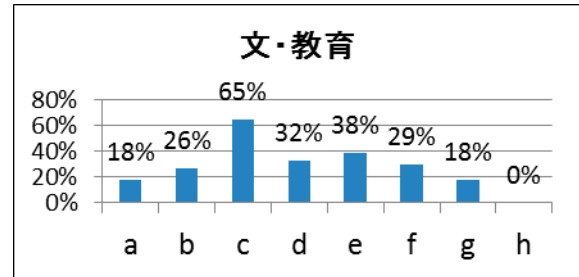
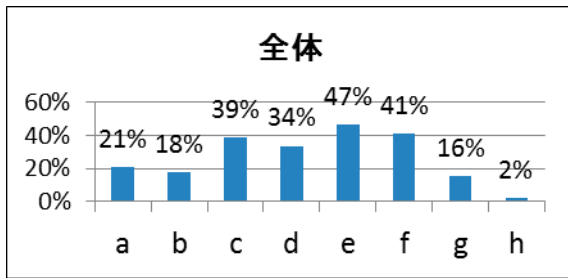
英語を使った学習活動のうち、「英語でレポート・(小) 論文を書かせる」(d) と「英語で議論をさせる」(f) は特に指導の負担や力量が求められるためか、この 2 つの割合の低い部署が多い。それでも全般的な傾向として、前回アンケート時に比べ、自身の授業内で学生に何らかの形で英語を使わせる機会が増えてきている。

「その他」(h) として自由記述に書かれた中で目立つものを挙げると、配布資料や提示用スライドは英語で作成する、専門用語について英語を併記する、といった、専門分野に関する英語の将来的な使用を見据えた工夫が部署横断的にみられた。また、クラス（ゼミ）内に留学生がいるか否かによって対応を変えているケースも少なくないようである。

1.6. 専門教育における英語学習活動の実践について（希望）

問 6. 学生の英語力が今よりもっと高かったら、ご担当の授業（講義・ゼミ）の中で英語を使ってどのような学習活動を行いたいとお考えですか。（複数回答可）

- a. 教員自らが英語で講義を行う
- b. 授業のテーマに関わる（平易な）英語の記事や文章を読ませる
- c. 英語の専門書や研究論文を読ませる
- d. 英語でレポート・(小) 論文を書かせる
- e. 英語で口頭発表をさせる
- f. 英語で議論をさせる
- g. 特にない
- h. その他（自由記入用紙【英語】に具体的にご記入ください）



前項を踏まえた上で、次に、教員が実際には英語を使ったどのような授業活動を理想と考えているのかに目を向けてみる。前項の問 5 では、現在実際に学生に行わせている学習活動として、「英語の専門書や研究論文を読ませる」(c) 割合が群を抜いて高かったが、問 6 でもやはり一定の割合を維持している。学生の英語力が高ければ更に、「英語で口頭発表をさせる」(e)、「英語で議論をさせる」(f)、「英語でレポート・(小)論文を書かせる」(d) といった活動をさせたいとの意向が強いことが分かる。特に、「医・保」を除くすべての理系部局において多くの教員が英語での口頭発表と議論の導入を第一に希望している。多くの理系部局において既に英語の資料を読ませたり英語での講義を行ったりしていることから、次なるステップとして、学会発表等や論文投稿を見据えた、学生によるより能動的な英語を使った学習活動が望ましいと考えられて

いるのであろう。また、これも前項で確認したように英語を使った学習活動を既に多く実施している「工・情報科学」と「理・先端生命・地球環境」は、問6の調査でも何らかの学習活動をさせたいと考える教員が多く、「特にない」(g)を除いた回答率合計はそれぞれ219%、223%である。

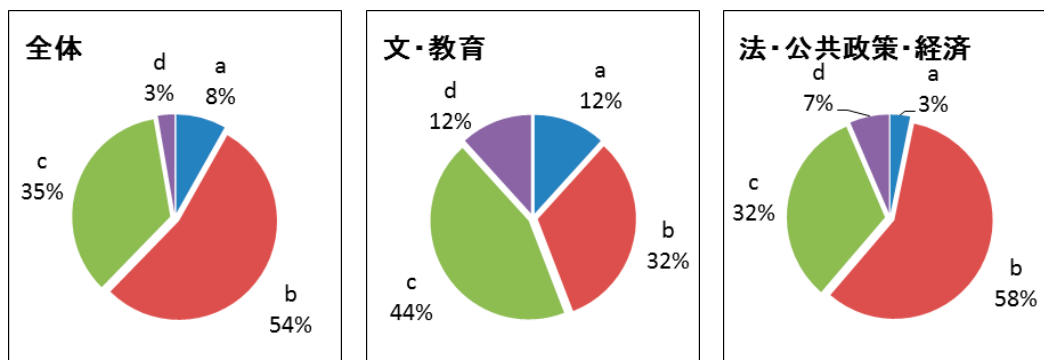
「医・保」においても、問5の場合と比べ、英語でのレポート執筆、口頭発表、議論(d、e、f)の回答率は格段に上がっているものの、依然として「英語の専門書や研究論文を読ませる」(c)を選択した割合が一番高いところが他の理系部局とは異なっている。この傾向は文系部局も同様であるが、特に「法・公共政策・経済」においては英語を使った何らかの学習活動を取り入れたいとの回答が低く(132%)、その点は「文・教育」や「医・保」と大きく異なる(それぞれ、209%、188%)。また、「特にない」(g)の回答率も他部局に比べて圧倒的に高かった。(全体平均16%に対し、「法・公共政策・経済」は倍の32%)。

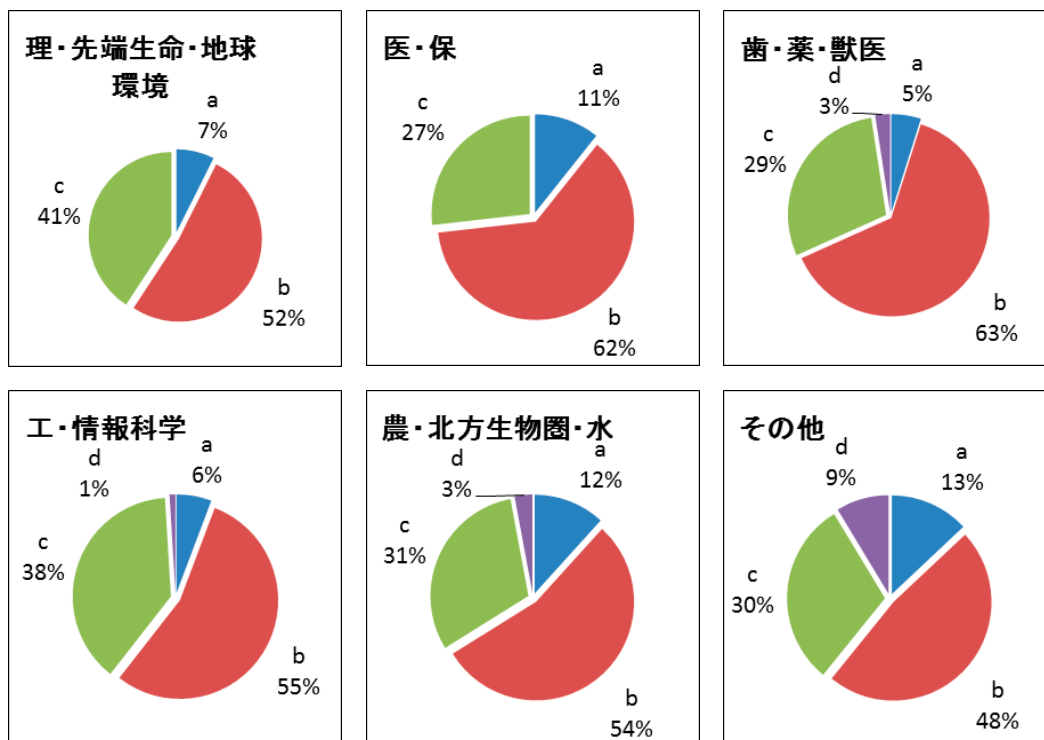
「その他」(h)として自由記述に示されたコメントの中にはそれほど特筆すべきものはないが、既に「十分実施しているのでこれ以上やることは考えていない」(「工・情報科学」といった、現時点での充実度をうかがわせるもの)他、「テキストの完全英語化」、「科学論文の内容を英語でディスカッションさせることを高いレベルでやりたい」(「理・先端生命・地球環境」といった、更なる徹底化を希望する意見がみられた。一方で、「英語力が伴っていない学生に英語での教育を行うことは本来の専門教育を損ねる」(「理・先端生命・地球環境」)、「臨床では難しい」(「医・保」といった、専門分野の内容そのものの教育との齟齬を危ぶむ意見も少数ながらみられたことも触れておく。

1.7. 習熟度別クラスの編成

問7. 現在、一部の英語科目では習熟度別クラス編成(英語IV[リーディング]:初級・中級、英語演習:初級・中級・上級)を導入しています。1学期に受験するTOEFL-ITPで一定のスコアに達しなかった学生には初級クラスの履修を勧めています。また、英語演習については成績の良い学生が初級クラスを履修するケースも散見します。現在のこの措置についてどのようにお考えになりますか。

- 習熟度別にする必要はない
- 現在のかたちで継続するのがよい
- 現在よりも厳密なかたちで習熟度別にした方がよい
- 無回答





習熟度別にクラスを編成する方針について、全部局の数値として「現在のかたちで継続するのがよい」(b)が54%であった。前回(2002年)の調査では賛成意見は74%を占めており、今回の数字は前回の数字と比べると20%低下しているが、今回の調査で別の回答として設けた「現在よりも厳密なかたちで習熟度別にした方がよい」(c)が、35%となった。この二つの合計(89%:(b)+(c))を見ると、大多数の教員が、習熟度別クラスで授業が運営されることを望み、学生には、自分の習熟度に合った授業を履修してもらいたいという考えが強くなってきているといえよう。

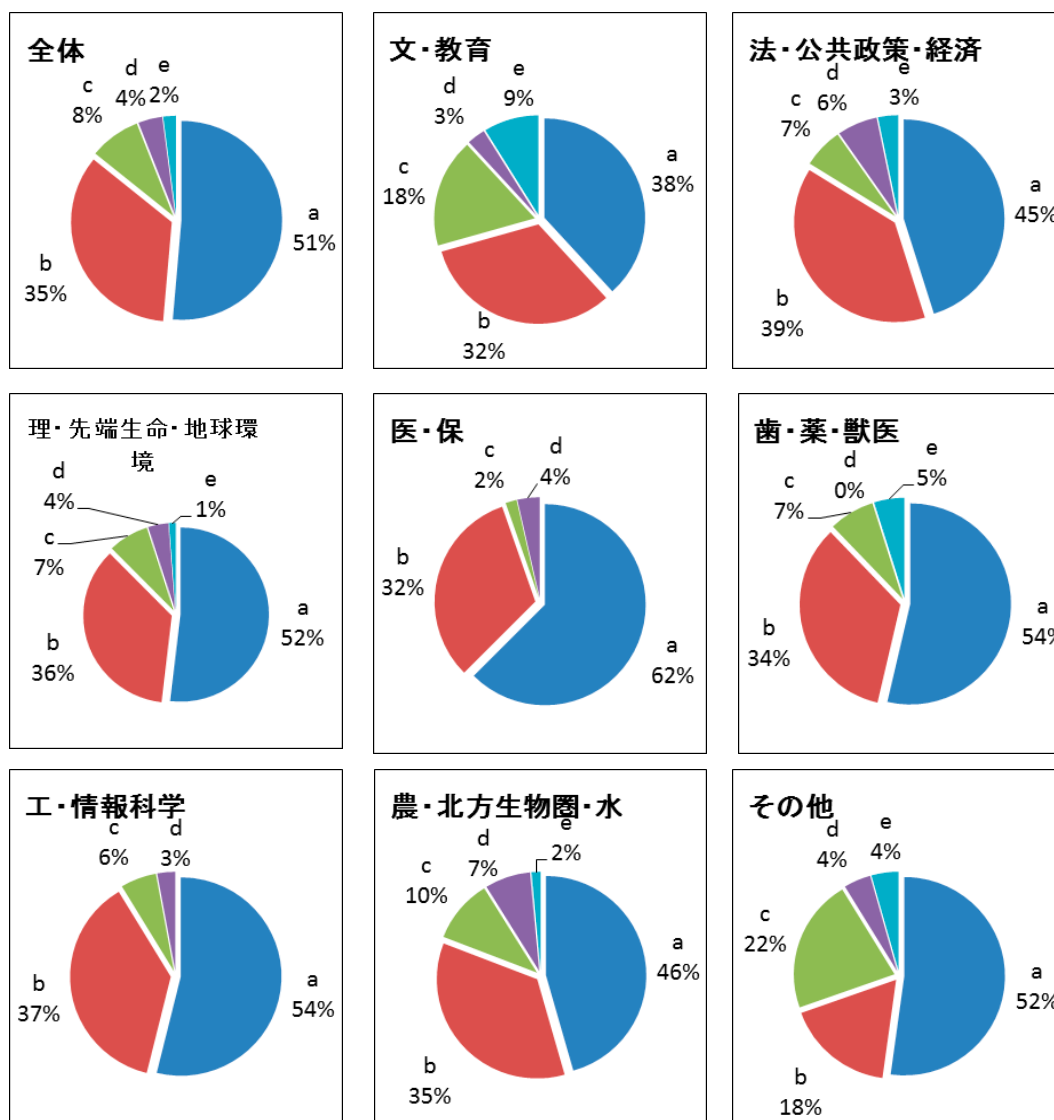
注意して確認しなければならないのは、「現在よりも厳密なかたちで習熟度別にした方がよい」(c)に対する回答である。文系教員の平均値が38.0%に対して、理系教員の平均値は33.2%となっている。理系教員よりも文系教員の方が、習熟度クラスでの運営を強く希望していることがうかがえる。文系と理系の意識差もさることながら、その差の程度にも注意を向ける必要がある。「文・教育」の教員が44%で最高値であり、「医・保」が27%で最低値となっており、数値はかけ離れている。

英語Ⅲ、英語Ⅳでは、比較的厳密にレベル別クラス編成がされるが、英語演習については、成績の良い学生が初級クラスを履修するケースも散見される。この状況は、少なくとも二つの問題をはらむと考えられる。第一に、履修学生全体に対して正当な評価ができないことが挙げられる。これは成績が相対評価によってなされることが背景にある。もともと英語の得意な学生が初級クラスを履修すると、容易に優秀な成績を得られるため、英語の学力が低い学生は、授業に対する実績に対して相対的に低い評価を受ける傾向にある。一方で、成績の良い学生がより高度な授業で学べばさらに能力を伸ばすと考えられるが、その機会を自ら潰してしまっているということにもなる。第二に、授業の雰囲気がいびつになることが挙げられる。成績の良い学生は、比較的、授業中に発言する傾向がある。その発言が高度な知識に裏付けられることも少なくなく、同じクラスの初級レベルの学生は萎縮して、授業に対して積極的に関わろうとする気持ちが削がれることがある。より学習効果を上げやすい環境をつくるためにも、英語演習では、習熟度別にクラスを編成すること、学生は自分の習熟度に合った授業を履修すること、これらの状況が厳密に実現するような仕組みを検討しなければならない。

1.8. 英語演習のクラス・サイズ

問 8. 英語演習（比較的少人数の英語科目）のクラス・サイズとして、何人くらいが望ましいとお考えですか。

- a. 10 人未満
- b. 10～15 人程度
- c. 15～20 人程度
- d. 20～25 人程度
- e. 無回答



英語演習のクラス・サイズについては、すべての部局において「10 人未満（が望ましい）」(a) という回答が最も多かった。可能な限り少人数で演習を実施することが望まれている。この回答の文系教員の平均値は 41.5%、理系教員の平均値は 53.6%となっており、理系教員の方が演習授業を可能な限り少人数で実施することを望んでいる。この回答の最高値は「医・保」が 62%、最低値は「文・教育」の 38%である。

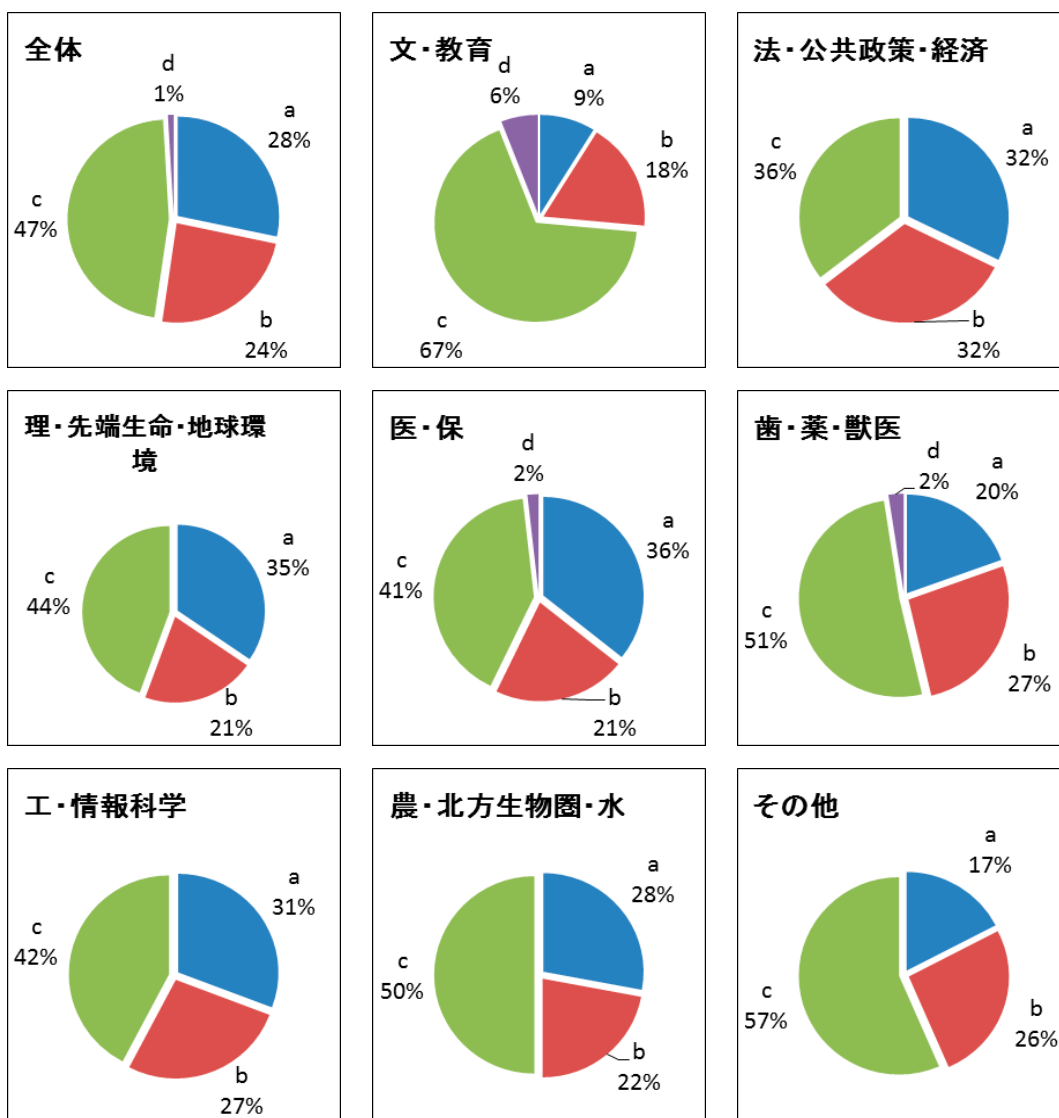
教員が主体となって講義をする大規模授業とは異なり、演習は、個人やグループでの発表やディスカッション

ョンが重視される。また英語の技能を身に付けるために反復的なトレーニングが重視されることもある。演習授業におけるこれらの主眼を実現するためには、必然的に少人数のクラス編成が望まれるが、実情として、十分な教員数が確保できない。これは英語に限らず、初習外国語においても当てはまる状況であり、本学の外国語教育全体として解消すべき課題であると考えられる。この課題を解消するためには、可能な限り外国語担当教員（非常勤を含む）の拡充を図り、さらに外国語教育センター以外の本学専任教員に、英語演習の積極的な開講を促すなど、担当教員数を増やす工夫が必要である。

1.9. 英語資格（TOEFL・TOEIC・英検）対策

問 9. TOEFL・TOEIC・英検対策の類の授業を増やすべきだとお考えですか。

- a. 賛成
- b. 反対
- c. どちらとも言えない
- d. 無回答



英語資格 (TOEFL・TOEIC・英検) の対策に関しては、すべての部局において「どちらともいえない」(c) の回答が最も多かった (この回答に対する全部局の平均値は約 47%)。つまりこれは、英語資格の類の授業を増やすことに対して、「一長一短がある」という意識が強いという状況を示している。この回答において、文系部局の平均値は 51.5%、理系部局の平均値は 45.6%となっている。平均値を取ると、この意識は文系部局の方が高いように見受けられるが、文系部局内でこの回答における最高値 (「文・教育」: 67%) と最低値 (「法・公共政策・経済」: 36%) が併存していることに注意を向ける必要がある。文系部局内でも賛否が分かれている状況であると考えられる。

TOEFL と英検 (実用英語技能検定) は、ともに英語の 4 技能 (「読む」、「聞く」、「話す」「書く」) を総合的に評価する試験で、特に TOEFL は留学の際に英語の能力証明として用いられることが多い。TOEIC はビジネスで必要とされる英語能力をどの程度持ち合わせているかを測る試験である。在学中にこれらの英語検定で上級や高いスコアを取得しておく、比較的、就職に有利に働く。しかしアンケートの結果を見ると、英語検定の受験を促すカリキュラム編成に対しては「なんともいえない」という意識が強い。専門で必要とされる英語力の底上げに寄与するのであればいいが、英語検定の受験対策自体は基本的に学生自身の責任とみなされ、大学として積極的に推進すべき目標とはみなされていないのだろう。しかし、次項で触れるように、(アカデミック・イングリッシュではなく) 社会一般で言うところの“実用英語”養成を積極的に求める声が皆無というわけではない。

1.10. 北大の英語カリキュラムに望むこと

問 10. その他、北大の英語カリキュラムに望むことを自由記入用紙【英語】にお書きください。

以下では、自由記入用紙に記載された「北大の英語カリキュラムに望むこと」に関する共通意見を、多い順に整理・分析する。

1.10.1. 英語総合力 (会話力/読解力/作文力/リスニング力) の養成 (合計 31 件/151 件)

・会話力 (12 件)

英語総合力を促進して欲しいという意見の中で最も多かったのは、英語が話せるようになるための講義を充実させることであった。

外国語は実際に会話ができ、その有効性が認められるという意識が強く、その能力が育成される英語カリキュラムが望まれている。普段から英語を話す機会がなければ、話す能力は育成されないという意見もあった。英語を話す機会をどのように設けるかが課題となる。この点については、たとえば、比較的少ない人数で演習を実施し、聞くことや話す事に慣れる、またその雰囲気の中で参加型の議論を展開すべき、という意見もあった。また授業へ留学生や TA を参加させて、英語でのコミュニケーションを図ることも要望されている。さらには英語でのプレゼンテーションを実施することへの要望はいくつかあり、実際に英語を話すためのカリキュラム、目標としては英語を話したいと感じさせるカリキュラムを編成することが希望されている。必須科目の「英語 I」では英語での発表が重視されているが、今後、どの程度この要素を拡充していくべきか検討されなければならない。本分析のもとになった自由記述を以下に記載する。

理 英語で各自5分~7分間くらいのプレゼンのトレーニングの講義があるのが望ましい。

理 北大に入学できる学生は基礎学力があるので、読解については心配していない。外国語は話せてナンボと思うので、会話

力の向上につながるカリキュラムにしてほしい。

医 To uplift “speaking” skill, not only reading and listening.

獣 おそらく英語で会話する機会の少ない学生も入学しているので、できるだけ少人数演習で英語での会話(聞くことと話すこと)に慣らしてあげてほしい。

獣 学生の中には帰国子女もいることから、能力別のクラスわけは良いことと思われる。英語は「ことば」であることから、使うことでどんどん身に着くと思われる。学習方法は英文を読み、文法や単語を暗記するだけでなく、英会話教室のような、会話する学習方法が良いと思われる。留学生にも TA として教育に参加してもらい、会話、議論、英語による発表などをとり込んでみてはどうでしょうか。

工 学生には、外国人と臆することなく話せる力を身につけてほしい。必ずしも「英語力」だけではなく、「コミュニケーション力」も重要だと思います。

工 私の経験のみからの意見です。英語での会話、外国人と会話することの楽しさを感じさせるカリキュラムはできないでしょうか。もっと英語を話したいと学生に思わせる授業があれば、レベルアップができるように思えます。そうなれば、次に文法の重要性を理解できるのでは。

情 議論参加型の少人数英語演習を必修にすべき。初級から中級レベルに到達できなかった者は、単位を与えない。そうでもしないと世界には追いつけない。

情 正確な発音ができるように、発表や対話のカリキュラムを充実させてください。

農 常に英語を使う機会がないと進歩できないと思われる。

農 1, 2 年次に読み書き以上に会話力を育成してほしい。

水 現在のカリキュラムがわかりませんので回答できませんが、会話力アップが望ましい。

・読解力 (7 件)

会話力要請の次に多かった要望は、読解力の要請である。読解力を要請するために、授業数を増やすこと、また授業の中では、大量に英文を読むことや、必要な文法事項の習得に力を入れることが希望されている。

理系部局の教員からは、専門分野の英文が早く読めて、かつ充分にその内容が理解できるようになる英語教育が望まれている。これは専門教育をスピーディーに進めること、また卒業研究を充実させることが主な理由となっている。理系の学部では読解力が専門分野を学習するスピードに直結するという意見もあり、理系学生における、更なる読解力養成の充実が望まれる。本分析のもとになった自由記述を以下に記載する。

文 読解力向上のための授業を増やしてほしい。

文 コミュニケーション能力も必要ではあるが、それ以前に正しい読解のために必要な文法事項の習熟に力を入れてほしい。

理 現在、北大の全学教育でいかなる英語教育が実施されているかよく存じ上げません。理学部に進む3年、4年生を見る限り、最低限の英語力は保たれていると感じますが、やはり、圧倒的に読む量が不足しています。理系では、平易かつ簡明な表現が求められますが、そのためには大量の読書(英文にて)が必須です。この点にご配慮いただいたカリキュラムを希望するものです。

情 卒論研究を始める4年制までに科学技術方面の英語力を身につけられるカリキュラムが望まれる。文法のうち、論理に関する知識や指示語を正しく読み取れる力が必要である。更に望めるなら、英作文力があればなおよい。

農 TOEIC などでもいいので、一定レベルの英語力を必須にしてほしい。理系学部では、英語資料を読める力が学習速度に直結するため。

農 大学入試を突破するくらいなので、基礎はかなりあると思います。あとは専門の英文に慣れていることが重要です。安易な試験対策は学生を誤った方向に導く上、論文が読めなくなったら、本末転倒です。

農 TOEIC 対策など、試験対策の範囲に限定せず、将来、実践的な英語を使うために必要な、核となるスキルが身につく科目

を設定してほしい。例えば、理系ならば専門基礎科目となっている物理、化学、生物の特に初歩知識を含むような読み物を扱った科目を設けてほしい。

・作文力 (3 件)

読解力養成の次に多かった要望は、英作文能力の養成である。学生の英文を書く能力は不足していると指摘されており、まともな英語論文が書けないとのコメントもある。これは、専門教育を行う教員ではトレーニングできないとして、英語教育の中で訓練して欲しいと要望されている。理系学部では、学部レベルでも国際会議で発表する機会がある。現在、1年次で履修する「英語Ⅰ」において、英作文の基礎としてのパラグラフ・ライティングの指導をおこなっている。また、スキル別の「英語Ⅲ」(選択必修)でもライティングの授業を展開している。これらの授業において、学生のライティング・スキルに合った指導の拡充が求められる一方で、学生がライティングの授業を選択したがるような仕掛けも必要である。本分析のもとになった自由記述を以下に記載する。

文 大学院生対象の論文指導演習(語学だけでなく、論理的構成力を含む訓練)。

エ 書く力が不足しているので、まともな英語論文を書けないのが現状である。

情 英作文力が弱い学生も多い。これは専門教育では教育しにくい。英語教育が専門の教員にお願いしたい。

・リスニング力 (2 件)

リスニング力養成に関する要望もある。特に理系学部からの要望が見受けられる。高学年になり、さらに専門的な教育を受ける時期になると、英語を聞き取る能力が強く要請されると指摘されている。また大学院教育では英文の読解や発表がますます必要となり、学部時代に十分なリスニング力が養成されることが望まれている。英語演習や英語Ⅲのリスニングクラスでは英語のビデオを鑑賞して議論したり、英語音声のテープを流して聞き取らせる授業もあるが、リスニング力を身に付けさせる持続的な仕組み作りを検討する必要もあるだろう。本分析のもとになった自由記述を以下に記載する(「ヒヤリング」という記載は「リスニング」と修正した)。

エ 入試段階で英語力が低い学生が多いので、TOEICなどで文法やリスニングをすると良いと思います。理系では大学院に入ってから英語の読解と発表が必要なので学部である程度できるようになったほうが良い。

水 リスニングをきたえてほしい。専門分野の英語はラボに入ってから必然的に習得するが、一般英語リスニングを習う機会が少ない。

1.10.2. ネイティブ・スピーカーとのコミュニケーション (15 件/151 件)

英語総合力を促進させる次に多かった要望は、ネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションを促進することである。またこれらの人材と普段から接触する機会を増やすことも望まれている。これは英語総合力のひとつである「会話力」を効率的に、また充実した形で伸ばす方策であると考えられる。

ネイティブ・スピーカーと話す際は、文法事項などの細かい言葉の制約を気にすることなく、不完全な英語でも臆せず英語でコミュニケーションが取れるような仕組みを作って欲しいという要望がいくつか見受けられた。本学の多くの学生は、英語の基礎学力は高いと考えられるが、ネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションを躊躇する傾向にある。外国人講師とのディベートを必須化してはどうか、というコメントもあったが、いずれにしてもネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションを図る仕組みをさらに構築する

必要があるだろう。

しかし、この仕組みを実現するためには、ネイティブ・スピーカーの数が足りないのが実情である。コメントには、ネイティブ・スピーカーの教員を積極的に採用することや、英語教員におけるネイティブ・スピーカー教員の割合を増やすこと、さらには外国語教育センター以外の部局に所属するネイティブ・スピーカーを英語教育へ参加させるなどの意見が寄せられている。他の意見として海外の英語話者と Skype で対話することも提案されている。本分析のもとになった自由記述を以下に記載する。

水 卒業研究で講座に配属された学生の多くは「英語が苦手」と言います。もう少し自信の持てるよう、学習機会を増やすと良いのではないのでしょうか。また外国人留学生とのコミュニケーションを避けようと思います。慣れていないのだと思いますので、普段から外国人と接する機会を増やすような方策は考えられないのでしょうか？TOEICではなく、TOEFL 対策に重点を置いた方が良いと思います。

文 英文法など細かいことを気にせず外国人と英語で意思疎通する経験を積ませたい。

理 英語を使わざるをえない環境になれば学生は自然と適応するので、外国人講師の強制的なディベートを行うべき。

理 全学教育委員を務めていた時に資料を見たが、北大ではオンライン授業や TOEFL、TOEIC の受験を強制し、成績が毎年向上するなど、英語教育をたいへんよくやられていると思う。しかし、どんなに勉強しても、日本人は英語にハンディがあるのは事実で、そう簡単にすらすら英語論文が読めたり、書けたり、外国人と議論する所まではいかない。一方で、不完全であっても外国人と話させて、英語能力に自信をつけさせることが大事で、英語を母国語とする外国人教員を数名雇用することを強く希望する。

理 外国人教員を積極的に採用するとよい。

理 ネイティブ教師の割合を増やす。

地 学部所属の外国人教員に一般教育への参加を促すべきです。

地 ネイティブによるディスカッション重視のカリキュラムが必要。

医 native との会話、議論をする。

医 native による、英語での授業を一般共通科目にやってみてはと思います。「英語教育」ではなく、特定の科目です。

保 外語学者と組んで、フィリピンなどの英語話者と Skype で会話を行う。北大生および教員が提携学者のプログラムに安価に参加できる仕組みを作ってほしい。

工 英語を母国語とする学生との交流機会を増やすこと。

工 むやみに英語カリキュラムを増やしても、難しい英語で講義すれば内容が理解できない。簡単な英語で講義すれば時間が足りず基本的な話で終る。本気で英語カリキュラムを充実させたいのなら、低学年で英語教育を充実させ、NATIVE の先生による授業を充実させ、日本人教官にも英語による講義のためのセミナーを行うなど、大学全体で戦略を立てる必要がある。

水 卒業研究で講座には属された学生の多くは「英語が苦手」と言います。もう少し自信の持てるよう、学習機会を増やすと良いのではないのでしょうか。また外国人留学生とのコミュニケーションを避けようと思います。慣れていないのだと思いますので、普段から外国人と接する機会を増やすような方策は考えられないのでしょうか？TOEICではなく、TOEFL 対策に重点を置いた方が良いと思います。

水 ネイティブの教師による英会話・英文読解等の授業を大学4年間続けることが重要と考えます。

1.10.3. 実用的な英語教育の充実化 (8件/151件)

次に多かった要望は、実用的な英語教育を充実させることであった。ここでいう実用的な英語教育とは、アカデミック・イングリッシュに関わる能力を養成するための教育ではなく、実務的な英語能力を養成するための教育である。アカデミック・イングリッシュの能力を養成する授業への期待がある一方で、実用英語への要望もあると理解できよう。この能力を養成するための方策として、TOEFL ITP でなく、TOEIC の試

験を受験させる、海外交流・プログラムを単位認定する、などの要望も出されている。本分析のもとになった自由記述を以下に記載する。

- 文 英語を使って専門を学部から学んでいけば、自然と慣れます。その際、文学的文章よりも、実用文中心に、場面場面に必要な英語を学んでいけばよいのではないか。
- 法 実用的な能力を、実践の中で高めていくことが望ましい。
- 経 学部レベルで「聞く」「話す」ことの機会を増やすべきでは。日常的に英語に接することができる機会が多い方が望ましい。学問としてよりも、実践としての英語の習得が学部レベルでは重要ではないか。
- 経 —TOEFL ITP を6月に実施することに再考を強く求めたい。新渡戸カレッジとも相性が悪い。
 ① 4月のクラス分け、または1年次末、2年次初の学習効果測定にしてほしい。
 ② TOEFL ITP でなく、TOEIC にしてほしい。
 —スプリングプログラム・サマープログラムを単位認定してほしい。
 —CALL システムの効果が疑わしい。費用対効果を公開してほしい。
- 理 試験の点数を上げることより実際に使える英語を身につけられるカリキュラムへ。
- 歯 生きた英語力を身につける様にする。
- 獣 実用的な英語力を取得することに、より注力していただけると良いと思います。
- 工 結局、現場で使える英語が重要だと思う。 そのための能力を総合的に養うカリキュラムを望む。

1.10.4. カリキュラムの統一／目標の設定 (合計7件/151件)

英語教育のカリキュラムを明確に統一するべき、また学習目標も学生に明確に伝わるように設定するべきであるという要望も散見された。この意見の中には、カリキュラムを理系分野と文系分野に分けて実践的な内容として運用することや、英語学習の「到達目標」「勉強方法」「到達目標を明確にする目的」を明確に記述することも含まれた。さらに、英語科目を1年から4年に分散させて受講させるのを認めることや、4年間を通じて英語を継続的に学ぶ仕組みも望まれている。医・歯・薬分野の学生においては、5年、6年時も単位が取れる仕組みも要望されている。最も深刻なのは後者の課題であると考えられる。基礎学年で英語の必修単位数は多く、学ぶ時間は必然的に多くなるが、高学年になると語学としての英語を学習する時間が少なくなる傾向があり、英語能力を伸ばす機会が少なくなっているのが現状である。外国語教育センターの中にも、継続的に英語能力を伸ばす仕組みが必要と考える者は少なくない。外国語教育に携わるスタッフも、継続的に英語能力を伸ばす仕組みが必要であるという考えを持つものが少なくない。本分析のもとになった自由記述を以下に記載する。

- 文 教員が好き勝手にやっている印象がある。試験だけでなく、カリキュラム・教科書についても、統一して VISION 目標形式にすべき。
- 理 ・全学教育での英語科目を1～4年次に分散させ、継続して受講可とする。
 ・学部課程での英語科目は、たとえば大きく理系分野と文系分野に分けて実践的な内容とする。科学的・論理的な英語、提案・討論英語、口頭発表・実践的討論中心。理系では化学英語作文など。(論文の読解は現状でも問題ない)
 ・各学部では、3、4年次の英語科目を学科専門科目として認められるようにすることが不可欠である。
- 理 北大のカリキュラム内容には疎いので、間違っていて認識している点もあるかもしれませんが、学部学生と英語の勉強会をしていて、彼らに欠如していると感じるのは次の3点です。
 ①どのレベルまで勉強するかという明確な目標

②どのように勉強するかという方法論

③英語の到達目標を明確にする点についてすべてのエネルギーを語学の勉強に費やすわけには行かないので、それぞれの学生に各自の目標を明確に認識させ、必要な努力を要求する必要があります。

理 学部の4年間を通じ、継続的に学習する仕組みがあると良い。

医 全学年を通して継続する。

歯 3年4年にも授業を増やす 医歯薬の5-6年にも単位が取れるようにしてください。

工 TOEFL, TOEIC はわかり易い目標であり、学生のモチベーション向上に役立つと思うし、社会も客観的評価を望んでいる。明確なゴール(卒業時に何点)を設けて、もっと指導することが必要。

1.10.5. 「新渡戸カレッジ」の有効活用／国際人の養成（合計4件/151件）

本学の「新渡戸カレッジ」の有効活用を希望するコメントも寄せられている。新渡戸カレッジとは、国際的に活躍する人材を育成するために、本学が平成25年に創設した特別教育プログラムである。12学部にも所属するすべての学生を対象としたカリキュラムが組まれており、履修学生は、原則半年以上の海外留学に参加する。また留学を支援するための英語教育や、英語による国際交流科目、学部専門科目が提供されている。学生たちは留学生と共に学ぶ環境にもあり、実践的な英語を身に付けさせるためのプログラムとして位置づけられている。新渡戸カレッジを、さらに多くの学生へ拡大し集中的な語学教育がなされることも希望されている。新渡戸カレッジとの共通科目になっている一部の英語演習科目に多くの留学生が参加すれば、必然的に日本人学生も英語でコミュニケーションを取らざるを得ない状況が促進されることへの期待である。また卒業後、国際的に活躍できるための語学教育の拡充も希望されている。短期集中型の英語授業の開設が希望されているが、この課題は上述の新渡戸カレッジのカリキュラムを、さらに多くの学生へ拡大することでも実現できると考えられる。本分析のもとになった自由記述を以下に記載する。

文 幸い新渡戸カレッジは人気がある所ですから、できれば拡大し、より多くの学生に集中的な語学教育をしていただければ学中レベル(3年、4年)の演習でも、より高度な内容の英語を使った活動ができると思います！しかし、前提となるのは留学生の増加です。演習の三分の一程度の人数が留学生になると、議論も活発になり、日本人学生も様々なことを外国語で説明する必要性にせまられることとなります。そういうかんきょうを作ることが、語学教育充実の前提になると思います。英語だけ、必要もないのに勉強させるのは、ムリがあるでしょう。国際教養学部的な、バイリンガル・プログラムに日本人・留学生を統合すべきだと思います。

経 —TOEFL ITP を6月に実施することに再考を強く求めたい。新渡戸カレッジとも相性が悪い。

① 4月のクラス分け、または1年次末、2年次初の学習効果測定にしてほしい。

② TOEFL ITP でなく、TOEIC にしてほしい。

—スプリングプログラム・サマープログラムを単位認定してほしい。

—CALL システムの効果が疑わしい。費用対効果を公開してほしい。

教 (担当教員の負担から言って、まったく現実的ではない提案ですが)英語の“力”が高く、意欲の高い学生(将来何らかの形で国際的に活躍しようとしている学生、と言ってよいかもしれません)に対する、短期集中型の英語授業の開設。一般の学生に関しては、4の項目で回答した4・5・8の力を伸ばすようなカリキュラム、ということに尽きます。

医 1～2年目に語学研修等を海外で行う。

2. まとめ

以上、英語教育についての教員の意識を探ってきたが、最後にこの調査結果から見えてきた課題について総括する。

2.1. 外国語教育センターと専門課程の連携

回答結果全般からうかがえるように、学生の英語力向上や英語を使った専門課程の学習に対する各部局の教員の関心は高い。しかしその一方で、1.2.で明らかになったように、英語カリキュラムの現状を十分に把握している教員は多くはない。まずは担当学部において展開されている全学の英語カリキュラム、すなわち自らの部局が学生に課している履修要件（英語科目の種類・単位数・単位取得の時期）が、現状のニーズに合っているかどうかの検討が専門課程側では必要だろう。現在全学教育で展開されている英語カリキュラム内でも履修要件の工夫次第で学生の英語学習をより促すことは可能である。たとえば、部局横断的に、英語の持続的な学習を望む声が多くみられたが、3・4年次においても年2ないし4単位の英語演習の履修を学部側で課すまたは勧めるといったことにより、学生が英語に触れ続ける動機を高め、機会を増やすことは可能だろう。

外国語教育センター側でも各部局に対する更なる働きかけが必要だろう。学部・部局においては専門教育が第一義であり、それを進展させる道具としての英語教育は、必要でありながらもそれへの目配りには限界があつてある意味当然である。しかし、学生の英語力向上のための仕組みづくりには、上述したように専門部局の教員側の体系的な英語教育に対する理解も不可欠である。全学の英語教育としての取り組みや展望を、折に触れ周知・共有していくことが肝要だろう。ついでながらその意味では、このアンケートをきっかけに改めて英語のカリキュラムを確認してみた、といった声が自由記述に寄せられているように、今回のこのアンケートの実施自体が、外国語教育に対する関心を高めることに一役買ったとも言える。ただ、そもそも英語教育に対して何がしかの関心を持つ教員がアンケートに多く回答を寄せたと考えられるため、回答のなかった教員も含めて英語教育に対する理解・関心を深めるためには外国語教育センター側のなお一層の努力が必要と言える。

英語教育の内容の面でも当然、外国語教育センターと専門課程との更なる協力が重要である。語学教育専門の教員と専門課程の教員とでは、学生に提供する英語学習経験が当然異なってくる。学生の学習動機を高めつつ、多角的な学習経験をさせるためにも、外国語教育センター所属教員と専門学部・部局との協力体制の確立が必要となってくるだろう。

2.2. 英語カリキュラムの多角化・柔軟性

上述したように、多角的な英語教育のためには専門部局の教員の協力が不可欠であるが、それ以外にも、多様なニーズに柔軟に対応できるような英語カリキュラムの設計が必要と言える。実は現行カリキュラムでは既に、発信能力に主眼を置いた「英語Ⅰ」、総合的な基礎力を醸成し、また自律的な学習姿勢を促す「英語Ⅱ」（オンライン授業）、「リーディング」・「リスニング」・「スピーキング」・「ライティング」の4技能別に特化した選択必修の「英語Ⅲ」、読解力の更なる向上を図る「英語Ⅳ」、そして各部局の教員の協力も得ながら様々なテーマで展開する比較的少人数の「英語演習」と、かなり多種多様な英語科目を提供している。それぞれの部局の要請に合致しつつも、学生たち自身の自律的な選択・学習意欲を高めるために、これらの授業の更なる充実化とより柔軟な授業展開が肝要だろう。専門学部によっては必ずしも英語を必修化する必要はないかもしれないし、また他方で、国際学会での発表や英語論文の執筆が学部生・大学院生にとって必須であるような学部・部局にとっては、学部学生（そして大学院生）の持続的な英語学習を義務付けるような

仕組みが必要であるかもしれない。そうした、部局ごとに大きく異なる履修パターンでも対応できるよう、やはり外国語教育センターと各部局が協力して検討していかなければならないだろう。

2.3. 研究に資する基礎力の底上げと総合的コミュニケーション力の養成

学生に求められる英語力の質やタイプには部局ごとの違いが若干あるとは言うものの、まずは資料を収集し、そして専門的な資料を読みこなす英語力、さらに願わくは自律的に英語論文を執筆し口頭発表を行うことのできる英語力が求められている。そのためには全学の英語教育において、学生の確かな基礎力の底上げに努めることが重要である。

また、数字としては表れにくかったが、各質問の自由記述や問 10 の自由記述回答において多く言及があったように、総合的なコミュニケーション力の養成も、広く共有された関心事である。増えつつある留学生との日常的なコミュニケーションから始まり、授業内でのディスカッションや、国際学会における専門的なやりとりまで、幅広いコミュニケーション力が求められている。

基礎力の底上げと総合的コミュニケーション力の養成のどちらにも、よりきめ細やかな指導が必要であることは言うまでもない。1.8.で確認したように、演習クラスのより実質的な少人数化を図り、十分な指導の行き渡りやすい、そして学生にとっては学びやすい環境を整えることも検討しなくてはならない。

また、学部レベルから英語ネイティブ・スピーカーとの接触の機会をできるだけ増やすことも必要である。日本人、ネイティブ・スピーカーの別に関わらず、英語教育に関わる多様な人材の確保は、北大で求められる英語教育のあらゆる側面で必須であるが、特に今、ネイティブ・スピーカーの教員の人的資源の確保と拡充は待ったなしの課題である。

第3章

1年次学生アンケートによる英語学習に関する意識調査(2013)

——分析と考察——

外国語教育センター外国語教育将来構想WG 英語部会

土田映子・原田真見・辻本 篤・河合 靖・園田勝英

0. はじめに

本アンケートは、北海道大学の学士課程1年生を対象に、全学教育英語カリキュラムについての意識調査を行ったものである。調査期間は2013年12月10日から25日までの2週間で、回答者は北海道大学外国語教育センターCALLのウェブページ (<https://www.cll.hokudai.ac.jp/>) 上に搭載されている教材サーバーGlexaを通じてアンケート項目を読み、回答する方式であった。アンケート対象者は2013年度入学の2591名のうち、休学中の35名を除いた2556名であり、回答人数は960名(回収率37.6%)となった。所属学部ごとの回答者の割合(表0-1参照)では、総合理系に所属する学生が41.4%を占めているが、これは入学定員に対する総合入試理系の募集人員の割合(約42%)とほとんど変わらない。

次項より、質問項目ごとに回答の分析を試みる。その際、2002年に同じく学生対象に実施されたアンケート調査の結果¹との比較も行う。

表0-1 1年生アンケート学部別回答者数(問1「あなたの所属学部を教えてください」)

*比率は小数点以下第2位を四捨五入しているため合計が100%にならないことがある。以下同様。

部局	回答者数	回答者に対する比率
文学部	79	8.2%
教育学部	14	1.5%
法学部	94	9.8%
経済学部	72	7.5%
理学部	27	2.8%
医学部医学科	28	2.9%
医学部保健学科	48	5.0%
歯学部	10	1.0%
薬学部	5	0.5%
工学部	44	4.6%
農学部	28	2.9%
獣医学部	13	1.4%
水産学部	55	5.7%
総合文系	43	4.5%
総合理系	397	41.4%
回答なし	3	3.1%
合計	960	102.8%*

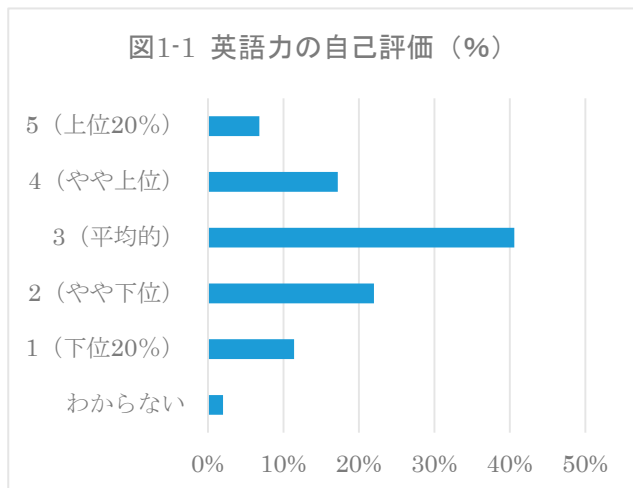
¹ 伊藤章・佐藤俊一編『教官・学生アンケートにみる全学教育外国語に対する意識調査と北大生の英語力の変化』(国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書51号(2002)第3章。

1. 英語力の自己評価と英語学習の現状

この項では、学生が自分の英語力をどの程度として認識しているのか、また英語学習にどのくらいの時間を充てているのかを問うた問いに対する回答結果を紹介する。

問2: あなたの英語力を自己評価してください。(所属学部の同学年中で5段階相対評価、5が最高)

表 1-1 英語力の自己評価

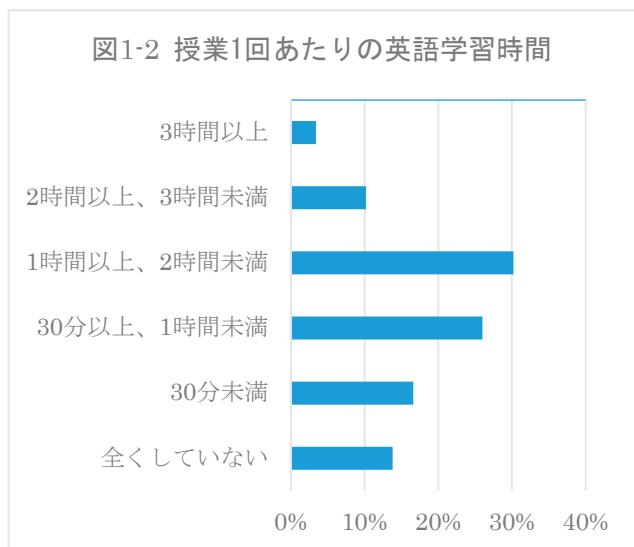


自己評価	回答者数	回答者に対する比率
5 (上位 20%)	65	6.8%
4 (やや上位)	164	17.2%
3 (平均的)	388	40.6%
2 (やや下位)	210	22.0%
1 (下位 20%)	109	11.4%
わからない	19	2.0%
合計	955	100%

自分の英語力を「上位 20%」または「下位 20%」と回答した学生は少なく、平均的、あるいは平均よりやや上か下程度と考えている学生が多いことがわかる。英語を得意と感じている学生より苦手意識を持つ学生の方が若干多いが、大学の英語の授業レベルを体感してのことであろう。受験勉強の頃から、真面目に英語学習に取り組んできた学生が多いことがうかがわれる。

問3: あなたは1回の英語授業のために、復習も含めて、どれくらいの時間勉強をしていますか。

表 1-2 授業1回あたりの英語学習時間



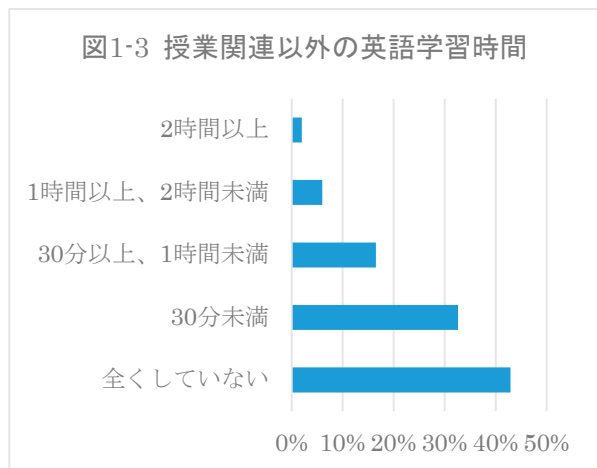
学習時間	回答者数	回答者に対する比率
3時間以上	32	3.4%
2時間以上、3時間未満	97	10.2%
1時間以上、2時間未満	288	30.2%
30分以上、1時間未満	248	26.0%
30分未満	158	16.6%
全くしていない	131	13.8%
合計	954	100.2%

授業の予習・復習・課題等については、約 56%が 30分～2時間の範囲と回答する結果となったが、30分未満・全くしていないという回答が3割を占めているのは気にかかる。学習時間の違いは、各学生の英語力

や、それぞれの授業が受講者に要求する労力の差によるものかもしれないが、それらの要素と関連づけて分析しなければ明確な理由は現れてこないであろう。

問4: あなたは英語の授業とその予習・復習以外で、1日あたり平均でどれくらいの時間英語の勉強をしていますか。

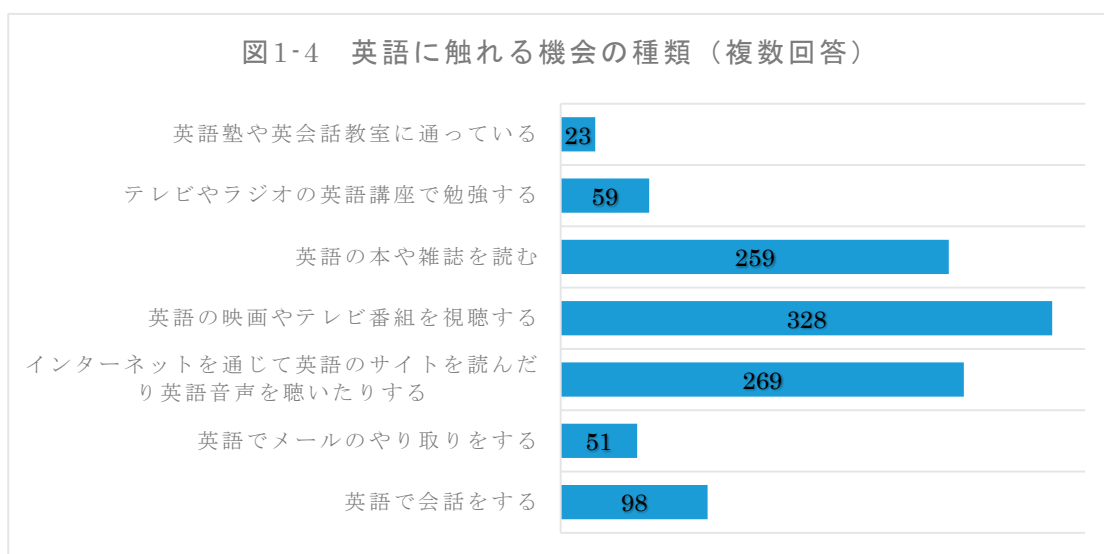
表 1-3 授業関連以外の英語学習時間



学習時間	回答者数	回答者に対する比率
2時間以上	19	2%
1時間以上、2時間未満	57	6%
30分以上、1時間未満	158	16.5%
30分未満	311	32.6%
全くしていない	410	42.9%
合計	955	100%

授業に関連しない自主的な英語の学習時間を確保している学生は少数派という結果になった。学習動機づけの高い一部の学生は1時間以上の英語学習を授業関連とは別に行っているが、こうした学生は一割にも満たず、最も多いのは英語学習を授業に依存している学生である。これらの学生の英語力や関連知識の内容は、英語カリキュラムの内容に大きく左右される可能性が高い。

問5: あなたは授業とその予習・復習以外に、どのような形で英語に触れる機会がありますか。あてはまるものをすべて選んでください。



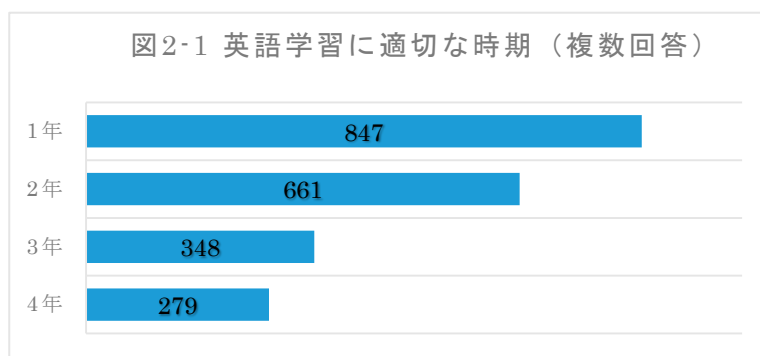
前回調査の時と現在との最も大きな環境の変化は、インターネットおよび電子メールの使用の一般化であるが、そのことが反映された結果となった。英語の本・雑誌、映画・テレビ番組といった従来型のメディアと並び、インターネットを通じた英語学習がすでに定着していることがうかがわれる。また、比較的少ない

ものの、英語でメールのやり取りをする・英語で会話をするという選択肢を選んだ回答者が一定数いることは注目に値する。これらの学生には、英語でやり取りをする現実の相手がいるということであり、そうでない学生よりも英語による発信をトレーニングする機会に恵まれているということだからである。

2. 英語学習の時期・目的・動機

この項では、英語学習に適切と考えられる時期に加え、英語学習の目的や動機に関わる問いへの回答を紹介する。

問 6: 大学 4 年間で英語を学習するのに適切な時期はいつだと思いますか。(複数回答可)



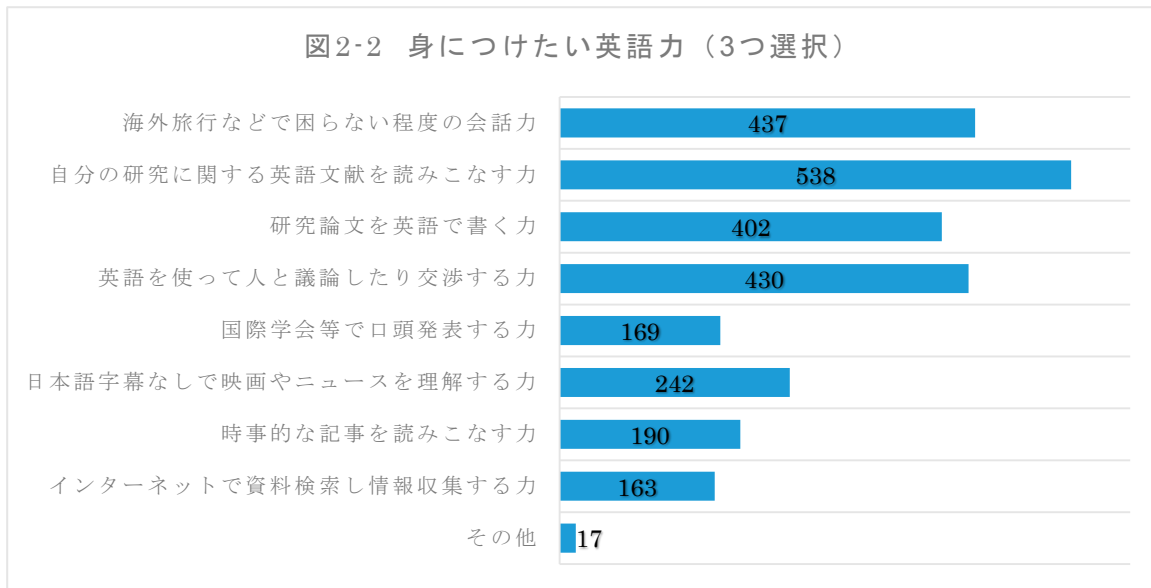
低学年のうちに重点的に学びたいという傾向が顕著な結果となった。後の自由回答欄の内容からもうかがえるが、学年が上がるにつれて専門の授業・研究に多くの時間を割かなくてはならなくなるため、英語力は早い段階で身につけておきたいと考える学生が多いものと思われる。

問 7: あなたはどのような種類の英語力を身に付けたい、あるいは身に付けなければならないと考えていますか。3つ選んでください。

この問いでは、身につけたい、あるいはつけるべきと考える英語力の種類から優先度の高いものを3点選んでもらったが、「自分の研究に関する英語文献を読みこなす力」が一位、「海外旅行などで困らない程度の会話力」が二位という結果になった。僅差で「英語を使って人と議論したり交渉する力」「研究論文を英語で書く力」が続いた。研究において、読む力の方が書く力より優先度が高いのは、学部1年生であることを考えれば妥当であり、むしろ「読む」と「書く」との回答数の差が大きく開いているわけではない点に留意したい。会話力の重視と並び、発信力をつけることへの意識がかなり高いことの表れといえる。

他方、「国際学会等で口頭発表する力」「インターネットで資料検索し情報収集する力」の優先度は低かった。前者については、1年生ではその機会が近い将来に訪れるとは考え難いことが理由かもしれない。

図2-2 身につけたい英語力 (3つ選択)



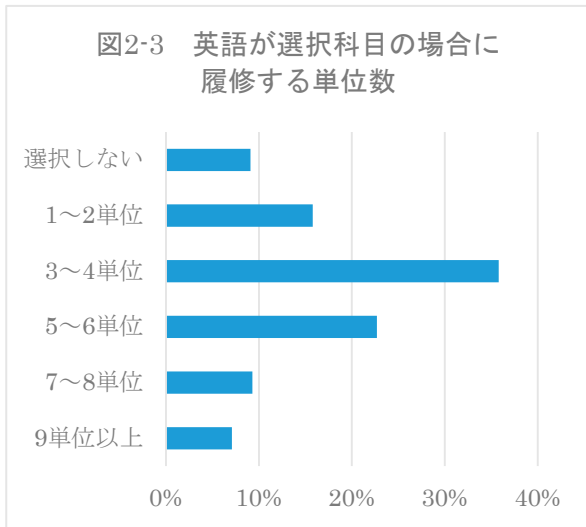
問7-2: 上の問で、「その他」を選んだ方は、具体的にお書きください。

「その他」を選んだ回答者は17名であった。以下、箇条書きで回答を挙げる。表現は原文のままである。全体の傾向としては、専門分野や研究よりも、日常生活で英語を使う場面が重視されていることがわかる。

- ・英語圏の国で生活していけるだけの英語力
- ・外国で住み、不便なく生活できるくらいのコミュニケーション力
- ・職場で顧客(患者)と適度なコミュニケーションが取れる程度の能力
- ・対話能力
- ・日常会話：英語でジョークをいえるぐらいの実力
- ・世界の人と莫迦話ができる
- ・すべて
- ・ビジネスで恥じない程度
- ・海外で無難に生活できる英語力
- ・簡単な日常会話ができる程度の英語力
- ・ネイティブスピーカーと流ちょうに話せる力
- ・音楽における歌詞の作成のために英語を書く力と、きれいに発音する力
- ・女性を口説き落とす程度の会話力
- ・将来、英語を使いこなして仕事できる力
- ・バイト先に外国人がたくさん来るので、その人たちと円滑にコミュニケーションする力
- ・日常会話ができる力
- ・英語圏で生活するのに支障のない程度の力

問 8: 仮に英語が選択科目となった場合、あなたは卒業までに何単位履修しますか。

表 2-1 英語が選択科目の場合に履修する単位数

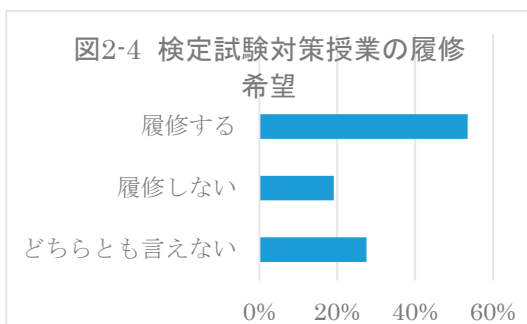


単位数	回答者数	回答者に対する比率
選択しない	87	9.1%
1~2単位	151	15.8%
3~4単位	342	35.8%
5~6単位	217	22.7%
7~8単位	89	9.3%
9単位以上	68	7.1%
合計	954	99.8%

現在の全学教育科目実行教育課程では、すべての学部で「英語 I、英語 II、英語 III 及び IV の 4 単位を修得すること」と定められている。これが選択科目となった場合にどうするかを問うた問いに対しは、「3~4 単位」と答えた回答者が最も多く、「5~6 単位」という答えを合わせて 6 割近くを占める結果となった。現行の必修単位数を基準として考える学生が多いことを示しているが、他方で「選択しない」という回答が 1 割近くを占めているのは決して小さい数字ではない。北大の英語の授業が自分のニーズと合致しない、または英語そのものの必要性が自分には低いという判断をしている学生がある程度いるということである。

問 9: 英検・TOEFL・TOEIC 等対策の授業が、カリキュラムの一部として開講される場合、あなたは履修しますか。

表 2-2 検定試験対策授業の履修希望



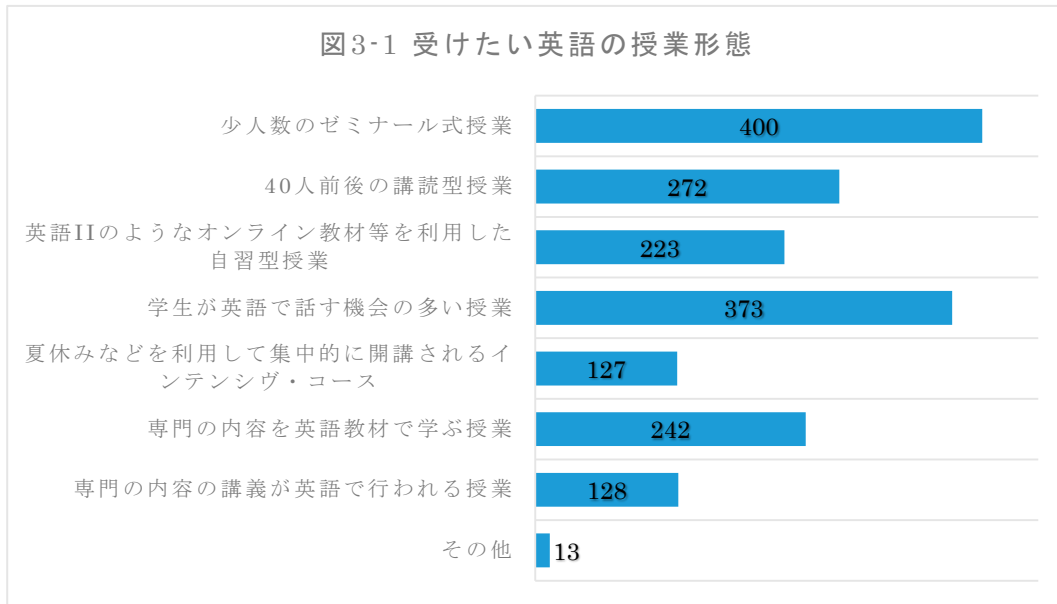
履修希望の有無	回答者数	回答者に対する比率
履修する	510	53.5%
履修しない	182	19.1%
どちらとも言えない	262	27.5%
合計	954	100.1%

検定試験対策の授業が開講されれば履修するという回答者が半数を超える結果となった。「どちらとも言えない」という回答者は、実際に履修の機会が提供されれば、自分にそのような必要が生じる場合を見極めて判断することがと推測され、就職や留学を念頭に置いての回答であろう。

3. 北大の英語教育に対する希望

最後の3つの問いでは、学生が英語の授業に対して持っている希望を訊いた。

問10: あなたが受けたいと思う英語の授業形態はどのようなものですか。(複数回答可)



「少人数」「英語で話す機会」が重要なキーワードとなっている。だが同時に、伝統的な講読型授業もそこそこ高い支持を集めており、教員の見れば学習効果が高いと思われるインテンシヴ・コースの人気は低い。「専門の内容を英語教材で学ぶ授業」と併せ、会話能力だけでなく専門に関わる英文を読む力も必要と考える一方、長期休暇には授業とは別の活動をしたいという気持ちの表れであろう。

問10-2: 上の問で「その他」を選んだ人は、具体的にどのような授業かをお書きください。

「その他」を選んだ回答者は13名であった。以下、箇条書きで12名の回答を挙げる(1名は単に「その他」と回答)。表現は原文のままである。内容は個々に異なるが、問8への回答と同様、実際に英語を話す相手を目の前にしてのやり取りの機会の増大を求める回答が多い。

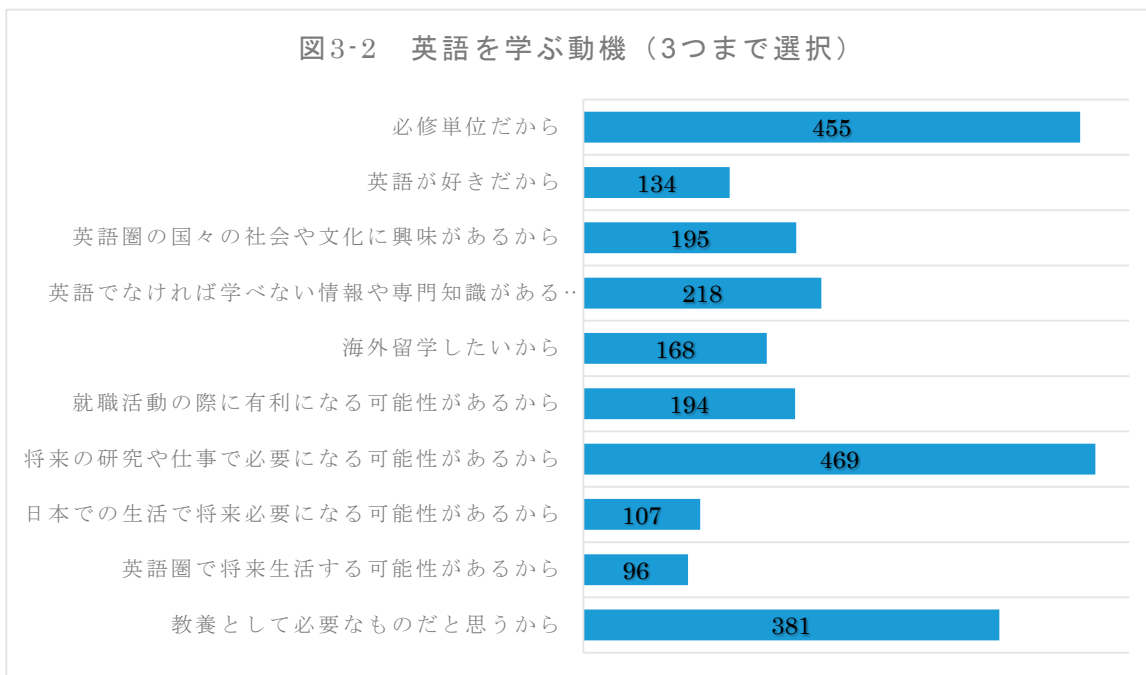
- ・授業ではなく自主学習がいい。
- ・実際に外国の大学でやっていることと同じような内容の講義を日本人だけでなく様々な国の人と学ぶ授業。
- ・その場で気軽に生きた英語を学べる様な授業。
- ・前期に開講された英語Iで、自分は秀の単位を取ったが、正直まったくもって力にならなかったと思う。その授業は英文を暗唱するもので、一言一句間違えないで覚えるようなものだった。しかし、海外で生活するとなった時や、英語で誰かとコミュニケーションをとった時は、英語を間違えないで話すことよりも、いかに自分の思っていることを伝えられるか、相手の思っていることをくみ取れるかが一番大切だと思う。そのような英語力があれば、専門用語は覚えるまで苦勞するかもしれないが、研究論文等を読むのもそれなりに上達していると思うし、論文を書く力だってそれなりにについていると思うのだ。読み書きは最悪時間をかければ正確に行える。時間をかけすぎて不便にならない程度の実力があればいいと思う。

でも直接誰かと意見を交わすときは時間が限られている。この時間内に十分に意見を交わせるだけの英語力があれば、読み書きはそれほど問題ないだろうし、完璧に100パーセント確実に正確な英語力もそんなに必要がなくなると思う。だから、直感的なリスニングとスピーキングなど、なるべくたくさんコミュニケーションを行えるような授業、そういう授業を受けたいと思う。できれば正確さによって成績や単位がどうにかなってしまうなどを気にせず、どれだけ積極的だったか、結果的にどれほどコミュニケーションがとれたか、そんな授業があったらいいと思う。

- ・ 専門の内容（たとえば生物学に関して英語でやるとするならば、内容についてのディスカッション、プレゼンテーション力を身につけるような授業形態にできるような工夫がなされているもの。）
- ・ リーディングが多すぎると思うのもっとスピーキングとリスニングを増やしていかないといけないと思う（ママ）。
- ・ 英会話の仕方を教えてくれる授業。
- ・ 自分の専門における外国人教授を招き、その専門について英語で討論をする授業。
- ・ 英語で書いたりする機会のある授業。
- ・ TOEIC 対策的なもの。
- ・ ネイティブの TA と日本人の講師の 2 人体制で行われる授業。
- ・ いない。

問 11: あなたが英語を学ぶ動機は何ですか。以下の選択肢から、優先順位の高いものを最大 3 つまで選んでください。

図 3-2 英語を学ぶ動機（3つまで選択）



「将来の研究や仕事で必要になる可能性があるから」「必修単位だから」「教養として必要なものだから」の 3 つの選択肢が圧倒的に選ばれる結果となった。全般に、日常の道具として英語を使いこなせるようになることを重視する傾向が強い中で、教養としての英語が選ばれるということは、「教養」という言葉が想起させるものの中身自体がかつてとは変わってきていることを示している。英語自体や英語圏の社会・文化への関心がさほど高くないことと考え合わせ、英語は海外の事情や文化に通じている証拠ではなく、高等教育を受けた者が身につけておくべき便利なツールとして捉えられているのであろう。言い換えれば、大学教育

を受ける者が比較的経済的・社会的に上位の階層出身者を中心としていた時代と比較し、教育機会の平等がまだ限定的な達成にとどまっているにせよ、現在は学生層の非エリート化がより一層進行した状況となっていること、それがこの一見相反する、「教養」重視と「実用」重視の並立という結果をもたらしているものと考えられる。

問12: その他、北大の英語カリキュラムに望むことを自由にお書きください。

この問いへの回答については、いくつかの目立った傾向について取り上げ、それらに関連する回答を抜粋して紹介する。全回答については、章末に付録として掲載する。

(1) 学生間の英語力の格差と英語ニーズの違いの問題

自由回答の中には、対照的な意見がいくつも見られた。これはそれぞれの学生が高校時代までにどのように英語を学習し、どんな英語環境で過ごしてきたかということと、将来の英語の必要性に関する見込みの違い、また英語の学力の違いに起因するものと思われる。

たとえば、必修科目としての英語については、一層の拡充、非必修化のそれぞれを支持する意見がみられる。「1年次だけではなく、それより上の学年でも英語を必修にするべきだと思います。英語は使わなければ伸びないし、どんどんと衰えると思うので、どんどん学生に使わせるようなカリキュラムにするべきだと思います」という学生がいる一方、「語学は自分で学ぶべき。(中略)なぜなら必要な人は必要なところで自然と英語を学んでいくし、そうでない人は英語を学ぶ必要がないからだ。だから大学では英語を必修ではなく、選択とすべき」という意見もある。

また、英語授業のレベルについては、低すぎるという意見とともに、ついていくのが困難と思われる学生からのコメントもある。前者からは「北大生の英語力からすると、ちょっと授業のレベルが低いのではないかと、思う。(中略)授業にもよりますが、高校レベルか、それ以下な気がします。もうちょっと手ごたえのある授業を受けたかったです」「高校の授業のほうが力になった。全体的に緩いのではないかと」といった意見、後者からは「全然わからないし、覚えている気がしない」という回答が寄せられている。

これらの意見の背景には、言うまでもなく専門性の違いや大学教育に対する期待の違い、英語の学力の違いが存在するのだが、それらに加えて留意しなければならないのは、北大に進学してくる学生たちの出身地域の事情や中学・高校での英語への取り組み方の違いである。詳細なことは回答者の学生に出身高校等での英語授業の内容、授業以外での英語に関連した活動の状況などを訊かなければわからないのだが、推測できることは、外国人の訪問者や定住者が比較的多く、日常生活の中で英語を目にしたたり耳にしたたりする機会が札幌よりも多い地域からの進学者が一定程度いるであろうこと、また一部の先進的な進学校などで、従来の講義型授業とは異なる新しいタイプの英語授業や活動が相当程度取り入れられていたり、一般的な高校用の英語教科書の内容にとどまらない教材が使われていたりすることが少なくないのではないかとということである。このような英語体験をしてきた学生たちは、大学での英語の授業は当然、よりレベルが高く内容の濃いものを期待して入学してきており、それが北大の英語への失望をもたらしていると考えられるのである。他方、従来型の英語授業や受験勉強を通じてしか英語にアクセスできていない入学者も相当いると考えられ、両方のグループの学生のニーズを満たすためには、学力別クラス編成はもちろんのこと、授業内容にバリエーションを持たせ、学生が自分の目的や学力に合った授業を組み合わせる受講が必要であろう。可能であれば、学生の将来の進路の希望や英語力の現状を踏まえた上で、受講すべき授業についての的確なアドバイスができるようなカウンセリング体制を整えたい。

(2) 授業内容・レベル・評価の不統一への不満

全員が同じ内容を受講する英語 II、抽選とはいえある程度希望の授業を選択する自由のある英語 III、VI に比べ、必修かつクラス選択の自由がない英語 I について、制度の改善を訴える学生の声は高い。

「英語 I は入学時に勝手に決まったもので、その難易度、評価の厳しさには講義ごとにおおきなばらつきがあるように感じる。簡単にいい成績が取れる講義もあれば、いい成績をとるのは難しい講義もある。これではあまりに不公平ではないかと思う。せめて、英語 III・IV のように個人に選択権を与えるべきではないかと思う」「同じ名前の授業でも先生によってやる内容がちがすぎる。特に英語 1 は自分でコース選択ができないので内容を統一してほしい」「英語 I は必修であるにもかかわらず、先生によって授業が異なりすぎる。ほかの教科でもこれは言えることだが、英語は特にライティング、リスニング、リーディングなど重点が置かれるスキルが違うので、すべての先生で方針は統一すべきだと感じた」

これらの声を受け、英語 I については平成 26 年度より、統一ガイドラインを定め、その遵守を教員に求めていく方針である。また、教員が英語 I の授業で活用するための共通教材の作成も予定されている。こうした対応策が、授業内容が統一されていないという批判にある程度応えることが期待される一方、多くの学生が求める、英語で発言したり対話したりする機会を、英語 I 全体として拡大していくことも必要であろう。なぜなら、理想として挙げられている少人数によるディスカッション中心の授業を、受講を希望する学生が全員入れるほどの数で開講するには、提供される授業コマ数と担当教員の大幅な増加が必須であり、将来的にはそれを目指すとしても、目下のところ実現までには相当の時間がかかるものと予想されるからである。もちろん、大学が大きな決断をし、専任・特任・非常勤を問わず、英語に関わるスタッフの大幅増員に予算を出すのであれば話は変わってくるのだが。

(3) 抽選システムへの不満

英語演習、英語 III・IV の抽選について挙げられている論点は主に、抽選漏れによって受講したくてもできない場合があること、希望しない授業を受講せざるを得なくなった場合に学習の動機づけがないこと、初級・中級・上級の選択が難しいこと、の 3 点に集約される。

「英語演習の抽選は公平に行われているが、落選してしまったら不平等に感じてしまう。総合理系には必修の課目なのに 1 年で前期も後期も英語演習に落ちてしまわないように改善してほしい」「抽選落ちでとりたいた英語の授業をとれないなんて、非常にナンセンスだと思います」「TOFEL でたまたま 3 点上回っただけで中級に入れるのはどうかとおもう。私は全然英語が苦手なので正直今中級でつらいし、内容がよくわからない。あの試験一回で後期の英語教育を決めるのはどうかと思います。そもそも 1 年前期の入学試験のときの点数で英語のコースを 1 年の前期から分けたほうが利にかなっているとおもいます」

学生の希望を最大限に叶えるには授業数を増やさなくてはならず、そうしたところで人気の授業とそうでない授業が出てクラスサイズに大きな差が生じることは避けられない。これは解決の困難なジレンマであり、状況をにらみながら開講数を調整していくほかないのだが、教員が協力し合い、似たタイプの授業の開講曜日・時間が重ならないようにして専門の異なる学生が受講できるようにするなど、工夫の余地はあると思われる。

成績によるレベル別クラスへの振り分けについては、既に東京大学が入学試験の英語の成績を利用し始めたところであり、北大でも同様のシステムが取れないか、検討する価値はあると思われる。

(4) 英語Ⅱへの不満

英語教員の人員不足を補うことができ、新しい時代のテクノロジーを活用する英語学習方法として導入された英語ⅡCALLだが、学生からは厳しい言葉が並んだ。その要点は、「英語力がつかない」ということである。代表的な意見を以下に挙げる。

「Callでの英語の授業は正直、あまり英語力の向上には向いていないと思う。やはり先生(外国人または日本人)との対面の授業のほうが、モチベーションも上がると思うし、英語力もつくと思う」「PCを使って英語を勉強するのは、理解づらいし違和感がある。力をつけることができているのか疑わしいので、CALLのような授業形態はなくしてほしい」「call 授業は本当に意味がないと思う。本当にしっかりやれば力が付くのだと思うが、そのやる気を引き出すのに必要な魅力がなさすぎると思う。大多数の人が終わらせることだけが目的になってると思うし、作業と化しているのが現実で誰の得にもなっていないと思う」「Callの授業をやる代わりに少人数制のNativeの先生の授業を行うほうが効率的でかつ英語ともしっかりと密接に触れ合うことができると感じる」「多くの生徒は、暗記や理解を必要とする場合には、紙に書いて覚えるのではないのでしょうか。私は今まで暗記や理解の多くを書いて覚えることに頼ってきたので、オンライン教材ではどうしても深くまで理解できなかったように思います。(結局は画面を印刷して書き込んだりしました)」「オンラインの英語学習は私には適していませんでした。自分のペースで勧められる(ママ)という点以外によい点が見つかりません。紙面上の文章や、実際に人が話す英語と触れた方が、英語がしっかりとした経験として残っていくと思います」

受験勉強を経験してきた学生たちは、何が学習の動機づけを上げ、学習効果を高めるのかを経験的に知っている。上記のような意見を出している学生たちが効果的であると認識しているのは、対面で教師とのやり取りをし、その場その場で教師からの評価や助言を受け取り、フィードバックすることで学習の成果を確かめていくことや、紙に手で書く作業などで自分の体を通して知識を身につけていくといった学習方法であろう。そのような体験がコンピュータを通じた自学自習からは欠けているのであり、授業料や時間という対価を払うだけの学習効果を、上記の学生たちは実感できていないのである。

一方、本アンケートとは別に、英語Ⅱの教材や授業運営、学力がついたかどうかについて学生に調査したアンケートでは、英語Ⅱを肯定的に評価する学生が7割程度という結果が出ている(本報告書第5章「英語Ⅱオンライン授業の現状と課題」参照)。英語Ⅱに批判的な学生たちとそうでない学生たちの違いが、実際の学習効果・学習効果の実感の有無・慣れや好み・教育・学習という行為についての考え方、いずれの理由によるのかは、アンケートの結果のみから判断することはできない。今後、可能であれば、より深い聞き取り調査を英語Ⅱの受講者に対して行い、一部の学生に強く見られる拒否反応を低減するような教材作成等を考えていくことも一案であろう。

(5) 少人数による実践英語訓練への志向

英語ⅡCALLへの不満は、少ない人数で英語を使った対話を練習したい、という実践英語訓練への志向とつながっている。既に上で扱った他の質問群への回答にも表れているが、英語学習への意欲の高い学生が求めているのは、即興的な英語コミュニケーション能力の強化ができる授業である。意見の例を挙げる。

「実際に英語を話す機会を増やしてほしい」「英語の能力を高めさせたいなら英語で話す機会をもっと設けるべきである」「自主的に英語を話す機会が少ないと感じる(クラスによると思うが)もっとDiscussion形式を取り入れたりして、お互いに英語で対話、対談を行えるようになるための授業が必要であると考えられる」「少人数の授業、ネイティブとの会話練習など、実践的なことをもっと授業に取り入れたらいいのではないのでしょうか」「外国人に話しかけられることがけっこうあるが、自分の言いたいことを英語で表現できず、もどかしい思いをするこ

とがある。英語の授業では、考えたことを辞書で調べずに即座に表現する練習をしたい」「学生どうしが実際に英語で会話をするような学習機会は、全学生に、かつもっと多く与えるべきだと思います」

ネイティブ・スピーカーの教員のもとで会話力を重視した授業を受けたいという希望が多いように見受けられるが、最後の意見のように、学生同士が英語で会話をする機会を設ける授業というのであれば、必ずしもネイティブ・スピーカーの教員でなくとも実施可能であろう。FDなど教員の力を養成する機会を設け、ネイティブ、非ネイティブを問わず、スピーキングの授業や英語による英語の授業を行う技術を教員に広く養成することが、今後重要となってくると思われる。

4. 2002年実施調査の結果との比較

2002年に行われた全学教育英語に関するアンケート調査は、2年生を対象として行われ、有効回答数788が得られた。この項では、その結果をまとめた報告書の内容を参照し、今回のアンケート結果との比較を試みる。

(1) 英語学習時間の伸長

2002年の結果によれば、1回の英語授業の準備・復習に充てる時間の長さを問う問いに対し、「全く（勉強）していない」という学生が171人、「30分以下」が212人で、これらの回答が合計383人、全体の48.6%を占めていた。今回のアンケート（問3）の回答では、30分以下か全くしていないという回答は合わせて30.4%で、授業のための勉強時間を比較的長くとる学生が増えたことがわかる。これは、いわゆる「単位の実質化」のために予習・復習の課題を課すことが教員に奨励されていることの効果の現れとみられることもできようが、総合入試制度が始まり、より良い成績を目指して努力する傾向が学生の間を高まっているためでもあろう。

授業関連以外の英語学習時間（問4）については、2002年・2013年とも、「全くしていない」という回答が最も多い。しかし、こちらにも多少の変化はみられ、2002年には65.6%であった「全くしていない」が、2013年には42.9%にまで減っている。そして、2002年では30分以上の英語学習時間を授業関連以外にとっている学生はわずか1割強であったが、2013年では24.5%と、倍以上の比率になっている。全体としては授業関連以外の英語学習に長い時間を割いている学生はなお少数派ではあるものの、英語学習への意欲がこの十年あまりで高まっていることを示す結果となった。

なお、今回アンケートでの問5（英語に触れる機会の種類）については2002年には対応する質問の設定がなく、問6で問うた英語を学習するのに適切な時期については、2002年と2013年の間で大きな相違はみられなかった。

(2) 英語学習の目的と受けたい授業の形態

近年のコミュニケーション重視の流れから、どんな英語力を身につけたいかという問い（問7）への答えにも変化があるものと予想したが、実際には学生の考える英語力タイプの優先順位はほぼ変化していないことがわかった。2013年のアンケートでは、2002年になかった選択肢として「インターネットで資料検索し情報収集する力」という項目を足したが、2002年と共通の7つの項目の優先順位や項目間の差は2回の調査を通じてほとんど同じであり、インターネットを英語で使う力については、以前からの7項目のどれよりも低い順位となった。唯一変化したのは会話力の種類で、2002年には「海外旅行などで困らない程度の会話力」と「英語を使って人と議論したり交渉したりする力」では、後者を選んだ回答者がやや多かったのに対し

し、2013年ではわずかながら前者が後者を上回った。これは、自由回答からもうかがえるように、現在はより日常的な場で英語を使うことを重視する学生が多くなっていることの反映であろう。

英語が選択科目となった場合に履修したい単位数(問8)については、大まかな傾向は2回のアンケートで共通しており、現状の必修単位数に近い「3~4単位」という回答が最も多くなっている。目につく変化は、その「3~4単位」と答えた回答者の割合が2002年の29%から2013年は35.8%に上がり、一方で「9単位以上」「選択しない」という両極端の回答が減ったことである(「9単位以上」で10%→7.1%、「選択しない」で11%→9.1%)。関心の高低に関わらず、ある程度は英語を学んでおかなければという安全策を取る傾向の一方で、英語にばかり打ち込んで専門をおろそかにすることもできない、というところであろうか。

検定対策の授業が開講されたら履修するかという質問(問9)については、「履修する」という回答が2002年の67%から2013年には53.5%へと大きく減り、代わって「どちらとも言えない」という回答が16%から27.5%へと増えた。「履修しない」という回答は2002年に17%、2013年に19.1%で、少ない変動にとどまった。推測できる理由としては、一時盛り上がっていたTOEIC受験ブームが落ち着き、その点数が示す英語レベルや検定試験としても価値が問い直される局面に入っていることが挙げられる。また、総合入試制度で入学した学生たちは、それ以前の世代よりも、自分に必要な資格等を見極めるのに時間をかけているという可能性も考えられる。

最後に、受けたと思う英語の授業形態についての質問(問10)について述べる。2002年のアンケートでは選択肢が2013年と異なり、「a. 受講生が20名以下の演習型授業」「b. 40~50名の購読型授業」「c. 100~200名のビデオ教材による講義型授業」「d. コンピュータ使用の自学自習型授業」「e. 場所と時間の縛りのないネットワーク利用の授業」「f. 夏休みなどを利用して集中的に開講されるインテンシブコース」「g. その他」となっていた。最も支持を集めたのはa.、次いでb.で、これは2013年の調査で少人数の演習が最も多く選ばれ、購読型授業が一定の支持を得たのと共通の傾向である。一方、2013年では述べ回答数1778件のうち127件、割合にして9.8%と最低の支持しか得られなかったインテンシブコースが、2002年の時点では述べ回答数1292件のうち198件、15.3%と、一定の支持を得ている。これはd.とe.のいずれよりも高い数字である。このことは、2002年には、学生の長期休暇や時間全般の使い方に、現在よりも余裕があり、自由度が高かったことを表しているのかもしれない。総じて、よりまじめに、より忙しくなっている現在の学生の姿が浮かび上がってくるのである。

5. おわりに

自由回答文を一読して感じられるのは、学生にかかっているプレッシャーの大きさである。学生は在学期間中に専門分野の知識・スキルを十分に学ぶことを願い、同時に英語力もつけたいと考えている。いくつかの回答からは、専門と語学双方の授業の課題に追われ、余裕がない様子もうかがえる。それだけに、英語の授業に対しては、時間や労力の無駄にならないよう、確実に英語力がつく形態を求めているのである。そのためには、英語を話す力の養成にしる、書く力の養成にしる、少人数教育が最も効果的であると考えている学生が多いことが、今回のアンケート調査では明らかになった。

そうした希望を叶えるために必要なのは、上でも触れたが、マンパワーの増強である。英語教育に関わる教員・スタッフが現在の数に据え置かれている現状では、学生の希望に応えるカリキュラム作りはほぼ不可能といってよいであろう。3-(1)で触れたが、一部の学生たち、おそらくは北大への入学生の中で最も先進的な教育を受けてきた学生たちは、北大の英語環境に不満を感じ、中には高校時代よりも英語力が下がったと感じている学生もいる。そうした評価はやがて後輩の高校生たちに伝わり、能力の高い受験生の争奪がますます激しくなっている昨今においては、北大が不利になる状況を作り出す一因になると言っても過言ではな

い。なお、重点項目としては取り上げなかったが、自由回答の中には優秀認定制度を批判するものが少なからずある。この制度によって英語の受講者を減らし、教員数が足りないのをカバーしている現状がある。ここからも、教員の増員が必要なことがわかる。

一方で、北大の英語の授業に対し、「ついていけない」「わからない」という思いを抱いている学生も少なくない。ネイティブ・スピーカーの教員と非ネイティブ・スピーカーの教員がそれぞれの能力を生かし、多様な学生集団のそれぞれに対応できる授業を提供する体制を整えていくべきであろう。そのためには、一人一人の教員自身が、北大の英語教育全体の中で、自分の役割がどう位置づけられるかを考え、かつ全体の方針との連携を保ち続けなければならない。

ここまで、学生の希望する英語教育について書いてきたが、同様に重要なのは、外国語センターとして、また北海道大学全体として、どのような英語力を、どれだけの範囲の学生につけさせるべきと考えるのかという、方針の設定である。英語の「会話」「ディスカッション」といっても、何をどのように語る能力を伸ばすのが大学教育の範疇なのか、何がそうでないのか、また書く能力はどれだけのレベルを目標とするのか、など、論じられなくてはならないことは多い。そうした事柄を十分に議論することで、必要な教員や TA を含めたスタッフの数、よりふさわしい組織の形が見えてくるであろう。

英語が必修でなくともよいという意見があることは上で紹介したが、学生の学習時間、教員の数や提供できるコマ数という限られたリソースを、どれだけ効果的に活用するかを考えると、必修コマ数の現状維持という枠をいったん取り外して新たな可能性を探るということも選択肢から排除すべきではない。こうした抜本的な改革は外国語教育センターのみの権限や能力でできるものではないので、センター内のみならず全学的な議論の対象とすべきであろう。

一ついえることは、すべての学生をカバーする一つの教育方針で事足りる時代ではないということである。多様な学生集団に対応し得る、弾力的なカリキュラム運営と、それを支える十分な人員の確保が、今後の外国語教育の鍵となろう。

付録：問12への自由回答一覧

*明らかに誤記・意味不明な記述と思われる箇所には「(ママ)」と付した。

- ・大変よい。
- ・学年が上がり、専門科目に移っても英語の授業や学習をするべきだと思う。
- ・コンピュータを使って取り組む課題をレベル別にもう少し増やしてほしい。
- ・少人数授業と雰囲気づくり
- ・英語Ⅰも抽選にしてほしい
- ・学生が将来的に日本に留まらず、世界を舞台に働くときなどに必要となる英語を身につけることができるような講義
- ・全額教育(ママ)に物理・生物以外の科目も英語で受けることができるようにしてほしい。
また、月5以外の時間に受けることができるようにしてほしい。私の場合、月5にほかの講義を取りたかったため、受けることができなかった。
- ・早期に英語によるコミュニケーションが可能になるような(ママ)授業を展開してほしい。今の日本の英語教育で自分が本当に英語を話せるようになるのかとても不安である。各自が特別なことをしなくても、学生が自身の英語力に自信を持てるような授業があればよいと思う。
- ・英語演習で、一つの授業あたりの受け入れ人数を増やすか授業自体を増やして、希望する演習を受けやすくしてほしい。どの授業も成績分布を同じようにして、簡単な授業に人が殺到することがないようにしてほしい
- ・教授によって授業内容が異なることは当然のことかもしれませんが、あまりにその差が激しいのは問題だと思います。出される予習の量の多さに極端な差があると、少し不公平な気がします。
- ・callはあまり得るものがないと思う。パソコンの前に座らなければならないという条件のせいで、取り組める機会が大幅に減る。他の方法と比べて、焦ってやって内容が入らなくなることが多くなると思う。
- ・同じ名前の授業でも先生によってやる内容がちがすぎる。特に英語Ⅰは自分でコース選択ができないので内容を統一してほしい。
- ・学内で発音矯正ソフトなどの英語力を向上するのに有用なソフトウェアを利用できるようにしてほしい。
全学教育で英語で行われる講義をもっと増やしてほしい。
- ・充分だと思います。
- ・現在、1年生は後期に英語Ⅲと英語Ⅳが必修科目となっている。英語Ⅳがリーディングに特化した授業であるため、英語Ⅲでリーディングを選択した学生は、他の技能を伸ばす機会が他の学生よりも少なくなる恐れがある。
北大生全体の英語の技能を偏りなく伸ばすためにも、対面授業におけるスピーキング、ライティング、リスニングの授業を選択という形ではなく、必修科目として履修すべきだと感じる。
- ・会話
- ・日本人の英語の先生にレベルの差がありすぎると思う。私は必修の授業で日本人の先生に習いましたが、正直満足できる内容ではなかったです。日本語で理論ばかり説明される授業よりも、実際に英語を使う授業が受けたいです。
- ・英語演習の数を増やしてほしい
- ・1年間を通して、日本人同士でもいいから英語で会話ができる授業があるといいと思う。
- ・オンライン教材をやめるべきだと思います。
- ・必修英語Ⅱの文章のレベル向上。入試下位層の英語力の(入学前の=入学後足手まといにならないための)底上げ。
- ・英語演習の抽選は公平に行われているが、落選してしまったら不平等に感じてしまう。総合理系には必修

の課目なのに1年で前期も後期も英語演習に落ちてしまわないように改善してほしい。

- ・もっとコミュニケーション能力が高められるようにしてほしい。
- ・英語 I II もレベル別にしてほしい。時間の無駄だった。
- ・Call での英語の授業は正直、あまり英語力の向上には向いていないと思う。やはり先生（外国人または日本人）との対面の授業のほうが、モチベーションも上がると思うし、英語力もつくと思う。
- ・授業ごとの質の差が大きすぎる
- ・実際に英語を話す機会を増やしてほしい。
- ・必修じゃなくしてもらいたい。
- ・英語 II の全体に占める中間テストの配点が大きすぎなので減らしてほしい。
- ・英語 II はすべての学生において等しい難易度、評価で、英語 III・IV に関しては自分で選んだものなので文句は一切ないが、英語 I は入学時に勝手に決まったもので、その難易度、評価の厳しさには講義ごとにおおきなばらつきがあるように感じる。簡単にいい成績が取れる講義もあれば、いい成績をとるのは難しい講義もある。これではあまりに不公平ではないかと思う。せめて、英語 III・IV のように個人に選択権を与えるべきではないかと思う。
- ・英語の能力を高めさせたいなら英語で話す機会をもっと設けるべきである。
- ・宿題を少なくしてほしい。ほかの科目を圧迫する量が毎週出されている。
- ・英語演習の授業を闇雲に抽選だけで受けられないようにしないでほしいです。
中級の授業でも、成績のつけ方が甘い授業だと単純に成績狙いの生徒で定員一杯になってしまい、1、2 学期を通して興味があつた授業が受けられず失望しています。あとは、TOEFL や TOEIC だけじゃなくて、IELTS 用のクラスとかも用意していただけると嬉しいです。
- ・CALL 授業よりも普通の授業のほうがよい
- ・全然わからないし、覚えている気がしない。
- ・会話力を養成するタイプの授業を増やしてほしい
- ・call やめてほしい
- ・外人に教わりたい。
- ・優秀認定の期間をもっと長くしてほしい TOEFL の優秀認定のボーダーを下げしてほしい 履修の抽選を廃止してほしい
- ・実践的な英語力の向上につながる授業
- ・自主的に英語を話す機会が少ないと感じる（クラスによると思うが）もっと Discussion 形式を取り入れたりして、お互いに英語で対話、対談を行えるようになるための授業が必要であると考えられる。また、Call の授業をやる代わりに少人数制の Native の先生の授業を行うほうが効率的でかつ英語ともっと密接に触れ合うことができると感じる。
- ・PC を使って英語を勉強するのは、理解しづらいし違和感がある。力をつけることができているのか疑問なので、CALL のような授業形態はなくしてほしい。
- ・より実践的な英語を身につけられるようなカリキュラムがあつたらいいと思います。
- ・英語の苦手、嫌いな生徒の参加意欲を高めるため 先生の話の聞いているだけではつまらないので 英語の授業が楽しいと感じられるような授業にするべきだと思う。（たとえば、授業でゲームを取り入れたり）
- ・数学や化学などのようにテストの成績にもっと重点を置いて成績評価をしてほしいです。
- ・英語で話す機会の多い授業があるといい。
- ・後期に英語演習を申し込みましたが、抽選落ちしたため、後期は英語の授業をとることができませんでした(秀認定をとっていたので)。抽選落ちでとりたいた英語の授業をとれないなんて、非常にナンセンスだと思います。論外です。
- ・留学生として英語をとっていませんが、日常生活で他の外国人と普通に英語を使いますし、私は英語より日本語を学習するのは始めたばかりですので、英語には問題ありません。このアンケートは私が対象とし

てあまり成り立たないと思います。

- ・外国人講師の授業ではしっかりとした外国人でしかできないような授業を行ってほしい。問題に取り組むだけなら日本人の先生で十分だと思う。
- ・北大生の英語力からすると、ちょっと授業のレベルが低いのではないかと、思う。私は前期ほとんど英語の勉強をしませんでした。そして、後期は英語の授業に予習がいるようになったので、予習するようになると授業がすごく簡単なことに気づきました。授業にもよりますが、高校レベルか、それ以下な気がします。もうちょっと手ごたえのある授業を受けたかったです。
- ・英語と生物(あるいは他の理系科目)に関して、日本語で行われる授業を行うと同時に、英語でも行える授業があればよいのではないかと。英語をマスターするのは当然であるが、やはり専門知識の方も大事である。両方を相互で学べる授業もあれば大学教育といえるのではないかと。
- ・英語Ⅱで利用したオンライン教材も大変勉強にはなったが、もっと母語話者に通じるような発音力や聞き取り能力の向上を図るプログラムを組み込んでほしい。
- ・少数精鋭
- ・英語Ⅰは必修であるにもかかわらず、先生によって授業が異なりすぎる。ほかの教科でもこれは言えることだが、英語は特にライティング、リスニング、リーディングなど重点が置かれるスキルが違うので、すべての先生で方針は統一すべきだと感じた。
- ・専門的な文章を読んだりするより、本当に基礎的な日常会話等の練習がしたい
- ・総合理系にとっては負担や成績が気になりより成績分布の偏りが激しい授業を取りたがる傾向がある。そのため、いったんテストで悪い点をとったり、成績のつけ方が偏りすぎている先生の授業かそうでないかで英語学習をしなくなる、授業を真面目に受けなくなるひが増える。授業内容を統一すべきである。また、評価もクラス単位でなく全体でみるべきである。そうすれば皆ががんばろうとするはずだ。
- ・語学は自分で学ぶべき。高校でもそうだったが、理科や数学と違い、自分で文法書や単語帳を使うだけで十分読み書きはできるようになる。むしろ授業の予習などが足かせになっている。なぜなら必要な人は必要なところで自然と英語を学んでいくし、そうでない人は英語を学ぶ必要がないからだ。だから大学では英語を必修ではなく、選択とすべき。
- ・一部の人のために、コール授業はクリック祭りのためにあるようなものなのですべて対面授業にし、必修の英語の授業はすべて同じテキストを使い同じ授業内容にするべきである。なぜならば、総合入試制度がある以上皆が評価を気にしているのに、先生による当たりはずれがあまりにも大きすぎるからである。授業内容や課題はある程度同じにして平等に行うべきである。
- ・学生に意欲を持たせることができればよいと思います。
- ・少人数の授業、ネイティブとの会話練習など、実践的なことをもっと授業に取り入れたらいいのではないのでしょうか。
- ・もっと英語を勉強したいのに、自然化学実験レポート等で時間を使い果たし、自主的な勉強がぜんぜんできてないのがやしいです!!! 受験期に身に着けたことが、どんどん流れ出ていっている気がして、英語にふれるたびに焦燥感に駆られます。
- ・もっと実践的な英語を学びたい
- ・英語のリスニングを扱う授業があるといいと思う。
- ・英語Ⅲ、そしてⅣについては抽選で履修クラスが決定しますがこの制度を改革してほしいと思います。単位が楽に取れそうな先生のクラスに希望を出すという事態が発生するかもしれません。英語Ⅰ、Ⅱはあらかじめ決められていたためそのような事態は起こらないと思います。
- ・英語を話す機会が少ないと思う。
- ・学部生なので1年のうちから工学に関する文章を読みたい。2年以上になってから論文を読んだり、論文を書いたりするときに助けになるし、英語の勉強に時間をとられすぎずに済むと思う。
- ・英語カリキュラムをあまり履修していないため、言えることがない。

- ・英語の論文の書き方指導
- ・話す、聞く能力が高められる講義がもっとあってほしい。やや易しめで。
- ・初級の英会話のクラスがもっとたくさんあったらいいと思います。
- ・授業時間中に英語を実際に使って話すような講座を増やしてほしい。
- ・なかなか、それぞれの教員で差があって、ただただ大変で実践的でなかったり、ただただ緩くためにならなかつたりする。もっと、ちょうどいいところの授業が増えるように調整してほしい。何のための総合入試制度かわからない。
- ・難しいことだとは分かるが英語Ⅰの授業内容の統一化を図っていただきたい。必修となっていてさらに自分で選べないのだからこれくらいの便宜は図れないものだろうか
- ・英語教育に限らず、先生の授業の質にむらがあるので、ある程度均一にしてほしい。
- ・授業によって必要とされる勉強時間があまりにも異なるのは、同じ科目（たとえば英語Ⅳ）なのに不公平感が出て嫌です。内容が各自選べるのはいいと思うのですが、必要とされる勉強時間は単位数との兼ね合いも考えて授業をしてほしいです。
- ・スピーキング、ライティングの割合を徐々に大きくしていくべきだと思う。
- ・集中講義にも英語による授業を開設して、普段の授業ではできないようなプログラムを行うことで、夏季休業中も英語に触れる機会が増えるし英語への関心が高まると思う。
- ・コールの授業は、やらなくてもいいかなと思います。
スピーキングの授業をとっているのですが、その授業は私自身、すごく好きだし、ためになっていると思うので、そのような授業を増やしてほしいです。
- ・英語演習が抽選科目なので、とりたいた授業がとれなくて残念なことがある。また、後期の英語Ⅲ、Ⅳは、受講するまでシラバスを見る程度で、どんな授業なのかわからないので選びにくい。
- ・もっと、会話したり議論するためのスピーキングの授業が開講されると履修したいと思う。
- ・しゃべる能力を伸ばす授業を増やしてほしい。
- ・日常会話の練習
- ・実践英語を学べる場が増えると嬉しいです。
- ・GPA や成績ばかりを気にしなくてはいけないので、自由に学びたいと思った学習方法をとることができない。
- ・英語の講義をもっと受けられるようにしてほしい。
- ・日常会話を学ぶ場面を増やしてほしい。
- ・パソコンでする授業はいらなと思う。
- ・技術英語の講座をを（ママ）専門ごとに開設してほしい。
- ・高校の授業のほうが力になった。全体的に緩いのではないかと。CALL は身になったと思うが・・・
- ・CALL のパソコンでの英語学習はそんなにいいものではないと思う。
- ・優秀認定制度はやめてほしい。まじめに英語Ⅲ、Ⅳを履修するのが馬鹿らしくなってくる。
- ・英語を気軽に学習できるような授業を開講してほしい。
- ・会話重視の授業を多くしてほしい
- ・必修の英語の授業は本当に内容が薄く無駄だと思う。特に CALL 授業は学べることが少なく、全く必要ないと感じた。英語演習は内容がそれなりに充実していると思う。
- ・英語のカリキュラムが増えるのはいいことだと思う 就職を目指す人も、研究者を目指す人も、これからの社会には英語は欠かせない
- ・将来英語を使う人つかわない人というわけなので選択科目にすればよいと思う。特に抽選科目で希望通りにならなかつたために希望もしない科目を必修だからと言って嫌々やる必要があるのか疑問に思う。
- ・使える英語を身につけることを目的としたカリキュラム
- ・英語の内容が重いわりに得られる単位が少なく、やる気が出ない。

- ・興味のある授業が受けられるようにしてほしい。抽選で外れることが多いので、似た内容のものを違う時間に2, 3個設定してもらえると、意欲を持って興味のある授業に取り組めると思う。
- ・call 授業に意味を感じない
- ・クラス間の評価の差を何とかしてほしい。
- ・積極的に英語を話す機会を、授業の一部として設けることは、英語の学習をするにあたって、とても有効だと思います。
- ・Webtube 等を休みの期間も受けたり、授業が終了しても受講したり、復習できるようにしてほしいです。
- ・教師ごとにカリキュラムの差があり過ぎるところを是正していただきたい。
- ・優秀認定をとっても英語Ⅲの授業を取れるようにしてほしい。またアカデミックライティングとリーディングの授業を必修にしたほうがよいと思う。
- ・英語が好きな人と苦手な人で分けて、授業すれば、それぞれのニーズにあったものを得られると思う
- ・英語Ⅱの Call で締め切りを守れずに単位を落とす人があまりにも多いように思えます。本人が怠っていた等の理由もありますが、課題を全部完了していないことに気がつかないというケースもあると思います。必須課題を全て終えたら成績画面に何かしらの表示があるなどすると少しは改善されるのではないのでしょうか。

対面式の授業では、私は中級クラスの授業をとっているのですが、どうやら初級の英語演習と同じ教材とテスト問題が使われているようで腑に落ちません。英語と英語演習では英語演習のほうがレベルが高いのですか？先生が教え方をかえているのかもしれませんが。

- ・英会話をする機会を増やしてほしい。
- ・もっと英語を使って話す機会を増やしてもよいと思う。
- ・演習の授業がすべて抽選で外れてしまい、その学期で履修できなくなるという話をよく聞いています。どうかしてほしいです。
- ・英語をただ学ぶだけでなく、話す機会をもっと増やしていけば、将来のためになると思います。
- ・現状でも質のよい授業だと感じているのでとくにはありません
- ・もっと生徒が議論する方の授業を増やした方がよいと思う。
- ・教授の質をもっと上げてほしい。
- ・特に英語に関して、発音のひどい日本人教授が多すぎる。
- ・難しいかもしれないが、初級・中級・上級といったレベルがあまりあてにならないように思った（たとえば、中級でありながら初級に近いと思われる授業だったり、上級と中級で難易度に大差があったりした）ので、名目上のレベルと実際のレベルをできるだけつりあわせるようにしてほしい。
- ・一年前期の英語一では多くの人が外国人教師の講義を受けれるようになったほうが、高校までの授業と違い、大学らしい生きた英語の授業をうけらる（ママ）ような気がします。
- ・TOFELでたまたま3点上回っただけで中級に入れるのはどうかとおもう。私は全然英語が苦手なので正直今中級でつらいし、内容がよくわからない。あの試験一回で後期の英語教育を決めるのはどうかと思います。そもそも1年前期の入学試験のときの点数で英語のコースを1年の前期から分けたほうが利にかなっているとおもいます。
- ・秀認定の制度の必要性がわからない
- ・1年前期の英語Ⅰは学生に講義内容、担当教員についての選択権がないのに各授業ごとにやる内容（教科書、授業形式、課題、成績など）がかなり異なっているらしいのですが、仮にそれが本当なら、内容をある程度揃えるべきだと思います。教員個人の自主性をないがしろにするつもりはないですが、仕組み上少し疑問があります。
- ・現在の授業ではスピーキングの授業ですら話しづらい雰囲気があり、より英語を本当にしゃべれない人向けの授業も開講してほしい。新渡戸以外の学生にも英語を話す機会を増やせるようにしてほしい。（もちろん本人が話す機会を作ろうとすることが一番重要であるとは理解していますが・・・）

- ・主に必修の英語についてのアンケートのようなのでここに書くべきことではないかもしれないが、ほとんどの英語演習が抽選科目になっている現状をなんとかしてほしい。
- ・英語Ⅰの授業内容をある程度統一してほしいです。現状では、所属クラスがあらかじめ決まっているのに、各クラスで重点を置く内容が大きく異なっている（文法事項、speaking、reading など）ので公平性に欠けると思います。統一できないなら英語Ⅲ、Ⅳのように選択できるようにするのはどうでしょうか。
- ・外国人に話しかけられることがけっこうあるが、自分の言いたいことを英語で表現できず、もどかしい思いをすることがある。英語の授業では、考えたことを辞書で調べずに即座に表現する練習をしたい。
- ・話す機会を自分から見つけに行く意識があまり出ないのでいろんな時事問題からいろんな国の面白い文化を話し合ったりすることで英語を”日常的に”使えるようにすれば英語を話す楽しみもわかると思うし、勉強に対して抵抗感がなくなると思う。
第二言語は結構楽しんで学べているので（文法的事柄が多く簡単というのものもあるが）、講義の参考にしてもよいのではないかと思う。
- ・もっと実用的な内容にしてほしい。
- ・スピーキングを様々なバリエーションで増やしてほしい。
- ・speaking と writing のスキルをあげられるカリキュラムを充実させてほしい。
- ・英語ⅢⅣの抽選システムについて
 - 1.入力から結果が出るまでの期間が長すぎる。即日結果開示のほうがいい。
 - 2.入力時に各科目からシラバスにリンクが張っていないのは不便。また、シラバスと登録画面で外国語教員の名前が統一されておらず検索性が悪いのも改善してほしい。
 - 3.クラスが選べるシステム自体はいいものだと思う。
- ・call 授業は本当に意味がないと思う。本当にしっかりやれば力が付くのだと思うが、そのやる気を引き出すのに必要な魅力がなさすぎると思う。大多数の人が終わらせることだけが目的になってると思うし、作業と化しているのが現実で誰の得にもなっていないと思う。
- ・英語を必修科目から外したほうが良いと思う。やらなければいけないという使命感からやるきがあまりでない。
- ・1年次だけではなく、それより上の学年でも英語を必修にするべきだと思います。英語は使わなければ伸びないし、どんどんと衰えると思うので、どんどん学生に使わせるようなカリキュラムにするべきだと思います。
- ・英語が苦手だが日常会話を英語でできるようになりたいので、簡単な英会話の授業をしてほしい。
- ・TOEIC を英語Ⅱに取り入れてほしかった。また、入学の春休み時点で TOEFL をやるということを告げてほしかった。
- ・留学生とより多くかかわれるようなカリキュラムを作ってほしい
- ・TOEFL、TOEIC による秀認定制度はいくらなんでもやりすぎで4単位も免除されるのはおかしいとおもっている。なぜなら、TOEFL、TOEIC ではスピーキングやディベートの能力は測れないはずなのに英語Ⅲ、Ⅳや英語演習ではそういう分野も含まれるからです
- ・総理は聞やっぱりわかんかね（ママ）
- ・speaking の授業があるといい。
- ・口語英文法は必須だと思います。
- ・今より自主的に英語教材に取り組む機会があるといいと思います。
- ・会話する機会が必要だ。
- ・必修から外してください。必修なら難易度を同じにしてください。
- ・英語は必修じゃなくてもいいと思う。
- ・1年生の時の英語Ⅰの成績が、外人の授業と日本人の授業で違いすぎる。外人の授業の成績のつけ方がキツくて嫌だった。

- ・もっと TOFLE や TOIC (ママ) の勉強を授業を通じてできたらいいと思う
- ・もっと自由に英語演習をとりたいです 抽選ではずれたらとれないのは悲しいです。
- ・英語Ⅱのようにオンラインを使った授業は自分に合わなかったのも、そこも選択式ならよかった。
- ・春先に売っていたトフルの生協幹旋の教材ですが、価格の割に市販のものとそこまで変わらないと思いました。
- ・TOEFL の実施時期が学校祭と被っていて、直前時期はなかなか勉強時間が確保できませんでした。必ず店舗を出店しなければいけない1年生にとっては厳しい時期だと思います。前期の日程等から6月中旬でなければいけないのはわかるので、後期にも実施するなどの配慮がほしいです。また後期には、英語Ⅱのような形で TOEIC を受講するカリキュラムもほしいと思いました(英語演習等で)。最後に、優秀認定の成績は度が過ぎていると思います。
- ・英語2のようにパソコンで学習するタイプは使いづらい。紙に自分で書き込んだり線を引いたりする方がやりやすい。
- ・英検・TOEFL・TOEIC の対策をする授業を必修にしてくれれば今までよりは真面目にやろうと思う。
- ・大学受験を終えて英語を勉強する気が失せたのでそこをなんとかしてくれるようなカリキュラムをお願いします。
- ・理系科目の負担にならないような適度な量で行われるべきだと思う。
- ・英語2は時期ごとで課題提出期間を設けたほうがいい。じゃないとやる人(ママ)が続出する。提出日をこまめに設置することでやる気も出るのではないかと思う。
- ・英語の必修単位をもっと増やすべきだと思う。
- ・英語ⅡCALL はもう少し身(ママ)のある授業にすべきと思う
- ・もう少し英語ができない人のために易しい問題も出してほしい
- ・TOEIC 対策の授業はあったらうれしいです。
- ・call の授業は自分で手を動かさずにクリックするだけなので、あまり意味ないと思う。紙の教材にすべきである。
- ・会話形式の授業を増やしてほしい。聞く、話すの能力も必要である。英語の必修を3年までにしてほしい
- ・これからの社会に必要な英語力を身につけられるカリキュラム
- ・CALL は意味がないと思う。
- ・北大生のほとんどが、英語が読めて(わかって)はいるかもしれないが、音読させるととてもひどい発音しかできていないということは、教員は全くわかっていないと思う。グローバルな人材を育成するのにきれいな発音は関係ないとまでいう教員がいるのも事実だが、しゃべられなければいつまでも”シャイな日本人”と思われるだけであると思う。北大全体の英語力について(文字の英語力ではなくて)、よく考えてほしい。
- ・教員によって授業の内容や質に大きな差があるようだ。
- ・オンラインの英語学習は私には適していませんでした。自分のペースで勧められる(ママ)という点以外によい点が見つかりません。紙面上の文章や、実際に人が話す英語と触れた方が、英語がしっかりとした経験として残っていくと思います。
後期の英語はリーディング、スピーキング、リスニング、ライティング、CALL などとコースを選択する形式でしたが、そのようにいずれかの英語力だけに偏らせるのは、全体としての英語力向上に全くつながらないと思います。それぞれの力を学んでそれらを合わせて初めて、実際に使える英語になるのではないのでしょうか。特に、学生どうしが実際に英語で会話をするような学習機会は、全学生に、かつもっと多く与えるべきだと思います。
- ・日本語のわからない外国人の先生の授業では、授業の課題内容が学生にあまり伝わっていないように見えた。TA をつけたり、課題の詳細を書いたプリントをくばるようにするなどの配慮が必要ではないだろうか。特に、必修の英語ⅠⅡⅢⅣでは、皆が英語の聴き取りが十分できる訳ではなく、授業が混乱していた

クラスもあった。

- ・多くの生徒は、暗記や理解を必要とする場合には、紙に書いて覚えるのではないのでしょうか。私は今まで暗記や理解の多くを書いて覚えることに頼ってきたので、オンライン教材ではどうしても深くまで理解できなかつたように思います。(結局は画面を印刷して書き込んだりしました) もちろんオンライン教材を好む生徒もいると思いますし、オンライン教材だからこそできることがあるというのも十分理解できます。また、授業を選ぶ際に、内容だけでなくその担当教授の人間性、英語力などの詳細を知りたいです。
- ・先生によって授業の質に違いがありすぎる。全員が同じ内容の授業をしないと、移行する際に不平等である。
- ・学科によらず、長期留学のできる体制にしてほしい。
- ・聞いて話す力を重視した英語教育が必要だと思う。
- ・英語なんて学びたい人だけ学ばせる 大学ってそういうところだろ
- ・TOEFL-IBT 対策の講義を開講して欲しいです。
- ・徹底的に発音を矯正するクラス
- ・もう少し双方向的な授業にしたほうがよいと思われる。日常会話に困らないために、ネイティブとの会話練習をもっと多く取り入れるべきであると考えます。
- ・パソコン課題で音声や動画を活用しているのはよいのだが、パソコンでリーディングの授業をされてもただただ目が痛いだけであまり意味を感じない。英語の担当教師によって難易度に差がありすぎる。基礎を確立するのは大切なことだが、あまりにも簡単な授業を前期に行ってしまうと、ことによっては入学時より英語の力が落ちる場合もある気がする。
- ・英語の CALL 授業をもう少し実践的なものにするべきだと思う。
- ・もっと留学生と交流する機会がほしいと思います。
- ・優秀認定制度は、英語を学ぶ機会の意欲減退につながってしまうので、廃止すべきだと思います。よりレベルの高い授業の強制受講などの策を講じるべきです。
- ・授業内外で留学生との関わりを持ちやすくしてほしい。
- ・優秀認定をとっても、英語Ⅲ、Ⅳの授業を履修できるようにしてほしい
- ・英語を勉強する気のある学生は授業がなくても勉強するし、逆にやる気のない学生は楽な授業を選んで最低限単位が取れるような取り組み方しかしないから、英語を必修単位にする必要はないと思う。選択科目にして、本当に意欲のある学生だけに授業を受けさせれば、今みたいに予習しない学生がいてそれに対して先生がイライラすることもなくなって授業の雰囲気ももっと良くなると思う。
- ・特になし (同文・同趣旨の文合わせて 21 件)

第4章

高年次学生アンケートによる英語学習に関する意識調査(2013)

——分析と考察——

外国語教育センター外国語教育将来構想 WG 英語部会

河合 靖・園田勝英・土田映子・原田真見・辻本 篤

0. はじめに

北海道大学の英語教育に関する意識調査を2002年(平成14年)に実施してから11年経過し、現行の英語カリキュラムを評価する一環として、本学の教員と学生にアンケート調査を実施することとなった。前回の調査では、本学の教員と2年次前期の学生を対象とした。今回も、教員と全学英語科目を履修中の学生(1年次後期)に調査を行ったが(第2章、第3章参照)、あわせて、本学の英語教育に対するニーズ調査を強化するために、学部2年から大学院博士3年までの高年次学生を調査対象に加えた。全学英語教育プログラム終了後の英語に関するニーズを学生側の視点から見ることを目的としている。本稿では、この高年次学生に対する調査結果を報告する。

本調査は、各部署の教務係の協力を受けて、12学部19大学院の学生・院生に対してメーリングリスト等を通じて調査協力の依頼文書を送り、彼らをアンケート回答用のウェブサイトへ誘導して回答を得る形で実施した。アンケートの設問は英語と英語以外の外国語を合わせて53問あり、そのうち英語に関するものは22問である。また、英語と英語以外の外国語に共通の海外語学研修プログラムに関する設問が3問ある。2014年(平成26年)1月22日から2月10日までウェブ上で回答を受け付け、有効回答者数は693人であった。調査対象者は約15,000人と推測されるので、対象者の4.6%程度である。アンケート用紙を直接送付した教員アンケートや授業内で協力を呼びかけた1年次学生アンケートと比較して回収率は劣るが、53問もの多数の設問に対して最後まで回答しており調査参加への真剣さが伺われること、回答者のうちわけが本学の年次・文理別の学生比率に対応しており本学の高年次学生の意識を比較的忠実に反映すると思われることなどから、十分参考に値するデータであると判断する。

本章では、英語教育関連の質問項目について結果を考察する。必要に応じて、年次グループ別、文理別の比較を交えて分析を行う。なお、医学部、歯学部、薬学部、獣医学部は6年制学部のため、学部5年次、6年次の学生を大学院修士学生と同じく5年次以降の年次グループに入れた。また、文理別では無回答等で不明の者が15人いたので分析から外した。さらに、明らかな誤解による回答については必要に応じて補正を加えた。

アンケートの設問には通し番号が付されており、問1は年次、問2は所属、問3から問5は海外語学研修プログラムの単位認定に関するものである。本稿では、英語教育に関連する問6から結果を報告する。なお、海外語学研修プログラムの単位認定については、後続の英語海外語学研修プログラムに関する設問のところで合わせて報告する。

表1：高年次学生アンケート回答者数うちわけ

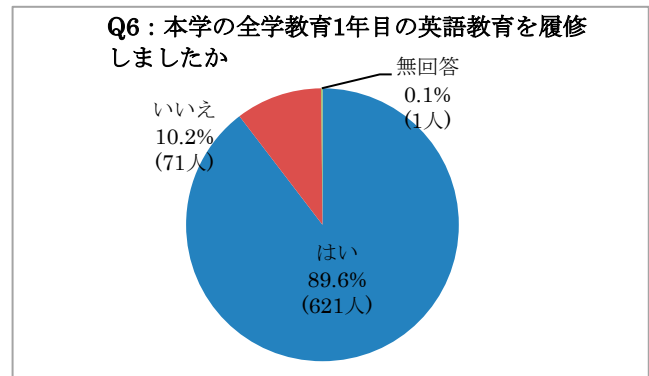
	学部 2年	学部 3年	学部 4年	修士1年/ 学部5年	修士2年/ 学部6年	博士 1年	博士 2年	博士 3年	回答 者数	小計	
文学部	8	10	8						26	109	153
教育学部	5	3	2						10		
法学部	15	11	17						43		
経済学部	13	8	9						30		
文学研究科				11	11	2			24	44	
教育学院						1			1		
法学研究科/法科大学院				2	2	1			5		
経済学研究科/会計専門職大学院				5	6				11		
国際広報メディア・観光学院					1			1	2		
公共政策大学院					1				1		
理学部	22	20	17						59	319	525
医学部	8	6	11	3	2				30		
歯学部	4	2		1					7		
薬学部	4	5	4	1	2				16		
工学部	38	40	31						109		
農学部	22	20	15						57		
獣医学部	2	1	1	2					6		
水産学部	16	6	13						35		
理学院				14	3		1		18	206	
医学研究科						1		2	3		
保健科学院				9	4				13		
歯学研究科									0		
工学院				26	28	2	3	1	60		
農学院				6	9		1		16		
獣医学研究科							2	1	3		
水産科学院				5	5	1			11		
情報科学研究科				14	14	2	4		34		
環境科学院				7	7		1	1	16		
生命科学院				6	3		1		10		
総合化学院				12	7	2	1		22		
不明	6	4	5						15		
回答者数	163	136	133	124	105	12	14	6	693	15	15
小計	432			261					693	693	693

※医学部・歯学部・薬学部・獣医学部は6年制

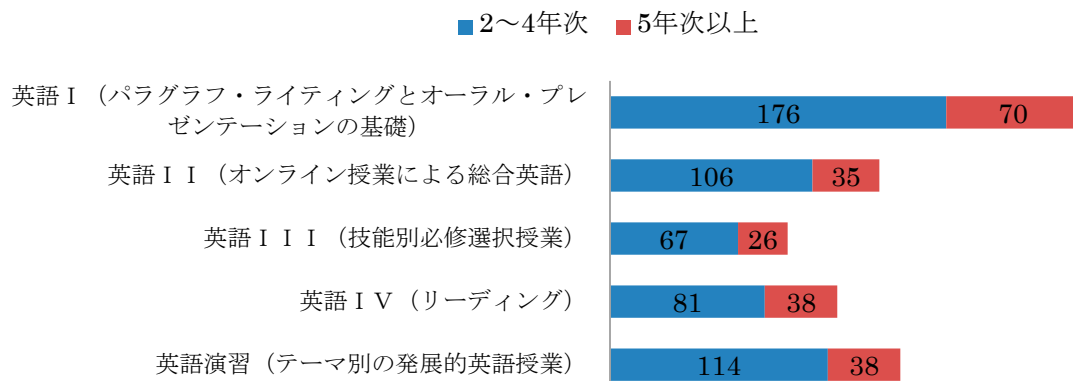
1. 全学英語授業科目に対する評価

本学英語教育科目を履修した高年次学生が、教育内容に関してどのような認識を持っているかについて、まず見ていく。問6「本学の全学教育1年目の英語教育を履修しましたか」に対して、アンケート回答者693人中、621人(89.6%)が本学の全学英語教育1年目の授業を履修したと答えている。学部編入者や他大学から大学院に入学してきた学生がいるので、高年次学生でも全員が1年次に本学の英語教育を履修しているわけではない。

問6で本学の全学英語教育1年目の授業を履修したと答えた学生に、問7では、現在の学習や研究に役立っていると思う科目を選んでもらった。複数回答可である。



Q7：次の全学教育英語科目はあなたの現在の学習・研究に役だっていると思いますか。役だっていると思うもの全てをお選びください。(複数回答可)



英語 I が役だっていると回答した学生が、2年次～4年次・5年次以上ともにもっとも多かった。合計246人の学生は、英語授業科目履修者621人の39.6%に相当する。続いて英語演習(152人、24.5%)、英語II(141人、22.7%)となっている。さらに、英語IV(119人、19.2%)、英語III(93人、15.0%)と続く。

問8では、「上の問7で役に立つ英語授業があったと答えた方にお聞きします。現在役だっていると思う内容を具体的にお答えください」と、その英語科目の具体的によかった点を質問している。

英語 I の授業内容に関わる問8の回答として、まず、「パラグラフ・ライティングの基本的な様式を学べたことが、論文執筆やレポート作成に役立っている」のように、パラグラフの構成やアカデミック・ライティングの基礎技能を身につけられたことが多くあげられている。また、「オーラル・プレゼンテーションは、日本語でのプレゼンテーションと異なる構成などが要求されるので、早い段階でそれを学習できたのは大いによかった」など、プレゼンテーションの基礎に関する記述も多かった。母語話者教員から英語で授業を受けることに対する評価(例「ネイティブの先生による英語のみ話す授業であったため、とにかく話してコミュニケーションをとる練習になった」)も目立った。

英語演習は、「英語を学ぶ」段階から「英語を使って専門知識を身につける」段階への橋渡しにすることを目標としている。「英語を勉強するというよりも、英語で何かを勉強するという基礎ができたこと」や「英語を勉強するのではなく授業内容を英語で勉強することを通して、英語で行われる大学院の授業も自然に受け入れられた」のように、問8の回答にもそれは反映されている。また、短期留学生が受講する国際交流科目

を日本人学生が英語演習として受講できるように設定されているが、「英語演習（国際交流科目のうち英語演習として受けられるもの）は外国人と交流することが出来ると同時に、英語を聞く・読む・喋る機会にもなっていて、良いと思う」という記述が見られた。しかし、「研究室に所属すると英語論文を読む必要があるし、大学院入試でも専門分野の英文を読むことになるため、英語論文を大量に読みくだして日本語訳し、きちんと答え合わせをするという授業がありがたかった」などのように、読解中心の授業に関する記述も多く見られた。英語演習は内容が多様であり、多読、シャドウイング、専門の内容に関係したプレゼンテーション、異文化理解など、履修した授業を反映して役立ったとされることからもさまざまな記述がみられた。

英語Ⅱオンライン授業には、動画や音声を多量に用いて実践的な聞き取りの練習を行う教材が多く含まれており、問8での記述には、「本物の英語でリスニングを聞く機会を得られたこと」や「ネイティブの会話のスピードを実感した点」のように、聞き取り能力の向上に関する記述が見られた。また、同様にこの授業では読解教材も多く扱われるために、「英語の論文を読む機会が多いのですが、リーディングの勉強をしていたことにより、読むスピード、読解力が身についたと感じています」など読解力の向上に関する記述も多い。また、英語ⅡではTOEFL-ITPを評価の一部に加えており、「TOEICの勉強をする際、リーディングやリスニングの基礎的な部分が補えていると思います」など、TOEFLやTOEICを受験する際への影響をあげる者も見られた。少数意見ながら「オンライン授業では英語の語学的な知識を通して英語の構造の理解を深めることができた」のように、英語の言語的な理解についてあげた学生も見られた。

英語Ⅳはリーディングの授業であるので、問8の回答でも、専門に進んでから英語論文を読む上で役に立ったという記述が当然ながら多数を占めている。（例：「理系学生であるが、海外の論文誌を読むための基礎的な練習としては役立っている。実際論文を読み始めるのは学部3年あたりからであるが、1、2年と英語の勉強をしていないと読む力が落ちてしまっていたと思う」）高年次に進んでから多量の英語文献に対応しなければならない状況があることが伺える。（例：「多量の英文を嫌悪感なく読む習慣を付けられること」）

問7では英語Ⅲをあげた人数がもっとも少なかったが、問8ではライティングの授業に言及する記述が多かった。（例：「高校の授業や受験英語のライティングで長文を書くことはほとんど無いため、英語Ⅲのライティングの授業で長文英語をネイティブの講師に添削してもらったことは非常に有益だったと思う」）また、プレゼンテーションやスピーキング、リスニングなど口頭による言語活動に対する記述も目立った。（例：「英語でプレゼンテーションを行うことによって語彙力、文章構成力が鍛えられたように感じた」）英語Ⅲは技能別に選択する科目であるが、4技能を統合する授業を評価する声もある。例えば、「リスニングの授業で、あるテーマに関するニュース映像を英語で見て、そのテーマに関する問題提起やそれに対する自分の意見をスピーチし、他者とディスカッションするという授業内容でした。自分の意見を述べたり、他者の意見に同調する、あるいは反対する際の英語表現についてのバリエーションを学ぶことができました」という記述が見られた。

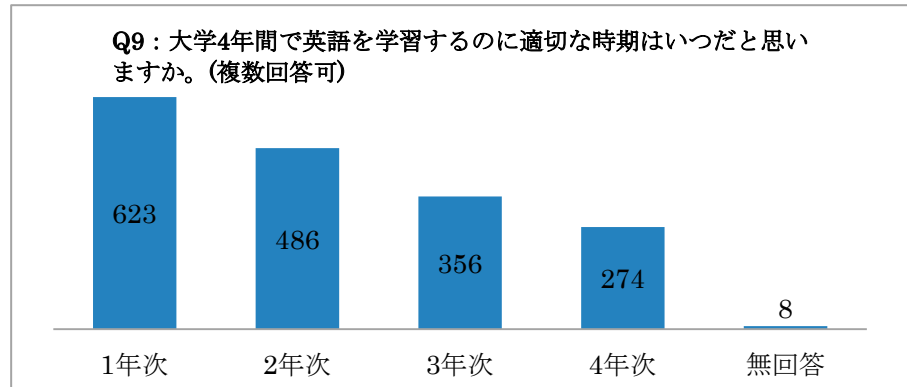
特定の科目というよりも、特色の異なる科目群をいろいろと履修出来たことの利点を指摘する者もいた。（例：「どの授業もすべて役に立った。むしろ、役に立たないはずはない。実際に海外に行きさえすれば確実にそのことに気づくはずだ」）また、提供される学習経験を自ら利用する重要性を述べている記述もある。（例：「英語Ⅲ」における、英語でのディベートだったり、「英語演習(上級)」における、英語での専門用語を用いた上での専門的な内容を学べたり、HUSTEPの留学生と一緒にディスカッションできたりする点で、大いに役立っていると思う」）

以上から、高年次学生は北海道大学の英語カリキュラムの恩恵を受けていると感じているように思われる。とくに、ライティングやプレゼンテーションの発信型の授業内容を評価し、母語話者教師による指導の利点をあげる記述が多い。ただし、専門に進んでから大量の英語文献を読みこなす必要性に対応する力をつけるための工夫も必要ようである。

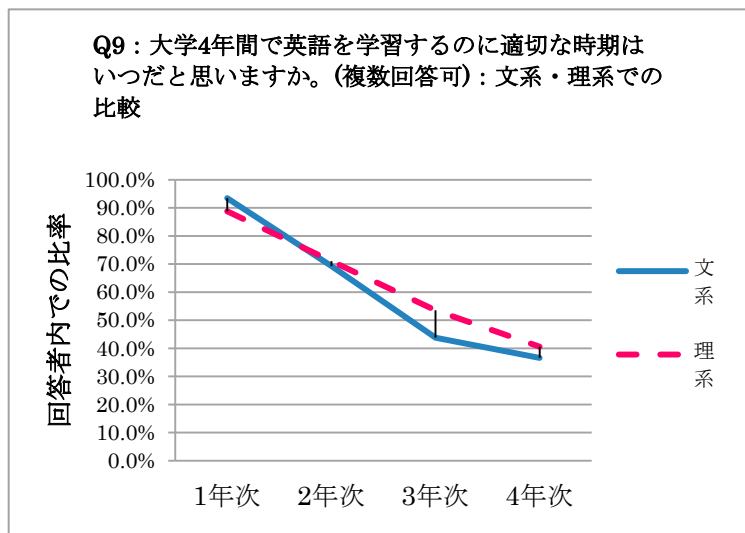
2. 英語学習の必要性

問9では、大学入学後、どの時期に英語を学習するのがよいか質問した。1年次に集中してやるのがよいのか、高年次まで継続してやるのがよいのか、どちらを支持しているのかを見た。結果からは、英語は1年次に学習すべきと考える傾向が強いことが読み取れる。複数回答となっているので、必ずしも1年次だけに英語を学ばよと考えているわけではないが、進級要件としての必修の外国語科目の単位を満たすことをまず考えている学生が少なからず含まれることが伺える。(1年次のみという回答者が95人、13.7%いた。)

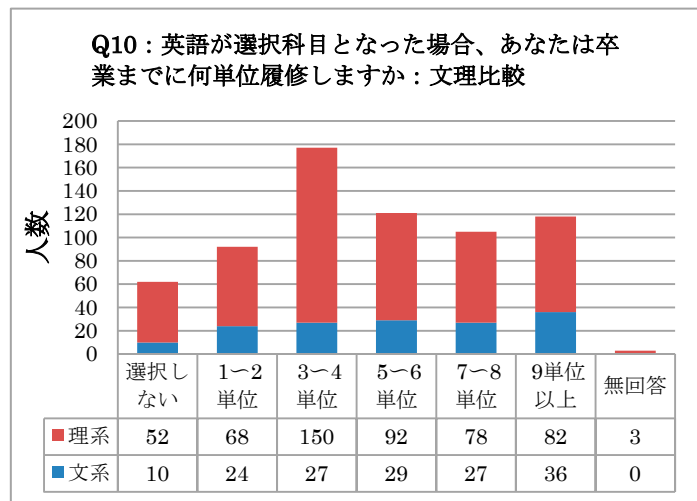
しかし、3年次、4年次にも英語を学ぶべきとする者も、それぞれ356人(回答者総数の51.4%)、274人(39.5%)いる。高年次において英語が必要とされ、それに対応するために英語力を継続的につけていく必要があると認識しているようだ。



文系と理系で、この傾向にどのような差が出るかを見た。文系学生の回答(153人)を実線で、理系学生の回答(525人)を破線で表示している。それぞれの回答者数に対する比率を年次ごとに折れ線グラフで表した。理系に比べて文系では1年次に英語を学ぶ重要性を認識しているようであるが、理系では3年次、4年次になっても英語を学ぶべきであるとする比率が文系より高い。特に3年次で英語を学ぶ必要性については、文系で43.8%、理系で53.5%とほぼ10%の差が出ている。文系では専門によって英語の必要性に差が出るので、高年次では英語学習が必要ないと考える学生が出てくるが、理系では専門に関係なく論文を読む、書く、発表する英語力が必要になるためにこのような傾向が出ているのではないかと推察される。



英語学習の時期については以上のようになったが、量については様相が少し異なる。問10では、英語が選択科目の場合に何単位履修するか質問したが、理系では3~4単位がもっとも多い(150人、理系回答者総数の28.6%)のに対し、文系では9単位以上と回答した学生が数の上ではもっとも多い(36人、文系回答者総数の23.5%)。文系の方がより高いレベルで英語力を求められているという認識があるため、多くの時間をかけて学ぶ必要性を感じているのかもしれない。理系の3~4単位というのは、現

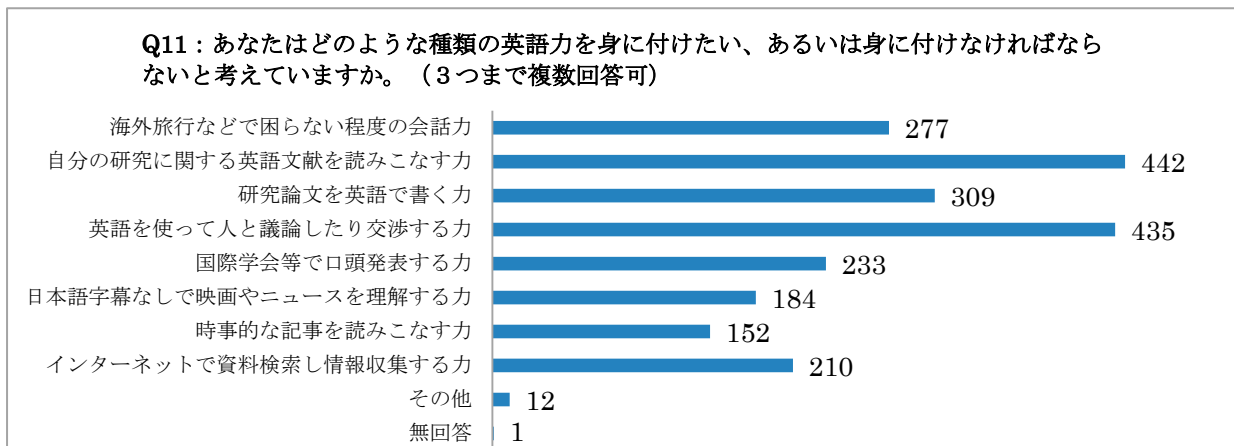


状を追認する回答であるが、文系の9単位以上というのは現状よりはるかに多い数字で切実さが感じられる。

以上から、文系では1年次に多くの英語科目を用意して早期に熟達度を高め、専門へ進んだ時に英語を使って研究を進めるよう望んでいるのに対して、理系では高年次に必要になった時に必要な技能を伸ばすことを求めていると推測する。本学の英語カリキュラムを考える際にも、こうした違いに対処する工夫が求められるだろう。

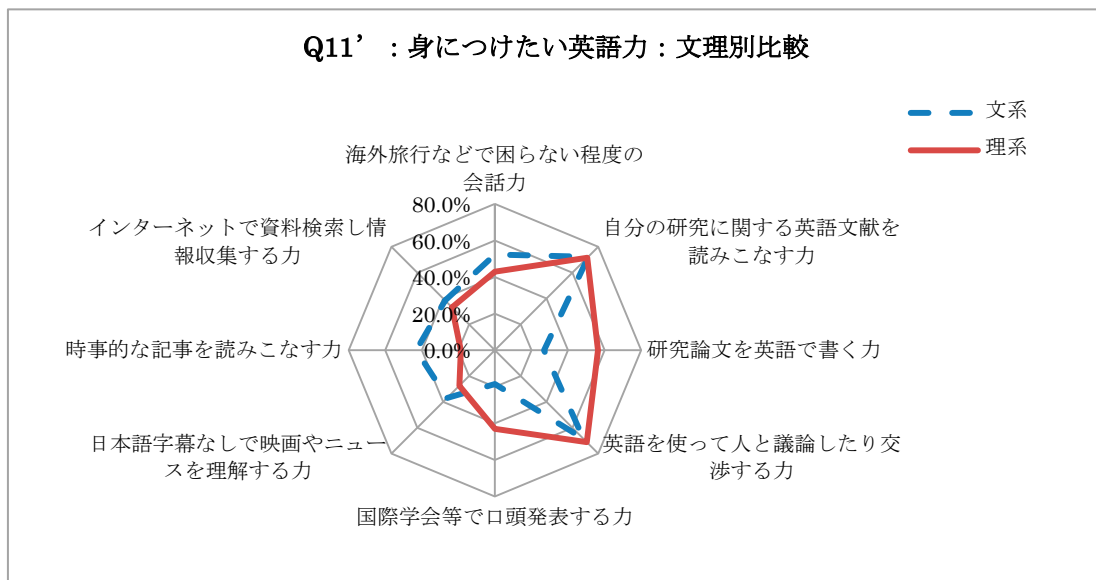
3. 身につけたい英語力

次の設問（問11）では、どのような英語力を身につけたいか、身につけなければならないと感じているか質問している。この設問は、3つまでの条件付きで複数回答可となっている。

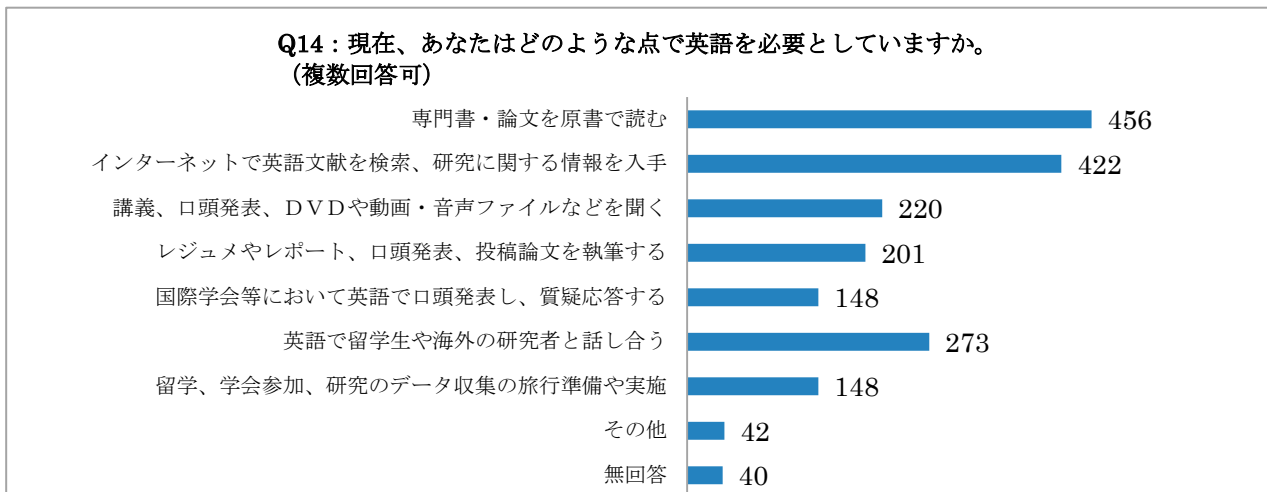


結果は、英語文献を読みこなす読解力（442人、回答者総数の71.2%）と英語で議論する口頭運用能力（435人、70.0%）が他を引き離している。ついで、論文執筆（309人、49.8%）、英会話（277人、44.6%）、学会での口頭発表（233人、37.5%）となっている。高年次のアンケートでは、英語が専門の学習・研究でどのように必要になるかが如実に反映されていると言ってよいだろう。

問11の回答で文系と理系に違いが見られるかを見た。文系では論文執筆や学会発表が低いのに対して、時事的な記事を読む力や映画やニュースを字幕なしで理解する力を求めている。英語文献の読解力や他の人と議論・交渉する力は、文理ともにもっとも比率が高い。



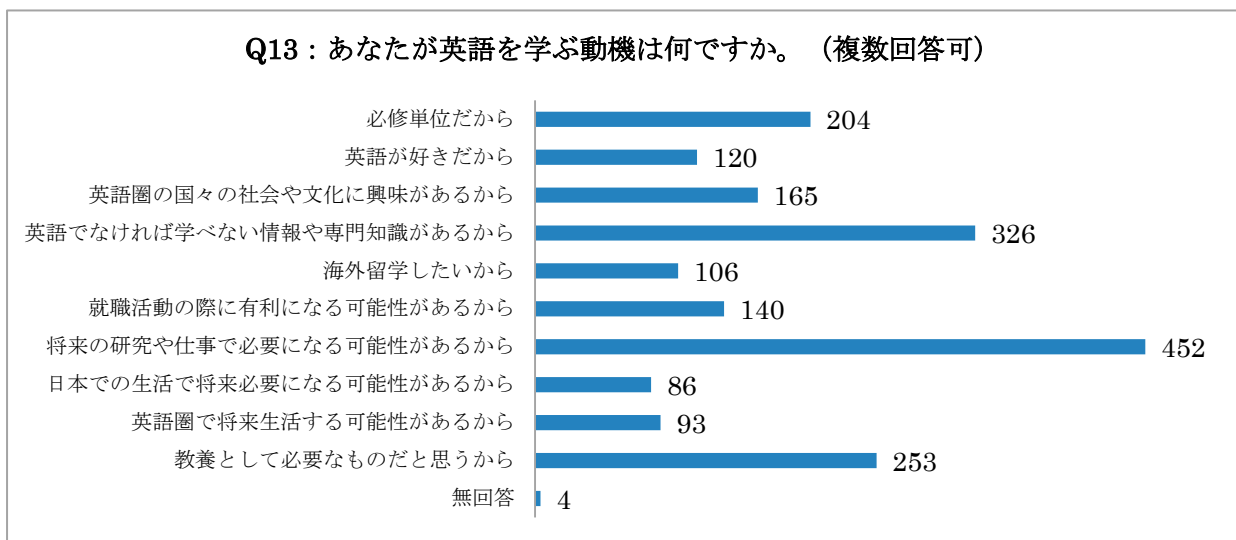
順序は入れ替わるが質問内容が近いので、現在必要な英語力について尋ねた問 14 を次に見てみる。



ここでは、読解力の必要性が顕著に現れている。もっとも回答者が多かったのは、専門書・論文を原書で読むこと（456人、回答者総数の65.8%）であった。第2位のインターネットで英語文献を検索、研究に関する情報を入手（422人、60.9%）においても、大量の英文を読んで内容を把握する力が求められる。これらの回答からかなり離れて、第3位が留学生や海外の研究者と英語で話し合う（273人、39.4%）であった。

問 15 では問 14 の「その他」の回答者に具体的な記述を求めた。大学院入試、TOEIC の受験、海外旅行、就職活動などへの言及が多かった。しかし、「私は、修士課程で国際研究プロジェクトに参加したが、上記すべての能力が必要であった。私は、特定の分野を優先して学習させるよりも、全体の底上げを目指すべきだと思う」と、個別の英語力よりも基礎力の充実を求める記述も見られた。

順番は前後するが、問 13 では英語の学習動機を尋ねている。

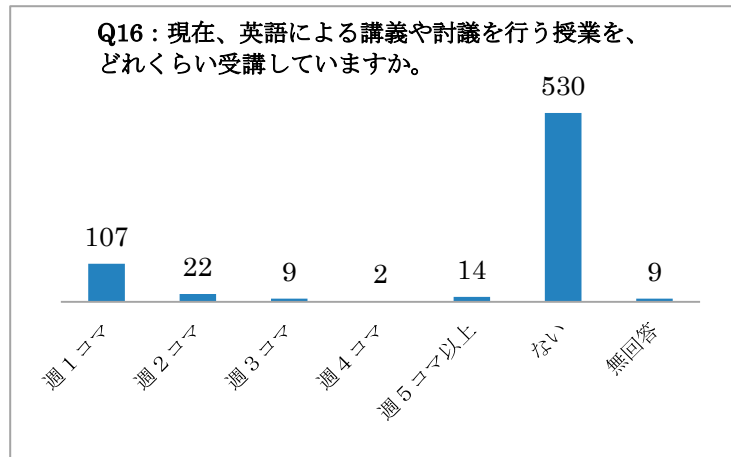


もっとも多いのは「将来の研究や仕事で必要になる可能性があるから」（452人、回答者総数の65.2%）であった。自分の専門性と英語が密接に関連し、将来的に英語が自分の人生を左右する可能性があることを感じ取っているらしい。その次に多かった回答は、「英語でなければ学べない情報や専門知識があるから」（326人、47.0%）となっている。これは、今回1年次学生に対して行った調査（第3章）と大きく異なる結果であった。1年次では回答者960人中218人（22.7%）しかこの選択肢を選んでいなかった。高年次になると英語が自分の専門分野でどのような役割を持っているか具体的に認識するようになるので、こうした動機づけの変化が見られると思われる。しかし、実践的な英語力の必要性を感じていない高年次学生もある

程度の比率で存在するようだ。3 番目、4 番目に多かった回答は「教養として必要なものだと思うから」(253 人、36.5%)、「必修単位だから」(204 人、29.4%) であり、どちらも回答者の 3 分の 1 程度を占めている。以上を勘案すると、高年次学生の 3 分の 2 は英語の必要性を切実に感じているが、3 分の 1 は教養として、あるいは必修単位として英語を履修している(つまり、将来的には自分は英語と縁が切れる)と考えているようである。

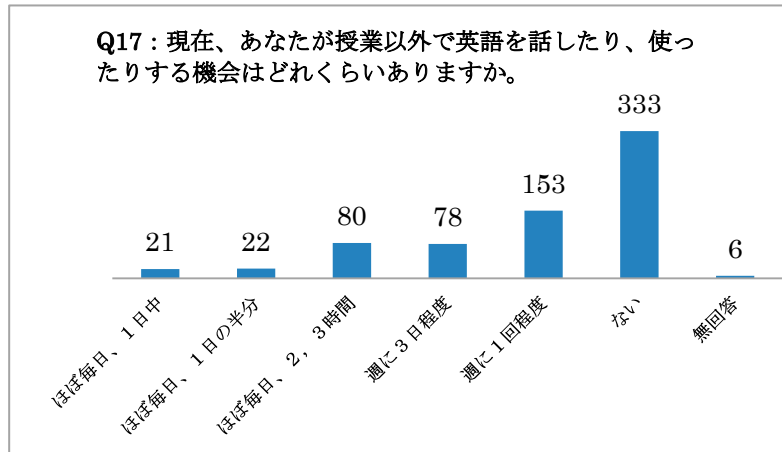
4. 高年次学生の英語学習・使用状況

次に、高年次学生が現在英語とどのように関わっているかを見ていくことにする。まず、問 16 では、現在英語による講義や討議を含んだ授業をどれくらい受講しているか尋ねた。大多数の学生(530 人、76.5%)は「ない」と回答している。週 1 コマの学生が 107 人(15.4%)で、コマ数が増えるごとに回答者数が順次減って週 3・4 コマでは一桁になるが、週 5 コマ以上は 14 人(2.0%)いる。

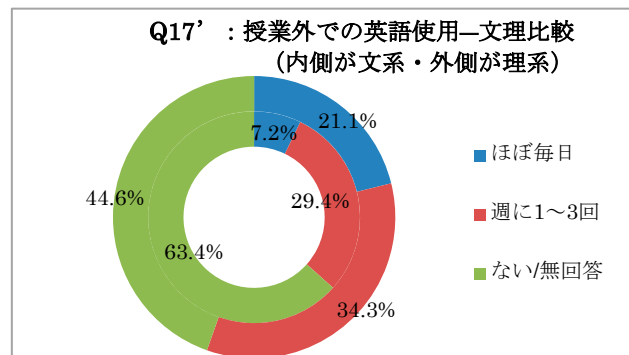


主要国立大学の中にも、授業総数の 3 分の 1 から 4 分の 1 を英語化することを目標に掲げるところが出てきているようであるが、本学では現在のところ英語による講義や討議を実施する授業は少なく、おそらく、主に文献や資料を英語で読む、発表を英語で行うというのが英語の通常の使われ方なのだろう。

問 17 では、授業以外で英語をどの程度使っているか尋ねている。こちらも、もっとも多かった回答は「ない」(333 人、48.1%)であった。しかし、それ以外の学生(354 人、51.1%)は少なくとも週 1 回以上は英語を使っていると回答しており、ほぼ毎日(1 日中、1 日の半分、2、3 時間をあわせて)と答えた学生は 123 人(17.7%)いる。



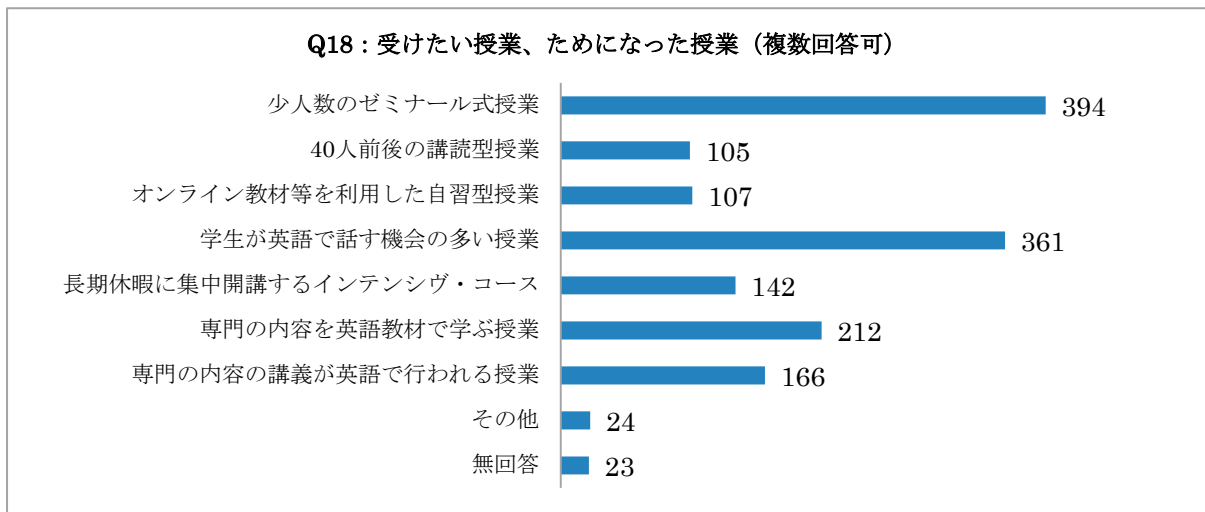
問 17 の回答を文理別に見てみると、ほぼ毎日(1 日中、1 日の半分、2、3 時間の回答を合計)と答えた学生は、文系では 11 人(文系回答者の 7.2%)なのに対し、理系では 111 人(理系回答者の 21.1%)であった。(文理不明の者が 1 名いるので、合計した数が全体と合わない) 研究室内コミュニケーションの英語化がとくに理系で進んでいるのがわかる数字である。



5. どのような授業を受けたいか

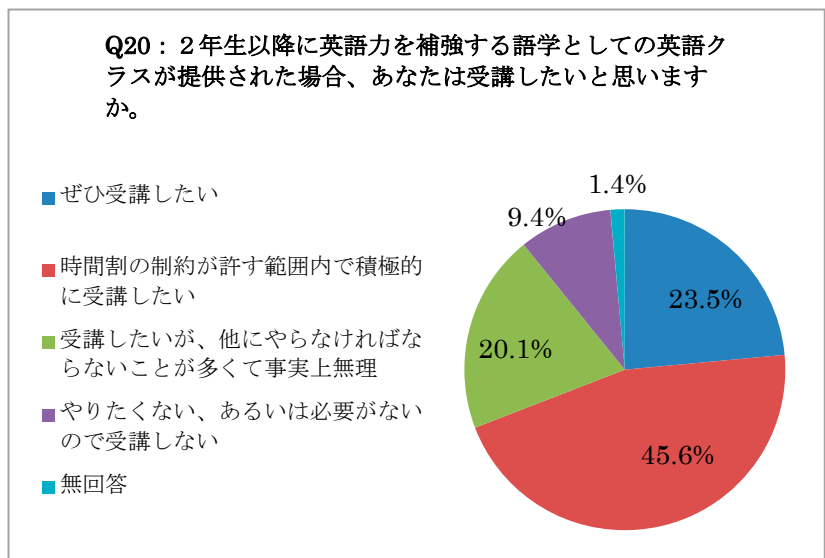
次に、高年次学生がどのような授業を受けたいと思っているかに関して見ていくことにする。

問 18 は「あなたが受けたいと思う英語の授業形態はどのようなものですか。あるいは、あなたがこれまでに受けた授業の形態で、自分のためになったのはどのようなものですか。(複数回答可)」という設問であった。少人数のゼミナール方式(394人、回答者総数の56.9%)と学生が英語で話す機会の多い授業(361人、52.1%)が、他の回答を引き離してもっとも多かった。続いて専門の内容を英語教材で学ぶ授業(212人、30.6%)、専門の内容を英語で講義する授業(166人、24.0%)と続いている。インテンシヴ・コース(142人、20.5%)、オンライン授業(107人、15.4%)、講読型授業(105人、15.2%)は、あまり高い支持を得ていない。

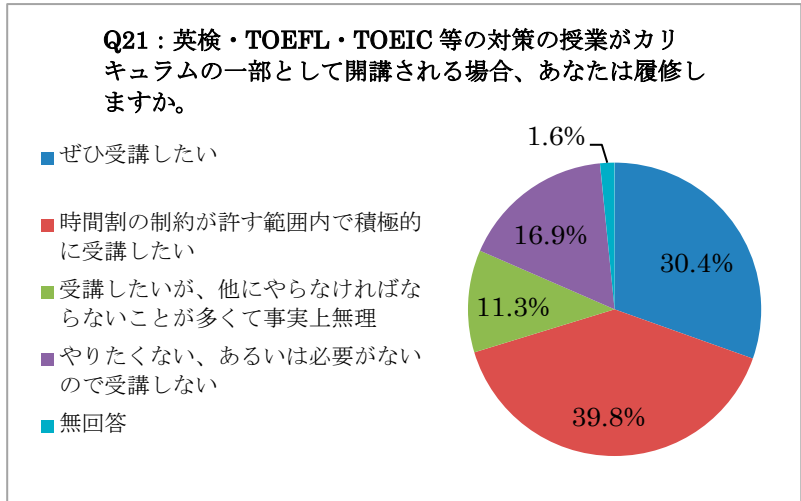


問 18 で「その他」を選んだ回答者に問 19 で具体的に回答を求めているが、「外国人の先生とマンツーマンの数分程度の英会話」や「とにかくネイティブスピーカーのスタッフ、もしくはバイリンガル並みに話せるスタッフによる、基本的な表現のみなどで限定されたすべて英語で行われる講義」など、母語話者との接触を求める記述が目を引く。

次に問 20 では、高年次における語学としての英語科目が開講された場合に受講する意志があるか尋ねている。ぜひ受講したいと答えた学生が 163 人(23.5%)、時間割の許す範囲で積極的に受講したいと答えた学生が 316 人(45.6%)であった。高年次における語学としての英語教育に興味を持っている割合が 7 割と、かなり多いことがわかる。これに対して、事実上無理である、受講する気がないという回答を合わせると 204 人で回答者の 29.5%を占めていた。



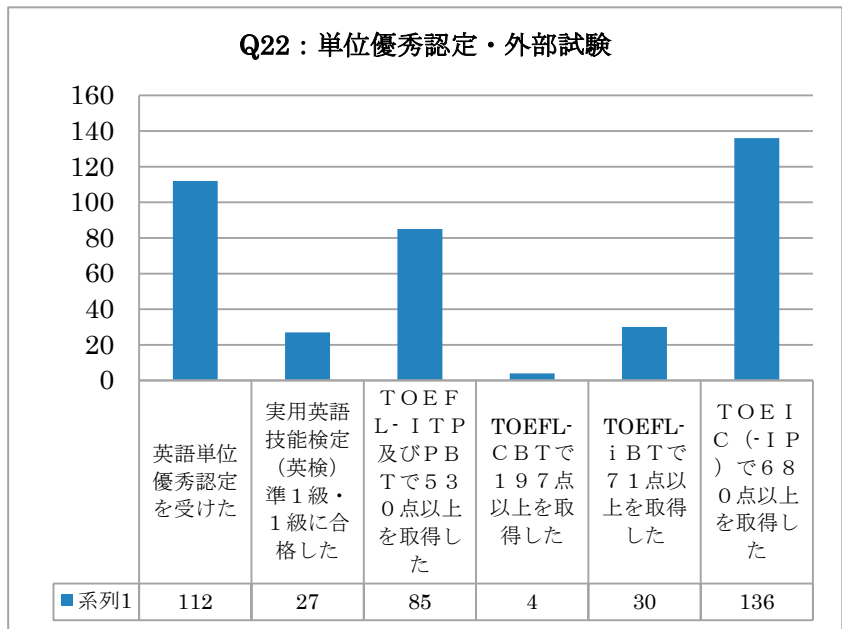
問 21 として、英検・TOEFL・TOEIC などの検定試験対策を目的とした授業が開講された場合、履修したいかどうか尋ねた。こちら、ぜひ受講したいが 211 人 (30.4%)、時間割の制約が許す範囲内で積極的に受講したいが 276 人 (39.8%) と、やはり 7 割が興味を示している。否定的な回答 (事実上無理、受講する気がない) は、合わせて 195 人 (28.2%) であった。



6. 検定試験の受験、留学への興味

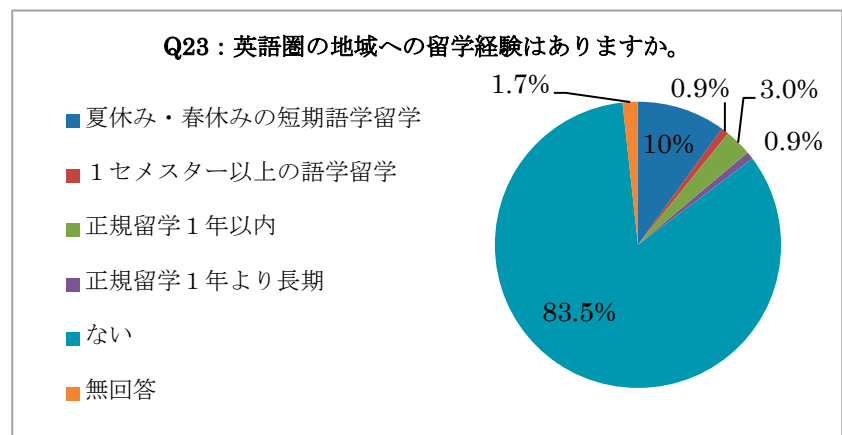
次に、高年次学生の英語検定試験の受験状況や留学に対する意識について見ていく。

問 22 では、どれくらいの割合の学生が TOEFL、TOEIC、英検に挑戦して成果を得ているか、また、単位優秀認定を受けているか尋ねている。英検準 1 級、1 級取得者は 27 人 (3.9%)。TOEFL はペーパー版 530 点以上、CBT197 点以上、iBT71 点以上取得者をすべて合計して 119 人 (17.2%)、TOEIC は IP を含めて 680 点以上取得者が 136 人 (19.6%) であった。検定試験のそれぞれのスコアは、本学で英語の単位優秀認定が受けられる得点であるが、実際に単位優秀認定を受けたことがある学生は 112 人 (16.2%) であった。



次に、留学経験の有無を尋ねた。問 23 への回答の通り、579 人 (83.5%) がないと答えている。留学経験があると回答した学生でも、大半は夏休み、春休みの短期留学 (69 人、10.0%) であり、1 セメスター、1 年、1 年以上を合わせても 33 人 (4.8%) にすぎない。問 22 における検定試験の高得点者や単位優秀認定者の多くは、長期留学によって英語の力をつけたわけではないことがわかる。

ここで、順番が大きく前後するが、問 3~問 5 で尋ねた本学の海外の大学での短期語学研修の単位認定制度に関する設問の結果について報告する。北海道大学では、夏休み、春休みに海外の指定された大学で短期の



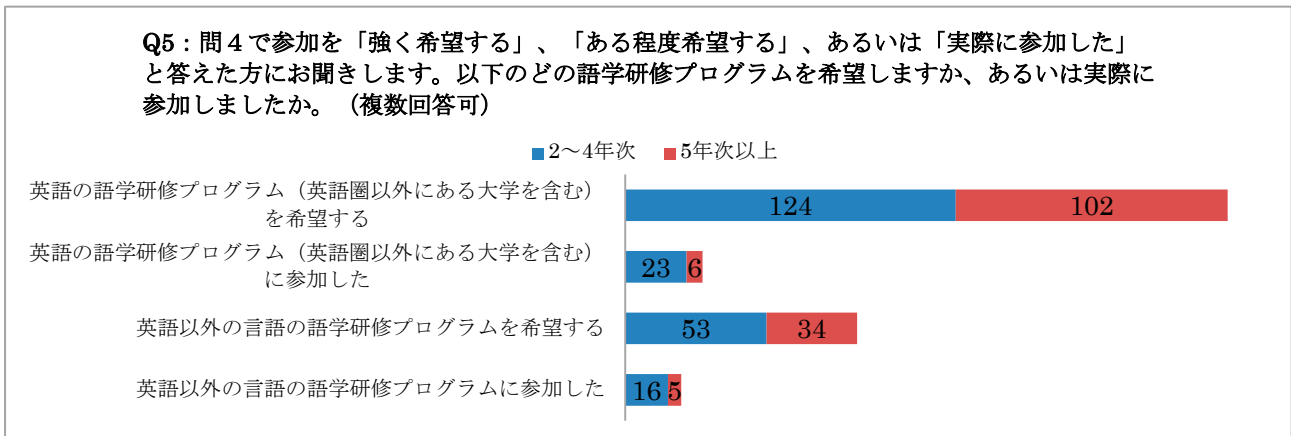
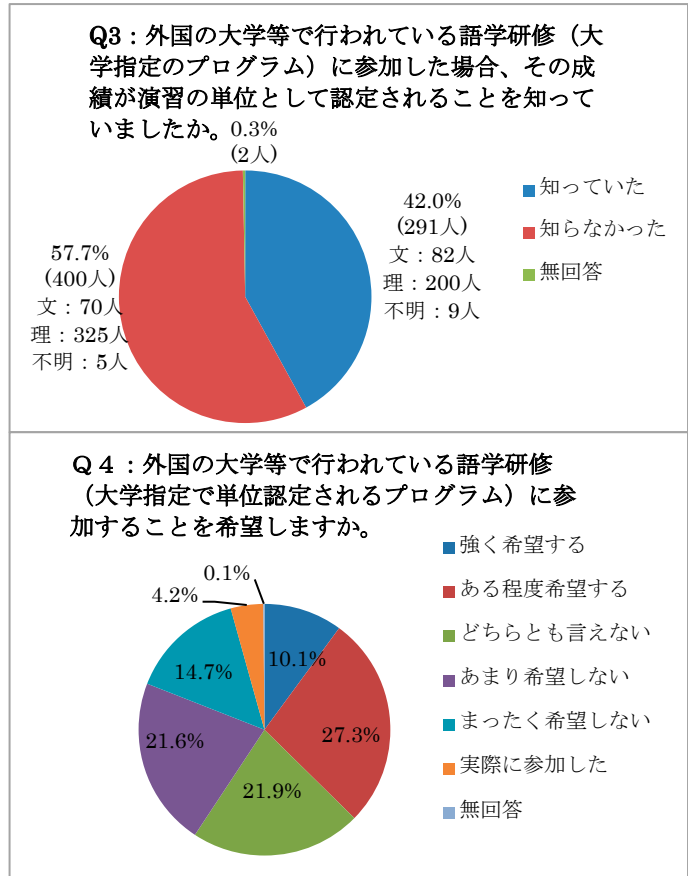
語学研修を受けると、英語演習の単位として認定を受けることができる。この制度は、英語の語学研修のみならず、本学が提供している英語以外の外国語についても同様に適用される。

問3では、この制度の存在そのものを知っていたかどうか尋ねた。400人(回答者全体の57.7%)と半数以上の学生が知らなかったと答えている。文理別では、325人(理系回答者の61.9%に相当)が知らなかったと言っており、認知度が低い。

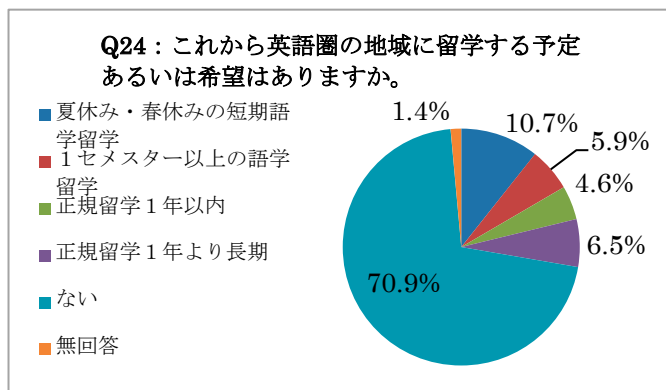
次に、この語学研修プログラムに参加することを希望するかどうか尋ねたのが問4である。強く希望すると回答した学生が70人(10.1%)、ある程度希望すると答えた学生が189人(27.3%)であった。4割弱の学生が興味を示していることが見てとれる。問23で、夏休み・春休みの短期留学に参加した学生が69人いるのを見たが、問4で大学指定のプログラムで単位認定を受けたものは29人(4.2%)となっている。(ただし、英語のプログラムとは限らない。)

参加に当たっては大学からの金銭的な支援もあるが、満額補助されるわけではないので、経済的にゆとりのある家庭の学生が参加していると思われる。短期留学に興味を示す学生が多いということは、経済的な支援を強めればもっとたくさんの学生が参加する可能性が高いことを示唆しているだろう。

問4で参加を強く希望する、ある程度希望する、実際に参加したと回答した学生は合わせて288人であった。この回答者に、どの言語の研修プログラムを希望するか尋ねたのが問5である。英語の語学研修プログラムを希望するあるいは、実際に参加した者は255人(この質問への該当者の88.5%)であった。また、このなかで2年次から4年次までは147人(当該年次でこの質問への該当者の85.0%)、5年次以上は108人(当該年次でこの質問への該当者の93.9%)である。5年次以上の学生の方が、英語の研修プログラムへの興味が高いことがわかる。反対に、英語以外のプログラムに対する興味では、2年次から4年次までの参加希望および実際に参加を合わせた69人(当該年次でこの質問への該当者の39.9%)が5年次以上の39人(当該年次でこの質問への該当者の33.9%)を上回っている。



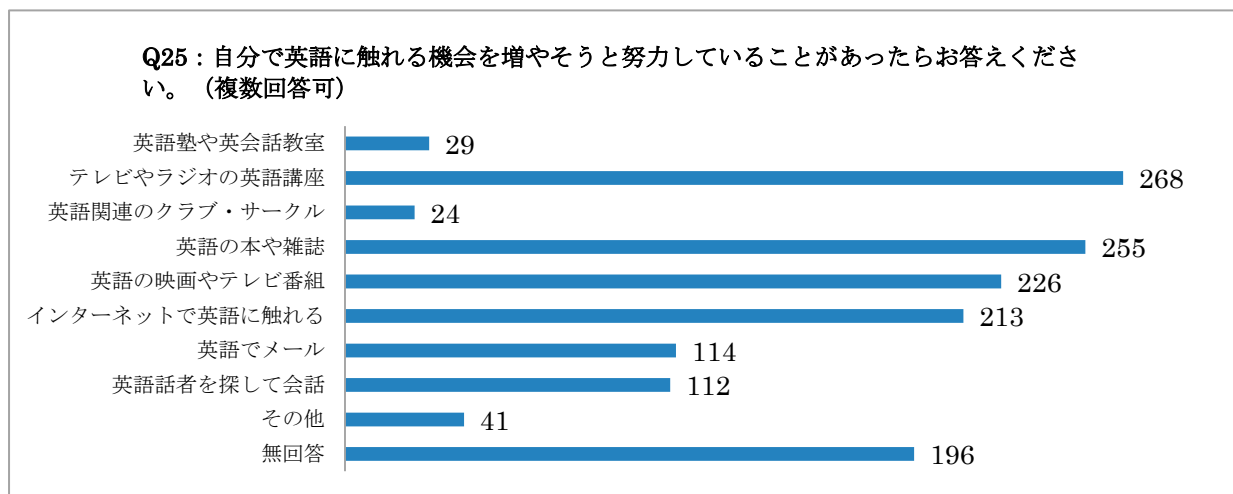
このように、本学の海外の指定大学における語学研修プログラムの単位認定制度は、期待したほど認知度は高いわけではなく、理系および5年次以上で英語の研修プログラムに対する興味が高いことが見てとれる。



問 24 では、英語圏に留学する予定、希望を尋ねている。70.9%の学生（491人）は「ない」と答えているが、期間や研修の種類に関わらず英語圏への留学の予定あるいは希望があると答えている学生は192人（27.7%）いる。そのなかでもっとも多い回答は、夏休み・春休みの短期留学（74人、10.7%）であった。昨今学生が内向き志向になったと喧伝されているが、留学に興味がなくなったわけではなくて、現実的な思考をするように

なっただけなのかもしれない。ゆくゆくは長期の正規留学を望んでいたとしても、まずは英語力、経済力の身の丈にあったところから段階的に進む選択をしているように見てとれる。

問 25 では、「自分で英語に触れる機会を増やそうと努力していることがあったらお答えください。（複数回答可）」と尋ねている。もっとも多いのがテレビやラジオの英語講座であった。（268人、回答者総数の38.7%）ついで、英語の本や雑誌を読むこと（255人、36.8%）、英語の映画やテレビ番組（226人、32.6%）と続いている。インターネットで英語に触れる（213人、30.7%）は時代を反映している回答である。英語塾や英会話学校（29人、4.2%）、英語関連のサークル・クラブ（24人、3.5%）はかなり少ない結果となった。



問 26 では、問 25 でその他を選択した回答者に具体的にどのようなことをしているか尋ねている。「研究室の留学生と研究について、あるいは日常会話を英語で話す」や「国際学生ハウスに住んでいる」のように留学生との英語によるコミュニケーションをあげる者、「韓国の友人と英語で Facebook や LINE を使ってやり取りをしている」や「外国の方とメールやフェイスブックでやりとりをする」などインターネット上で英語を使って情報のやりとりをしている者、「TOEIC の試験勉強」など検定試験対策を行う者と言ったところが複数の回答者の記述となっている。また、「工学院、工学英語教育コースに所属しています」のように、すでに動き始めている英語による専門コースに言及している回答者もいる。

本学高年次学生は、年次があがるほど英語の必要性が高まるが、長期留学で一気に英語力をつけるのではなくて、現状の英語力や経済力をわきまえて、手近なところから地道に手をつけてみる選択を行っているのではないと思われる。本調査の結果からすると、留学志向がないわけではなくて、条件がそろいさえすれば留学してみたいと思っているようだ。しかし、以前と違って情報が豊かになっているなかで現実的な判断をしていて、何が何でも海外留学と言ったがむしゅらさ、無謀さがないだけなのかもしれない。また、交通

手段の発達や情報化の進展に伴い、日本においても国際化とコミュニケーションの英語化が進んできているので、日本にいながら段階的に実践的英語コミュニケーション能力を高めることが可能になってきている状況もあるようだ。苦しく、つらい思いをして留学するのではない、自分なりの英語の身につけ方を見つけようとしているようにも見える。しかし、すべての学生がこのような主体的な英語学習に向かっているとも言えないだろう。英語使用状況に二極化が起こっていて、コミュニケーションのツールとしての英語使用が当たり前になっているグループと、英語を使った意思の疎通は別世界の話というグループが隣合わせで共存している状況なのかもしれない。

7. 英語カリキュラムに望むこと

本学の英語教育に関する最後の設問（問 27）は、「その他、北大の英語カリキュラムに望むことを自由にお書きください」である。以下、主な意見や興味深い指摘をあげてみたい。

本稿で見てきた高年次における英語のニーズ調査では、専門に進んでから英語論文を読むための読解力の向上が浮き彫りになってきたが、英語カリキュラムに望むことと尋ねられると、リーディング授業の強化に対する要望は少ない。「授業時間で英語を習得するのが不可能なので、学生に本や雑誌をたくさん読ませるべきだと思います。200 ページ程度/月」と「ゼミのように少人数で輪読する授業形式は増やしても良いと思う」の2件のみが読解力への言及であった。

これに対して断然多いのは、実践的コミュニケーション能力、とくにスピーキング能力の向上に対する要望である。問 27 では 188 人から回答があったが、そのなかで 26 人がスピーキングあるいはライティングの拡充・強化を望んでいる。また、「ネイティブの方との会話の機会を多く取り込んでほしい」のように、母語話者あるいは留学生と授業内で英語を使った交流ができる授業を希望する意見が 11 件あがっている。同様の理由で「外国人講師による英語の講義を増やし、生の英語に触れる機会を設けるべき」のように、母語話者教員による授業の増加を望む意見が 3 件あった。また、「英語を実際に使って話し合いを行う授業や英語で開催される授業などを積極的に開講してほしい」のように、英語で行う英語授業あるいは専門科目をもっと提供すべきであるとする声が 12 件あった。

しかしながら、アンケートの回答からは離れるが、英語演習や英語Ⅲなど選択科目の実際の履修希望状況では、母語話者のスピーキングの授業を望むこうした回答とは裏腹に、日本人教員の講読授業の方が希望者が多く、母語話者のとくに上級クラスが履修者集めに苦勞しているのが現実である。また、少数意見ながら「英語の講義が、ちまたにあるような『英会話教室』になることなく、アカデミックなレベル・内容であり続けてほしいと思っています」という希望や、「大学院の授業で留学生(日本語が理解できるのに)がいるからすべて英語でやりますはやめてほしい。口頭で話している内容も板書も全く理解できないので正直受講している意味がないです」という専門科目の英語化に対する拒否の声もあった。選択科目の履修状況を考えると、もしかすると、この少数意見の方が本学の学生たちの声なき声であるということも、考えられなくはない。

大学教育の英語化が急速に進みつつあるなかで、英語が苦手である、あるいはしばらく英語に接していないために準備ができていないという学生が、高年次で英語による授業に対応できない状況が起こりつつあるようだ。この問題に対処するために、2 年次以降も語学としての英語の授業を受講できるようにしてほしいという意見も多かった。「2 年次以降も英語の授業を必修あるいは選択必修にすべきだと思う」など 30 人から高年次英語授業の要望が出ている。卒業要件にするのではなしに、単位と関係のない授業として開講してほしいという声や、専門科目の時間割とぶつからないように 6 講時以降に開講してほしい、あるいは全学教育の建物まで来るのは大変なので学部・大学院の建物のなかで開講してほしいという希望もあった。

高年次英語教育推進に対立する意見としては、1人だけであるが「1年生の時期に英語を学ぶという点は現カリキュラムのままでいいと思う。2年生以降になると自分の専門科目の勉強が忙しくなるので」があった。

英語科目の授業内容の難化・高度化を求める声も多かった。「私は留学経験もない日本人ですが、私が受講した1~2年次の英語カリキュラムは全て難易度が易しすぎて英語が全く上達しませんでした」などの意見が10件あがっている。一方で、反対に授業が難しすぎたという意見もあった。「北大の英語学習のプログラムはどれも英語が好きで積極的に勉強したい人向けのものばかりで困っています」など、英語が苦手な学習者が初歩の復習から徐々にステップ・アップして学習できるプログラムを希望する声が5件あがっている。

次に科目別の不満を見ていく。もっとも顕著なものは、英語演習などの選択科目で行われる履修者の抽選についてである。「抽選で希望でない講義を受けさせられることがあるがそれはやめてほしい」など5件あがっている。この問題は、各学部の進級・卒業要件の設定の仕方と絡んだ問題であり、全学教育の英語科目担当者だけではいかんともしがたい側面がある。英語Ⅱについての言及は9件あり、そのうち2件は「英語Ⅱのような形式の講義が充実するとよい(単位数を増やしたり学部によって専門的な内容を入れたりなど)」など好意的な評価、7件は「英語Ⅱのオンライン授業は、やる気の問題ですが身につけている感じがしなかった」など不満を述べる意見であった。不満では、内容が易しすぎるという理由(1件)と、クリックするだけで学んだ気がしないという理由(3件)があげられている。教材の難易度については担当者が操作できるが、中身を読まずに解答をクリックして終了する学習者については、本人の自覚を待つしか今のところ方法がない。英語Ⅰについては、「英語Ⅰは最初からクラスが振り分けられているが、担当の先生によって、授業の内容やレベルに差がありすぎるように思う」という記述が1件見られた。

以上、英語演習、英語Ⅰ・Ⅱについて否定的な反応を並べたが、第1節で見たように、本学の英語科目のなかで現在役に立っていると思うものをあげてもらった問7への回答では、この3科目の評価が他の2科目に比べて高かった。したがって、全体としてはこうした批判的な意見は少数派と見ることもできる。特定の授業内容に関する意見ではこの他に、TOEICなどの検定試験に対する対策クラスの開講希望が9件あった。そのなかに、TOEFL-iBT対策授業の希望が1件含まれる。また、専門に接続する英語授業、とくに理系と文系で内容を変えた授業科目の提案(例:「文系、理系、また将来の志望分野に合わせた、英語のカリキュラムの提供。理系であれば、論文の読解、英語での発表を聞いたり議論したりする力が必要であると思います」)があげられている。

留学支援に関する記述は5件であった。「留学情報へのアクセスのしやすさを望む。夏休みや春休みの留学の期間や日数の種類を多くしてほしい」と言った授業外での支援や、「留学をする上で必要な英語力をつけられるようなカリキュラムがあれば受けてみたいです」など留学へ向けて少しずつ準備する科目群を提言する声が含まれる。

英語単位優秀認定制度に対しては、この制度のために英語の学習機会を失ったという批判が1件あった。申請制なので、権利を有していても英語科目を履修したい場合は受講が可能なのだが、高年次になってから英語が必要になるまでに英語に接する時間が空いてしまうという弊害もあることを、この制度の紹介時にあわせて説明する必要があるだろう。

以上、本学の英語教育に対する要望を見てきたが、出てきた内容は日本の大学英語教育に対するステレオタイプ的な批判と重なる部分もあるし、先に見てきた設問に対する回答と矛盾するところも見られる。要望は真摯に受け止めるが、そうした要望が出てきた背景に何があるかを考えながら、英語カリキュラムに反映させる上では慎重に対応する必要がある。

8. まとめ

高年次学生に対するアンケートの回答について見てきた。結果から言えそうなことをいくつかまとめる。

北海道大学の専門教育も、急速に英語化が進みそうな気配がこのアンケートからも垣間見える。学部・大学院で英語による専門教育はすでに始まっているようであるし、理系を中心に留学生の増加により研究室の英語化が進んでいるらしい。1年次では自分に英語は関係ないと思っていた学生が、高年次になって実はそうではなかったということに気がついて、切実に英語の授業を求めているという姿が浮かび上がる。

このアンケート結果の矛盾点としては、文系においても理系においても英語文献を読みこなす力がもっとも求められているにもかかわらず、英語教育に寄せられる要望としては口頭運用能力の育成が強く求められているという点がある。この矛盾点を考えていく上で、第二言語のリーディングとはいかなるものかをまず考える必要があるだろう。単語ひとつひとつから意味を組み立てて日本語に置き換えていくボトム・アップ的な読みと、書き手の意図をとらえることを第一に考えるトップ・ダウン的な読みの2種類があると言われる。一般的な概念で言えば、精読か、あるいは速読・多読かということになる。二者択一で考えられがちであるが、現実にはどちらも重要である。

どの専門分野に進んでも、文献を読んで課題を設定し、データを集めて分析し、最初に設定した課題の答えを求めてそれを発表することが研究活動の中身であるとすれば、専門が決まる前の段階では、専門性は低いかもしいないが、それと同じプロセスを授業内で体験するようにすることが、実践的コミュニケーション能力の育成と読解力の向上を同時に伸ばして行く一つの方法と思われる。読みの目的によって、精読と速読・多読を使い分けなければ、このような形の授業形態には対応できない。また、こうした授業活動を通して、高年次においてどのような読解が必要になるかを、学習者自身が理解するだろう。

高年次英語教育に関する要望も多く出てきた。その具体的な内容については、これから検討する必要がある。専門英語への橋渡し、留学への橋渡し、母語話者教師による英語での内容中心授業、留学生・母語話者との交流、段階別のステップ・アップ、文理別の学習目標設定などがキーワードとなると思われる。どれも、「言うは易く行うは難し」であるが、どうすれば実現するか知恵をしぼっていきたい。

第5章

英語Ⅱオンライン授業の現状と課題

外国語教育センター外国語教育将来構想 WG 英語部会
園田勝英・河合 靖・土田映子・原田真見・辻本 篤

0. はじめに

外国語教育センターは、2006年度より、初年次学生全員が受講する第1学期必修科目である英語Ⅱを、オンライン授業として開講している。この授業では、それぞれ60座席のCALL (Computer Assisted Language Learning) 4教室と複数の教材サーバーからなるCALLシステムを活用して、1年次学生全員(約2600名)にネットワーク上で統一教材の学習機会を提供する。成績評価は、TOEFL-ITP (Test of English as a Foreign Language Institutional Testing Program) という外部試験の点数、オンライン教材の学習状況、学期の最後に行われる期末試験などに基づいて、全学生に対して同一基準で行う。以下、2013年度を終えて8年が経過した英語Ⅱについて、その開始までの経緯を含め、その現状について報告するとともに、学生と教員双方からの評価を踏まえ、今後の課題についても展望する。

1. 開始までの経緯

英語Ⅱは、4人の担当教員が2600名の一年次全学生をオンラインで教えるという、それまでなかった全く新しい形態の授業である。このような授業が生まれた経緯や背景を、いくつかの要因に分けて記述する。

1.1. CALL 教室

北大の外国語教育に初めてCALLが導入されたのは、情報教育館3階のCALL教室が使用開始された2000年4月であった。それ以降、学内外のCALLへの期待あるいはそれをういた教育実績を背景に、継続的に講じられた予算措置を受けて設備の拡充と改良が進んでいった。そして、英語Ⅱが始まる2006年度には現在の60座席のCALL教室4室が整備されていた。

英語Ⅱでは、1年次学生約2600名を1クラス50名強からなる50数クラスに編成し、各クラスに対して、時間割上の1コマとCALL教室1室を指定している。これによって、教員の側からはガイダンスなどの対面授業を行うことが可能になっている。また、学生にとっては、所属するクラスの時間と教室において優先的にコンピュータ端末を使用することができ、毎週同じTAから、継続的に学習サポートを受けられるようになっている。この50数クラスの編成で授業を運用するために必要な最低限のCALL教室数が、60座席4室である。

1.2. CALL 教材

2000年にCALL教室1室が設置されたとき、主な英語教材(サーバー)はFamily AlbumとALC NetAcademyであった。これらに加え、その後数年間にわたって、Tell Me More、Voice Chat System、

WebTube 等が導入され、多くの英語教員がこれらを授業で実際に使用し評価を行っていた。また、機会あるごとに教材(サーバー)の開発元に改善要求を行っていた。

このような中で、2006 年度より英語 II をオンラインで行うことが決定された。当初の計画は、教員によるサポートのもと、既に購入し利用していた ALC NetAcademy を自学自習させ、TOEFL-ITP によって成績評価をするという、漠然としたものであった。しかし、英語 CALL 実施準備委員会が内容を具体化し、2005 年度に小規模な試行授業を行ったところ、ALC NetAcademy では、学習者の多様な習熟度や興味に対応できないこと、市販品であるため内容を本学が独自に改良できないなどの理由により、英語 II の主要教材としては採用できないという結論に至った。(ただし、初年度の 2006 年では暫定的に ALC NetAcademy が使用された。) 代わりに本学学生の英語学力に見合う良質な独自オンライン教材を開発することになり、それらを開発提供するプラットフォームとして、すでに運用実績のあった WebTube が採用された。

1.3. TOEFL-ITP

1996 年度以来、旧英語 IV の一部として実施されていた「北大英語学力統一試験」が、2002 年度入学生からは TOEFL-ITP に切りかえられた。「北大英語学力統一試験」も英語教育強化に対する学内の要望を受けて導入されたものであったが、TOEFL-ITP への切替えは特に当時の丹保総長の強い意向により行われた。その際に重視されたのは、TOEFL-ITP によって学生が自分の英語力をより客観的に把握するという点であった。

TOEFL-ITP は、2005 年度入学生まで旧英語 IV の一部として、多くの学部で 2 年目の後期に実施されていたが、2006 年度入学生からは英語 II の一部として、1 年目の 1 学期に実施されることになった。なお、受験料は 2007 年度まで学生が負担していたが、2008 年度より北大が負担している。また、実施は 2000 年の試行以来現在まで、北大生協に委託されている。

1.4. カリキュラム

英語 II は 2006 年度から始まった現行の英語カリキュラムの中に作られた科目である。1 年次の第 1 学期は、英語の発信能力(パラグラフライティング、発音、口頭発表など)の基礎を養う英語 I と本オンライン授業英語 II が必修である。これらの 2 つの科目を学生に履修させることにより、学生に英語の基礎的学力をつけさせ、2 学期以降の発展的学習に備えさせることをめざしている。

また、英語 II で全学生が受験する TOEFL-ITP の点数を目安にして、1 年次 2 学期以降の英語科目の初級・中級・上級のレベルが設定されている。英語 III は主として技能別の応用練習を行い、英語 IV は読解の応用練習をする。この他に、英語 I~IV で養われた英語力をもとに、英語を学術研究の道具として使えるようになることを目指す応用発展的授業である英語演習(初級・中級・上級)が選択可能になっている。また、TOEFL-ITP 等の外部試験で高得点を取得した 1 年次在学学生に対して、英語単位が最高 4 単位まで認定される英語単位優秀認定という制度がある。TOEFL-ITP の場合は 530 点以上が認定要件である。

なお、現行カリキュラムに英語 II オンライン授業が導入された経緯には、非常勤講師の担当コマ数(人件費)の削減などによって生じた人的資源の不足に対応する必要があったことも付言しておかなければならない。

2. 英語Ⅱの現状

2.1. 英語Ⅱの目的

英語Ⅱの目的として、シラバスや各年度の英語Ⅱ実施報告書で掲げられているのはつぎの3点である。

(a) 北大生として身につけるべき英語の基礎学力の増強。(b) 高度で創造的な英語運用能力養成をめざす2学期以降の英語科目への橋渡し。(c) 全学教育終了後も自律的に英語学習を継続する態度と技術の涵養。

2.2. 担当教員とその業務

2006年度以来2013年度まで、英語ⅡCALL実施委員と呼ばれる4人の教員が、実施計画の策定、履修者名簿の管理、教材作成、サーバー管理、対面ガイダンス、TOEFL-ITPの実施、試験作成、数回行われるアンケート調査、学生からの質問や要望への対応、成績評価、授業評価等のすべての運營業務を担当してきた。50人程度の学生を相手にする通常の授業とは大きく異なり、2600名の学生を一斉に教えるためには、事前に精密な計画を立て、十分な準備を行い、誤りなく計画を実行し、さらにその結果を検証するという作業を繰り返し行わなければならない。また、健康上やその他の理由により授業進行に遅れる学生がどのような授業でも必ず一定の割合で出てくるが、母数が2600名と大きくなると、そのような学生数は膨大になる。そのような学生への対応も、4人の教員の仕事の大きな部分を占める。さらに、英語Ⅱの一部に組み込まれているTOEFL-ITP試験の実施そのものは北海道大学生協に委託されているが、受験者名簿の確定、追試の許可、スコアカードの返却などは、実施委員が行っている。

言うまでもなく、4人の担当教員を補佐するTA(Teaching Assistant)を雇うための予算が措置されており、授業担当要員としてTAが大きな役割を果たしている。TAは時間割上に配置されている毎週約50のクラスのそれぞれに行き、授業週であれば教員の補助を行い、自習週であれば学生への学習サポートを行う。その他にも、配布物の印刷、マークシートの採点、教材作成の補助などもTAが行っている。教室における学習サポートでは、事務的連絡、質問に対する対応、CALL機器の不具合への対処などを超えて、TAが自らの英語学習体験を語ったり、発音や作文を単独で指導することも行っている。このTAの募集、管理、指導も実施委員の仕事の大きな部分を占めている。

授業が行われる第1学期(4月～8月)の期間中は、実施委員は授業運営に忙殺される。これに加えて、第2学期(9月～2月)は準備の期間としてかなり多くの仕事を行わなければならない。この負担が、英語Ⅱ担当教員1人当たり5コマ分の授業負担と計算されている。しかし、実際の仕事量はこれを大きく超えているというのが、英語Ⅱ担当経験者の共通した実感である。

なお、2014年度からは、実施委員の数が4名から5名に増員される。ただし、担当教員1人当たりの授業負担コマ数計算は5コマから4コマに減る。また、実施委員の他に、2009年度より英語母語話者の専任教員一名が、教材作成委員に任命されて、教材の作成を行っている。

2.3. オンライン授業における対面授業

最初期の一部の教材を除き、オンライン教材は全てウェブブラウザ上で閲覧し学習できるので、学生は必ずしもCALL教室に来て学習する必要はない。しかし、以下に述べる理由により、学生を教室に集めて教師が対面で授業を行う「対面授業」をなくすことはできない。このことは、CALL4教室体制の維持は英語Ⅱの実施にとって必要不可欠であることを意味する。

英語Ⅱでは、約2600名の1年次学生を50数クラスに分割し、それぞれのクラスに毎週1コマの曜日・時間・教室を指定している。学期初めの2あるいは3週は、全クラスを時間割通りにCALL4教室に集めて、

各教室で教員 1 名と TA1 名が 1 組となってガイダンスを行う。英語 II の目的、内容、評価方法、学習の仕方などを誤解がないように学生に理解させ、同時に学習意欲を喚起する。オンライン授業だからといって全ての指示や連絡をオンラインや配布資料で提供して済ませることはできない。

また、一般に CALL 教材は反復練習が中心で、基礎的学力の強化には有効であるが、印象が無機的で人間味がなく、学習作業は単調で無味乾燥なコンピューター作業の繰返しになることが多い。このようなオンライン教材だけを与えられても、学習意欲と集中力を持続させるのはきわめて難しい。このため、英語 II では工夫や改良によりこれを克服する努力が続けられてきた。具体的には、担当教員を紹介するビデオを制作したり、各教材の冒頭にその教材を作成した教員の写真や音声解説をつけたり、ホームページを充実させたり、前節で述べたような TA の活用などが行われている。それでも、教員と学生が直接接することを無くすことはできないのである。

2.4. CALL システム

CALL システムは、英語 II を支える基盤設備である。学生が使用する CALL 教室 4 室、オンライン教材を提供する教材サーバー群、学生への指示を掲示するホームページ・サーバーの 3 つからなっている。これらの設備の維持管理や更新は外国語教育センターの CALL 専門委員会を中心に行われている。日常的には、1 名の技術専門職員が多発する各種トラブルに迅速に対応している。8 年間大きな障害もなく授業が遂行できたことは、この技術専門職員に負うところが大きい。

CALL 教室は、E309、CALL110、CALL210、情報教育館 CALL の 4 室である。それぞれ学生 60 名を収容することができる。教室前方の大きなスクリーンに加えて、黒板として使用できる学生 2 人で共有するセンターモニターを備えている。4 年ごとに機器の更新が行われ、英語 II をはじめとする外国語授業を円滑に行うために、安定した稼働を最優先に、使い勝手の向上がはかられている。

教材サーバーは、英語 II 開始当初から WebTube が主に用いられている。2011 年 9 月の設備更新で CALL サーバー群が大幅に強化されたのを受けて、2012 年度の英語 II からは教材の一部を WebTube から Glexa に移した。現在の教材サーバーはこれら 2 台の二本態勢であり、一方のサーバーが障害を起こしても授業が続けられるようになっている。なお、Glexa は、2007 年度まで使用していた Voice Chat System に代わる新しい e-learning system (Learner Management System) として導入されたものである。

さらに、英語 II のホームページ (<http://ecall.imc.hokudai.ac.jp>) が別のサーバー上に置かれている。このホームページの主たる目的は、教員から各種の指示を学生に伝え、学生の学習意欲を喚起することである。学生に提供される情報のうち、オンライン教材と教材サーバーで提供されている SNS 的情報以外のものはすべて、このホームページで提供される。そのため、このホームページは他の教員や学内外に英語 II を知らせる機能も担っている。

2.5. 評価方法

最初の年(2006 年)の報告書では、「英語 II の成績評価は、上記 TOEFL-ITP のスコアに基づいて行うが、オンライン教材配信サーバ WebTube 上の必須課題、グループ学習課題の完了状況によっては、可以上に該当するスコアであっても不可になったり、可が上限となるという条件が定められている。スコアが 400 未満の学生には、オンライン英語教材 NetAcademy から出題される再試験を課し、それでも合格しなかった場合に不可とした」と記されている。すなわち、他の必要条件が満たされている場合、TOEFL-ITP が 530 点以上ならば「秀」、529 - 475 ならば「優」、474 - 430 ならば「良」、429 - 400 ならば「可」というように、TOEFL-ITP の点が成績に直結していた。

それに対し最近（2012、2013年）では、下の表のように TOEFL-ITP を含む 6つの点数を総計して、1037 - 780 を「秀」、779 - 710 を「優」、709 - 640 を「良」、639 - 540 を「可」、それ以下を「不可」としている。

試験・課題	最低点	最高点	必須か否か
中間試験 (TOEFL-ITP)	310	677	必須：未受験の場合は「不可」
期末試験	0	200	必須：未受験の場合は「不可」
必須課題 A	0	30	必須：指定期日までに未完了の場合は「不可」
必須課題 B	—	—	必須：指定期日までに未完了の場合は「不可」
Listening Challenge	0	100	必須ではない
Glexa Phone 課題	0	30	必須ではない
総計	310	1037	

2006年度では、必須課題とグループ学習を完了していれば、TOEFL-ITP の点数が 100%の重みを持っていたのが、2013年ではほぼ 50%にまで落ちている。これは、6月半ばの TOEFL-ITP 受験以後の学習意欲の減退への対策として期末試験の比重を重くしていること、授業への参加意識を高めるための各種「ボーナス点」を設けていることなどによるものである。8年間の間に、英語Ⅱが TOEFL-ITP で成績が決まる授業から、その一部に TOEFL-ITP 受験体験が含まれる授業に変わってきている。

2.6. オンライン教材

英語Ⅱのようなオンライン授業の成否を決する大きな要因の 1つは、オンライン教材の質と量である。2006年に英語Ⅱをはじめると同時に、担当の教員はこの点を十分に認識していた。その上で種々検討した結果、英語Ⅱの教材は市販のものを使わずに独自の教材を内製することにした。その方針は現在まで引継がれている。

以下に各年度で使用されたオンライン教材の概要をまとめた。そこから分かるように、毎年多くの新作課題が作成されている。これらは全て、英語Ⅱ実施委員および教材作成委員を中心とする北大の英語教員が作成したものである。

さらに、この一覧から分かることは、教材の種類が、読解、聴解、作文、発音、TOEFL-ITP 対策におよんでいて、偏りが少ないことである。教材のすべてが北大の英語教員によって作成されていることにより、内容や程度が北大の学生にふさわしいものになっていることは言うまでもない。

すべての教材はオンライン上でアンケート調査により学生の側からの評価を受けている。そして、これらは教材プールに蓄えられ、必要に応じて再使用されている。再使用される際には、多くの場合何らかの手直しを加えられている。2012年度にあったように、教材を WebTube から Glexa に移植することも行われた。一部のビデオ教材は Hokkaido University Open Course Ware (<http://ocw.hokudai.ac.jp>) において一般公開されている。

2006年度

- WebTube 上の新作 (41 課題)
- グループ課題
 - * 英文メールをやり取りする課題
 - * Video Chat System で音声メッセージをやり取りする課題

2007年度

- WebTube 上の旧作 (14 課題)

- WebTube 上の新作 (37 課題)
 - * TOEFL-ITP sample mini-test (1 課題)
 - * TOEFL prep (6 課題)
 - * Goh Videos (16 課題)
 - * Learning Japanese (2 課題)
 - * CNN listening (7 課題)
 - * Language and Culture (1 課題)
 - * Vocabulary Knowledge Activation Test (2 課題)
 - * 英文を読むってどういうこと? (1 課題)
 - * 英語角 (1 課題)
- 発音提出課題 (前年度のグループ学習課題に代わるもの)

2008 年度

- WebTube 上の旧作 (18 課題)
- WebTube 上の新作 (27 課題)
 - * ビデオ講義教材 (13 課題)
 - * 発音学習ビデオ (6 課題)
 - * その他 (8 課題)
- Glexa 発音提出課題 (1 課題、電話でレストランに予約をする)

2009 年度

- WebTube 上の旧作 (30 課題)
- WebTube 上の新作 (14 課題)
 - * ビデオ講義教材 (8 課題)
 - * CNN listening (4 課題)
 - * Reading Skills (2 課題)
- Glexa 課題 (前年度の「Glexa 発音提出課題」を大幅に作り替えたもの)

2010 年度

- WebTube 上の旧作 (38 課題)
- WebTube 上の新作 (15 課題)
 - * ビデオ講義教材「英語音の特徴」(7 課題)
 - * ビデオ講義教材「Introducing England」他 (3 課題)
 - * Video Dictation (5 課題)
- Glexa 音声課題

2011 年度

- WebTube 上の旧作 (56 課題)
- WebTube 上の新作 (10 課題)
 - * Vocabulary Building (6 課題)
 - * Academic Reading (2 課題)
 - * Walking around San Francisco (1 課題)
 - * How to Read Newspaper Headlines (1 課題)

- Glexa 音声課題
 - * reserve a table
 - * say and hear

2012 年度

- WebTube 上の旧作 (26 課題)
- Glexa へ移された WebTube 旧作 (38 課題)
- Glexa 上の新作 (6 課題)
 - * ビデオ講義教材「Email Etiquette」(3 課題)
 - * リーディング教材 (3 教材)
- Glexa 音声課題
 - * reserve a table
 - * say and hear

2013 年度

- WebTube 上の旧作 (26 課題)
- Glexa 上の旧作 (44 課題)
- Glexa 上の新作 (3 課題)
 - Type the words (2 課題)
 - technical writing (1 課題)
- Glexa 音声課題
 - * reserve a table
 - * say and hear

2.7. TOEFL-ITP

例年、TOEFL-ITP は 6 月半ばの土曜日に実施されている。これは、大学に入学してから 10 週間後の週末で、英語Ⅱの授業カレンダーでは第 8 週目の授業の終わりころに位置している。学期のできるだけ遅い時期に実施するのが望ましいが、採点されて点数が送り返されてくるまでの日数を勘案し、追試験や再試験のための余裕をとると、実際上これより遅らせることはできない。10 週間程度の学習で英語力が大きく伸びることは期待できないので、英語Ⅱの TOEFL-ITP の点数が示す学生の英語力は、学生の入学試験時のそれと同じではないかという意見もある。

TOEFL-ITP の点数に対する関心は、受験する学生はもちろん教員の間でも高い。理由は、TOEFL-ITP の点数が英語の学力を示す客観的な指標と見なされているからであろう。さらに、学生にとっては、英語単位優秀認定制度や 2 学期以降の英語クラスの初級中級上級のクラス分けがあつて、TOEFL-ITP の点数が 2 学期以降の英語の履修に大きく影響することも、TOEFL-ITP に対する関心が高い理由になっている。

全学生の平均点は、2006 年以降 2010 年と 2012 年の 2 回前年を下回ったことがあつたが、全体として上昇基調にある。2006 年に 462.33 点であつた平均点が、2013 年には 480 点を越えた。これは、2006 年に 480 点以上の学生が全体の 3 割弱であつたものが、2013 年には全体の半分以上になっていることにも現れている。この上昇に寄与している要因が何であるのかについては未だ不明であるが、上で述べたように TOEFL-ITP への関心が高まっていること、英語Ⅱのオンライン教材の質と量が向上していること、英語Ⅱにおけるさまざまな形での学習意欲の喚起がより効果的になっていることなどが、その要因として考えられ

る。

年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
A[530-677]	3.79% (98)	5.44% (142)	4.74% (124)	4.68% (118)	4.06% (103)	8.38% (218)	7.36% (190)	9.06% (235)
B[480-529]	24.74% (639)	27.64% (722)	29.19% (764)	32.65% (823)	28.96% (735)	39.43% (1026)	36.27% (936)	43.04% (1117)
C[440-479]	48.63% (1256)	45.98% (1201)	48.72% (1275)	46.77% (1179)	46.45% (1179)	39.58% (1030)	40.95% (1057)	38.27% (993)
D[400-439]	20.02% (517)	18.11% (473)	15.36% (402)	14.56% (367)	17.53% (445)	11.11% (289)	13.29% (343)	8.29% (215)
E[310-399]	2.83% (73)	2.83% (74)	1.99% (52)	1.35% (34)	2.99% (76)	1.50% (39)	2.13% (55)	1.35% (35)
受験者総数	2583	2612	2617	2521	2538	2602	2581	2595
最低点	327	340	363	347	323	343	327	340
最高点	660	617	663	627	650	657	670	670
平均点	462.23	466.00	468.06	470.08	465.21	477.37	474.34	481.19
標準偏差	35.66	36.87	35.07	33.56	36.58	36.78	39.15	37.32

3. 評価

最後に現時点での評価として、学生からの評価と担当教員の評価を紹介する。

3.1. 学生の評価

英語 II では、学期を通じて頻繁にオンラインアンケートを行って、個々の教材や授業運営に対する学生の反応をモニターしている。ここで紹介するのは、学期末に行っているアンケート調査中の二つの質問への回答である。ひとつは、「英語 II を受講したことはあなたにとってプラスになりましたか」というもので、一般的に満足したかを聞いている。これに対して、最近では 7 割前後の学生が肯定的に答えている一方で、各年度とも明確に否定的な回答をした者が 1 割前後いる。この 1 割はオンライン授業という斬新な授業形態に最後までなじめなかった学生である可能性があり、今後さらに調査を行う必要がある。

英語 II を受講したことはあなたにとってプラスになりましたか。

年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
なった	55.8%	57.8%	67.6%	71.2%	71.5%	-----	69.9%	65.5%
どちらとも言えない	32.0%	32.6%	25.0%	23.4%	21.4%	-----	21.7%	25.4%
ならなかった	12.2%	9.6%	7.4%	5.5%	7.1%	-----	6.3%	9.1%

もう一つの質問は、コンピューター学習に共通する弊害である機械的な学習の完了についてである。英語 II では多くのオンライン教材を所定の期日までに完了することを義務づけているが、これを教材の内容を理解しない機械的なクリックのみで完了することが可能である。この質問はそのようなことをどの程度行っているかを聞いている。そのようなことを常に行った学生が 1 割前後いることが分かる。また 4 割前後の学生がときどきそうしていると回答している。これは、オンライン教材の学習を中心に組み立てられている英語 II にとって、非常に大きな問題である。

オンライン教材で、何も読まず考えずに機械的にボタンをクリックして完了したことがありますか。

年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
やっていない	-----	-----	51.2%	58.7%	55.2%	53.5%	46.4%	41.6%
ときどき	-----	-----	42.0%	35.1%	35.5%	39.3%	42.7%	45.5%
ほとんど常にやった	-----	-----	6.7%	6.2%	9.3%	7.2%	9.6%	13.0%

3.2. 担当を経験した教員の評価と展望

2013年7月に、2010年度以後英語Ⅱを担当した教員8名を対象にメールによる小規模な聞き取り調査を行った。以下はそこで得られた意見や感想を4つに分類整理したものである。第1に、英語Ⅱの担当経験者は英語Ⅱに対しておおむね肯定的な評価をしていることが分かった。(3.2.1) 第2に、教材として市販のものを使わずに独自に制作していることについても肯定的であるが、教材全体の統一や著作権の問題があることが指摘された。(3.2.2) 第3点として、英語Ⅱ担当経験者とそれ以外の教員間の認識の隔たりを心配していることが分かった。(3.2.3) その他、学年全体を一斉に教えることやチームティーチングに対する積極的な評価がある一方で、人的資源に対する不安が表明された。(3.2.4)

3.2.1. 英語Ⅱ担当経験者は英語Ⅱの内容に対しておおむね肯定的である

- * 英語Ⅱの教材はバラエティがあり、オンラインゆえの長所、短所両方ありますが、今ある資源や人員のわりに(つまり、そういうものが足りないと言いたいわけですが)、いいものを提供できていると思います。
- * 英語Ⅱ担当者の努力により、多くの意欲的な学生については(英語Ⅱの目標が)達成できていると思います。
- * 英語Ⅱでは、複数教員による多様な教材を提供しているため、一人の教員が担当する授業よりも、内容が豊富となり得る。また、オンラインという形態は、習熟度、学習速度の異なる学生たちに対して、大量の教材を提供することができる。これらの利点はあるが、実効性があるかということは別の話である。
- * 北大生としての基礎的な英語力の共通の基盤を作るのに実質的に貢献するような教材が提供されていると思います。
- * 英語Ⅱで異なる教員が作成した様々の教材に触れることで、英語の学習についてある程度幅広い知識を得たり、考えたりする機会を学生は得ていると思います。また言うまでもなく、自分のペースで英語のスキルを練習する機会も得ていると思います。したがって、英語Ⅱは意欲のある学生にとっては、その気になれば、英語学習のリソースと演習機会を得られる科目、TOEFLを受験する経験を得る科目というような位置を占めていると思います。

3.2.2. 教材プールの充実と問題点

- * (現在の英語Ⅱのオンライン教材の整備状況は) 個々の教員がこれまで個人的に蓄積して授業で用いていた教授方法や知識を英語Ⅱに集積することになっていると思う。その結果、一人の教員が担当する授業では実現できなかった、複数の異なる視点で作られた多様な教材を同時に学生に提供することができるようになったと思われる。
- * Almost all of our courseware was developed in-house. There are some videos, photographs, images, and text that we obtained from elsewhere. Exposing students to authentic material is important; yet

copyright limitations may force us to restrict access. We should choose material that allows access from off campus.

* Some students ask for, and some TAs recommend, that there should be more cohesion and order among courseware -- that is, that our current line-up is too haphazard and unmethodical. This observation is true. Our courseware is a cumulation of idiosyncratic endeavors produced by a variety of instructors. By happenstance, we may have stockpiled an array of courseware suited for our students because the authors developed courseware they felt were needed at Hokudai. What we have does work, but by unplanned convergence, not intended design.

* この特徴(教材が内製であること)が失われれば、英語 II の存在理由などない。外注されても文句は言えない。

3.2.3. 英語 II の実態が外から見えにくい

* 教員でも、英語 I だけを担当している教員は、英語 II で何を教えているか、あまりよくわかっていない。英語 II において、英語 I で教えられていることが、より効果的に教えられている部分もある。英語 II を担当していない教員が「オンライン教材を見て下さい」と言われても、時間もないし、仕方ない部分もあるのでしょうか…。

* 新しい人を担当させて、英語 II 経験者が増えるようにしていく必要がある。特殊な技能の蓄積がなければ担当できない仕事は減ってきている。2013 年度は、DokuWiki を使って英語 II のウェブサイトを作ったが、責任者の先生が一人でウェブ上での情報発信をこなしている。これでかなり英語 II 担当の敷居が低くなったのではないか。

* 英語 II で行われていることを、広く英語系の（特任も含む）構成員、さらに外国語教育センターの他の言語系の人たちにも、知らせる努力をもっとする必要があるかと思います。特に、前者に関しては、英語 I と補完的な部分もあるにも関わらず、多くの英語系の先生たちが、英語 II で何が行われているかをよく知らないと思います。今後、英語 II に関わる人も少なくないので、普段からの情報共有がとても重要だと思います。

3.2.4. その他

* I feel privileged to have access to the entire freshman class. No other course at Hokudai has direct, uniform access to the entire undergraduate student body.

* オンライン教材を作ったことはいい経験でした。少しでも反応があると、うれしいとも思いました。チームで働く楽しさもありました。

* 英語 II は普通に考えればかなり成功が難しいタイプの授業を英語系の担当教員の献身的努力によって成功させてきた科目のように思います。ただ、このことによる教員の負担は重いのも事実で、(限られた人的リソースなどから考えて) このままずっと順調に維持していけるのかという不安はあります。

* 一年次の学生全体に共通の学習体験を与えているという点は、もっと評価されるべきだと思う。

4. おわりに

2000年4月に北大で最初のCALL教室が使われはじめてしばらくは、受講生40人前後の対面授業の中でCALL教材を学習させるという使い方がされていた。しかし、2006年以後の英語Ⅱでは一学年2600名の学生全員に同一のオンライン教材を学生の裁量に任せた形で学習させている。今から振り返ってみると、この転換はかなり大胆な試みであった。前例として参考にできるようなものが何もなかったこと、また本稿執筆者の知る限り他大学において追随する例がないことから、そのように言えるであろう。この英語Ⅱを苦心惨憺の末に軌道に乗せた初期の英語Ⅱ担当者の功績は、十分に評価されるべきである。

このような努力が実を結んで今のところ英語Ⅱがうまく行っていることは、約7割の学生が肯定的に評価していること、TOEFL-ITPの点数が伸びていること、担当を経験した教員が意味のある授業であると評価していることなどに表れている。

その一方で、1割の学生が明確に否定的評価を下し続けていることや、機械が相手であることにつけ込んで課題を無意味な操作で完了する弊害が一向に減少しないことが示すように、授業を改善していく努力を今後も続ける必要がある。またオンライン教材の充実にもつとめなければならない。それらができるかどうか、すなわちそのための人的資源を供給できるかどうか、今後の英語Ⅱがかかっていると思われる。

第6章

教員アンケートによる初習外国語に関する意識調査(2013)

——分析と考察——

外国語教育センター外国語教育将来構想 WG 初習外国語部会

寺田龍男・清水賢一郎・増田哲子

0. はじめに

本報告は、(英語とともに) 初習外国語に関して教員を対象に行ったアンケートの結果と分析である。第2章の英語に関する分析でも紹介されているように、アンケート用紙および回答用紙を配布した教員 1346 名のうち、438 名から回答を得た。回収率は3割強 (33%) であり、前回 2002 年度 (平成 14 年度) の 41% には及ばなかったものの、ほぼ3人に1人から回答を得られた¹。回答に自由記述を求める質問が多かったことや繁忙期に実施されたことを考慮すると、けっして低い数値ではないといえよう。記述欄に様々な意見・分析・批評が書かれた回答が多数寄せられたことから、外国語教育そのものはもとより、初習外国語に対する教員の関心が高いことも明らかになったと考えられる。

以下で、質問項目順に結果を分析し、前回の報告と比較しつつ考察を加えてゆく。なお分析結果の比率 (パーセンテージ) は、すべて小数点以下を四捨五入して表示した。また質問ごとに部局別のデータグラフを用意したが、それらをすべて列挙すると莫大な紙数を要する。そのため、「全体」のデータをさらに細かく分析する必要がある場合は「文系」・「理系」・「その他」(情報基盤センター・観光学高等研究センター・留学生センター・高等教育推進機構・所属不明) の3グループに分けて示した。それ以上の特徴については各部局の例を挙げることをもって代えた。

1. 分析と考察

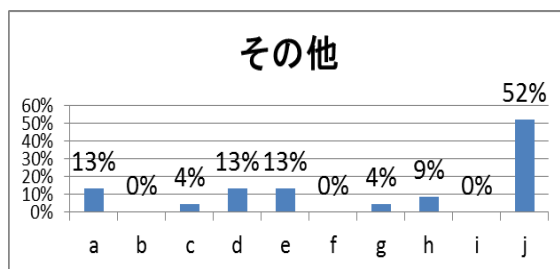
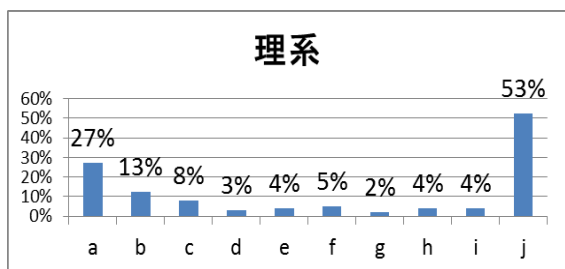
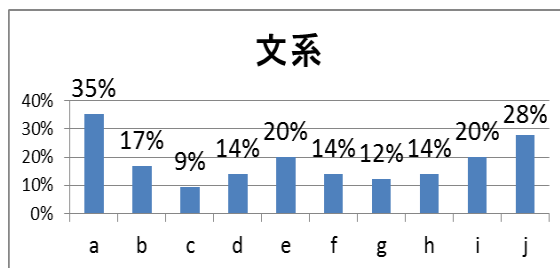
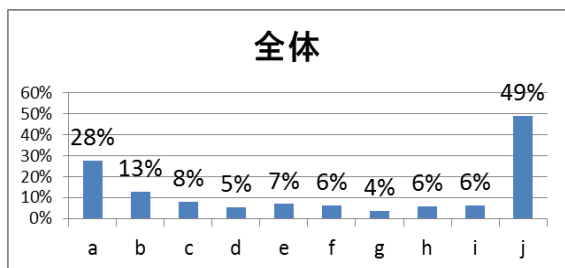
問 11²はカリキュラムの現状認識について問うものである。「ご担当学部における英語以外の外国語カリキュラムの現状についてご存知のことはどれですか。(複数回答可)」である。

- a. 英語以外に「必修」科目としてご担当学部の学生が履修できる外国語 (初習外国語) の種類
- b. その修得単位数
- c. その開講期 (どの期に何単位開講されているか)
- d. 統一試験の実施
- e. オンライン授業 (CALL) の実施
- f. 再履修クラス是否存在
- g. 演習における習熟度別/技能別クラス編成の実施

¹ 伊藤章・佐藤俊一編『教員・学生アンケートにみる全学教育外国語に対する意識調査と北大生の英語力の変化』(国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書 51、北海道大学言語文化部、2002) の第4章(教員アンケート)を参照。

² 今回のアンケートは英語と一体の形で、英語に関する質問に続けて実施したため、質問番号が11から始まる(アンケートのサンプルは本報告書巻末の参考資料3を参照)。

- h. 海外短期語学研修（演習の単位として成績評価し単位認定）の実施
- i. 「必修以外」にご担当学部の学生が履修可能な外国語の種類
- j. 何も知らない

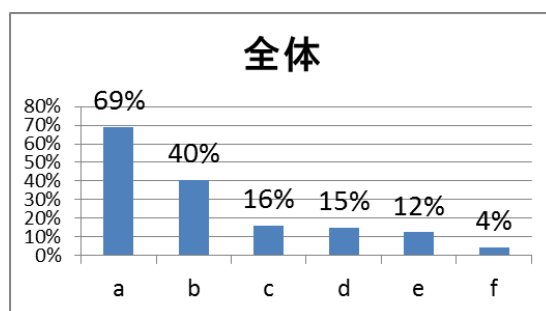


教員の半数以上が知っていた項目はひとつもなく、もっともよく知られていたものでも「a. 英語以外に「必修」科目として履修できる外国語の種類」の 28%が最高値である。これに「b. その修得単位数」の 13%がつづくが、その他は多いものでも「c. その開講期」(8%)、「e. オンライン授業 (CALL) の実施」(7%) など、きわめて低いことが明らかになった。ほぼ半数の教員は「j. 何も知らない」と回答している。前回のアンケートで「何も知らない」と答えた教員が約 40%だったことを考え合わせると、広報の不十分さと必要性をさらに痛感させる結果といわなくてはならない。

問 12 では望ましい履修時期をたずねた。「学生が英語以外の外国語を学習するのに適切な時期は、大学 4 年間のいつだとお考えですか。(複数回答可)」である。

- a. 1 年次 b. 2 年次 c. 3 年次 d. 4 年次 e. よくわからない f. その他

大多数が「a. 1 年次」(69%) および「b. 2 年次」(40%) での履修と回答しており、2 年次履修がまだ文系全学部と一部理系学部で必修だった前回(「1 年次」89%、「2 年次」67%) とほぼ同じ傾向とみなすことができる。これに対して「c. 3 年次」(16%)、「d. 4 年次」(15%) はこれも前回と同様少数である。どちらも現行カリキュラムでの履修時期と一致しているのは専門科目との関係であろう。専門課程に移行したあとで外国語科目を再履修する場合、学部学科の必修科目と時間が重なるため、再履修の授業で所属す

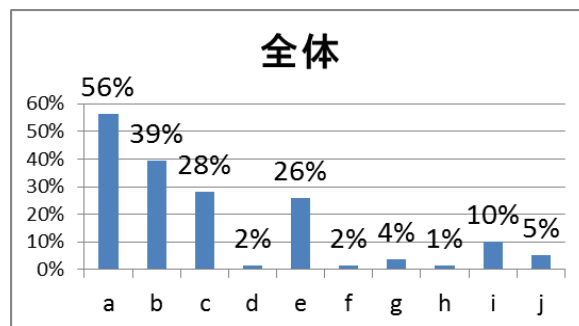


べきクラスの決定が困難になる事例は少なくない。こうした点からも外国語の学習が専門の授業と重なるのは好ましくないと考えられているのではないだろうか。ただ、この質問で「f. その他」を選択した教員による自由記述の中では「必要な時にいつでも学べること」、「欧米の一流大学では週 4, 5 回の授業を実施し、2

年である程度の能力をつけるのが普通。日本の大学の言語教育はあまりに貧弱」という見識も示されていた。今後の検討課題となろう。

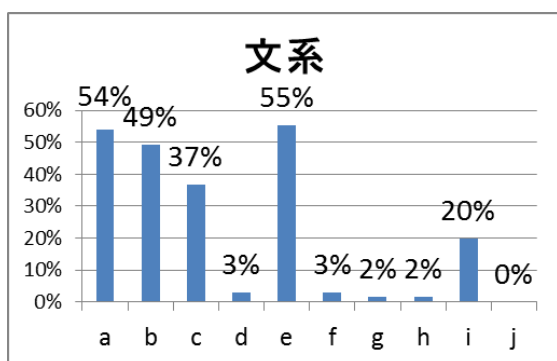
問 13 「英語以外の外国語について、どのような能力をご担当学部の学生に身につけさせたい、あるいは身につけさせなければならないとお考えですか。(複数回答可)」では学生に身につけさせたい能力をたずねた。

- a. その言語の基本的知識
- b. その言語に関わる社会的・文化的な基本知識
- c. 海外旅行などで困らない程度の会話力
- d. 日本語字幕なしで映画やニュースを理解する力
- e. 辞書を使えば、文献を読みこなせる力
- f. 辞書なしで、文献を読みこなせる力
- g. 議論したり、口頭発表したりする力
- h. 論文を書く力
- i. インターネットで資料検索し情報収集する力
- j. その他



「a. その言語の基本的知識」(56%)、「b. その言語にかかわる基本的な社会的・文化的知識」(39%)、「c. 旅行などで困らない程度の会話力」(28%)、「e. 辞書を使えば、文献を読みこなせる力」(26%)に回答が集中した。しかしすべての文系部局といくつかの理系部局では「i. インターネットで検索・収集する力」を選んだ教員が比較的多く、全体でも 10%を占める結果となった。以下、「d. 日本語字幕なしで映画やニュースを理解する力」(2%)、「f. 辞書なしで、文献を読みこなす力」(2%)、「g. 議論・口頭発表を行う力」(4%)、「h. 論文を書く力」(1%)、「j. その他」(5%)となっている。

前回のアンケートでも同じ質問をしたが、回答比率は若干異なっていた。「言語の基本的知識」(77%)は前回は1位を占めたが、2位は「辞書を使って読む力」(65%)、3位が「旅行で困らない会話力」(44%)だった。前回のアンケートでは「3つ選んでください」という指定があったので回答条件は異なるが、今回は「読む力」に対する要求の度合いが(全体として見ると)低下した。しかしこの「読む力」に関する文系部局の期待は依然として高い。上述のように全体では 26%の教員が身につけさせたいと回答しているが、「文・教育」では 50%で「言語の基礎知識」(47%)を上回り、最高値となった。さらに「法・公共政策・経済」でも 61%で、「言語の基礎知識」と同率一位となっている。



このような教員の要請に対して、現在の必修 4 単位制の枠の中でどのように対応すべきかは今後の重要な課題であろう。この点については最終節でふたたび取り上げる。

なお「j. その他」を選択した教員の自由記述では、問 12 と同様で、「ビジネスや学問では英語で事足りる」のような回答が目についた。理由は「英語力も不十分なのに」さらに別の外国語を学ばせる必要はない、ということであろう。欧米各国では社会の多文化共生化・異文化交流の活発化にと

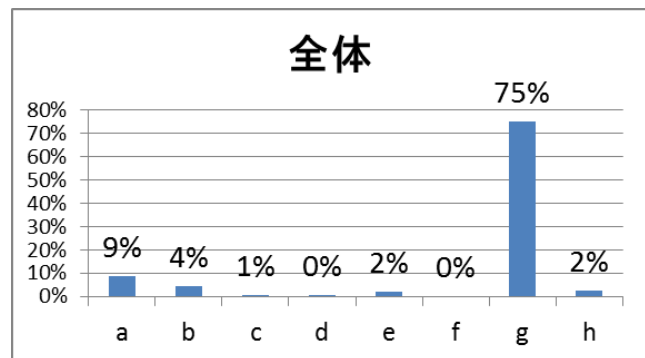
もなってマルチ・リンガリズムが進展しており、中等教育の段階で複数の外国語を学ぶことが一般化している。だが日本では状況が異なるということが、このアンケートの記述からもうかがえる。英語以外の言語を学習する必要性を認める「ヨーロッパの言語のいくつか、中国語、韓国語」のような意見は、自由記述の中では少数派だった。

1年次学生対象アンケート（第7章）の問5の結果によると、身につけたい学力の第1位は「海外旅行などで困らない程度の会話力」（57%：教員アンケートでは28%で第3位）、第2位が「その言語の発音・文法・語彙などの基本的知識」（56%：教員では56%で第1位）、第3位が「その言語に関わる社会的・文化的な基本知識」（42%：教員では39%で第2位）、第4位が「辞書を使えば、文献を読みこなせる力」（27%：教員でも26%で第4位）である。教員・学生とも上位4位までは、数値に多少の違いが認められるものの、ほぼ同じ傾向を示しているといえる。しかしそれら以外の項目では、回答率自体は低いものの、概して学生の期待が教員の要望を上回っている。「日本語字幕なしで映画やニュースを理解する力」（学生10%：教員2%）、「辞書なしで、文献を読みこなせる力」（学生7%：教員2%）、「議論したり、口頭発表（学生アンケートでは「交渉」）したりする力」（学生13%：教員4%）、「論文を書く力」（学生3%：教員1%）、「インターネットで資料検索し情報収集する力」（学生8%：教員10%）。外国語教育センターではこれらの希望や要望にもできるだけ対応する体制を構築したい。

問14と問15では、授業における英語以外の言語の使用状況についてたずねた。問14は、「ご担当の授業（講義・ゼミ）の中で、英語以外のどのような学習活動を行うことがありますか。（複数回答可）」である。

- | | |
|---------|----------|
| a. ドイツ語 | b. フランス語 |
| c. ロシア語 | d. スペイン語 |
| e. 中国語 | f. 韓国語 |
| g. 全くない | h. その他 |

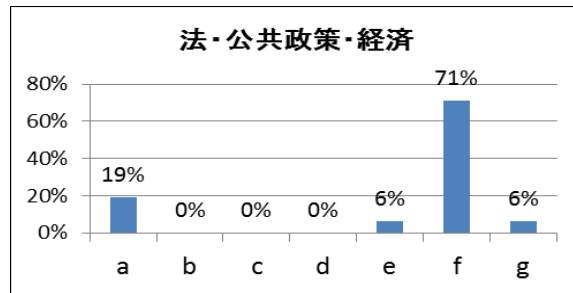
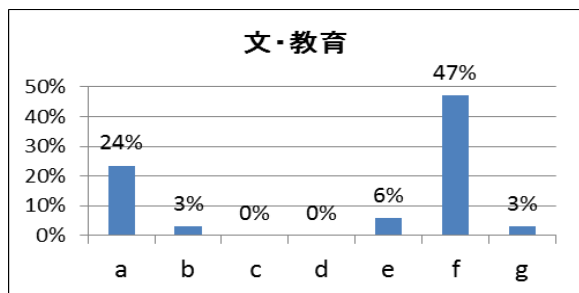
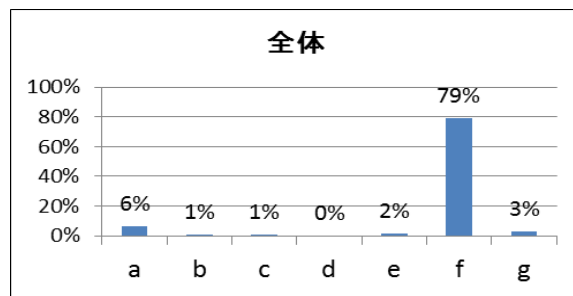
この結果によれば、英語以外の外国語は「g. 全く（使わ）ない」（75%）ということだが、使用する場合は「a. ドイツ語」（9%）、「b. フランス語」（4%）、「e. 中国語」（2%）、「c. ロシア語」（1%）、「h. その他（ラテン語・ギリシャ語・



イタリア語など）」（2%）となっている。これを11年前の前回調査と比較すると、数値は若干下がってはいるが、ほぼ同じ傾向（ドイツ語11%、フランス語6%、ロシア語3%、中国語2%など）が今回も確認された。しかし文系・理系に分けると、文系全体ではドイツ語が20%、フランス語が22%、中国語も6%で、その他も8%になる。これをさらに部局別に細かく見ると、「文・教育」ではドイツ語とフランス語がともに21%、中国語が6%、ロシア語とスペイン語が3%、その他も15%を占める。また「法・公共政策・経」ではフランス語が23%、ドイツ語が19%、中国語6%である。後述するように、これらの部局では教育内容に関する意見や要望に強いものがあるが、その由来をこれらの数値の高さが示しているといえよう。理系部局でもドイツ語が10%前後の値を示すところが複数ある。

問15は「ご担当の授業（講義・ゼミ）の中で、英語以外の外国語を使ってどのような学習活動を行うことがありますか（複数回答可）」である。

- a. 文献を読ませる
- b. レポート・(小)論文を書かせる
- c. 口頭発表をさせる
- d. 議論をさせる
- e. インターネットでの資料検索や情報収集をさせる
- f. 全くない
- g. その他

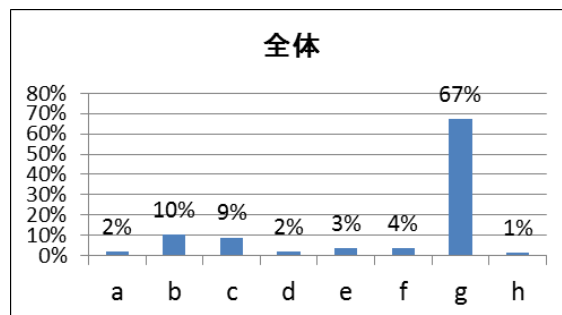


問 14 の結果から予想されるように、「f. 全くない」が 79% (前回 80%) で大半を占める。ただ文系部局では「a. 文献を読ませる」という回答が比較的多く、「文・教育」が 24%、「法・公共政策・経」で 19%を占めた。またこれらの部局では「e. インターネットでの検索と収集をさせる」もともに 6%であった。

これら以外の回答「b. レポートを書かせる」、「c. 口頭発表をさせる」、「d. 議論をさせる」、「g. その他」はいずれの部局でも皆無に近い。これを問 13 の結果と比べると、「言語の基本的知識」(56%)、「その言語にかかわる基本的な社会的・文化的知識」(39%)、「辞書を使えば文献を読みこなせる力」(26%)を身につけさせたいと考えてはいるものの、とくに理系ではそれらを学生たちが学習に生かすことがほとんど期待されていないのであろう。それら以外の知識や力になると、まったく活用させる状況にはないことがわかる。文系部局で英語以外の外国語で書かれた文献の読解が重要な作業となることは容易に想像できる。しかし理系部局では、たとえ言語の「基本的知識」を重視してはいても、それを読解に結びつけるという理由ではなく、むしろ「その言語にかかわる基本的な社会的・文化的知識」を重視している教員が多いのではないだろうか。かつてなら「教養」と定義され、今日ではむしろ「異文化理解」のツールとみなされる言語の習得を念頭においているように思われる。

問 16「学生の初習外国語(英語以外)の運用能力が今よりもっと高かったら、ご担当の授業(講義・ゼミ)の中でその外国語を使ってどのような学習活動を行いたいとお考えですか。(複数回答可)」は前回のアンケートにはなかった項目である。

- a. 教員自らがその外国語で講義を行う
- b. 授業のテーマに関わる(平易な)記事や文章を読ませる
- c. 専門書や研究論文を読ませる
- d. レポート・(小)論文を書かせる
- e. 口頭発表をさせる
- f. 議論をさせる

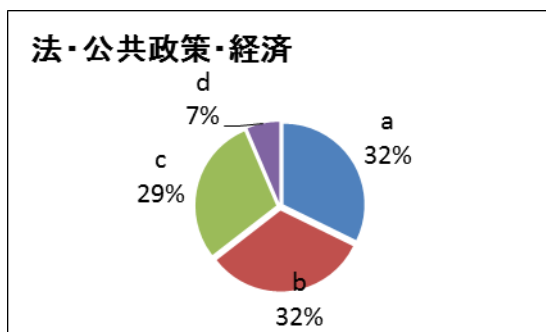
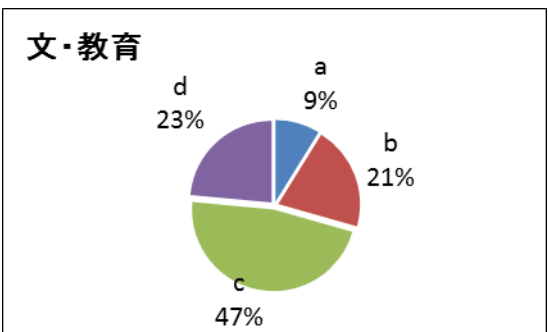
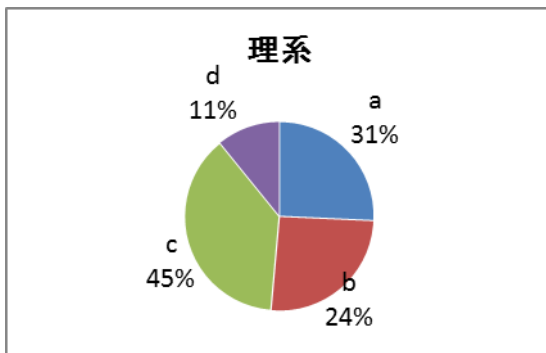
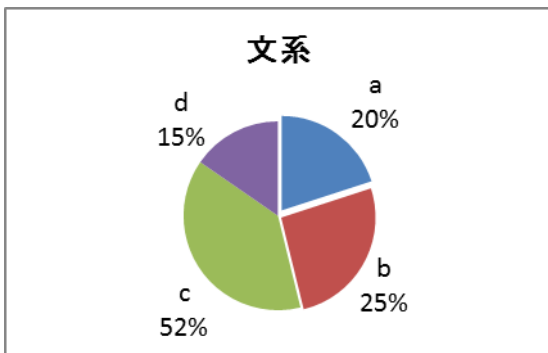
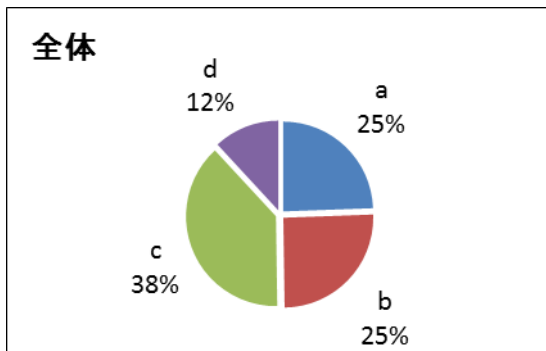


- g. 特にない
- h. その他

問 15 が現状に関する問いであるのに対し、この問 16 は今よりよい状況を仮定したうえでの質問だったが、結果は 15 とほぼ同じであった。全体では「g. 特にない」が 67%を占めるが、問 15 の「全くない」の 79%よりは若干下がっている。この違いの原因は問 15 の「文献を読ませる」に対応する問 16 の「b. 授業のテーマに関わる（平易な）記事や文章を読ませる」の数値がほぼどの部局でも上がっていることにある。たとえば「法・公共政策・経」では現在文献を読ませている教員の比率が 19%（問 15）であるのに対し、学生の学力がもっと高ければ文献を読ませたい考える教員は 35%に達する。こうした傾向は、数値は高くないものの、理系の多くの部局にも見られる。また文系部局では、「平易な記事や文章」だけでなく「c. 研究書や研究論文を読ませたい」と考える教員が多い。「法・公共政策・経」では 26%の教員が本格的な文献講読を希望しており、「文・教育」ではこの比率が 21%で、「平易な記事や文章」の 18%を上回っている。文系部局の要望の大きさがここで再び確認できる。

問 17 は「英語以外の外国語についても各種の検定試験が行われています。各種検定試験の成績を単位として認定すべきとお考えですか」と検定試験の結果を単位認することの是非を問うものである。

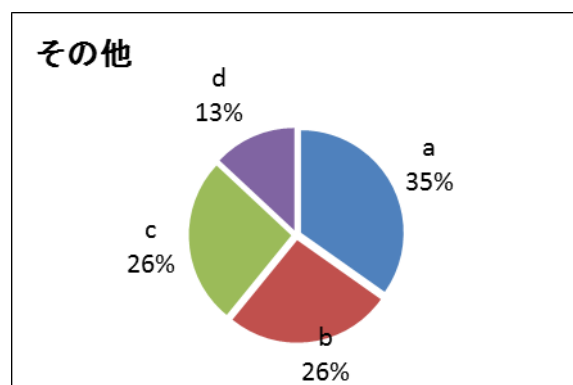
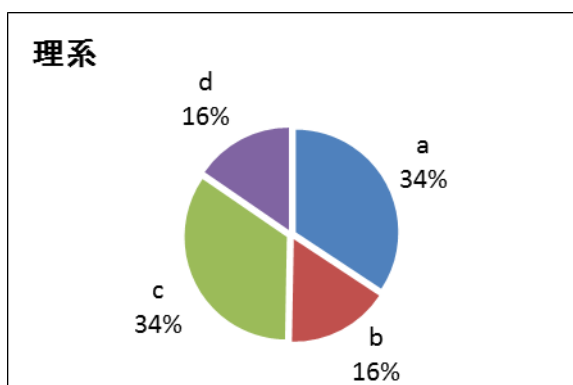
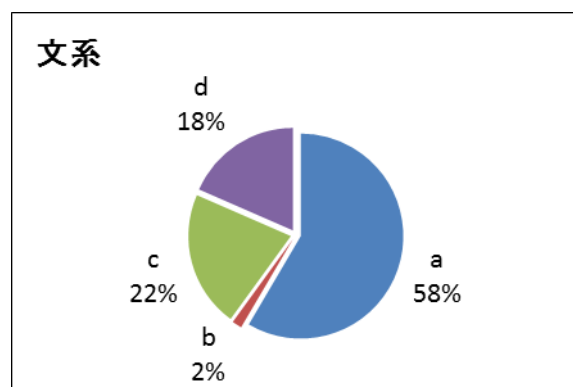
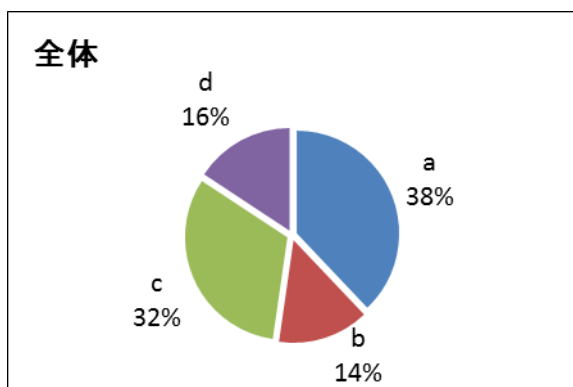
- a. 賛成
- b. 反対
- c. どちらとも言えない
- d. （無回答）



全体 (38%) でも部局別 (「法・公共政策・経」を除く) でも「c. どちらとも言えない」がもっとも多かった。理系部局では 30%台から 40%台で、他を圧した感がある。興味深いことに、「文・教育」ではこの比率が 47%と各部局中最大値を示したのに対し、「法・公共政策・経」は 29%ともっとも低い値であった。次に「a. 賛成」を見ると、全体では 25%で理系の各部局もほぼこの数値に近いが、「文・教育」ではわずか 9%と極端に低いのに対して、「法・公共政策・経」は逆に学内でもっとも高い 32%の教員が賛成している。「b. 反対」としたのは全体では賛成と同じ 25%だが、理系だけを見ると反対 (24%) より賛成 (31%) の方が多い。前回とは異なり、今回は賛成・反対などの理由を尋ねなかったので詳細は明らかでないが、前回のアンケートの回答 (「賛成」36%、「反対」28%、「どちらとも言えない」38%) の理由に関する記述では、「どちらとも言えない」では内容・実態を知らない、どの程度ニーズがあるかわからない等の理由が挙げられていた。おそらく今回も、内容・実態が知られていないのが最大の原因ではないかと想像する。また同じ文系でも部局により「賛成」と「反対」が大きく分かれた点については、機会を改めて詳しく調査する必要がある。(なお、問 23「英語以外の外国語カリキュラムに望むこと」への回答の中で「検定試験は日本特殊な中検・仏検・独検等ではなく、グローバル検定にしてほしい」という要望が寄せられた。これについても今後の課題としたい。) ちなみに学生の場合は、教員とは異なり検定試験の結果を単位化する要望が強いことが明らかになった。(詳細は第7章 (1年次生) および第8章 (高年次生) を参照されたい。)

問 18 は「現代の日本社会において、英語以外の外国語を学ぶ必要性をお認めですか」である。

- a. 必要 b. 不要 c. どちらとも言えない d. (無回答)



まず全体を見ると「a. 必要」が 38%、「b. 不要」が 14%、「c. どちらとも言えない」が 32%、「d. 無回答」16%であった。この傾向は文系・理系を問わずどの部局でも同じで、すべての部局で「必要」が「不要」を

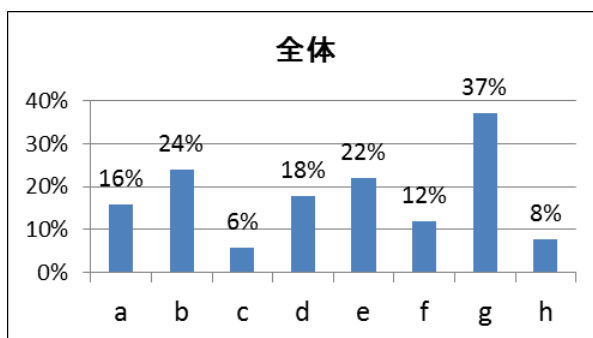
上回っていた。文系部局の平均が「必要」58%、「不必要」2%と大きな差がついたが、理系部局の平均でも「必要」35%に対して「不要」16%と、「必要」が「不要」の2倍を超えている。ただ、理系部局の平均で「わからない」が34%にのぼる。(ちなみに前回は、全体平均のみではあるが「必要」が59%、「不要」が12%、「どちらとも言えない」が29%であったが、「無回答」のデータがないので単純には比較できない。)

この質問で各教員に回答の理由の記述も求めたところ、多数の詳細な意見が得られた。いずれも貴重な示唆に富んでいるが、以下にそれらのいくつかを挙げてゆく。まず「a. 必要」と回答した教員の意見として典型的なのは「教養として言語そのもの・社会・文化を学ぶことは必要」や「時間のあるうちにいろんなことを知っておいた方がよい」といういわゆる教養派と「グローバル社会への対応」(英語以外の言語も習得すべきという)のマルチ・リンガリズム派で、大半がこのふたつのどちらかに分類される。これに対して「b. 不要」とする意見は「英語で十分」・「英語教育を優先すべき」や「理科系ではまったく必要ない」などである。「c. どちらとも言えない」と答えた教員の記述は比較的長いものが多い。そこからは、回答者が考えても答えが見つからない、あるいは現状をもどかしく思っていることがうかがえる。「個人の仕事の種類により、必要な外国語は異なる。このため、全員に必須ではないが、「不要」ではありえない。アフリカや南米、東欧に行く学生も増えているので、必要に応じて選択できるクラスがあれば理想だが、すべてを大学で実施するのは困難と思われる」、「大学入学とともに一律に第二外国語を習う必要はない。社会に出て必要になった時に学ばせよ。一般教養程度なら、現状のように学ばせよと思う」、「多くの学生が、英語の能力(特に会話力)が必ずしも高くない中、英語以外の外国語を学ぶ時間を、英語の語学能力にあてた方がよいと考える一方、中学より学校教育の中に組み込まれ、仕方なく受け身的勉強をしてきたと考えられる人も少なくない英語と比べて、第二外国語は主体的に自らが学習の対象として特定の言語を選択することができ、学ぶことの楽しさがあると思うから」などの意見が見られた。これらの多くに共通するのは「人により状況が異なる」という点である。問題は、だから必要になってから自分で学ばせよと考えるか、あるいはそうした時に備えてあらかじめ学習させておくべきと判断するか、そのどちらかであろう。しかしそのどちらだとしても、基幹総合大学である本学は、外国語学習の機会を多様かつ柔軟に提供することがふさわしく、外国語教育センターの重要な役割であると考えられる。最後に、主として理系教員からヒンディー語などアジアの諸言語の重要性を強調する意見があったこと、そして外国語教育センターとしてはできるだけ多くの言語を習得する機会を提供したい考えであることを付け加えたい。ちなみに現在は、他部局の教員や非常勤講師の協力も得てイタリア語・ポーランド語・チェコ語・ハンガリー語・フィンランド語・オランダ語・ギリシャ語・ラテン語・ブラジルポルトガル語・インド古典語・広東語が「外国語特別演習」として開講されている。

問 19~21 は、教員に一学習者となったことを想定してもらい、外国語学習に対する考えをより明らかにすることを意図したものである。問 19 では、「もし、あなたが人生をやり直す機会を与えられ、今、18歳に戻り、大学に入学するとしたら、何語を学びたいですか。(複数回答可)」とたずねた。

- | | |
|---------|----------|
| a. ドイツ語 | b. フランス語 |
| c. ロシア語 | d. スペイン語 |
| e. 中国語 | f. 韓国語 |
| g. 英語 | h. その他 |

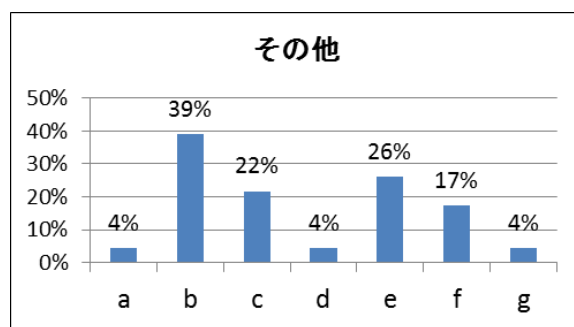
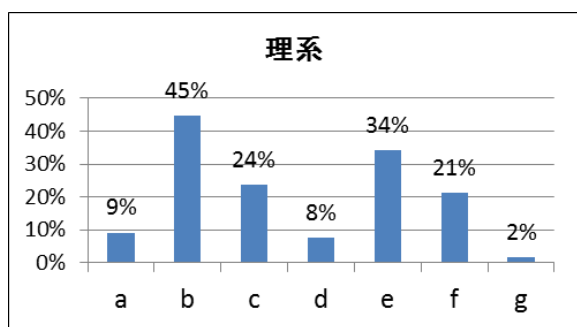
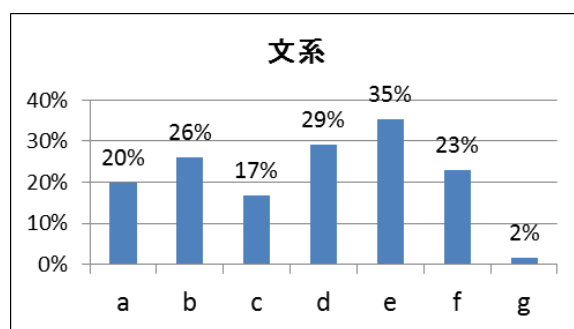
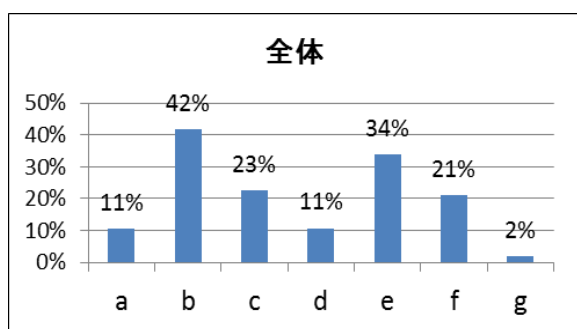
全体では多い順から「g. 英語」(37%)、「b. フラン

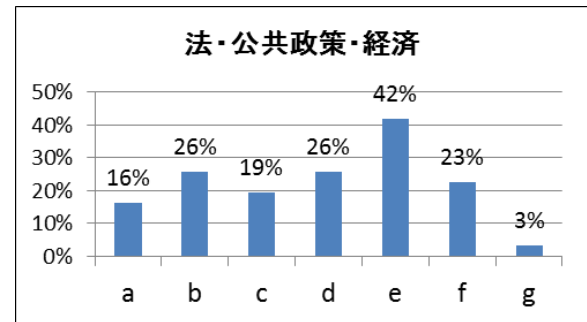
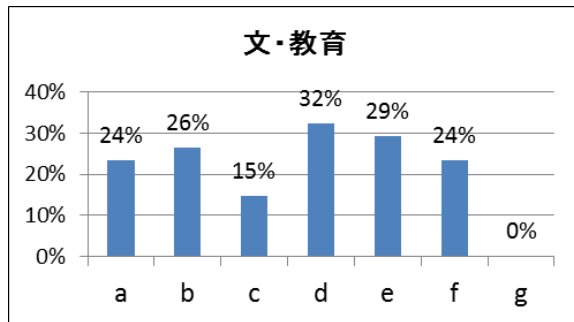


ス語」(24%)、「e. 中国語」(22%)、「d. スペイン語」(18%)、「a. ドイツ語」(16%)、「f. 韓国語」(12%)、「c. ロシア語」(6%)で、「h. その他」を選んだ回答者は8%だった。「(その他)」の内訳は全世界の言語にわたるのでここでは割愛する。)文系と理系では若干数値が異なるものの、ほぼ同じ傾向である。前回のアンケートでは、多い順に「英語」(44%)、「中国語」(33%)、「フランス語」(28%)、「スペイン語」(26%)、「朝鮮語」([前回のアンケートではこの表現が用いられた]21%)、「ドイツ語」(16%)、「ロシア語」(10%)、そして「その他」が11%だった。英語がもっとも多いのは同じだが、今回は中国語がやや減少した。一年次生の約40%が選択し(2013年度)、全学教育の初習外国語でもっとも履修者の多いドイツ語が、前回も今回もともに16%の教員からしか選ばれていない点は興味深い。さて選択理由は、これも前回同様に千差万別だが、英語の重要性を挙げる回答者はやはり多かった。さらに回答者個人の(現在の)研究や私的関心を挙げた例も非常に多かったが、「使用者の多さ」と「地域の近さ」という理由で中国語・スペイン語・韓国語を学びたいという希望が目についた。

問20は「今、あなたが、あらたに外国語を学ぶとしたら、どのような内容に重点を置いた授業を受けたいですか。(複数回答可)」である。

- a. 文法を中心とした授業
- b. 話すことに重点を置いた授業
- c. 聞き取り重視の授業
- d. 読解重視の授業
- e. 読み書き話し聞く総合的な授業
- f. 言語そのものよりも、その言語が話されている国の文化や歴史、社会生活などを知ることができるような異文化理解に重点を置いた授業
- g. その他





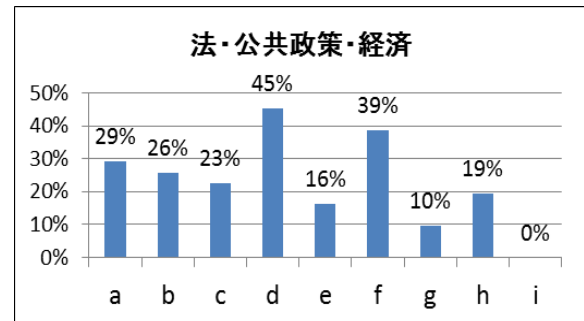
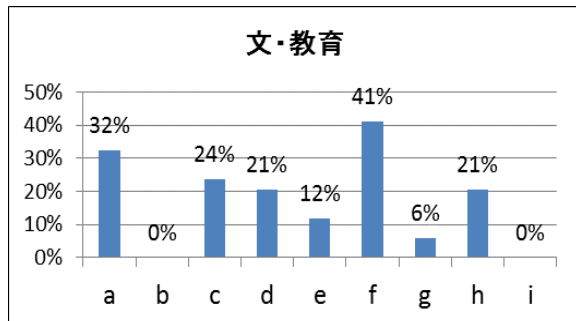
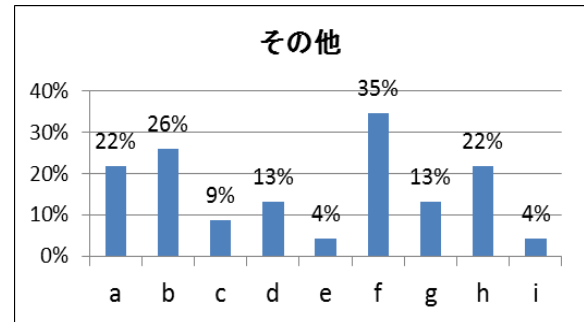
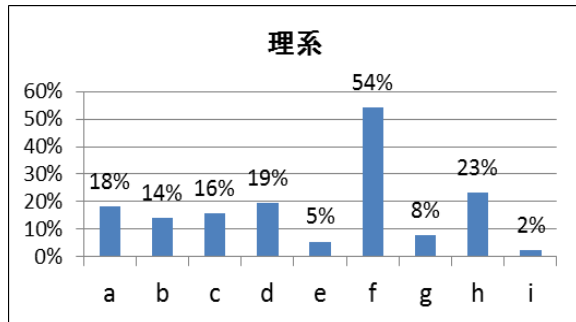
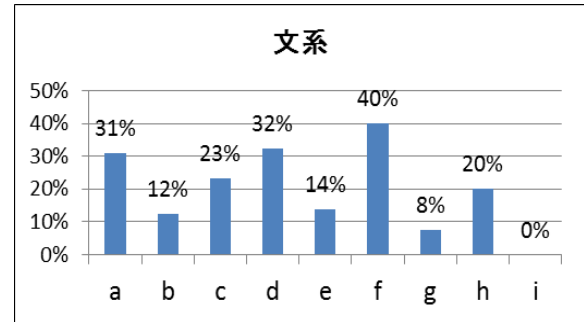
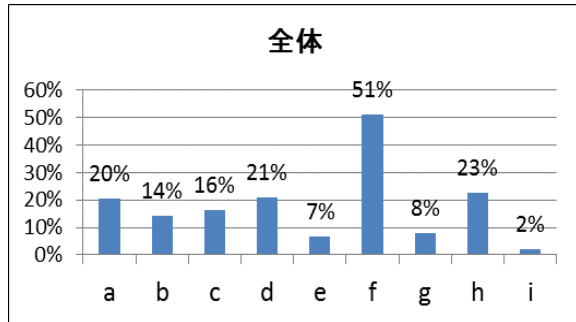
全体の傾向としては多い順に「b. 話すことに重点を置いた授業」(42%)、「e. 読み書き聞く話す総合的な授業」(34%)、「c. 聞き取り重視の授業」(23%)、「f. 異文化理解に重点を置いた授業」(21%)、「a. 文法を中心とした授業」「d. 読解重視の授業」(ともに 11%)、「g. その他」(2%) だった。

言語の 4 技能を伸ばすよりも「話す」ことに重点を置く回答者が多いのは、理系の全部局で(部分的には突出して)この「話す」力をつけたいと考える教員が多いからである。これに対して文系部局では「読解重視の授業」や「総合的な授業」を求める回答の比率が高かった。「文・教育」では「読解重視の授業」が 29%、「法・公共政策・経」では 42%の教員が 4 技能の総合的な習得を希望している。仮定の質問ではあるが、やはり現在の研究・教育活動が回答に影響しているのだろう。

では前回のアンケートと比べるとどうだろうか。同じ質問に対して前回の結果は、「話すことに重点を置いた授業」(57%)、「読み書き聞く話す総合的な授業」(40%)、「聞き取り重視の授業」(30%)、「言語そのものより(…)異文化理解に重点を置いた授業」(23%)、「文法を中心とした授業」「読解重視の授業」(ともに 10%)、「その他」(4%) であった。数値は若干低下したが、順番は変わっていない。なお、「その他」を選んだ回答者の記述を見ても、「会話中心」、「会話の能力中心」、「表現力」、「5 人くらいのカルチャースクール的な授業」など、「話すこと」と「聞き取り」に重なるものが圧倒的に多かった。

問 21 は「今、あなたが、あらたに外国語を学ぶとしたら、それをどのような形態で習いたいですか。(複数回答可)」という問いである。

- a. 従来通りの対面授業
- b. コンピュータやインターネットを用いての授業
- c. 毎週 1、2 回程度の授業
- d. インテンシヴコース(短期集中授業)
- e. 日本人教師が行う授業
- f. ネイティブ教師が行う授業
- g. 日本語を用いての授業
- h. ほとんど日本語を用いなくて、当該外国語だけで進める授業
- i. その他



「f. ネイティブ教師が行う授業」が全体で51%と、他を圧して一位となった。以下多い順に「h. ほとんど日本語を用いなくて、当該言語だけで進める授業」(23%)、「d. インテンシヴコース」(21%)、「a. 従来通りの対面授業」(20%)、「c. 毎週1, 2回程度の授業」(16%)、「b. コンピュータやインターネットを用いての授業」(14%)、「g. 日本語を用いての授業」(8%)、「e. 日本人教師が行う授業」(7%)、「i. その他」(2%)である。ネイティブ教師が行う授業の人気の高さに比べ、日本人教師が日本語を用いて行う授業はあまり歓迎されていないことが明確にわかる結果といえる。これは文系・理系に共通する傾向であるが、部局別に見ると唯一「法・公共政策・経」だけは「インテンシヴコース」(45%)が「ネイティブ教師が行う授業」(39%)より上位にある。「ネイティブ」以外の項目では各部局によって結果が異なるが、いずれも数値が低く際立った傾向は認められない。

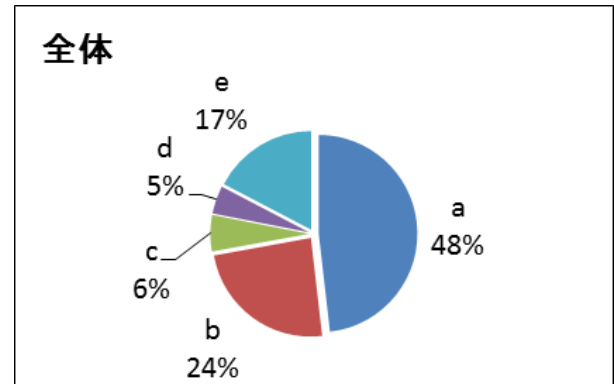
ちなみに前回のアンケートでも傾向はほぼ同じである。回答が多かった順に並べると「ネイティブ教師が行う授業」(70%)、「ほとんど日本語を用いなくて、当該言語だけで進める授業」(34%)、「毎週1, 2回程度の授業」および「インテンシヴコース」(ともに19%)、「従来通りの対面授業」(12%)、「コンピュータやインターネットを用いての授業」(11%)、「日本人教師が行う授業」(10%)、「日本語を用いての授業」(9%)、「その他」(7%)という結果だった。今回のアンケートで「その他」を選択した回答者の記述を見ると、「ネイティブ」、「少人数」が圧倒的に多い。しかしこれらとは別に「文系の場合、文法をしっかり学び、文章の精読、会話などが必要。一方で、理系の場合、「日常会話としての外国語」以

外に使うことがないので、会話重視のカリキュラムにし、文法に対する教育を減らしてもいいと思う」という意見があった。

問 22 では「英語以外の外国語演習（少人数クラス）のクラスサイズとして、何人くらいが望ましいとお考えですか」と、（選択必修クラスではなく）演習クラスの望ましい人数をたずねた。

- a. 10 人未満 b. 10～15 人程度
c. 15～20 人程度 d. 20～25 人程度
e. （無回答）

全体平均はグラフの通りである。「a. 10 人未満」（48%）、
「b. 10～15 人程度」（24%）、「c. 15～20」（6%）、「d. 20～25」（5%）、「e. 無回答」（17%）であった。この傾向は文系・理系を問わずすべての部局に共通している。（なお前回のアンケートではこの質問を行っていない。）演習では「少人数教育」実現のため、2003 年度



（平成 15 年度）は上限が 20 名だった。しかし近年は受講希望者の多さに応えられるだけの開講数を確保することが難しく、残念ながら多くのクラスで抽選を行わざるをえない状況が続いている。この間に外国語教育センターが提供している初習外国語演習では、履修者の上限が原則 25 名まで引き上げられたが、2013 年度（平成 25 年度）は、全学教育委員会からの要請により、多くの教員が上限を最大 30 名まで引き上げている。少人数教育にはほど遠く、むしろ逆行しているわけで、この問題は外国語教育センターが抱えるもっとも重要な課題の一つといわなければなるまい。

最後の問 23 は「その他、北大の英語以外の外国語カリキュラムに望むことを自由にお書きください」と自由な記述をお願いした。前回同様、今回も多種多様かつ示唆に富む意見や要望が寄せられた。しかし実施主体が外国語教育センターであるせいか、現状の維持存続および強化を望む、という意見の方が多かった。以下に、批判も含めていくつかの例を紹介したい。

「国際化するには英語だけではダメで他の言語ももっと充実させるべき」、「語学だけでなく、その国の文化や日本との繋がりなどを含めて総合的カリキュラムを組むと良い」、「国際的な視野を持った研究者のベースを作るような教育をしてもらいたい」、「教員の個性を生かしてバラエティに富んだカリキュラムを、学生が選択する」、「インドネシア語、タイ語などを実施する。欧州に偏った第二外国語の現状は好ましくない」などは現状を是とした上での建設的提言である。中には「総合入試導入後、必修単位が削減された。専門教育上の事を考えると、以前の単位数に戻してほしい」という意見もあった。外国語の習得単位数は現行制度上は各学部の意向によって決まるのではあるが、外国語教育センターとしても可能な限り協力を行い、学生の外国語運用能力向上に寄与したいと考えている。

批判としては「英語力を上げることの方が重要だと思う」、「予算がないので、優先順位は英語のライティング。予算がないのに、全ての主要外国語のクラスを揃えようとするので中途半端になるのでやめた方がよい」、「あまり（初習外国語の？）種類を増やす必要はない」、「英語以外の外国語が必要な局面は減っている、必修の単位面での縛りは弱めてほしい（選択必修の場合も）。ただし、現状での履修希望者数は考慮して、学べる機会を十分確保してほしい」、「二十数年前にドイツ語を学んだが、現在その知識はほとんど残っていない。理由は使わないからだと思う。日常使わない言語を無理に詰め込んでも、活用されることはないのではないか？」などがある。

これらとは別に、「学部学生だけでなく、大学院生や教員・職員も受講できる授業を増やしてほしい。またそうした情報を教職員に周知してほしい」という意見も複数見られた。外国語教育センターではすでに20年以上前から「外国語特別講義」として大学院生や教員・職員も参加できる授業を多数提供してきた。しかし受講者数にばらつきがあるため、これらはすべて全学教育の演習と一体化された。すでに述べたように、初習外国語の演習は飽和状態に近く、演習単位の取得が進級にかかわる場合も少なくないので、1・2年次の学生が優先されることとなり、結果として大学院生と教職員の受講が困難になった。しかし全学の外国語教育の責任部局である以上、これらはできるだけ早く解決しなければならない問題であると認識している。

2. むすびに

「英語以外の外国語を学ぶ必要性をお認めですか」という問い(問18)に対して、「必要」を選んだ教員は38%だった。(前回は59%。)しかし、今回のアンケートで同じ主旨の質問に対して「必要」(英語以外の外国語を/英語に限らず1つ以上の外国語を学ぶべき)と認めた1年次生は58%(第7章 問4)、高年次生では63%(第8章 問33)にのぼる。英語以外の外国語に関して、学生たちの積極的な姿勢が際立つ結果となっている。また、1年次生と比べて、高年次生はさらにポイントが上がっている。この違いは何に起因するのだろうか。現時点であえて推測すれば、現在履修している1年次生たちにとってはしばしば負担と感じられるものの、高年次になってふり返ると何らかの重要性に気づかされる、ということではないだろうか。現場に立つ者としては、教員側が主として研究と教育のツールという実用性で初習外国語を考えているのに対し、学生(特に1年次生)の方は未知なる外国語への関心と期待から学ぶ必要性を感じていると思われる。高年次の学生たちも、学びたい時に学べる体制を望んでいることは明らかである。未知の言語の学習を通して、そのことばが用いられる国や文化圏への知的関心を満たし、4技能をさらに伸ばすことが教員・学生の双方から期待されていると考えたい。

回答を寄せた教員、とくに理系教員の共通認識は、(かつての「文法・訳読」から)「異文化コミュニケーション」の手段としての役割を初習外国語に期待している、ということであろう。だからこそ教員自身がネイティブ教員に学びたいと考え、また学生たちにも「言語の基本的知識」を前提にしながらも「基本的な社会的・文化的知識」や「旅行などで困らない程度の会話力」の習得を求めていると思われる。ちなみに中国語では専任教員担当のすべてのクラスで留学生をTAとして任用してチームティーチングを行っており、ネイティブ参加の授業形態が実現している。受講者の期待に応えるだけでなく、TA(大学院留学生)への経済的支援という観点からも大きな貢献となっている。今後本学の国際化がさらに進めば、他のいくつかの言語の教育においても同様の措置は十分可能であろう。

その一方で、学力の強化を望むがゆえに現状を批判する意見もある。「1. オンライン授業をなくし、従来通り文法中心の対面授業で教えてほしい。2. 一年次に初習の文法を最後まで教えてもらいたい。ドイツ語・フランス語では関係詞・接続法を教えなければ、会話にも読解にも役立たない。3. ネイティブ教師が教えるのはよいが、文法中心の授業をしてほしい」、「専門課程による外国語クラスと一般教育のクラスとを連携し、語学がよく出来る学生が3・4年になっても専門の中で学び続けられるように、一般教育の中でイニシエーションをしてほしいし、逆に専門分野の外国語を一般教育の中のクラスで触れさせるような協力を各学部の先生にさせることが望ましい」(いずれも問23での回答。)専門分野の外国語にふれさせる授業は、すでに初習外国語でも複数学部の教員によって実現しているが、毎年開講・提供している学部がある一方で、年度により変動のある学部もある。専門の授業を行いながらという条件ゆえ、種々の困難が予想されるが、できれば継続的な開講が望まれる。

専門課程の「講読」で用いるのであれば、文法事項を全学教育段階ですべて習得させてほしいと思われるのは理解できる。しかし現在の週2回2学期4単位制では、文法の完遂もまたきわめて困難といわざるをえない。そもそも「聞く・話す・読む・書く」の4技能をバランスよく習得させるのが健全な方法であり、「文法・訳読」に偏った学習はいびつな学力を形成させることになる。同じ理由で、「会話」を中心とするコミュニケーション能力を伸ばすことが目標であっても、文法に未修得の事項が残るのは避けられない。また本学に限らず日本の大学では、日本語を第一言語（母語）とする学生が圧倒的に多い。このような状況では「教授言語」として日本語を避けるべきではあるまい。細かなニュアンスを正確に伝えられるからである。しかしだからといって、けっして現状維持のままでよいわけではない。今回のアンケートで得られた多数のデータや数々の貴重な意見・提言を糧として、初習外国語教育のさらなる改善と充実に努める所存である。なお「CALL授業の効果を公開してほしい」という要望もあったが、毎年各言語教育系から実施状況と学生へのアンケート結果が提出され、高等教育推進機構学務委員会で成果が報告されていることを申し添える。

最後に、前回のアンケートの時点では実現していなかった短期語学留学制度が導入されたことを報告したい。夏季休暇や春季休暇等を利用して語学留学し、その成績を全学教育の演習単位に認定するものである。この制度は前回アンケートで強く望まれていたが、すでに実現しただけでなく助成制度も設けられ、さらに発展する見込みであるのは喜ばしいことである。今後さらに広報に努め、より多くの北大生が、大学入学後に学んだ外国語を通じて、世界のフロンティアを切り拓いていってくれることを期待したい。

第7章

1 年次学生アンケートによる初習外国語に関する意識調査(2013)

——分析と考察——

外国語教育センター外国語教育将来構想 WG 初習外国語部会
増田哲子・寺田龍男・清水賢一郎

0. はじめに

本報告は、2013年（平成25年）12月に、1年次の学生を対象として行った「初習外国語」¹に関するアンケートの結果と分析である。アンケートは英語に関する質問と合わせて構成され、実施された。調査期間、アンケート対象者数、回収率については本報告第3章「1年次学生アンケートによる英語学習に関する意識調査(2013)——分析と考察——」を参照されたい。2013年度第2学期開講のドイツ語Ⅱ、フランス語Ⅱ、ロシア語Ⅱ、スペイン語Ⅱ、中国語Ⅱ、韓国語Ⅱ、日本語の全クラスを対象として実施された。ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語においては、CALL授業の時間を利用して Glexa 上にてアンケートを実施した。CALL授業を展開していないスペイン語と韓国語に関しては、通常授業の際にアンケートへの協力を依頼するお知らせを配布し、各自で Glexa にログインして回答するよう促した²。CALL授業を実施している言語（独・仏・露中）としていない言語（西・韓）のあいだと、各学部のあいだに有効回答数に偏りが出たものの、すべての学部の学生から回答を得た。有効回答 960 のうち言語別に見た回答数は、以下の通りである。ドイツ語 276（全ドイツ語履修者 1037 名のうち約 27%）、フランス語 325（全フランス語履修者 407 名のうち約 80%）、ロシア語 56（全ロシア語履修者 152 名のうち約 37%）、中国語 229（全中国語履修者 587 名のうち約 39%）、スペイン語 63（全スペイン語履修者 250 名のうち 25%）、韓国語 24（全韓国語履修者 141 名のうち 17%）、日本語 3 名（合計 976）³。

以下、質問項目順に結果を分析し、考察を述べていく。分析・考察にあたっては、文系・理系の学部間で相違が見られたものについてはそのデータを挿入したが、基本的には「初習外国語」の言語別（独・仏・露・中・西・韓、日本語は除く）の分析を重視した。後者のほうが、差異が見られたからである。本アンケートと同時に行われた教員および高年次学生を対象としたアンケートの結果も、随時考察に取り込んでいく。また、2002年（平成14年）にも同様のアンケートを実施したので、その結果を本アンケートの結果に照らし合わせながら、適宜、比較・考察を行うこととする。

なお、分析結果のパーセンテージ表示は、原則として小数点以下は四捨五入、1%未満の数値が含まれる場合は小数点以下1桁まで表示した。

¹ アンケート内においては、「英語以外に必修科目として選択した外国語」という用語も用いたが、これらの外国語は北大生にとっては「初習外国語」であるため、本報告においてはこの「初習外国語」という語も併用することとする。

² スペイン語に関しては、一部の演習授業で CALL 教室を利用しているため、演習の授業時間の一部を割いて回答にあてた。

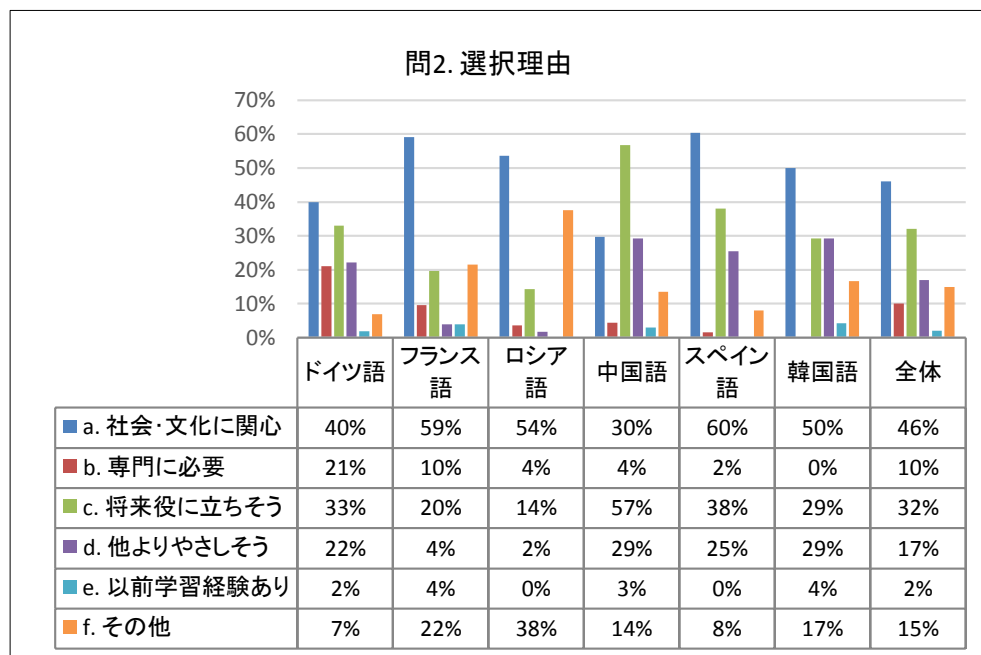
³ 回答者数は 960 名であるが、初習外国語を 2 つ選択している者のデータは両方の言語においてカウントした。たとえば、ドイツ語とフランス語の 2 言語を初習外国語として履修している者の回答は、ドイツ語とフランス語の両方のデータに反映した。アンケート回答者のうち、初習外国語を 2 つ選択している者は 13 名であった。

1. 分析と考察

1.1. 外国語科目の選択について

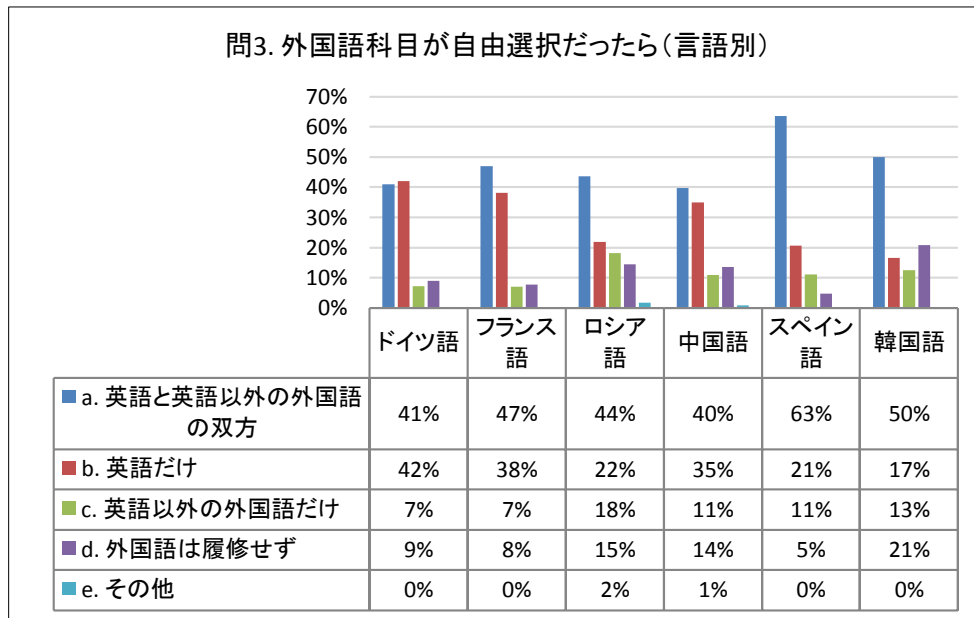
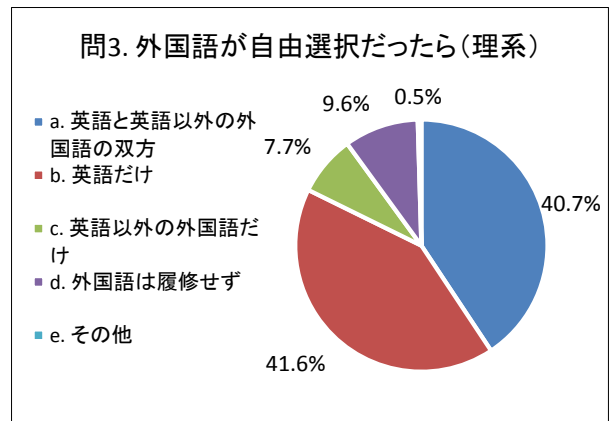
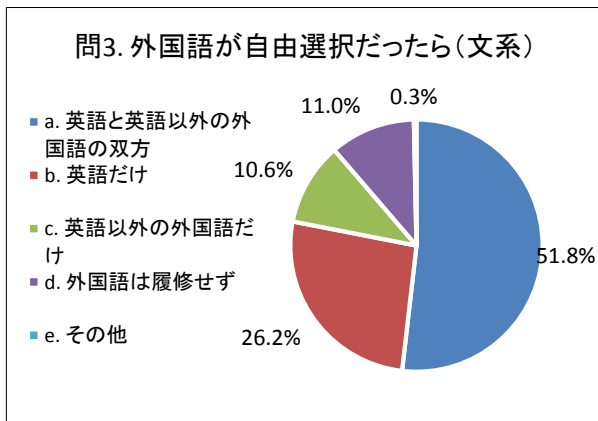
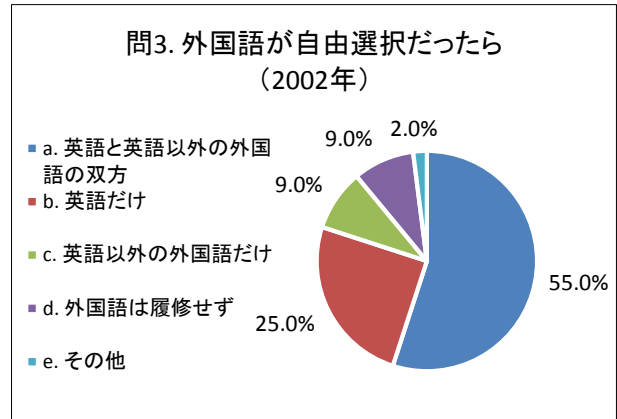
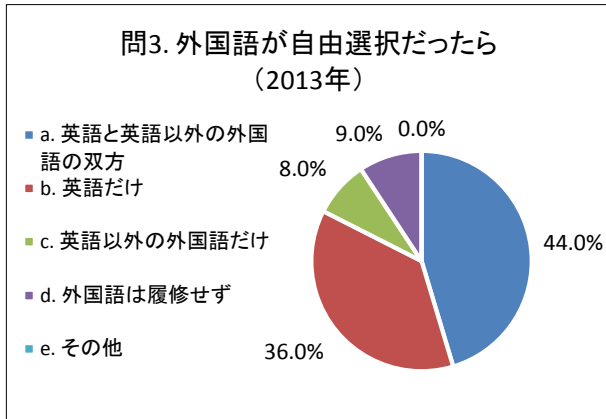
問 1 は、英語以外に必修科目として選択した外国語（「初習外国語」）を問うものなので省略する。

問 2 は、「問 1 の外国語を選択した理由は何ですか（複数回答可）」というものである。



全体では、「a. その外国語が話されている地域の社会や文化に関心があるから」がもっとも多く（46%）、次いで「c. 将来、役に立ちそうだから」（32%）、「d. 他の外国語よりもやさしそうだから」（17%）と続く。中国語以外を選択した学生では、「a. その外国語が話されている地域の社会や文化に関心があるから」がもっとも多く、その割合はとりわけフランス語とスペイン語の履修生において高い（59～60%）。ドイツ語履修生においては、「b. 自分の専門の勉強をするうえで必要になるから」という理由が相対的に高い（21%）が、このような特徴は 2002 年に実施したアンケートにおいても同様であった。これに対して、専門に結び付けて言語を選択する傾向は、スペイン語や韓国語の履修生では非常に低い。このような特徴は、問 5 の設問「どのような能力を身に付けたいか」に対する回答とも関連付けられる。また、中国語履修生では「c. 将来、役に立ちそうだから」がもっとも多い（57%）が、この傾向は前回（2002 年）のアンケートにおいても同様であった。その数値を見てみると、前回は 47%であったが今回は 10 ポイント以上増加している。この増加は、ここ 10 年間の日中関係や国際社会における中国の存在感の変化等を反映しているとも見ることもできるかもしれない。ロシア語とフランス語においては、「f. その他」を選択した履修生が多かったが（ロシア語 38%、フランス語 22%）、その具体的な内容の多くは「抽選に外れて第一希望の言語を履修できなかった」ためである。その他の言語（ドイツ語、スペイン語以外）においても、選択理由に抽選漏れを挙げる回答が非常に多かった。抽選制度についての意見は本アンケートの自由記述欄にも散見されたので、後に紹介する。

問 3 は、「仮に外国語科目が選択科目であったなら、あなたはどのような選択をしていたと思いますか。入学時の自分を想定して教えてください」というものである。

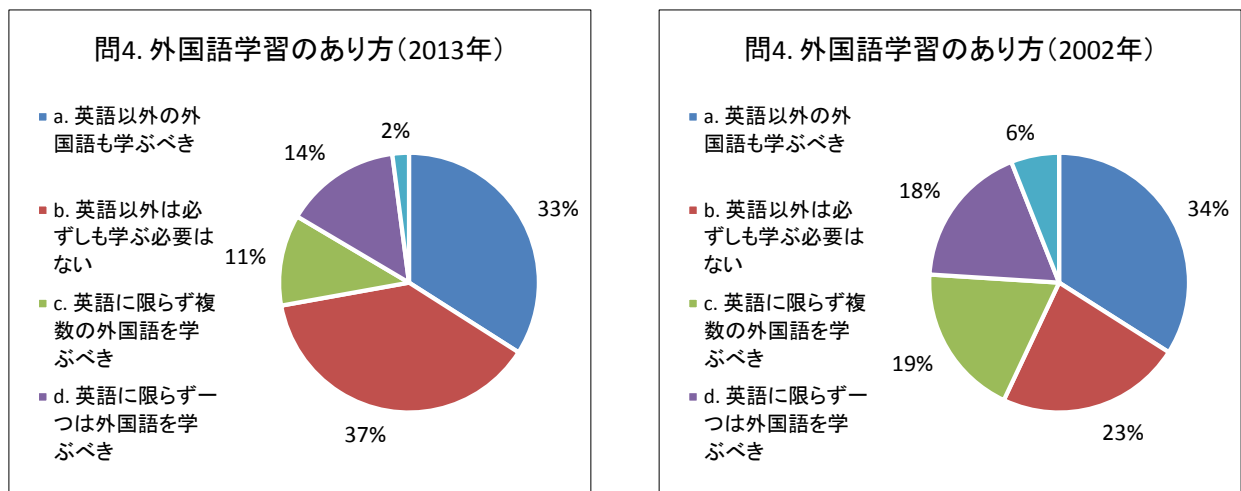


全体では、「a. 英語と英語以外の外国語の双方」が最多で(44%)、次いで「b. 英語だけ」(36%)、「d. 外国語は履修せず」(9%)、「c. 英語以外の外国語だけ」(8%)である。この結果から、英語かそれ以外の外国語を学ぶ必要性を感じている学生(選択肢 a, b, c を選んだ者)が、全体の約9割に上ることがわかる。また、「英語以外の外国語」も学ぶことを選択した者(a+c)は、52%に上る。このような学生の傾向に対して、教員たちの英語以外の外国語学習に対する意識は若干消極的である。質問の内容は多少異なるが、教員アンケートにおいて「現代の日本社会において、英語以外の外国語を学ぶ必要性をお認めですか」と問うたところ、全体として「必要」が38%、「不要」が14%、「どちらとも言えない」が32%、「無回答」が16%であつ

た⁴。学生の半数以上が英語以外の外国語に対しても学習意欲を見せているのに対して、その必要性を認めている教員は4割弱しかいないことになる。おそらく、教員側としては、初習外国語よりも英語やその他の専門科目に学習時間を割いてほしいという要望があるのかもしれないが、このような学生・教員間のギャップは、外国語学習に対する学生の意欲を削いでしまう恐れもあるのではないだろうか。

問3について加えて考慮すべきなのは、選択肢aの「英語と英語以外の外国語の双方」を選んだ学生数が、2002年と比較して10ポイント以上減少し、選択肢bの「英語だけ」が10ポイント以上増加したことである。この傾向は、今回のアンケート作成時にある程度予想していたものであるが、語学別に見てみるとその数値には若干の差が見られる。たとえば、ドイツ語履修生では「b. 英語だけ」を選択した者がもっとも多い(42%)⁵。これに対して、今回のアンケートより初習外国語に加わったスペイン語と韓国語では、「a. 英語と英語以外の外国語の双方」が他の選択肢より圧倒的に多い(スペイン語63%、韓国語50%)。この2言語の履修生は、初習外国語を自らの専門に結び付ける傾向は低いものの、その一方で、英語以外の外国語を学ぶ意義や必要性をより強く感じているようである。

問4は、「実際に外国語の授業を受けてみて、北大生の外国語学習はどうあるべきだと思いますか」というものである。

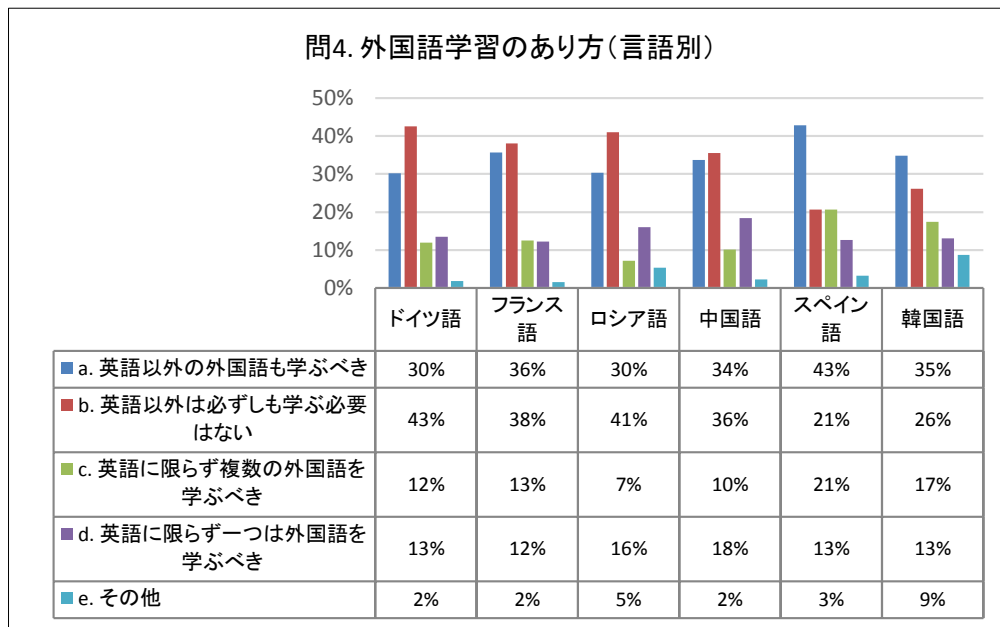


全体で見ると、「b. 英語以外の外国語は必ずしも学ぶ必要はない」が最多で(37%)、次いで「a. 英語を学ぶのは当然だが、英語だけでなく英語以外の外国語も学ぶべきである」(33%)、「c. 英語に限らず複数の外国語を学ぶことが重要である」(11%)、「d. 英語に限らず最低一つは外国語を学ぶべきである」(14%)となる。この結果を前回調査(2002年)と比較してみると、「a. 英語を学ぶのは当然だが、英語だけでなく英語以外の外国語も学ぶべきである」と「b. 英語以外の外国語は必ずしも学ぶ必要はない」が逆転している(2002年はaが34%、bが23%であった)。このことについては、問3と共に、グローバル化が進む近年の世界情勢に鑑みてある程度予想していたことではある。しかしながら、今回のアンケートにおいても、英語に限らず何らかの外国語を一つ以上学ぶべきだという意見(a+c+d, 58%)は全体の6割近くに上っており、初習外国語の必要性はなお高いことが伺える。外国語別に見てみると、問3と同様に、スペイン語と韓国語において、英語以外の外国語へのニーズ(a+c+d)は非常に高い(スペイン語77%、韓国語65%)。自由記述欄に目を向けると、英語・初習に限らず、外国語の学習は個人の裁量に任せるべきだという意見がある一方で、グローバル化が進む世界において、異文化理解のためには英語に限らず外国語を学ぶことは不可欠だ

⁴ 「第6章 教員アンケートによる初習外国語に関する意識調査(2013) —分析と考察—」を参照。

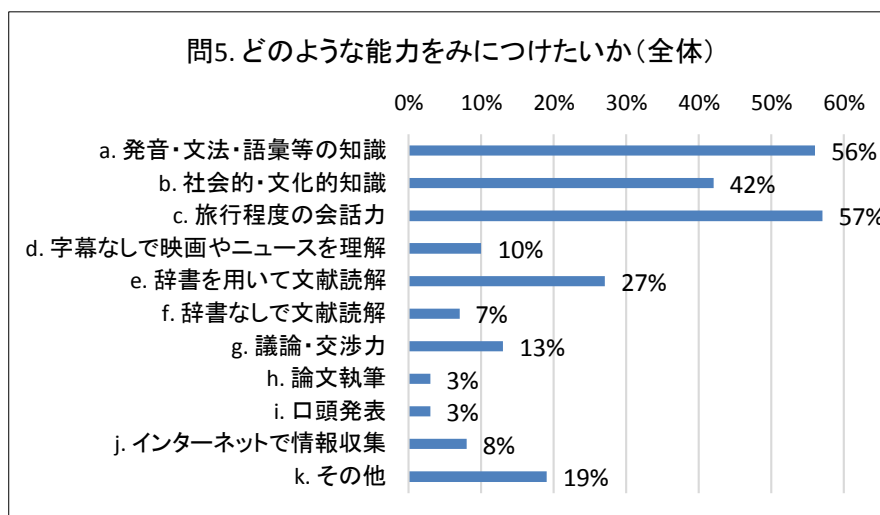
⁵ ドイツ語におけるこの傾向は平成14年度にも見られるが、今回のアンケートでは10ポイント以上増加している。

という意見が見受けられた。



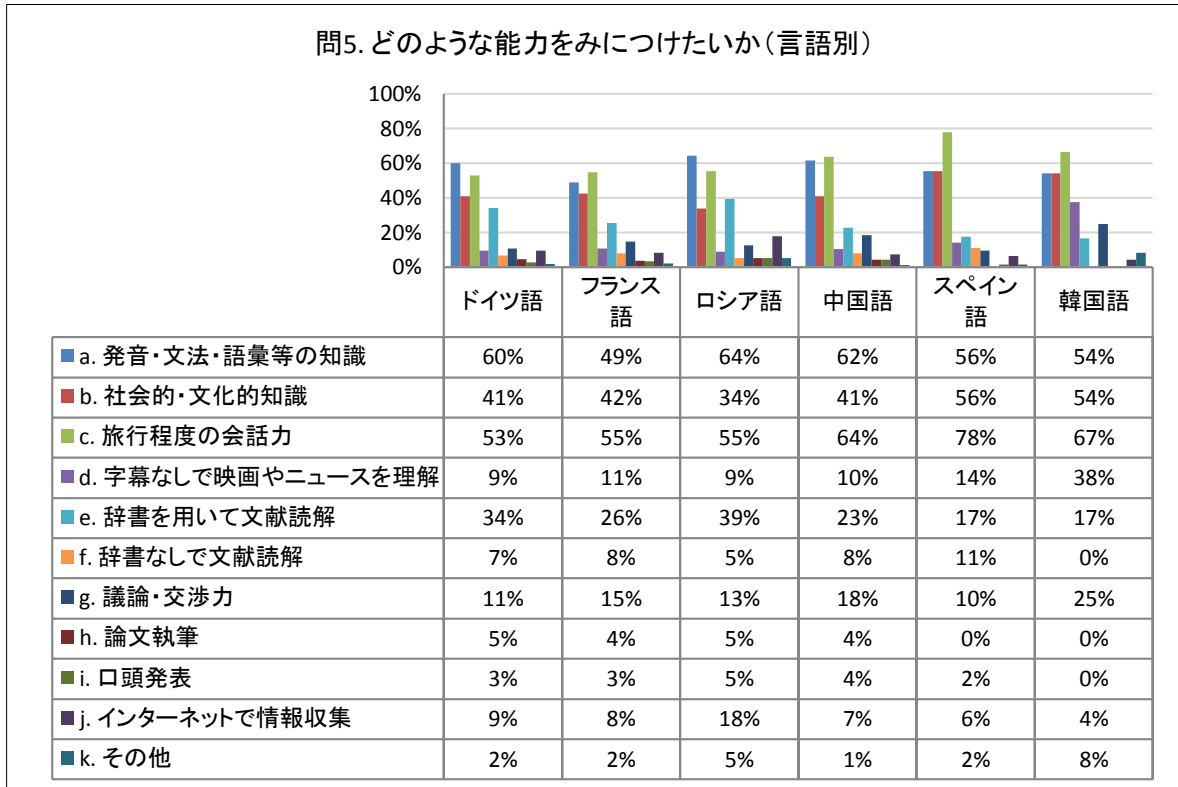
1.2. 身につけたい語学力について

問5は、「英語以外の外国語について、どのような能力を身につけたいと思いますか(複数回答可)」である。



全体では、「c. 海外旅行などで困らない程度の会話力」(57%)と「a. その言語の発音・文法・語彙などの基本的知識」(56%)がほぼ同程度に高い。それらに次いで、「b. その言語に関わる社会的・文化的な基本知識」(42%)が続く。選択肢cの「会話力」が上位にきていることから、外国語に関して実用的な能力を身につけたいという欲求が高いことがわかる。この会話力を伸ばすために不可欠な基礎として、選択肢aのニーズも高い。さらに、言語そのものの技能だけではなく、その言語を使用している文化や社会についての知識(b)も、実際に言語を使う場面においては必要不可欠である。これら上位3つの選択肢から判断すると、英語以外の外国語に関して、学生たちはより実用的なコミュニケーション能力の習得を望んでいることがわかる。自由記述欄の回答を見ても、その言語が話されている文化圏で生活することや、その言語の母語話者とのコミュニケーションを想定しているものが多い。一方、文献読解、論文執筆、学会発表といった学術的な能力(e, f, h, i)へのニーズは上位3つに比べると高くはない。このような学生の傾向は、教員アンケート

の結果にも類似している。教員アンケートの質問 13 において「英語以外の外国語について、どのような能力を担当学部の学生に身につけさせたいか（複数回答可）」を問うたところ、「辞書を使えば、文献を読みこなせる力」は 26%、「辞書なしで、文献を読みこなせる力」は 2%である。これに対して、学生アンケートにおいては前者が 27%、後者が 7%である。

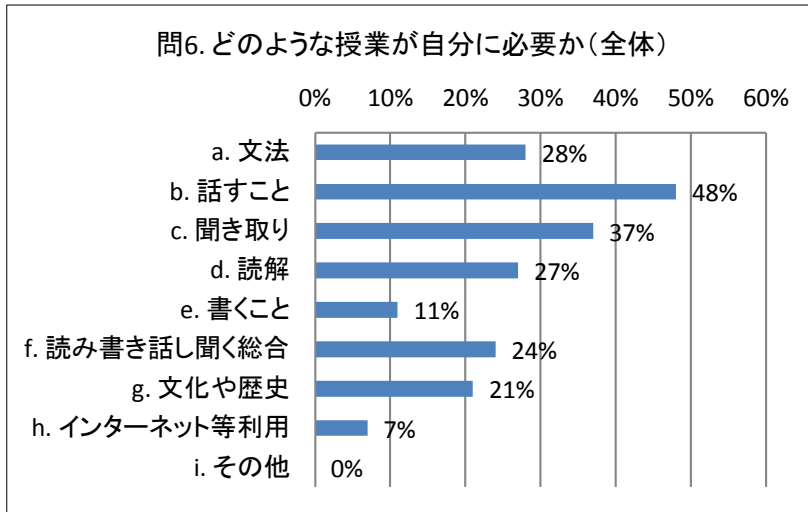


問 5 の身につけたい能力に関しては、外国語別に多少の差があることも考慮すべきだろう。たとえば、フランス語、中国語、スペイン語、韓国語においては、「c. 海外旅行などで困らない程度の会話力」を身につけたいと望む割合が他の能力よりも高い。スペイン語においては、選択肢 c の数値（78%）と他の選択肢との差が 20 ポイント以上開いており、実際にスペイン語を使うことを目標として学んでいる学生が多いようである。また、フランス語履修者は自由記述欄において、実際に「生活をする」ことに言及しているものも見受けられた。問 2 の外国語の選択理由においても、フランス語履修者においては「その外国語が話されている地域の社会や文化への関心」がもっとも高かったこととも関連する。また、韓国語においては、「d. 日本語字幕なしで映画やニュースを理解する力」へのニーズが他の外国語に比して高いことも興味深い⁶。このような仏・中・西・韓の「会話力」への要望に対して、ドイツ語履修者においては異なるニーズも見られる。すなわち、先に挙げた学術的な能力 (e+f+h+i) へのニーズが、ドイツ語履修者においては 49%と半数近い。これに対して、とくにスペイン語と韓国語では、学術的な能力 (e+f+h+i) へのニーズは相対的に低い（スペイン語 30%、韓国語 17%）。このことは、問 2 の初習外国語の選択理由においても、比較的多くのドイツ語履修生が「自分の専門の勉強をするうえで必要」と答えていたことと結びつく。この傾向は、2002 年のアンケートにおいても同様であり、学術や専門の研究におけるドイツ語へのニーズが引き続き存在することがわかる。全体の傾向だけを見たのでは、コミュニケーションと実用・応用のみに目を向けてしまう恐れがあるが、外国語別に見てみると、その傾向は言語によって幾分異なっており、ドイツ語においてのように、学

⁶ このことは、韓国において制作されたテレビドラマや映画といった、いわゆる「韓流」コンテンツが近年の日本においても人気を博していることを反映しているのかもしれない。

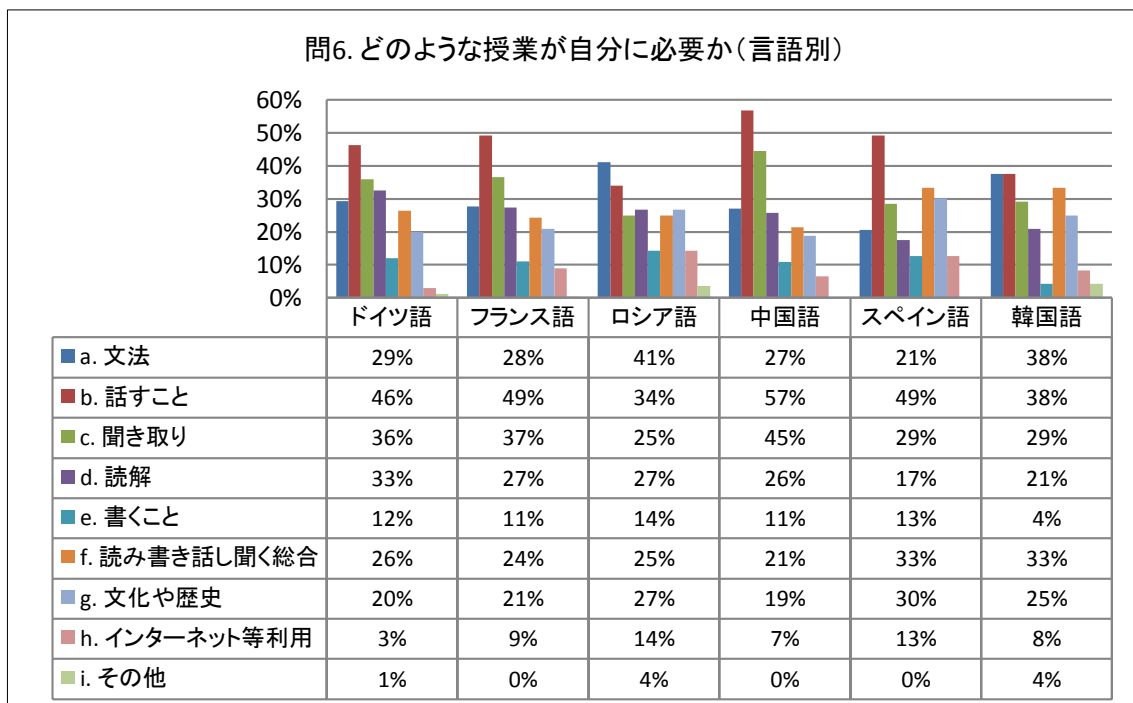
術的な能力に対するニーズも依然として高いことがわかる。

問6は、「問5で選んだ能力を身につけるために、現在履修している授業に付け加えたとしたら、どのような授業が自分に必要だと思いますか」という設問である。この設問は今回のアンケートから加えたもので、問5と合わせてどのような授業形態・内容を学生が求めているのかを明らかにするものである。



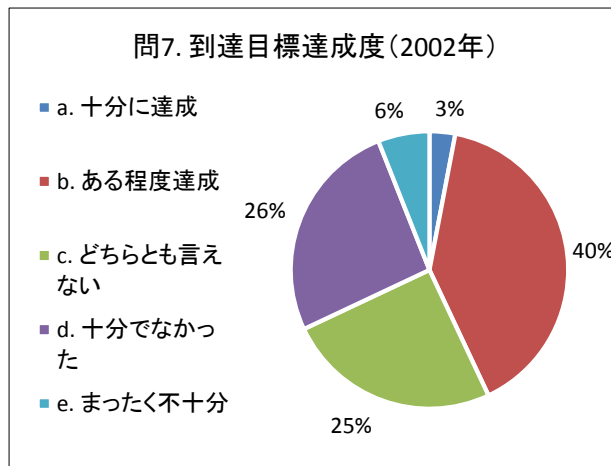
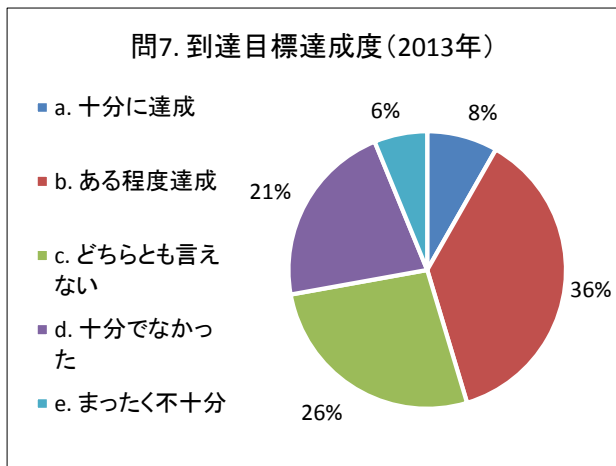
全体を見てみると「b. 話すことに重点を置いた授業」(48%)の必要性がもっとも高く、それに続いて「c. 聞き取りに重点を置いた授業」(37%)、「a. 文法を強化する授業」(28%)、「d. 読むこと(読解)に重点を置いた授業」(27%)、「f. 読み書き話し聞く総合的な授業」(24%)、「g. 言語そのものよりも、その言語が話されている国の文化や歴史、社会生活などを知ることができるような異文化理解に重点を置いた授業」(21%)となっている。「話すこと」への関心が高いたが、これは問5の「どのような能力を身につけたいか」への回答と相関する。

すなわち、学生たちは問5における「c. 海外旅行などで困らない程度の会話力」(57%)を身につけるために、「b. 話すことに重点を置いた授業」を求めているのである。このようなコミュニケーション能力を高めるために、聞き取りや読解など総合的な語学力を磨く授業も求めているが、その一方で、「e. 書くことに重点を置いた授業」への要望は低い(11%)。読む・書く授業(d, e)よりも話す・聞く授業(b, c)への要望が相対的に高く、外国語の学習成果を読み書きよりも口頭でのコミュニケーションに求めているようである。このような全体の傾向は、外国語別に見てもそれほど変わりはない。しかしながら、ロシア語においては「a. 文法を強化する授業」がもっとも高く(41%)、「b. 話すことに重点を置いた授業」への要望(34%)を上回っている。



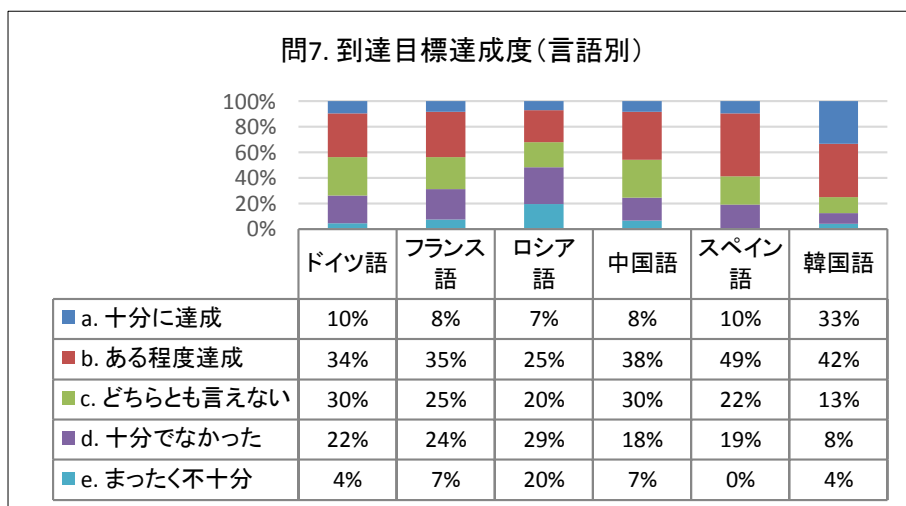
1.3. 「初習外国語」授業の達成度、学習時間、成績評価について

問7は、「あなたは英語以外の外国語（問1で選択した「初習外国語」）の授業で求められている到達目標をどの程度達成できましたか」という授業の達成度を問うものである。



全体では、「b. ある程度達成できた」が最多で（36%）、以下「c. どちらとも言えない」（26%）、「d. 十分でなかった」（21%）、「a. 十分に達成できた」（8%）、「e. まったく不十分だった」（6%）と続く。自分の達成度についてポジティブに評価している学生数（a+b, 44%）は、ネガティブに評価している学生数（d+e, 27%）を上回っている。だが、目標を到達できたと自覚できる学生が全体の4割しかいないという点と、「c. どちらとも言えない」と答えている学生数も少なくないという点を考慮すると、カリキュラムや授業方法について依然として改善の余地があるといえるだろう。

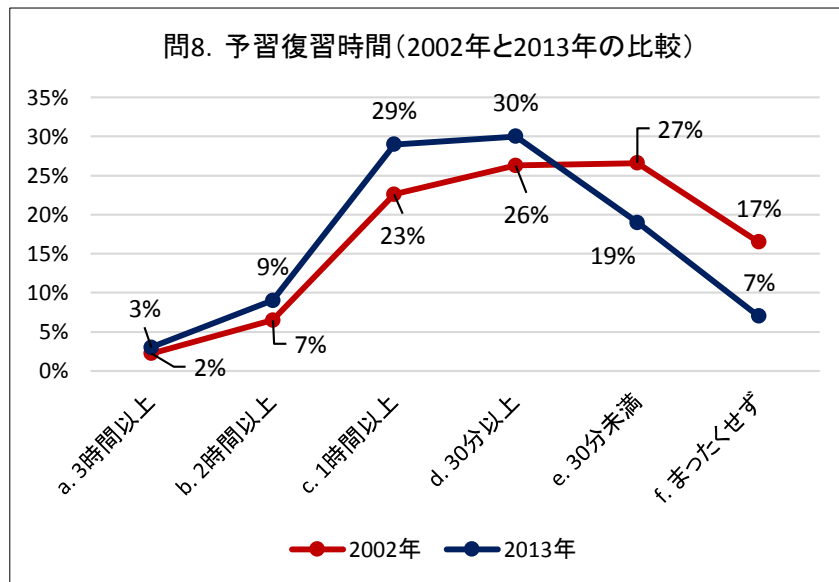
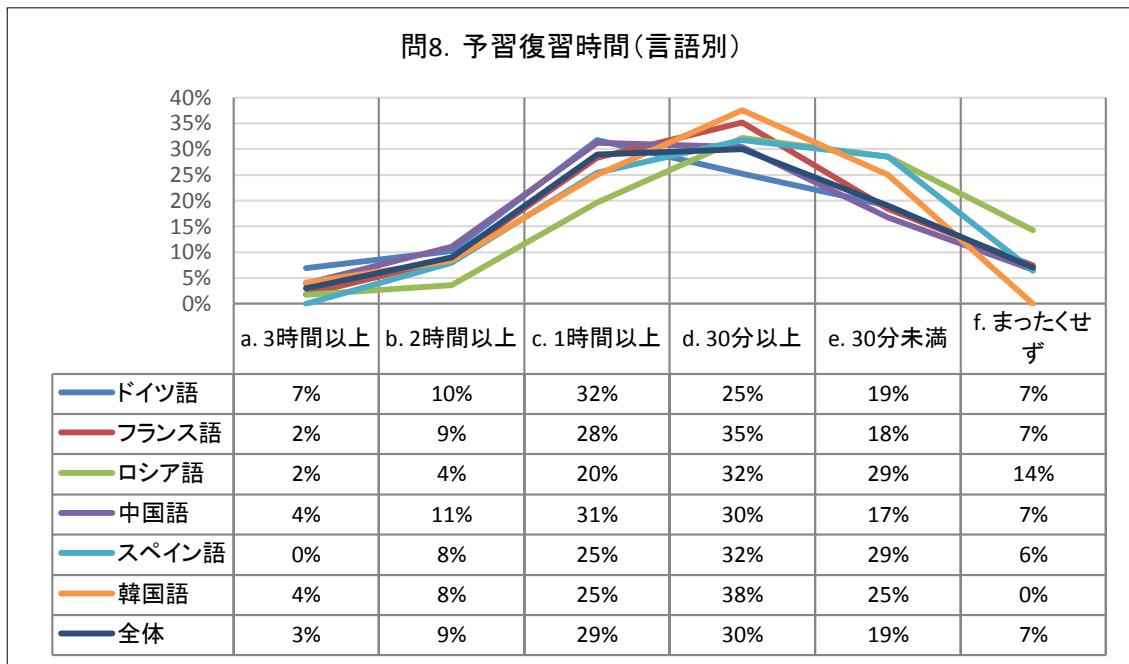
また、この問への回答は、言語によってかなりのばらつきがあることが明らかとなった。独・仏・中の3言語においては、全体の結果とほぼ同じような傾向が見られた。これに対して、スペイン語と韓国語では、自分の達成度についてポジティブに評価している学生数（a+b）の割合は、全



体の傾向を大きく上回っている（スペイン語 59%、韓国語 75%）。とくに、スペイン語においては「e. まったく不十分だった」が0%であること、韓国語においては「a. 十分に達成できた」が全体の3割以上（33%）を占めることは注目に値する。他方、ロシア語においては、達成度をポジティブに評価している学生数（a+b）の割合は全体の傾向に比べて少なく（32%）、ネガティブに評価している学生数（d+e）が半数近くに上る（49%）。ロシア語は、前回2002年に実施されたアンケート調査においては、達成度をポジティブに評価している学生数（a+b）は63%、ネガティブに評価している学生数（d+e）は13%（そのうち「e. まったく不

十分だった」は0%) だったことと比較すると大きな変容である⁷。

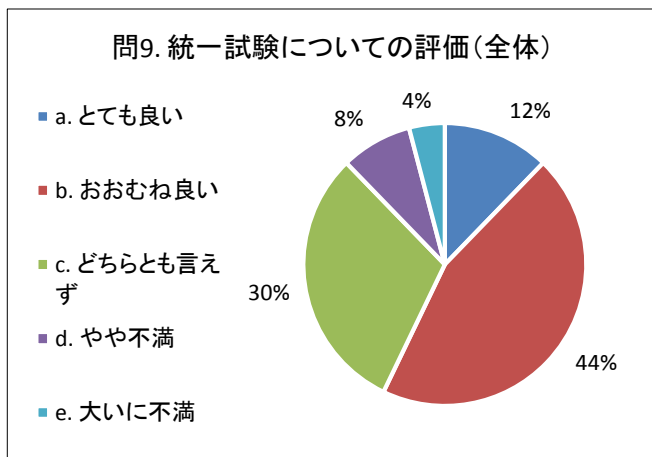
問 8 は、「あなたは英語以外の外国語の授業 1 回のために、予習や復習の時間を平均してどのくらいかけていますか」というものである。



全体の傾向としては、「c. 1時間以上」(29%)と「d. 30分以上」(30%)がもっとも多く、6割近くの学生が予習・復習に30分以上2時間未満をかけていることがわかる。一方、0~30分未満しか自宅学習にかけない学生も、全体の2割以上いる(e+f, 26%)。これらの学習時間を前回の調査と比較してみると、今回の調査において、「a. 3時間以上」「b. 2時間以上」「c. 1時間以上」「d. 30分以上」のいずれにおいてもポイントが上がっている一方で、「e. 30分未満」「f. まったくしていない」においては下がっている。前回調査においては、7割の学生が自宅学習に割く時間を1時間未満と回答している(d+e+f, 70%)のに対して、今回の

⁷ 伊藤章・佐藤俊一編『教官・学生アンケートにみる全学教育外国語に対する意識調査と北大生の英語力の変化』(国際広報メディア研究科・言語文化研究報告叢書 51号、北海道大学)(2002) p. 82。

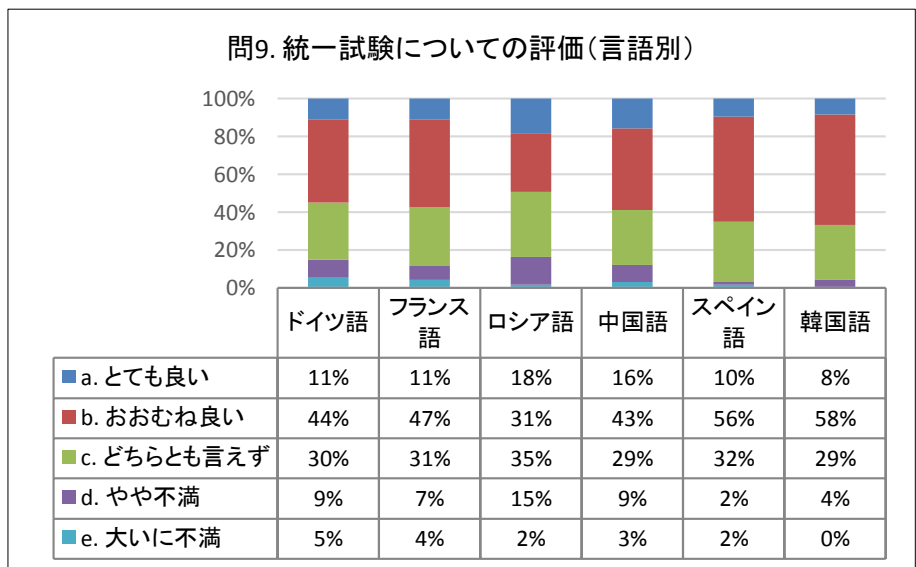
調査ではその割合は6割以下 (d+e+f, 56%) となっている。また、前回調査においては「e. 30分未満」がもっともポイントが高かったのに対して、今回の調査では「d. 30分以上」へとグラフの山がずれている。したがって、北大生の外国語にかかる自宅学習の時間は、2002年よりも若干ではあるが増えているといえよう。外国語別に見てみると、自宅学習が30分以上2時間未満 (c+d) の割合がもっとも高く、どの言語においても履修生の5割以上となっている。だが、より詳細にデータを分析してみると、自宅学習の時間は外国語によってばらつきがあることがわかる。ロシア語とスペイン語においては、自宅学習の時間が0~30分未満の割合が高い (e+f, ロシア語 43%、スペイン語 35%)。これに対して、ドイツ語と中国語においては、2時間以上と答えた割合が1.5割を超える (a+b, ドイツ語 17%、中国語 15%)。また、ドイツ語と中国語においては、学習時間が「c. 1時間以上」と答えた履修生の割合がもっとも高く、フランス語、ロシア語、スペイン語、韓国語においては「d. 30分以上」と答えた割合がもっとも高い。大まかな傾向として、ドイツ語履修生は他の履修生よりも自宅学習に割く時間が多く、ロシア語とスペイン語においては少ないようである。



問9は、「英語以外の外国語では成績評価の一環として統一試験が導入されています。あなたはこの試験方式をどう評価しますか」というものである。

この質問に対しては、「a. とても良い」と「b. おおむね良い」をあわせたポジティブな評価が、全体の半数以上にのぼった (a+b, 56%)。ネガティブな評価 (c+d) は12%であることもあわせて、統一試験に対して一定の評価は得られているとおもわれる。

言語別に見てみると、どの言語においてもポジティブな評価 (a+b) が約5割かそれ以上となっているが、ネガティブな評価 (d+e) については言語によってばらつきが見られた。選択肢dとeを合わせた数値が、スペイン語と韓国語では5%以下であるのに対して、ロシア語では17%となっている。この傾向を、問7の「到達目標達成度」と合わせて考察してみると、自らの達成度をネガティブに評価している履修生の割合が半数近くに上る (問7, d+e, 49%) ロシア語では、統一試験に対する評価が低い。その一方で、自らの達成度をポジティブに評価するスペイン語と韓国語 (問7, a+b, スペイン語 59%および韓国語 75%) では、統一試験に対して不満を持つ割合も少ない。なお、統一試験については、教員のあいだでの認知度が極めて低い (教員アンケート質問11から見ると全体の5%)。この点については、2002年アンケートにおいても指摘

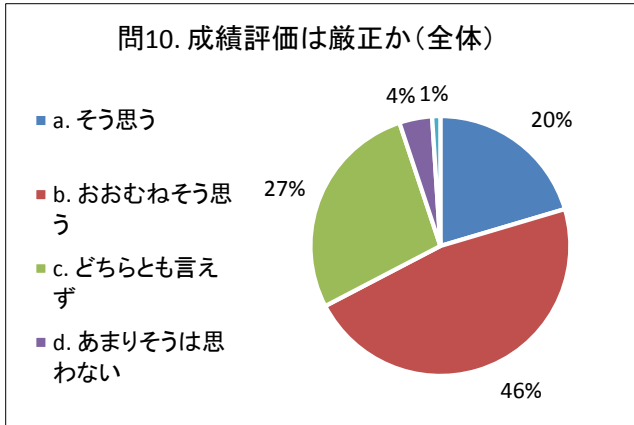


この点については、2002年アンケートにおいても指摘

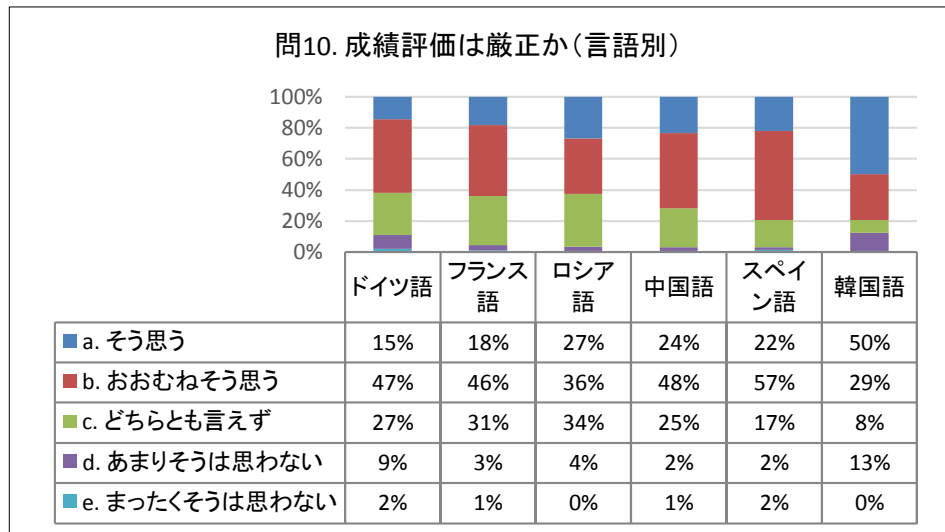
されていたはずである⁸。2002年アンケートでは認知度は8.2%で、広報の必要性が主張されていたにもかかわらず、今回のアンケートにおいてさらにポイントが下がってしまったことは非常に残念な結果である。

問10は、「あなたは英語以外の外国語の成績評価が厳正に行われていると思いますか」である。

全体では「a. そう思う」が20%、「b. おおむねそう思う」が46%であり、6割以上の学生が現在の成績評価に納得をしているようである。「d. あまりそうは思わない」と「e. まったくそうは思わない」は合わせて5%である。問10の成績評価の厳正さに対しては、問9の統一試験に対する評価よりも若干ポジティブな傾向が見られる。外国語別に見ても、すべての言語でポジティブな評価(a+b)が6割を超えている。また、前回アンケートにおいては選択肢dとeによるネガティブな評価が16%だったことと比較しても、成績評価の厳正化についての私たちの取り組みが結実してきているといえるのではないだろう



か。しかしながら、この点については、現状のままでよとしているわけではない。問10では、選択肢dとeを選んだ回答者にその判断理由や意見を求めたが、それらの記述を見ると成績評価については未だ検討すべき事項が含まれていることが認められるからである⁹。成績評価の厳正化に関

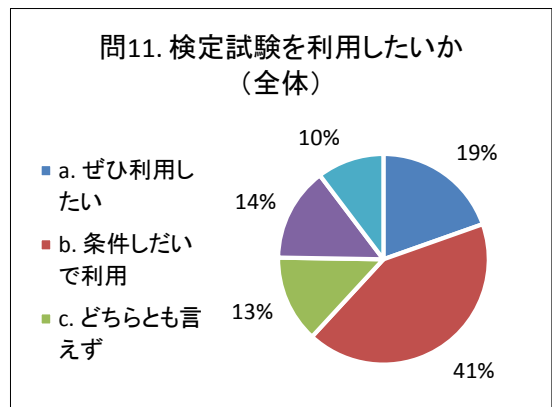


しては、問9の統一試験に対する評価とともに更なる努力をしていく必要がある。

1.4. 各種検定試験の利用と海外語学短期研修について

問11は「英語以外の外国語についても各種の検定試験が実施されています。もしこれらの検定試験の成績が単位として認定されるとしたら、あなたはそれを利用したいと思いますか」というものである。

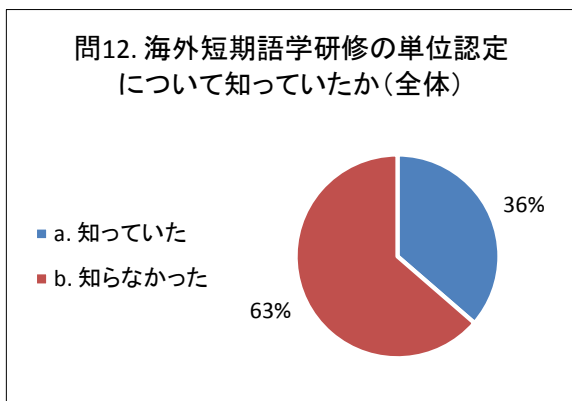
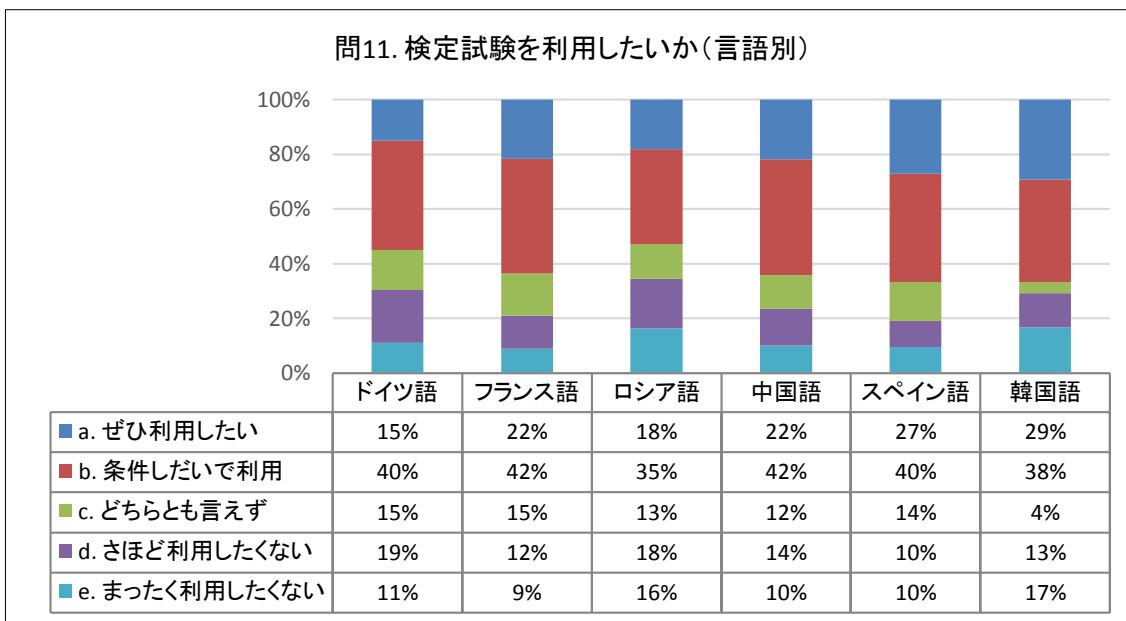
全体として、「a. ぜひ利用したい」「b. 条件しだいで利用



⁸ 伊藤章・佐藤俊一編『教官・学生アンケートにみる全学教育外国語に対する意識調査と北大生の英語力の変化』(国際広報メディア研究科・言語文化研究報告叢書51号、北海道大学)(2002)p.84。

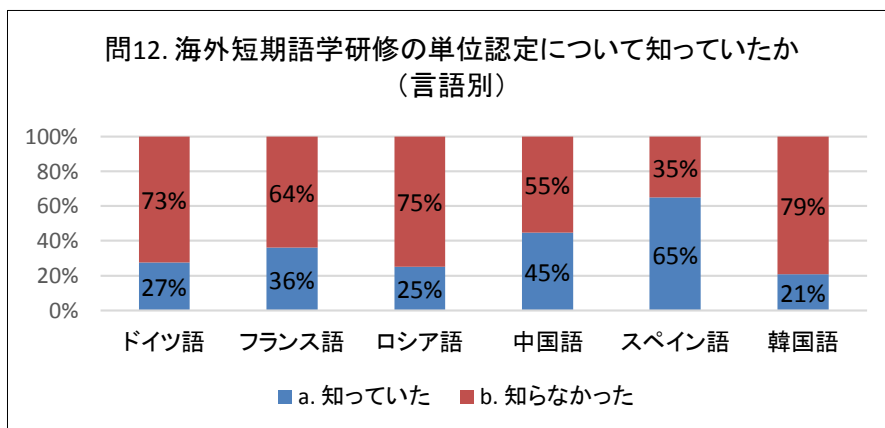
⁹ 「成績評価が厳正に行われているとは思えない」と答えた回答者(選択肢dとeを選んだ者)から寄せられた理由をまとめると、「教員によって授業の評価基準や(統一試験以外に課す)試験や授業の難易度が異なる」「語学によって難易度が異なる」等の意見が挙げられた。

用したい」を合わせて、6割以上の学生が検定試験の利用を前向きにとらえていることがわかる。なお、検定試験については、教員アンケートでもその利用の是非について問うている。検定試験の利用に賛成している教員は25%であることと比較すると、学生のほうが語学試験への態度は積極的だといえよう。



問12と問13は、海外語学研修制度に関するものである。前回アンケートにおいては、語学研修の単位認定に対する要望が高く(70%)、アンケート後に制度化がなされた¹⁰。だが、問12において制度の認知度(「外国の大学等で行われている語学研修に参加した場合、その成績が演習の単位として認定されることを知っていましたか」)を問うてみると、全体の6割以上が単位認定について「b. 知らなかった」と答えている。せっかく制度を整えたのだから、私たち教員側もより広報に力を注ぎ、認知度を高めるべきであろう。

言語別に見ると、認知度がもっとも高いのはスペイン語で、65%の履修生が単位化について「a. 知っていた」と答えている。これに関しては、今年度(2013年度)よりスペイン語の短期語学研修先が新たに1つ増えたため、国際本部が説明会を行ったことも影響しているだろう。他方、韓国語履修生で「a. 知っていた」と答えたのは21%であった。



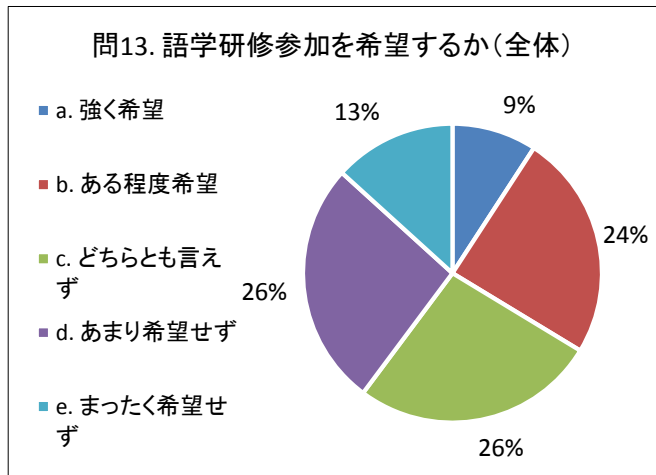
¹⁰ 伊藤章・佐藤俊一編『教官・学生アンケートにみる全学教育外国語に対する意識調査と北大生の英語力の変化』(国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書51号、北海道大学)(2002)p.85。

問13は、問12に関連して「外国の大学等で行われている語学研修に参加することを希望しますか」というものである。

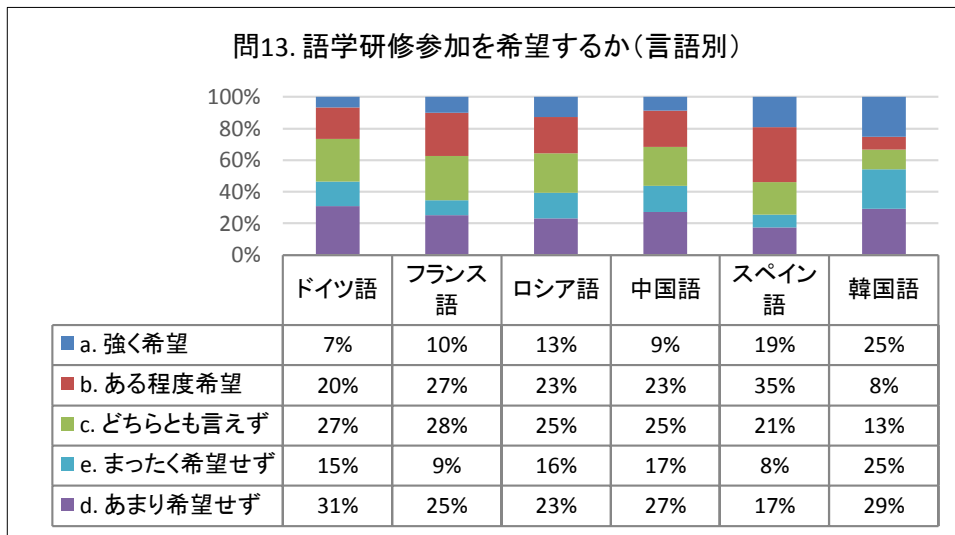
全体を見ると、「a. 強く希望する」「b. ある程度希望する」と答えた学生の割合は33%で、「d. あまり希望しない」「e. まったく希望しない」と答えた学生(39%)のほうが多い。この点は、問5の「英語以外の外国語について、どのような能力を身につけたいか」という質問への解答と矛盾するように見える。問5において見たように、学生たちは語学の授業において「c. 海外旅行などで困らない程度の会話力」(57%)や「b. その言語に

関わる社会的・文化的な基本知識」(42%)を身につけたいと答えており、自由記述欄においても、その言語の文化圏で生活することや母語話者とのコミュニケーションを望む声が多数あった。それにも関わらず、問13から判断すると、海外で行われる研修に実際に参加することに対しては消極的なようである。

外国語別に見てみると、海外語学研修にもっとも積極的なのはスペイン語で(a+b, 54%)、フランス語、ロシア語、韓国語、中国語がそれに続く(それぞれ37%、36%、33%、32%)。スペイン語履修生の海外語学研修への積極性は、問5の語学の選択理由で選択肢cの会話力をもっとも高かったことと相関するもので

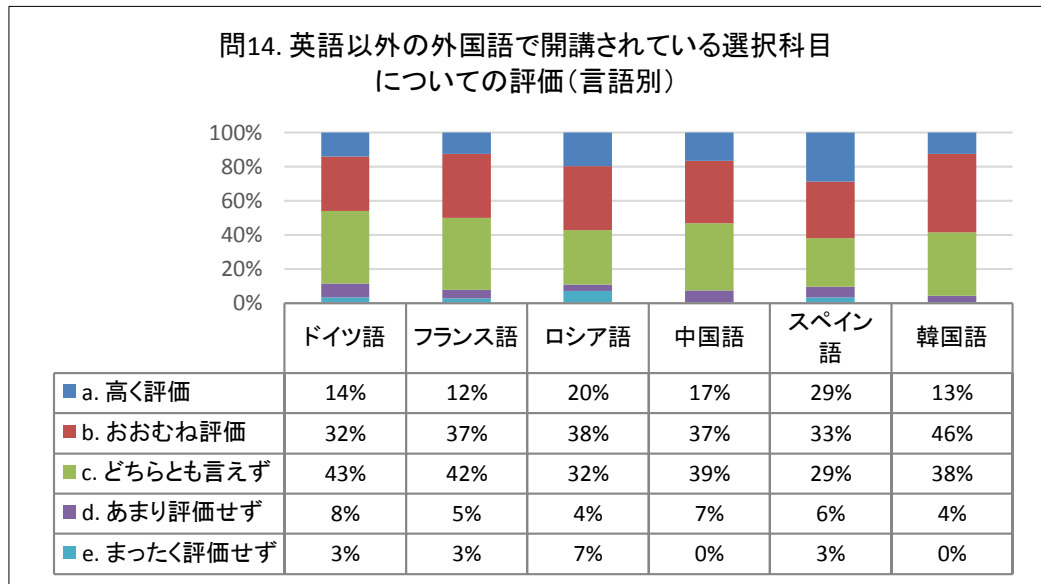
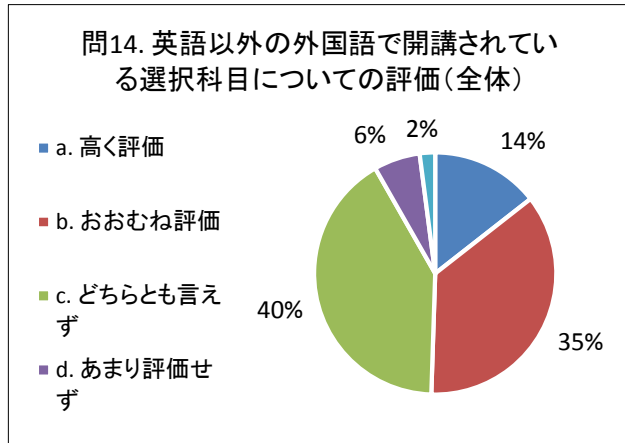


であろう。また、先に述べたように今年度から新たな研修先が加わり、説明会等を行ったことも理由に挙げられる。一方、ドイツ語履修生による海外語学研修への興味はもっとも低く27%だった。だが、問5で見たように、ドイツ語履修生は自分の専門に結び付けて語学を選択する傾向が高いこ



とや、論文読解能力等の学術的な能力への要望も根強いことを考慮すると、特別に消極的な姿勢とは言えないだろう。

問14は、「英語以外の外国語で開講されている選択科目(「初習外国語の演習」や「外国語特別演習(イタリア語、ラテン語、フィンランド語、広東語等のいわゆる第3外国語)」)のカリキュラムについてどのように考えますか」というものである。全体の約半数(a+b, 49%)がポジティブに評価をしている一方、ネガティブな評価(d+e)は8%と少ない。「c. どちらとも言えない」と答えた回答者の割合は40%に上るが、これは抽選漏れによって「初習外国語の演習」を受講できなかったり、その他の言語の「外国語特別演習(第3外国語)」を受講した経験がないためであろう。その一方で、「外国語特別演習(第3外国語)」を履修している学生からは、第2外国語には含まれていない言語を学ぶことによって「異文化理解の促進につながる」「選択の幅が広がる」といった積極的かつ貴重な意見が出ていることを付け加えておく。



2. むすびに

アンケートから見られる「初習外国語」カリキュラムに対する学生の傾向と要望について、まとめとして以下の2点から考えてみたい。

第一に、学生たちは、外国語習得の成果として会話やコミュニケーション能力の獲得を求めていることがわかった。たとえば、問5と問6の「どのような能力を身につけたいか」、そのために「どのような授業を必要とするか」においては、実践的なコミュニケーション能力を求める声が強かった。さらに、自由記述欄においても、ネイティブ教員と学ぶ機会の増加やネイティブTAの配置に対する要望も含めて、「話す」授業を求める意見が散見された。このような要望に対して教員側もさまざまな工夫をしているが、慢性的に人材が不足している現状においては、学生の声すべてに応えることは困難だろう。また、学生の要望に応えるための一つの手段として、海外短期語学研修の単位化が整備されたはずである。だが、今回のアンケートに見られたように、学生の認知度は依然として高いものではなかった。前回アンケートでの要望を受け、助成制度と共に導入されたこの演習については、より認知度を高めるために私たち教員はさらに努力すべきだろう。

第二に、言語の選択や「演習」の履修における抽選制度に関する不満が挙げられる。先に述べたように、問2の言語選択の理由について「第一希望言語の抽選漏れ」を挙げる学生も少なくなかった。また、自由記述においても、取りたい内容あるいはレベルの「演習」の授業が抽選により取れなかったことや、それを防ぐために「演習」の開講コマ数の増加を望む声が多数寄せられた。この点についても、現時点での外国語教育センターの人員配置では、学生の要望をすべて満たすことは困難である。

だが、現状では難しいことを理由にこれらの不満を看過する訳ではない。私たちが意識しなければならないのは、学生たちの不満の背後には、外国語を「学びたい」という欲求が確かに存在しているという点である。なかには、希望の「演習」を取れないことを単位や成績評価にのみ結び付けて不平を述べる学生もいるが、その一方で、ある言語について真剣に関心や学習意欲を抱いたにも関わらず、抽選に外れてしまったために機会を逸してしまうというケースもあるだろう。たとえば、自由記述欄において、GPA制度の観点からクラスや選択語学による成績評価の「不平等」を挙げる記述が散見されたが、その一方で、「多くの学生が単位や成績ばかり念頭において履修しているので、もっと異文化に興味を持つきっかけになるような機会を授業中にほしい」といった意見や、外国語の学習を1年で終えるのではなく「授業が終わってから自主的に学び続けることができる」体制作りを望む声、「教師一人一人の個性あふれる授業」への要望等も寄せられた。教員として、こうした学生の意見は非常に喜ばしいものであるし、学生の意欲を見逃さずに、育てていけるような方策を考えたいとおもう。

北海道大学が基本理念として掲げる「国際性の涵養」を達成するためには、外国語学習は必須である。この点について、外国語習得に対する北大生の意識は決して低くはない。本アンケート問3において見たように、4割以上の学生が、外国語が自由選択であっても「英語と英語以外の外国語の双方を選択する」と答えていたことからそれが分かる。他方、これまでみたような学生による要望や不満が明らかにするのは、GPAの数値に還元される成績の評点のみが外国語を学ぶことの成果ではないということ、彼ら自身が理解しているという点である。そして、このような外国語や異文化に対する興味・関心こそ、私たちが目指す「国際性の涵養」のための原動力となるものであろう。現在、外国語教育センターが提供する「初習外国語」カリキュラムも、北海道大学のみならず多くの大学が抱えるさまざまな現実的課題に縛られたなかで運営されている。だが、そうした状況においても、私たちは外国語学習の理想と到達点を見失うべきではない。今回の学生アンケートのなかには、そのことを再確認させてくれる意見もあったのは頼もしい限りである。

第8章

高年次学生アンケートによる初習外国語に関する意識調査(2013)

——分析と考察——

外国語教育センター外国語教育将来構想 WG 初習外国語部会
清水賢一郎・増田哲子・寺田龍男

0. はじめに

本報告は、英語以外の外国語、すなわち北大におけるいわゆる「初習外国語」に関して、学部2年次以上から大学院生（修士課程、博士課程ともに含む）までの高年次学生を対象に実施した意識調査の結果とその分析である（アンケート内においては、「英語以外の外国語」という用語を用いたが、それらの外国語は北大生にとっては「初習外国語」であるため、本報告においては「初習外国語」という語も併せて用いる）。

北大の初習外国語教育に関する意識調査としては2002年（平成14年）に実施したものが¹、その後11年を経て、現行の初習外国語カリキュラムを評価するため、教員と学生にアンケート調査を実施することとなった。その際、調査分析をより多面的で有意義なものへと強化すべく、今回あらたに学部2年から大学院博士3年までの高年次学生を調査対象に加えた。全学教育のいわゆる「必修」部分の修了後、学部専門課程や大学院に進学した学生が英語以外の外国語学習をどう評価し、どのような問題意識を抱いているか、学生側の視点から検討することがその目的であり、本稿はその調査結果を報告し、分析考察を行うものである。

アンケートの実施方法は、本報告書第4章の英語に関する分析の冒頭（0.はじめに）に紹介されており、英語に関するアンケートと一体のかたちで実施した。2014年（平成26年）1月22日～2月10日まで、12学部、19大学院研究科・学院等（以下「学部等」という）の事務部を通じてアンケートへの協力を呼びかけ、オンラインで回答してもらったもので、有効回答693を得た（その内訳は第4章の表1参照）。これは今回教員や学部1年生を対象に実施したアンケートと比べると回収率は高くないものの、ほぼすべての学部等の学生から回答を得られており、回答者の内訳も北大の年次・文理別の学生比率にほぼ対応していることから、北大の高年次学生の意識を比較的忠実に反映するものと判断される。これまで類似の調査が見あたらない中、参考に値する貴重なデータであると言えるだろう。

以下、質問項目順に結果を分析し、考察を述べていく。その際、文系と理系との間での比較分析、及び学年グループ別（学部2～4年次vs. 大学院生〔但し一部の医系学部は6年制のため学部5～6年次生も含む²〕）の比較分析も行った。その結果、質問項目によっては有意義な違いが見られたため適宜言及する。加えて、教員対象、及び学部1年次の学生を対象として行った初習外国語に関するアンケート（第6章、第7章参照）との比較分析、さらに（初習外国語とともに）英語に関して同一の集団（高年次学生）を対象に実施したアンケート（第4章参照）と比較対照して検討することも有益と思われたので、適宜それらの分析結果も踏ま

¹ 伊藤章・佐藤俊一編『教官・学生アンケートにみる全学教育外国語に対する意識調査と北大生の英語力の変化』（国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書51、北海道大学言語文化部、2002）の第4章（教員アンケート）及び第5章（学生アンケート）を参照。

² 医学部・歯学部・薬学部・獣医学部の4学部が6年制をとっている。本アンケートにおいては、これら5～6年次生は「5年次以上」として大学院生と同列に取り扱うこととする。

えて論じることとする。(右図参照)

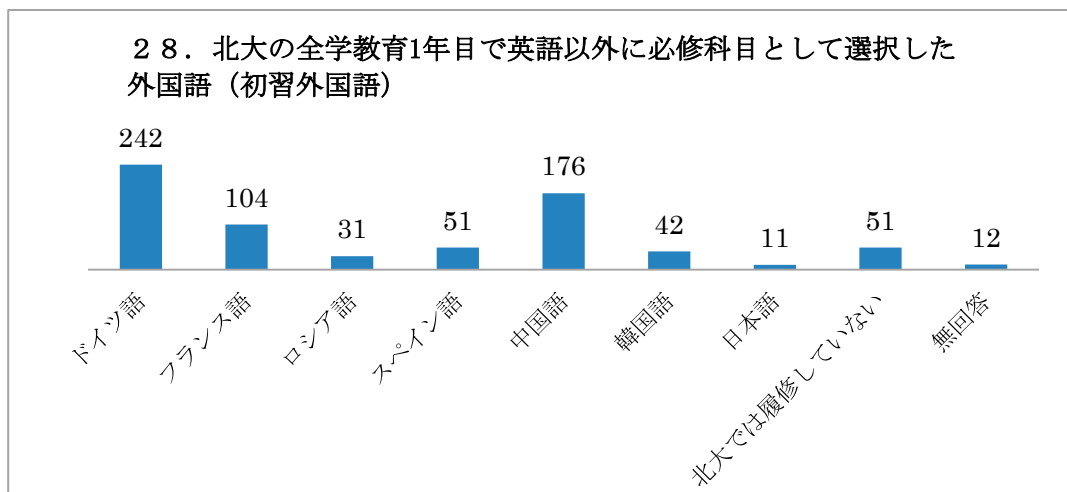
なお、分析結果の比率(パーセンテージ)の表示はすべて小数点以下を四捨五入した。また、以下の記述では読みやすさに配慮し、選択肢に a, b, c … の記号を付したことがある。

		アンケート対象		
		教員	学 生	
			学部 1 年次生	高年次学生 (学部 2~4 年次+大学院生)
質 問 内 容	英語に関して	第 2 章	第 3 章	第 4 章
	英語以外 (初習外国語)	第 6 章	第 7 章	第 8 章 (本報告)

1. 分析と考察

1.1. 履修選択について

問 28³⁾は、北大の全学教育 1 年目で英語以外に必修科目として選択した外国語(初習外国語)を問うものなので、分析は省略する⁴⁾。



問 29 は、「問 28 の外国語を選択した理由は何ですか(複数回答可)」というものである。全体としては「a. その外国語が話されている地域の社会や文化に関心があるから」が最も多く(43%)、次いで「c. 将来、役に立ちそうだから」(30%)、「d. 他の外国語よりやさしそうだから」(22%)、「f. その他」(11%)、「b. 自分の専門の勉強をするうえで必要になるから」(8%)、「e. 以前、学習した経験があるから」(4%)と続く。

これを履修した外国語別に細かく見てみると、「a. その地域の社会や文化に関心があるから」の割合はドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、韓国語では半数以上(スペイン語では約 3 分の 2)を占めているのに対し、中国語だけは 26% (ほぼ 4 人に 1 人)に留まる。反対に、中国語において突出して多いのは「c. 将来、役に立ちそう」という理由だ(63%)。前回 2002 年度に実施した学生対象アンケート調査⁵⁾でも中

³⁾ 英語に関する質問に続けて実施したため、質問番号が問 28 から始まる。諒とされたい。

⁴⁾ 1 点補足すると、北大では文系の 4 学部において特に希望する場合「2 つ目の初習外国語」の履修が可能となっているが、そのように複数の外国語を回答した者は 25 名であった。但し、内訳を確認すると、3 つ答えている者や日本語を含めている者がおり、主旨を誤解したと推察されるケースも見られた。本来は「必修科目として選択した」外国語だけを回答すべきところであるが、恐らく選択科目の「外国語特別演習」(いわゆる第 3 外国語)も含めて回答したのではないと思われる。しかしながら、以下の分析においては、そうしたケースも区別せず考察対象に含めることにした。また、アンケートでは選択肢に「日本語」も加えたが、選択者は基本的に留学生であり回答数もわずか 11 名であったため、以下の分析では割愛する。日本語教育に関しては国際本部(留学生センター)を中心に別途調査を行うべきであろう。

⁵⁾ 佐藤俊一・竹中のぞみ・宇佐見森吉・清水賢一郎「学生アンケートによる初習外国語に関する意識調査—分析と考察—」(伊藤章・佐藤俊一編『教官・学生アンケートにみる全学教育外国語に対する意識調査と北大生の英語力の変化』国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書 51、pp.79-93、北海道大学言語文化部、2002)。

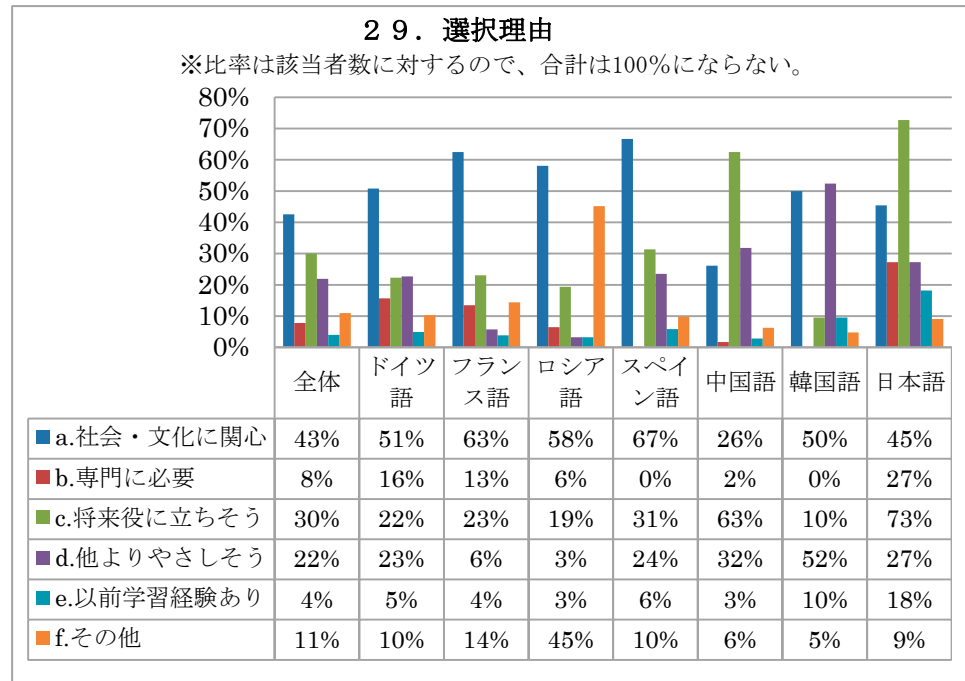
国語選択理由で「将来役に立ちそう」は最多だったが(47%)、この10年余りの間に約15ポイントも増加している。ここからは政治経済を中心とした東アジア情勢の重要度・注目度の高まりがうかがえると同時に、中国語圏の文化・社会生活への関心や共感はずしも高まっていないことが見て取れるだろう。

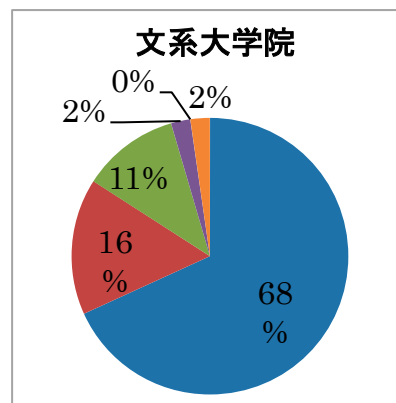
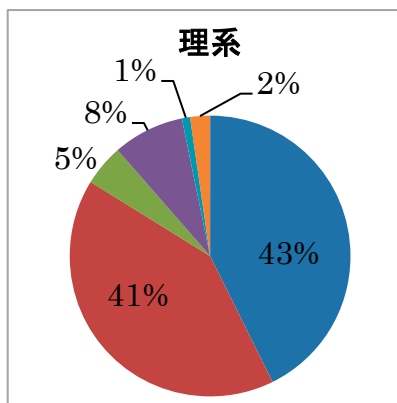
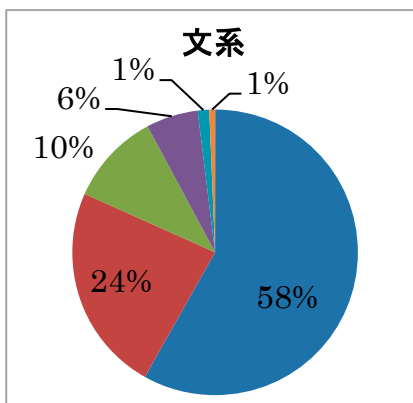
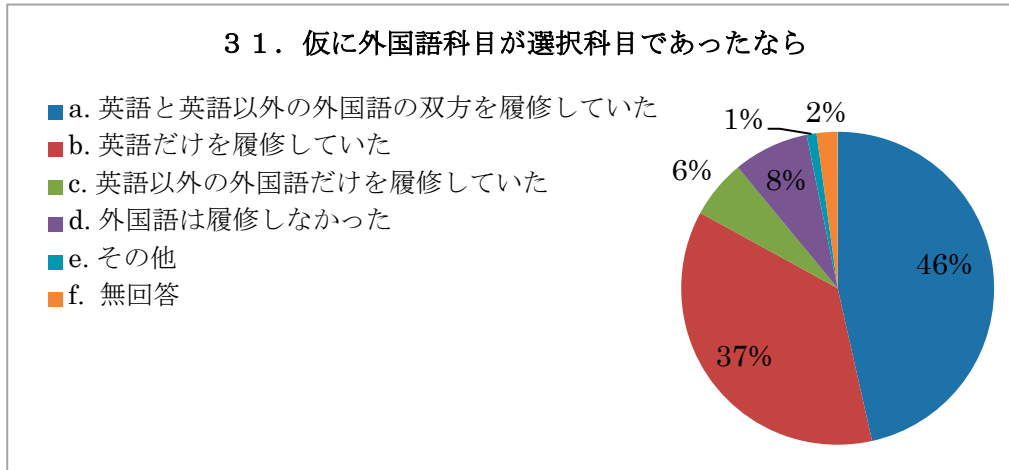
「専門の勉強に必要」という意見はドイツ語とフランス語の履修生で相対的に多い(それぞれ16%、13%)。教員対象アンケート(問14~15)によれば、専門の授業でドイツ語やフランス語を(基本的に文献講読で)使う教員は、特に文系部局を中心に他の言語に比べてやや多いことがわかり(とはいえ全体の10%以下に過ぎないが)、教員の要望や専門教育での使用状況を反映したものと言えよう。

反対に、スペイン語と韓国語では「専門の勉強に必要」という回答はなく、スペイン語では7割近くが「社会・文化に関心」(67%)、次いで約3割(31%)が「将来役に立ちそう」を理由に挙げ、韓国語では「やさしそう」が最多で(52%)、「社会・文化に関心」(50%)とほぼ同数を占めた。韓国語では「以前学習した経験があるから」が他より多い(10%)のも特徴である(「以前学習経験あり」はスペイン語でも6%と相対的に高めであった)。韓国語とスペイン語の人気の高さがうかがわれる。まさにそうした状況を受けて、北大でも2007年度(平成19年度)からスペイン語と韓国語がいわゆる第二外国語に追加されたが、特にスペイン語は履修希望者が非常に多く、履修調整(抽選)を行わざるをえない状況が続いている。人員配置の問題もあり、なかなか解決は容易ではないだろうが、可能な限り早期の改善が求められる。

なお、ロシア語履修生で「e. その他」が多いのが目立つが(45%)、その具体的な内容を見ていくと、①北海道に近く重要、北大はスラブ研究が盛んだから、②人があまりやっていないから、③キリル文字を読めるようになりたかったから等、他の言語を選択した学生と比較して、よりはっきりした目的意識をもっていることがうかがわれる。一方、ドイツ語や中国語の「その他」で比較的多かったのは学習人口や使用人口の多さ、そしてもう1点「抽選で第一希望に落ちたから」であった。抽選システムに対する不満は自由記述欄(問53「外国語カリキュラムに望むこと」)へのコメントでも少なくない(1年次生対象アンケートでも同様)。また、全体として「入学前に選択せねばならず、よくわからないまま、なんとなく選んだ」といった主旨の回答も散見された。抽選制度とともに履修選択システムのあり方として今後の改善が重要な検討課題の一つであろう。

問31は、「仮に外国語科目が自由選択であったなら、あなたはどのような選択をしていたと思いますか。入学時の自分を想定して教えてください」というものである。全体では、「a. 英語と英語以外の外国語の双方」が最多で(46%)、次いで「b. 英語だけ」(38%)、「d. 外国語は履修せず」(8%)、「c. 英語以外の外国語だけ」(6%)である。この結果から、「初習」選択者(a+c)は52%であり、学生の過半数は初習外国語を学びたいと希望していることがわかる。





	全体	文系	理系	文系 2~4年次	理系 2~4年次	文系 大学院	理系 5年次以上
a. 両方とも	46%	58%	43%	54%	43%	68%	42%
b. 英語のみ	37%	24%	41%	27%	40%	16%	42%
c. 初習のみ	6%	10%	5%	10%	5%	11%	4%
d. 履修しない	8%	6%	8%	7%	8%	2%	9%
e. その他	1%	1%	1%	2%	1%	0%	0%
f. 無回答	2%	1%	2%	0%	2%	2%	2%

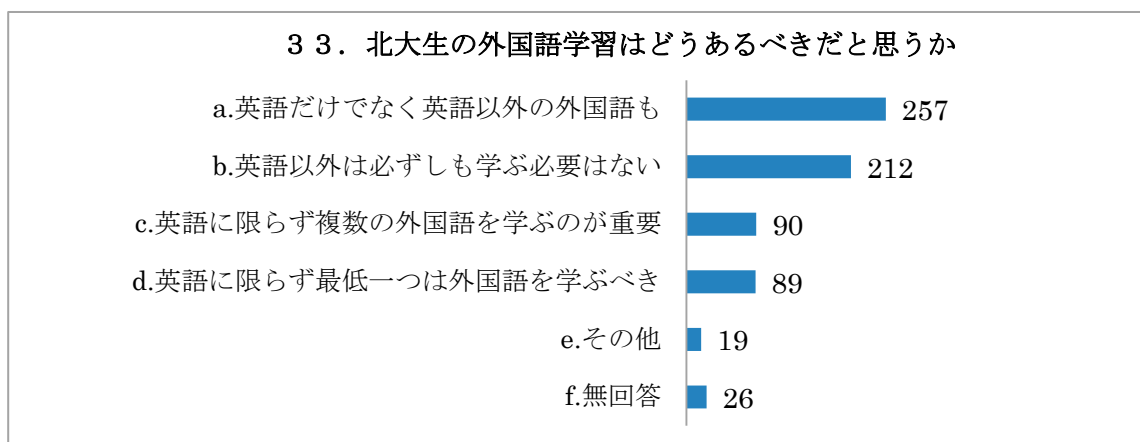
これをさらに文系・理系別に詳細に見てみると、文系では「a. 英語と初習の両方」が約6割、さらに「c. 英語以外だけ」(10%)を加えると約7割(a+c=68%)の学生が「初習外国語」を選択したと回答し、「b. 英語だけ」は24%にとどまる。一方、理系では「a. 英語と初習の両方」(43%)と「b. 英語だけ」(41%)とがほぼ拮抗しており、「初習」選択者は半数近くにとどまる(a+c=48%)。さらに、文系の大学院生だけにしぼって見ると、「初習」選択者(a+c)は68+11=79%にまで達し、「b. 英語だけ」はわずか16%に過ぎない。理系と文系、特に文系大学院とでは意識にかなりの差があることが見て取れよう。

問33は、北大生の外国語学習のあるべき姿を問う、「実際に外国語の授業を受けてみて、北大生の外国語学習はどうあるべきだと思いますか」というものである。「必修」部分の学修を終えて専門課程に進んだ学生たちが、一定期間を経た段階で自身の学習経験を振り返った際、どのような認識をもっているのかを明らかにすることがこの設問の目的である。

全体で「a. 英語を学ぶのは当然だが、英語以外の外国語も学ぶべき」が最多(37%)で、以下、「b. 英語以外の外国語は学ぶ必要はない」(31%)、「c. 英語に限らず複数の外国語を学ぶことが重要」(13%)、「d. 英語に限らず最低一つは外国語を学ぶべき」(13%)と続く。このことから、「英語」を学ぶべきだと考える者(a+b)が7割近く(68%)を占めることがわかる。グローバル化の進む今日、これは予想どおりの結果であるが、だ

からといって「英語だけ」でよいと認識しているわけではなく（「英語以外は必要ない」とする者は文系大学院生ではわずか9%）、「英語以外」の外国語を学ぶべきだと答えた者(a+c+d)も6割以上(63%)おり、初習外国語への期待もやはり高い。さらに、「英語以外の外国語」を学ぶ必要性を訴える声として、「英語に限らず」学ぶべきとする意見(c+e)は文系で3割を超えており、これは理系で「英語以外は必要ない」が3割以上を占めるのと対照的である。なお、「その他」で多かったのは「必要な人が必要に応じて学べばよい」といった、個人の自由を尊重すべきとする意見であった（19人中11人）。

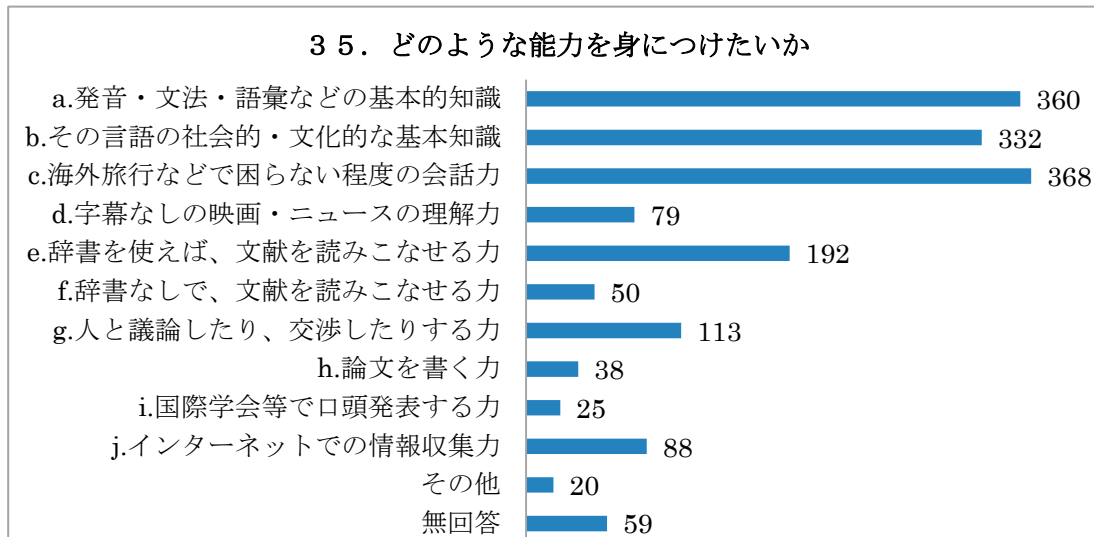
ちなみに、初習外国語を学ぶ必要性は教員アンケート（問18）でも38%に認められているが、高年次学生の6割以上（1年次生でも58%）が「英語以外の／英語に限らず1つ以上の外国語を学ぶべき」と答えているの比べると、学生のほうが英語以外の外国語学習にずっと積極的なことがわかる。この学生と教員の間意識のギャップには注意が必要であろう。



	全体	文系	理系	文系 2~4年次	理系 2~4年次	文系 大学院	理系 5年次以上
a. 英語以外も	37%	41%	36%	40%	38%	41%	34%
b. 英語のみ	31%	18%	34%	22%	35%	9%	34%
c. 英語に限らず複数	13%	18%	11%	18%	11%	16%	12%
d. 英語に限らず1つ	13%	14%	13%	14%	11%	14%	14%
e. その他	3%	5%	2%	4%	2%	7%	3%
f. 無回答	4%	1%	2%	2%	3%	14%	4%

1.2. 身につけたい外国語運用能力、学習に適切な時期について

問35は「英語以外の外国語について、どのような能力を身につけたいと思いますか（複数回答可）」である。全体では、最多は「b. 旅行などで困らない程度の会話力」（53%）であり、ほぼ同数で「a. その言語の発音・語彙・文法などの基本的知識」（52%）、僅差で「c. その言語に関わる社会的・文化的な基本知識」（48%）が続いた。ここまではいずれも基礎的な知識や会話力と言える。以下、多い順に、「辞書を使えば、文献を読みこなせる力」（28%）、「人と議論したり、交渉したりする力」（16%）、「インターネットで資料検索し情報収集する力」（13%）、「日本語字幕なしで映画やニュースを理解する力」（11%）、「辞書なしで、文献を読みこなせる力」（7%）、等々の、スキル別・目的別の運用能力が挙げられている。



	全体	文系	理系	文系 2~4年次	理系 2~4年次	文系 大学院	理系 5年次以上
a. その言語の発音・文法・語彙などの基本的知識	52%	62%	49%	66%	51%	52%	47%
b. その言語に関わる社会的・文化的な基本知識	48%	53%	46%	53%	47%	52%	46%
c. 旅行などで困らない程度の会話力	53%	65%	49%	67%	48%	61%	51%
d. 字幕なしで映画やニュースを理解する力	11%	18%	9%	15%	10%	25%	8%
e. 辞書を使えば、文献を読みこなせる力	28%	36%	25%	35%	27%	39%	21%
f. 辞書なしで、文献を読みこなせる力	7%	14%	5%	12%	5%	18%	6%
g. 議論したり、交渉したりする力	16%	24%	14%	20%	14%	34%	14%
h. 論文を書く力	5%	7%	5%	5%	5%	14%	6%
i. 国際学会等で口頭発表する力	4%	6%	3%	4%	3%	11%	3%
j. インターネットで資料検索し情報収集する力	13%	17%	11%	16%	12%	20%	9%
その他	3%	2%	3%	2%	3%	2%	3%

※比率は該当者数に対するので、合計は100%にならない。

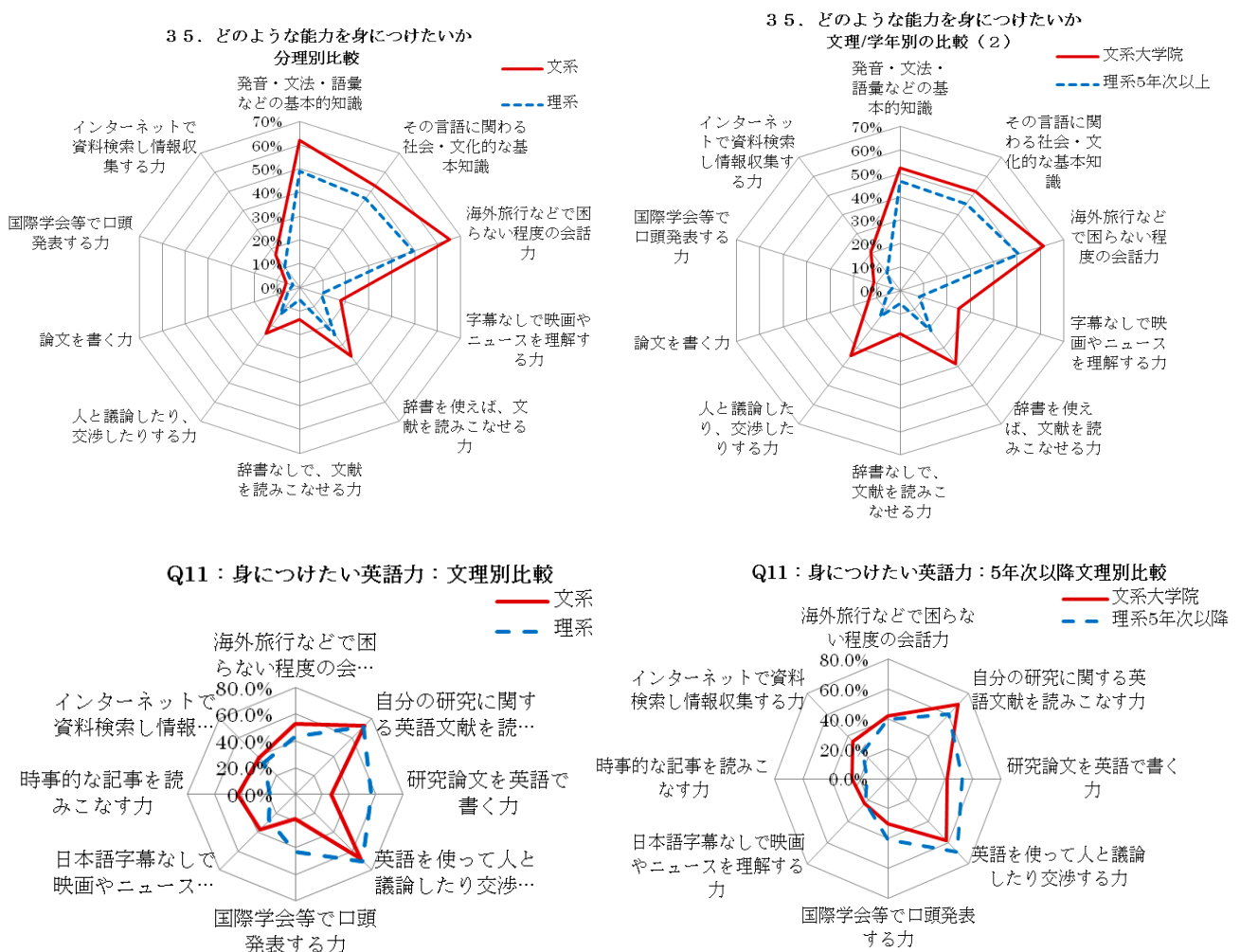
主としてアカデミックな場面で必要となる「論文を書く力」(5%)、「国際学会等で口頭発表する力」(4%)等の能力は、(英語とは異なり)初習では全体としてはさほど強く求められてはいないように見える。とはいえ、文系大学院生に限ってみれば、それぞれ14%、11%と、一概に無視し難い数値を示している。「(辞書を用いて/辞書なしで)文献を読みこなせる力」(e+f)への高いニーズ(文系学部生 47%; 文系大学院生 57%)、及び「議論したり、交渉したりする力」(同 20%; 34%)、「ネットで資料検索し情報収集する力」(同 16%; 20%)とともに、文系でのアカデミックな外国語運用能力の必要性が理系に比して相対的に高いことを物語る。今後この方面で、文系部局教員との、より組織的・有機的な協働体制の拡充が検討されてよい。

また、「e. 辞書を使えば文献を読みこなせる力」や「g. 議論したり交渉したりする力」は、文系・理系を問わず一定のニーズがある。高年次でのカリキュラム編成を考える際に留意すべきであろう。

ここで英語に関して尋ねたアンケートと比較してみると、英語と英語以外(初習外国語)とでは、当然ながら求められている能力がずいぶん異なることが明快に浮かび上がる。なかでも顕著なのは「議論したり、交渉したりする力」で、初習では全体で16%、最も多い文系大学院生でも34%なのに対し、英語では全体で70%、大学院では87%にも及ぶ。「論文を書く力」も初習では全体で5%、最も多い文系大学院でも14%な

のに対し、英語では全体で50%、大学院生では66%が身につけたいと希望している。

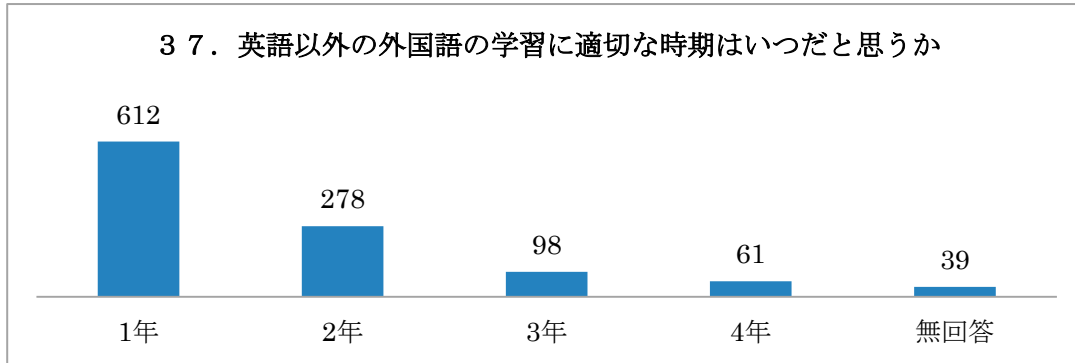
また、英語と比較してもう1点気づくのは、英語では文系と理系とで「身につけたい能力」に比較的大きな差が見られるのに対し、初習外国語では文・理間にあまり差がなく、ほとんど同様の傾向を示していることである。レーダーチャートを見れば一目瞭然で、英語では文系(赤・実線)と理系(青・破線)でかなり図柄が異なるのに対し、初習ではほぼ同型的な図柄を示している。つまり、英語では文理別、学部・大学院別に多様なニーズに対応する必要があるのに対し、初習では全般的に必ずしもそこまでの用意は必要ないこと、ただし文系大学院生に対しては他よりも専門的な文章作成(アカデミックライティング)や議論・交渉(オーラルプレゼンテーション、ディスカッション)のスキルを高めるためのコース開設を検討する余地があると考えられる。例えば、大学院共通科目としての開講、あるいは留学生(ネイティブスピーカー)との協調学習プログラムの開発などが、今後もう少し積極的に模索されてよいかもしれない。



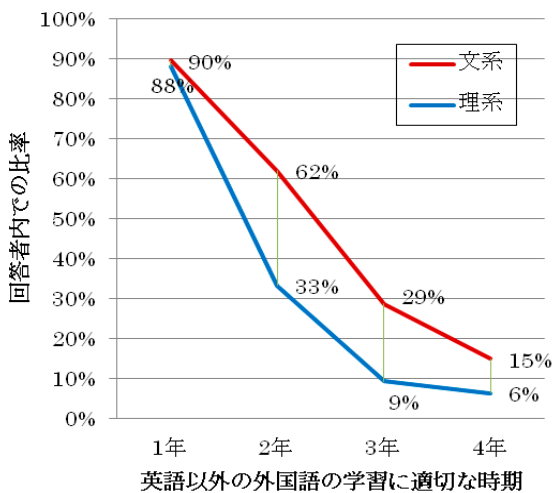
問37は、「大学4年間で英語以外の外国語を学習するのに適切な時期はいつだと思いますか(複数回答可)」である。全体では、1年次が最も多く(89%)、2年次(40%)、3年次(14%)、4年次(9%)と下がっていく。これは北大全体のカリキュラムとして2年次以降専門課程の学修が本格化する実状を反映したものであり、現実的な選択であろう。ただ、2年次と3年次の比率は文系と理系の間でかなりの開きが見られ、留意が必要である。文系では2年次について約60%の学生が、3年次についても約30%の学生が初習外国語の学習に適切と考えていることがわかる。さらに大学院生及び理系5年次以上の回答を見てみると、学部2~4年次生の回答に比して、高年次での継続的な外国語学習が望ましいと考えている様子が見て取れる。確かに人数とし

では1~2年次ほど多くの履修は見込めないにせよ、4年次までステップアップ方式で継続学習していける学習環境を今後よりいっそう整備拡充していくことが検討課題となろう。

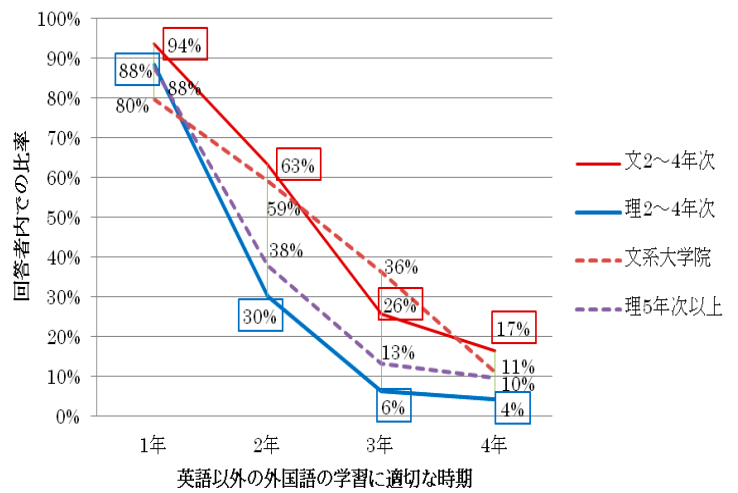
なお、自由記述欄へのコメントで「2年次以降、特に文系学部は教養棟から距離が遠く不便」、「各学部でも受講できるようにしてほしい」といった主旨の意見がいくつも見られた。授業の内容面やバリエーションの充実だけでなく、物理的な「立地条件」も含め、各学部等の所属教員との連携強化が求められる。



37. 英語以外の外国語の学習に適切な時期はいつだと思うか



37. 英語以外の外国語の学習に適切な時期はいつだと思うか
文系・理系/学部生・大学院生の比較



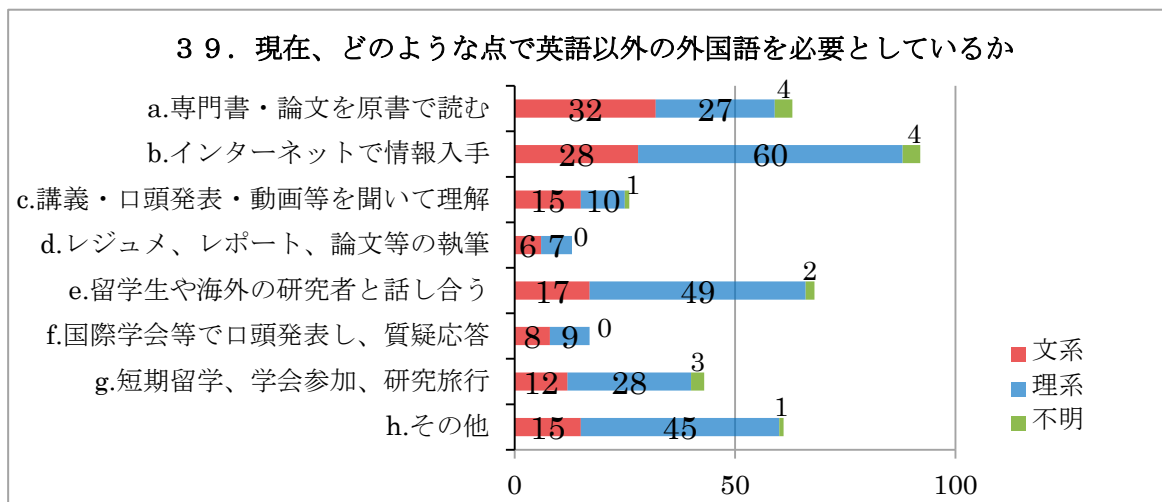
1.3. 現在の英語以外の外国語学習状況、必要性、接触状況について

問 38~42 は、現在どのような形で英語以外の外国語に触れているか、あるいは必要としているか、実状把握のための設問である。

まず問 38 では「現在、英語以外の外国語で講義を受けたり、討議をする授業を受けていますか」と尋ねた。大方の予想どおり、ほとんどが「ない」と回答している。

	全体	文系	理系	文系 2~4年次	理系 2~4年次	文系 大学院	理系 5年次以上
週1コマ	32	18	12	14	10	4	2
週2コマ	11	4	5	3	4	1	1
週3コマ	6	1	5	1	5	0	0
週4コマ	1	1	0	1	0	0	0
週5コマ以上	1	1	0	0	0	1	0
ない	618	122	488	86	281	0	207
無回答	24	6	16	4	9	2	7

とはいえ、問 39 (「現在、どのような点で英語以外の外国語を必要としていますか。あてはまるものをすべて選んでください」) によれば、「英語以外の外国語を必要」とする場面は、現状でも必ずしも少なくないことがわかる。「b. インターネットで文献を検索したり、研究に関する情報を入手する」と回答した者が文系・理系合わせて 92 名おり、「a. 専門書・論文を原書で読む」も 63 名いる。それ以上に注目すべきは、「e. その外国語で留学生や海外の研究者と話し合う」(68 名)の多さであり、これは特に理系で顕著である(68 名中 49 名)。理系の研究室では留学生や外国人研究者と英語や英語以外の外国語を用いてコミュニケーションする機会が多いことの現れと見てよいであろう。それは学部生・大学院生を問わず少なくないようである。なお、「その他」で多かったのは「ない(必要ない)」(31 名)であった。



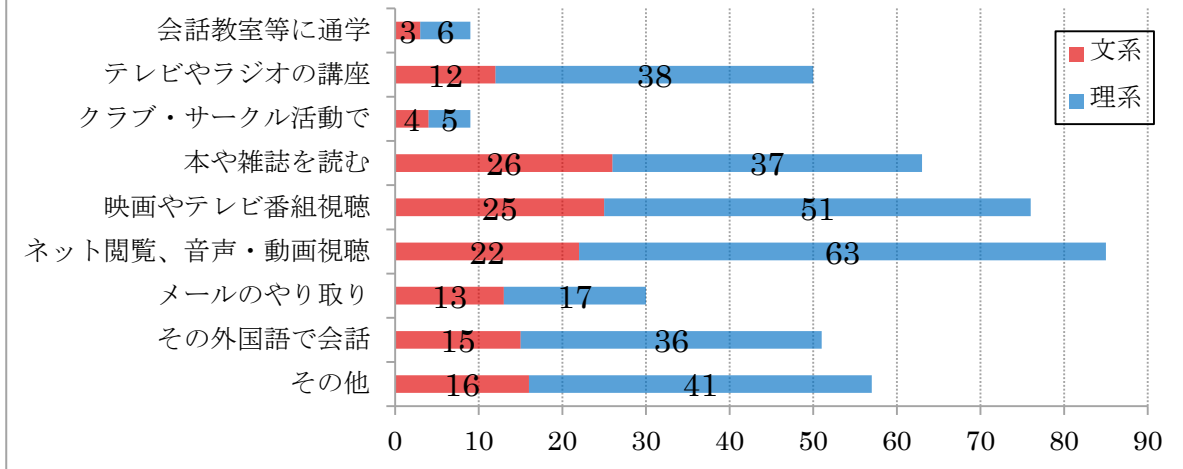
	文系 2~4 年次	理系 2~4 年次	文系 大学院	理系 5 年次以上
a. 専門書・論文を原語で読む	18	16	14	11
b. インターネットで情報入手	15	37	13	23
c. 講義等で原語資料を聞いて理解	11	6	4	4
d. レジюме、レポート、論文等を執筆	2	4	4	3
e. 留学生や海外研究者と話し合う	9	25	8	24
f. 学会等で口頭発表、質疑応答	1	4	7	5
g. 短期留学、学会参加、研究旅行	7	20	5	8
h. その他	11	25	4	20

問 41 では「授業や研究以外」の場面で、「どのような形で英語以外の外国語に触れる機会があるか」を尋ねた。「ネットの閲覧や音声・動画の視聴」、「映画・TV」、「本や雑誌」といったメディアを通じての接触が多いほか、テレビ・ラジオ講座で学習している学生が特に理系で学部・大学院を問わず比較的多いことがわかった。(英語だけでなく) 英語以外の外国語での会話やメールのやりとりも、理系の大学院生ではやはり少なくないようである(「その他」に「講座の留学生との交流」といった内容を答えた者が 3 名ほどいた)。

その一方で、「クラブ・サークル活動に参加して」英語以外の外国語に触れる機会は思ったほど多くなかった。自由記述欄のコメントで、もっと留学生と交流したいと望む声は少なくなかった。今後の検討課題として、各学部等の所属研究室における交流はもとより、そうした枠組みを越えた、カジュアルな交流の場を創り出していくことも積極的に模索されてよいのではなかろうか。

なお、「その他」で多かったのは、問 39 と同様、「ない」という回答であった(31 名)。ほかには「レストランのメニュー」や「街角の案内看板」「Facebook で交流するため」等が見られた。

4 1. 授業や研究以外に、英語以外の外国語に触れる機会



	文系 2~4 年次	理系 2~4 年次	文系 大学院	理系 5 年次以上
会話教室等に通学	1	3	2	3
テレビやラジオの講座	8	21	4	17
クラブ・サークル活動で	2	3	2	2
本や雑誌を読む	17	21	9	16
映画やテレビ番組視聴	14	29	11	22
ネット閲覧、音声・動画視聴	12	38	10	25
メールのやり取り	8	6	5	11
その外国語で会話	8	15	7	21
その他	13	25	3	16

1.4. 検定試験について

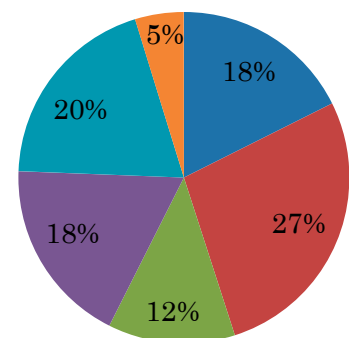
問 43~45 は、いわゆる検定試験について尋ねたものである。

問 43 では「英語以外の外国語についても各種の検定試験が実施されています。もしこれらの検定試験の成績が単位として認定されるとしたら、あなたはそれを利用したいと思いますか」という質問に対し、積極的意見(a+b)が 45%、消極的意見(d+e)が 38%、判断保留(c+e)が 17%という結果を得た。ポジティブな回答とネガティブな回答の間にあまり大きな差はなく、賛否両論といったところであろうか。

ただ、少し細かく見てみると、文系では積極的な意見が 6 割と多く（「a. ぜひ利用したい」29%、「b. 条件しだいで利用したい」31%）、消極的意見は 24%と少ない（「d. さほど利用したいとは思わない」12%、「e. まったく利用する気持ちはない」12%）。また、学年別に見ると、2~4 年次生では積極的意見がほぼ半数を占め、これと対照的に大学院生（5 年次以上）では消極的な回答が半数近く（46%）にのぼる。これは恐らく検定試験の

4 3. 検定試験が単位認定されたら利用したいか

- a.ぜひ利用したい
- b.条件しだいで利用したい
- c.どちらとも言えない
- d.さほど利用したいとは思わない
- e.まったく利用する気持ちはない
- f.無回答



	全体		文系		理系		2~4年次		5年次以上	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
a. ぜひ利用したい	122	18%	44	29%	76	14%	84	19%	38	15%
b. 条件しだいで利用したい	190	27%	48	31%	139	26%	131	30%	59	23%
c. どちらとも言えない	86	12%	19	12%	63	12%	53	12%	33	13%
d. さほど利用したいとは思わない	126	18%	18	12%	105	20%	66	15%	60	23%
e. まったく利用する気持ちはない	136	20%	18	12%	116	22%	75	17%	61	23%
f. 無回答	33	5%	6	4%	26	5%	23	5%	10	4%

受験に関して、学部生の場合は大学の単位認定基準として以外に、就職活動の際に有利にはたらくことが期待されているのではないかと推測される。

それでは、実際に英語以外の検定試験はどれほど利用されているのか。問 44 で受験の経験を問うたところ、「はい」はわずか8%にとどまった(いいえ 88%、無回答 4%)。

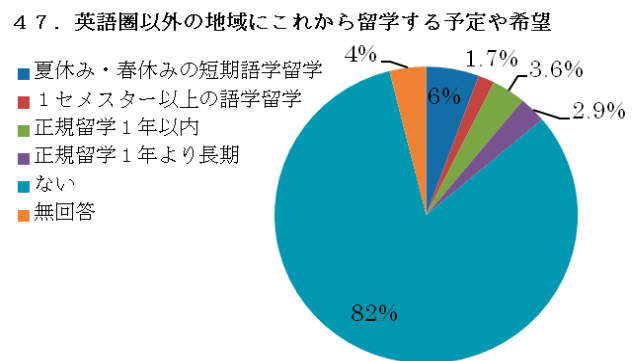
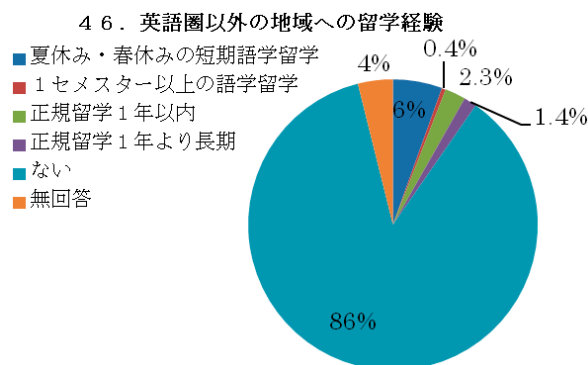
どのような試験を受けたことがあるか(問 45) 記入してもらったところ、51 名が具体的に回答してくれた。いわゆる独検、仏検、中検、ハングル検定等の日本で日本語母語話者を対象に創設された検定試験だけでなく、Goethe-Zertifikat、DELF、DELE、HSK、KLPT といった各国政府が公式に(または公認で)グローバルに実施しているものまで、種類も級別も様々である(今回のアンケートではロシア語の検定試験を挙げた者はいなかった)。

検定試験を北大のカリキュラムの中にどのように位置づけるかという問題は、教員の側でも賛否両論が錯綜していることが教員対象アンケートからうかがわれる。今後慎重に検討を重ねる必要がある。

1.5. 留学について

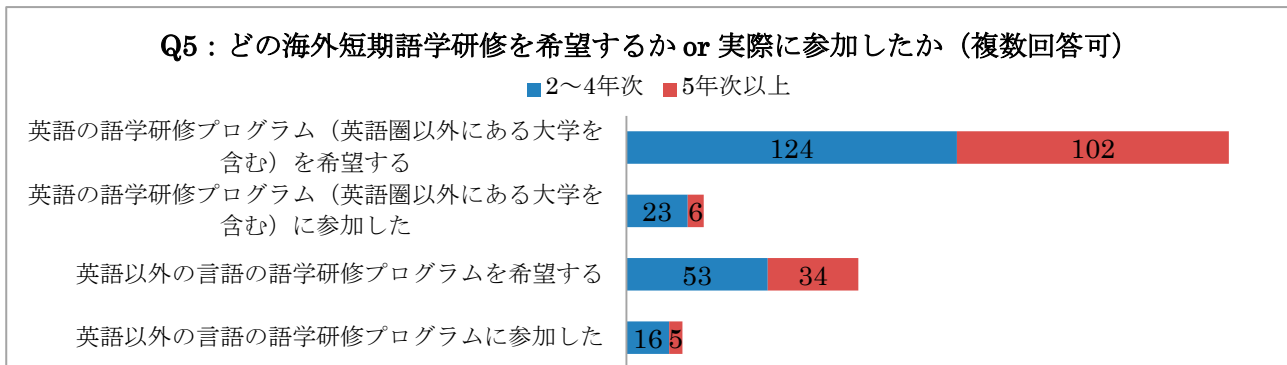
問 46~47 は留学について尋ねた。なお、北大の海外短期語学研修プログラムの単位認定制度に関しては、今回のアンケートでは英語と英語以外を一括して問 3~5 で尋ねたので、ここで併せて検討する。

まず、留学経験の有無を尋ねた問 46 (「英語圏以外の地域への留学経験はありますか」) についてだが、86%(599 人)が「ない」と答えている。留学経験があると回答した学生では、多くが夏休み・春休みの短期留学(38 人、全体の 6%)であり、それ以外は 1 セメスター以上の語学留学(3 人)、正規留学 1 年以内(16 人)、正規留学 1 年以上(10 人)にすぎない。



また、「これから留学する予定や希望」を尋ねた問 47 でも「ない」が 82%(570 人)。予定や希望があると回答した学生では、夏休み・春休みの短期留学(39 人)、1 セメスター以上の語学留学(12 人)、正規留学 1 年以内(25 人)、正規留学 1 年以上(20 人)という結果であった。

ここで問 5 の結果を見てみよう。「外国の大学等で行われている語学研修（大学指定で単位認定されるプログラム）」に関して「どの語学研修プログラムを希望しますか、あるいは実際に参加しましたか（複数回答可）」という質問に対して、「英語以外の外国語の語学研修プログラムに参加した」と回答した学生はわずか 21 人（2~4 年次 16 人；5 年次以上 5 人）であった。また、「参加を希望する」と回答した学生も英語に比べるとずっと少なく、87 人（2~4 年次 53 人；5 年次以上 34 人）であった。これは今回のアンケートの回答者全体からするとわずか 13%に過ぎない。北大でも国際本部を中心に学生に対して様々な形で留学案内の広報活動を行い、海外語学研修プログラムの充実に向けて努力を重ねているが、まだまだ大きな潮流をつくりだすには至っていないことがわかる。



特に問題として浮かび上がったのは、海外語学研修プログラムの単位認定制度が、残念ながら学生たちにあまり知られていないことである。大学では、より多くの学生を海外に派遣すべく留学経費の助成金制度も拡充する方向で努力中だが、プログラムの開拓や内容の充実だけでなく、学生への広報・周知についても、なおいっそうの努力が必要である。

1.6. 英語以外の選択科目について——「演習」、「外国語特別演習」（第3外国語）——

北大では、いわゆる必修の「外国語科目」⁶以外に、英語以外の初習外国語も選択科目の「外国語演習」として履修できる制度になっている。ただし、卒業要件単位数への算入は各学部により異なり、選択必修かそれとも自由選択か、なかなか複雑である。具体的には以下のとおりである。

表 1.6 北大における外国語の履修要件（各学部で求める卒業要件単位数）

		外国語科目		外国語演習		
		必修	選択必修	必修	選択必修または自由選択	
		英語 I~IV	初習外国語 I~II	英語演習	初習外国語の演習	外国語特別演習（第3外国語）
文系	文系共通（文・教・法・経）	4	4（選必）	2	4（選必）	自由選択
	理系	医・医学科	4	4（選必）	2	2（選必）
医・保健学科		4	4（選必）	いずれか2（選必）		
歯、獣医		4	4（選必）	2	自由選択	
上記以外の理系（理、薬、工、農、水）		4	4（選必）	いずれか2（選必）		

※初習外国語はドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、中国語、韓国語の6か国語。

※外国語特別演習は、上記6か国語以外の、いわゆる「第3外国語」をいう。イタリア語、ラテン語、ハンガリー語、フィンランド語、広東語、ほか多様な外国語が開講されている。

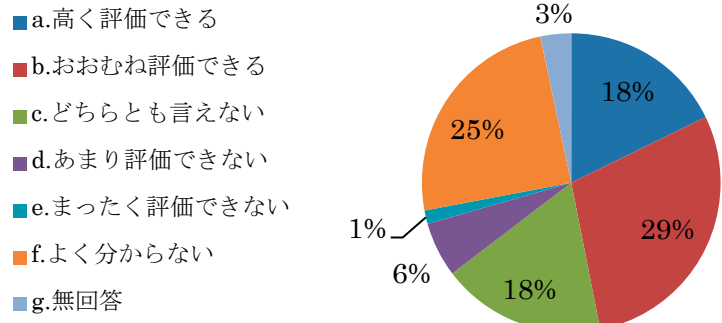
※数字の「4」「2」はその単位数以上の修得が求められることを示す。

⁶ 英語は全学部で4単位(以上)が必修。英語以外の初習外国語は1か国語を選択し、4単位(以上)を「選択必修」で履修する(以上を「外国語科目」と称する)。

問 48～52 では上の表の右側、緑色で「網かけ」した部分について質問したものである。

問 48 は「北大では英語以外の外国語で様々な選択科目（「初習外国語の演習」や「外国語特別演習（イタリア語、ラテン語、フィンランド語、広東語等のいわゆる第3外国語）」が開講されていますが、そのカリキュラムについてどのように考えますか」というものである。結果は、肯定的評価(a+c)が半数近く、否定的評価(d+e)はわずか7%で、基本的には肯定的に受けとめられていると言ってよい。

48. 選択科目（「初習外国語の演習」や「外国語特別演習」）のカリキュラムに対する評価



肯定的評価の理由としては次のよう

なものが代表的である。「英語以外の言語を学びながら異なる文化や考え方に触れることで、自分の視野が広がる。」「日常生活では、なかなか触れることのできない（そもそも参考書すら少ない）ような言語を学ぶ機会があるのは、総合大学ならではだと思う。もっと増えたらいいな、とも思う。」「新たな言語を学ぶこと、また、すでに学んできた言語を演習で実際に使ってみることで、その言語はもちろん、今まで学んできた他の言語を考え直すことにもつながり、言語を考えることで、その背景にある文化にも関心が向く可能性があるので、北大の基本理念の一つである、国際性の涵養につながると考えられるから。」

一方、否定的評価の理由としては、英語学習との優先順位や時間的な制約の中で、なかなか第2、第3外国語を深く学ぶことは難しいといった意見が多く見られた。その他、抽選制度に対する不満も散見された。「抽選なのがいけない。興味があるのに受けられないとなると面白くないし、学習の機会を断たれるし、自発的に勉強できずに結果的に興味をなくす。抽選無しで講義を受けられるようにしてほしい。」「外国語特別演習は普段なじみのない外国語を学びたいと思う者にとっては良いきっかけとなるが、評価が甘いことが多いため、良い評価を取るためだけに抽選に参加する総合入試の学生が多く、モチベーションが低くなる。」

この他、「c. どちらとも言えない」が18%あり、「f. よく分からない」は25%もいる。そのように回答した理由を問49で自由記述で書いてもらったが、それを見ると、圧倒的多数が「受講したことがないので回答できない」といったものである。その中身は大きく4つほどに分かれ、①そもそも興味がなく受講しなかった、②興味関心あり、受けたかったが時間割の制約等のため受けられなかった、③学部により卒業要件単位数に算入してもらえないため受けなかった、④3年次編入や他大学出身者の大学院生は北大の全学教育を受講したことがないため回答できないケースも少なくない。その他、「興味関心や要望は人それぞれなので一概には言えない」といった、個々人の自由意思や要望を尊重し多様な考え方を認めるべきという、配慮ある意見も少なくなかった。

1.7 高年次向けのカリキュラムについて

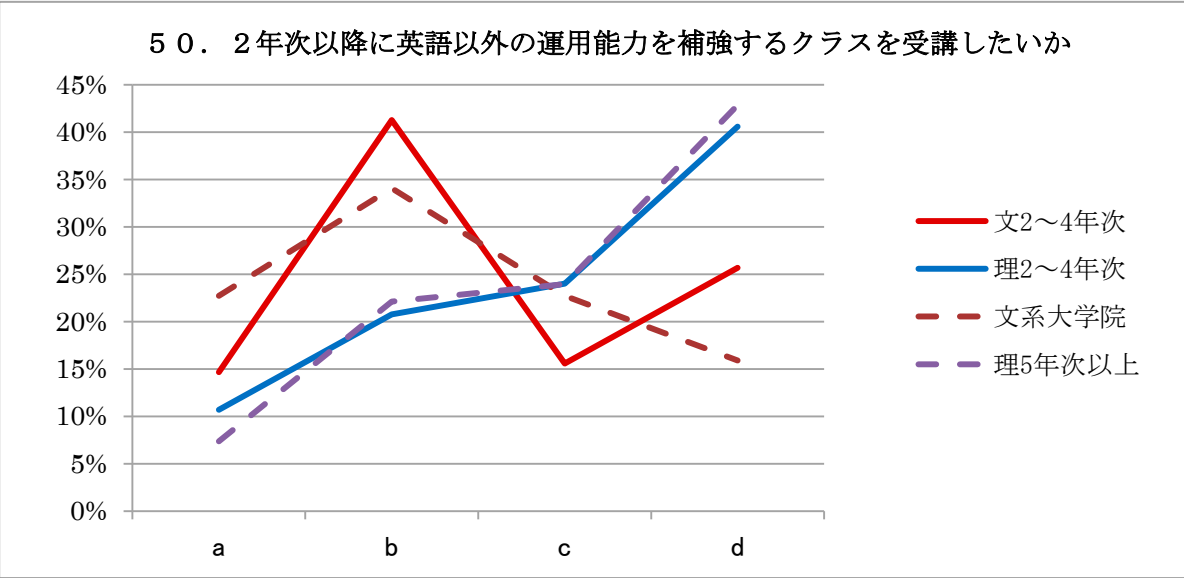
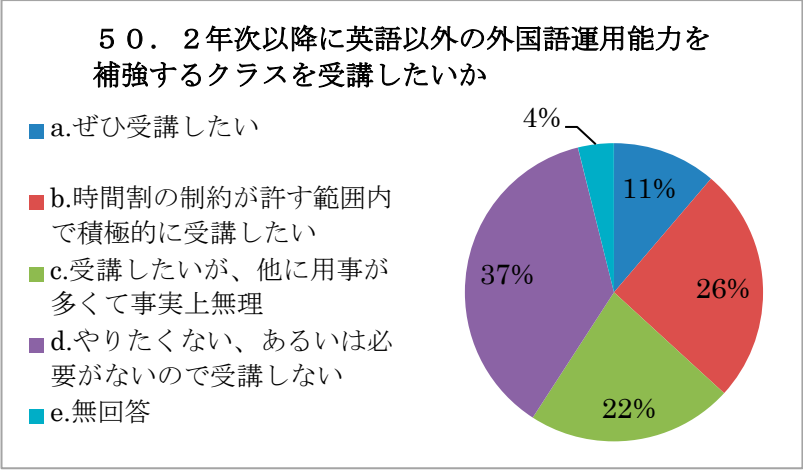
問 50～52 では高年次学生を対象とした英語以外の外国語カリキュラムのあり方を考えるための設問を用意した。

問 50 は、「2年次以降に英語以外の外国語運用能力を補強するクラスが提供された場合、あなたは受講したいと思いますか」というものである。ポジティブな回答(a+b+c)が約6割、ネガティブな回答が約4割となった。半数以上の学生は2年次以降も、できれば英語以外の外国語の力を強化したいと考えているわけであり、ここでも高年次学生における初習外国語学習に一定のニーズがあることがうかがわれる。

ただ、今回のアンケートからは、なかなか厳しい現実も浮かび上がってきた。ポジティブな回答の中でも端的に「a. ぜひ受講したい」という者(11%)と「b. 時間割の制約が許す範囲内で積極的に」(26%)を合わせても積極的な回答は約 4 割(37%)であり、同じく 37%の「d. やりたくない、あるいは必要がないので受講しない」と拮抗している。それと同時に、「c. 受講したいが、他にやらなければならないことが

多くて事実上無理」という声も小さくない(22%)。潜在的な要望はあっても実際上受講は難しいのが現実と見られる(「他にやらなければならないことが多くて」と答えた者の内訳は大多数が理系で、文系 27 人：理系 126 人であった)。

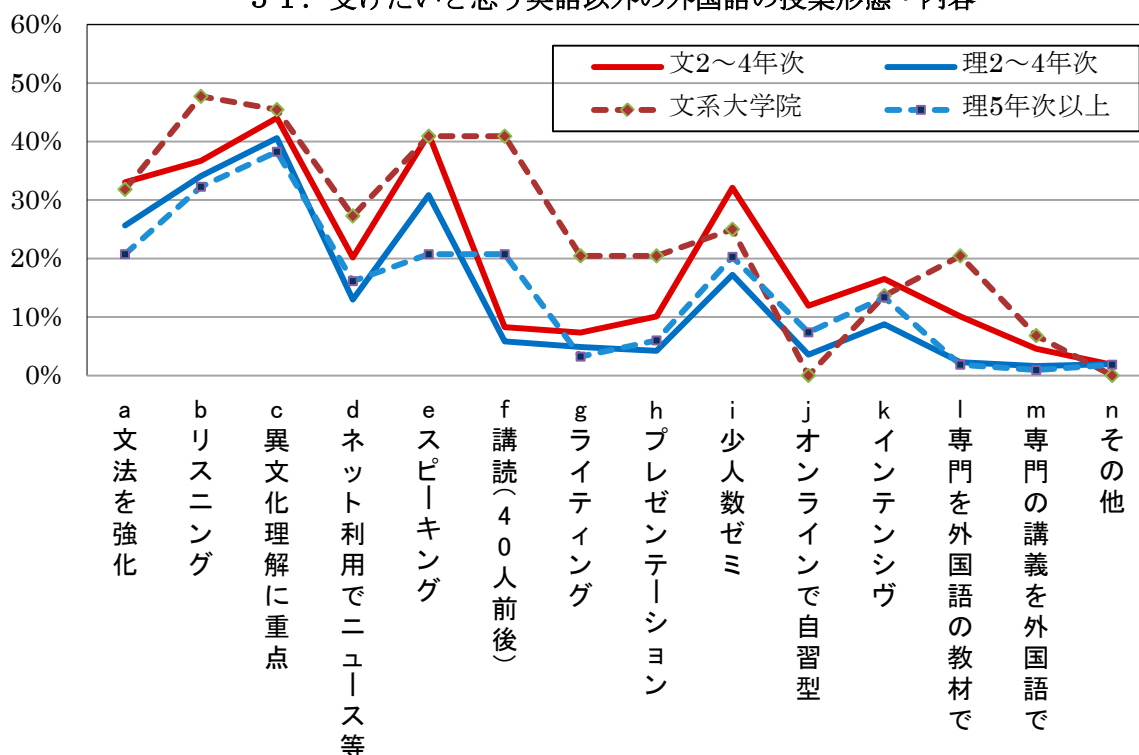
文理別に見ると、文系で「受講しない」は 23%と少なめで、むしろ「(ぜひ/時間割が許す範囲内で積極的に) 受講したい」(a+b)が 56%と半数を超える。対して理系では「受講したい」(a+b)が 30%、「受講しない」が 42%であり、「事実上無理」と合わせるとほぼ 3 人に 2 人(66%)が「受講しない/できない」という状況である。さらに、学部 vs. 大学院の別も加味して検討すると、文系の学部生は「b. 時間割の制約が許す範囲内で積極的に受講したい」が 4 割にのぼる。言い換えれば、カリキュラム上の条件さえ整えば外国語学習に取り組みたいという潜在的ニーズは特に文系でけっして小さくないと見てよい(なお、理系では年次グループ別の差がほとんどなかった)。



	全体		文系 2~4 年次		理系 2~4 年次		文系 大学院		理系 5 年次以上	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
a	78	11%	16	15%	33	11%	10	23%	16	7%
b	177	26%	45	41%	64	21%	15	34%	48	22%
c	155	22%	17	16%	74	24%	10	23%	52	24%
d	256	37%	28	26%	125	41%	7	16%	93	43%

問51は「あなたが受けたと思う英語以外の外国語の授業形態・内容はどのようなものですか(複数回答可)」というものだった。全体では、多い順に①「c. 文化や歴史、社会生活など異文化理解に重点を置いた授業」(42%)、②「b. 聞き取りに重点を置いた授業」(36%)、③「e. 学生が話す機会の多いスピーキングの授業」(35%)、④「a. 文法を強化する授業」(27%)、⑤「i. 少人数のゼミナール式授業」(21%)、⑥「d. ネット等を利用して、日常生活やニュース等をテーマにする授業」(17%)、⑦「k. 夏休み等を開講されるインテンシヴ・コース」(12%)と続く。「c. 文化や歴史、社会生活など異文化理解に重点を置いた授業」は文・理の別、学部・大学院の別を問わず、全体に最も関心が高いと言える。また、全体でほぼ傾向が共通している項目として、「i. 少人数のゼミナール式授業」はどのグループからも比較的人気が高く、逆に「j. オンライン教材等を利用した自習型授業」は全体的に人気が低いことがわかる。

5 1. 受けたと思う英語以外の外国語の授業形態・内容



	全体		文系 2~4年次		理系 2~4年次		文系 大学院		理系 5年次以上	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
a	180	27%	50	33%	124	26%	14	32%	45	21%
b	244	36%	61	37%	175	34%	21	48%	70	32%
c	284	42%	68	44%	208	41%	20	45%	83	38%
d	112	17%	34	20%	75	13%	12	27%	35	16%
e	236	35%	63	41%	167	31%	18	41%	45	21%
f	36	5%	11	8%	22	6%	18	41%	45	21%
g	40	6%	17	7%	22	5%	9	20%	7	3%
h	46	7%	20	10%	26	4%	9	20%	13	6%
i	145	21%	46	32%	97	17%	11	25%	44	20%
j	41	6%	13	12%	27	4%	0	0%	16	7%
k	84	12%	24	17%	56	9%	6	14%	29	13%
l	33	5%	20	10%	11	2%	9	20%	4	2%
m	15	2%	8	5%	7	2%	3	7%	2	1%
n	13	2%	2	2%	6	2%	0	0%	4	2%

だが、その一方で、文系と理系、あるいは学部と大学院との間で要望にかなり違いの見える項目も少なくない。特に文理で比較的違いが大きいのが、講読とライティング、そして専門の内容を“外国語で”学ぶ授業に関してである。「l. 専門の内容を英語以外の外国語の教材で学ぶ授業」は文系大学院生で 20%に及び（学部生も 10%と、そこそこ要望あり）、理系（わずか 2%）とは顕著な違いがある。また、文系大学院生では「f. 講読型授業」も 41%にも達し、「g. 文章・論文などのライティング」や「h. 発表スキルを学ぶプレゼンテーション」、「b. 聞き取りに重点」なども、他のグループに比して突出して高い。これらはアカデミックな場面で「読み、書き、発表し、やりとり（質疑応答）できる能力を強化したい」ということの現れと見てよいであろう。

一方、理系では学部と大学院とで基本的にはほぼ同様の傾向を示しているが、「f. 講読」については理系でも大学院生は 21%と比較的多くが要望しているのは見落とせない。大学院レベルになると、英語以外の外国語も専門の文献等を「読みこなす力」が求められる場面が多くなるからと推測される。反対に学部生で要望が高めなのは「e. 学生が話す機会の多いスピーキングの授業」である。1年次生対象アンケートでも明快に現れていたように、学生のコミュニケーション指向の高さがうかがわれる。一つの背景として研究室単位（特に理系）での交流に外国語が比較的良好に使われるようになってきていることも関係しているのではないだろうか。

なお、「k. 夏休み等に関講されるインテンシヴ・コース」は全体で 12%と数値的には必ずしも高いものとは見えないかもしれないが、問 50 で「受講したいが、他にやらなければならないことが多くて事実上無理」と回答した者も、特に理系を中心に比較的多くが関心を示している。海外短期語学研修の拡充だけでなく、国内でのサマーキャンプ等も含め、集中開講型プログラムの開発も検討に値しよう。

「その他」の回答（計 13 件）では、「必要ない」（4 件）のほか、「対訳（英語でも可）で文学作品を読む授業」（農・4 年）、「その言語の文学作品をじっくり読む講義。文法の勉強だけでなく、文化理解にもつながると思うので」（農・修士 1 年）という、ある意味オーソドックスな希望が 2 名（理系！）から寄せられていたのが目を引く。文学作品をじっくり読み解くなどという「遅れた」学習方法と蔑まれかねない昨今であるが、北大生にはこういう声もまだまだ健在だということであろう。

この他、「フランス語は英語と文法が近いので、フランス語⇔日本語で考えるのは非効率的な感じがして、1 年のときはテキストの例文を英語に訳してからフランス語にしていた。フランス語⇔英語で考える授業があったら受けてみたい」という実に意欲的な意見もあった。「（初習の）○○語⇔英語で考える授業」に関しては、京都外国語大学では「チームティーチングによる 2 言語同時学習」プログラム（平成 18 年度文科省「特色 GP」選定）という先進事例があり、筆者ら外国語教育センター外国語教育将来構想 WG メンバーも授業見学を含め視察する機会があった⁷。それは英語を基軸とし、さらに第 2 外国語を同時に学ぶというコンセプトで、英語ともう 1 言語のそれぞれを専門とする教員 2 名が、同一内容の教材を用いてチームティーチングを行うもので、e-learning、インターネット等のマルチメディア CALL 教室をフル活用しながら、英語ともう 1 言語それぞれを母語とするネイティブの大学院留学生を TA（Teaching Assistant）とし、教員チーム 4 名体制で 1 クラス 10 数名程度の少人数教育を行うという、極めて「恵まれた」学習環境を創り出していた。施設・機器設備からテクニカルスタッフ等のマンパワーも含め、北大で同様の条件を整えるにはクリアすべき課題も少なくないが、演習科目をトライアルの場として、TF（Teaching Fellow）制度の導入も視野に入れながら⁸、できるところから工夫を重ねていくことは可能であろう。

⁷ 視察は 2013 年 11 月 26 日、本報告筆者の一人である清水が田邊鉄[情報基盤センター准教授]とともに「英語＋中国語」の 2 言語同時学習クラスの実地見学を行った。インタビューも含め、お忙しいなか丁寧にご対応くださった岡本俊裕先生と相川真佐夫先生に、この場をお借りしてあらためて謝意を表します。

⁸ CALL 授業における TF の活用については、外国語教育センター中国語教育系では、平成 24 年度北海道大学総長室事業推進経

2. むすびに

北大における外国語教育について、大学院生をも含む高年次学生を対象に実施された意識調査として、今回のアンケートは知られる限り初めてのものである。回答から浮かび上がった問題は、もとより教員や1年次生と共通する部分も多いが、それとともに、高年次生、特に大学院生ならではの課題も少なくない。ここでアンケート結果の分析・考察から読み取れたことをあらためてまとめておく。

(1) 英語以外のいわゆる初習外国語の必要性・学習意欲は、高年次生においては1年次生以上に高く、6割を超えている。特に文系の大学院生では7割を超え、理系でも4割を占める。対するに教員は全体で38%

(文系58%、理系34%)となっている。世上の英語優先の風潮にもかかわらず、現在専門課程に在学中の高年次学生は、教員が考えている以上に、英語以外の外国語の学習意義や必要性を実感しているものと見られよう。学生・教員間のこの認識のギャップについて、教員側は留意する必要がある。

(2) 身につけたい外国語運用能力では、初習外国語では(英語とは異なり)文・理間でさほど大きな差は見られず、文理共通に言えることとして、その言語の発音・文法・語彙等の基礎的知識だけでなく、その言語に関わる社会的・文化的な基礎知識(異文化理解)への知的欲求が高い。スキル別に見ると、「聞く、話す」を中心としたコミュニケーション指向が強く、「ひとと議論したり交渉したりする力」を高めたいと希望している。また、「読む」力を高めたいと感じている高年次生は文・理を問わず多く、特に大学院生では文献を読みこなす力が理系でも求められている。ただし、文系大学院生は他と若干違った傾向を示しており、より専門的な文章作成(アカデミックライティング)や議論のスキルを高めるためのコース開設が検討されてよい。

(3) 受講したい授業形態・内容については、(2)と関連して異文化理解やリスニング、スピーキングへの要望が強く、予想どおり少人数のゼミナール式授業が求められている。前回2004年度(平成16年度)のカリキュラム改訂以来、全学協働体制のもと各学部所属教員の協力を得て、外国語演習の開講数とバリエーションは大幅に増えてきているが、この方向性は基本的に間違っていなかったことが検証されたと言えるだろう。また、「外国語を」ではなく)専門の内容を「外国語で」学ぶ授業に関しては、文系大学院生の20%が求めており(文系では2~4年次生も10%、対して理系はわずか2%)、国際本部を中心に2014年度(平成26年度)から正式にスタートする「現代日本学プログラム」との発展的な連携を、英語以外の外国語においても検討する余地があるかもしれない。

(4) 初習外国語の演習や外国語特別演習(選択科目)のカリキュラムは、ほぼ半数が肯定的に評価している。基幹総合大学として多様な言語とその社会文化を学ぶ機会を提供していることが北大の基本理念の一つである「国際性の涵養」につながるこの認識が、学生にも共有されているのは喜ばしい。ただし、時間割や卒業要件の制約、あるいは抽選制度に対する不満の声も少なくはない。卒業要件等の「縛り」から自由に履修できる制度を整えるとともに、時間割の制約から比較的自由な、夏休み等を利用した集中開講型のインテンシブ・コースを今後さらに拡充していくことも検討課題である。

(5) 検定試験による単位認定に関しては、高年次学生でも賛否相半ばであり、慎重な議論が必要である。

以上アンケート結果の分析・考察をまとめたが、この他、アンケートの最後(問53)で「北大の英語以外の外国語カリキュラムに望むこと」を自由に記述してもらった。意見は多岐にわたったが、高年次生の視点から、2年次以降も継続学習しやすい制度・カリキュラムを整備してほしいという要望が最も多かった。なかでも抽選制度に対する不満は多く、今後とも大学として改善策を講じていかなければならない。

また、留学生との交流を望む声も少なくなかった。「中国や韓国、ロシアなどから来ている留学生の方と

交流する機会があれば面白いと思う。」「北大には留学生がたくさんいるので学内留学的なものがあればうれしい。」ここで言われている「学内留学的なもの」は曖昧だが、恐らく日本に（キャンパス内に）居ながらにして外国語漬けになれるような学習環境・生活空間という意味ではないかと推察され、それはまさに北大が実現を目指しつつある「バイリンガルキャンパス」ないし「グローバルキャンパス」の方向性とも合致するものと思われる。関連して、「留学生をもっと活用すべきではないか。講義の講師でもいいし、TAでもいい。そうすることで、学生どうしの交流も活発になるし、そのつながりこそが北大の思う『グローバルな人材』の第一歩ではないか」との建設的な提案もあった。これまで広く活躍している留学生TAのみならず、TF (Teaching Fellow) 制度を活用しながら、日本人学生と留学生とが相互に学び合えるような協調学習の場を創出していくことは検討に値するであろう⁹。

もう一点、ここまで触れてこなかった問題に言及している自由記述を取りあげる。英語単位優秀認定制度に関するものである。一見初習外国語とは無関係な事柄と見えるかもしれないが、そうではない。「英語で秀認定を取ったので1年の後期は英語の必修授業が空きコマになったが、そのコマに外国語やその他の選択科目の授業がなく、結局何も取れなかった。英語Ⅲ、Ⅳの時間に他の外国語の授業を取れるようにしてほしい」という要望である。これは英語の成績優秀者に対する特別措置として導入された制度であるが、学生の立場からすれば、すでに一定レベルに達している英語に加えて、別の外国語、すなわち大学入学後に新たに学び始めた初習外国語（第二外国語）をさらに深く学びたい（あるいは第三外国語を学びたい）という要望はごく自然なものであろうし、日本語と英語に加え、それ以上の外国語運用能力に長けた人材は現代日本社会における要請でもあろう。今回のアンケートの自由記述にも「(英語以外の外国語カリキュラムについて)一部の英語上級者が選択科目として履修するように組み替える方が望ましい。あるいは、はじめから英語を選択しないコースを設定するならば、上の限りではない」という建設的なコメントもあった。このような要望と関連して、東京大学では本年度(2013年度)から一定レベル以上の高い英語力を有すると認められる学生を対象とする特別プログラムとして「TLP(Trilingual Program)」をスタートさせている¹⁰。現時点で開設されているのは英語+中国語のコースのみだが、初習外国語で必修科目(文系で週3コマ×1年半)に加えて週2コマセットのインテンシブ・コースを履修し、その仕上げとして2年次の夏季休暇には現地中国(南京大学)でのサマースクール(20名限定、選抜試験を課す)に参加することで、英語にも中国語にも堪能なグローバル人材を養成するという試みである。北大でも英語単位優秀認定制度の見直しを含め、英語だけでなく外国語教育全般のあり方を構想するに際し、力があり、モチベーションの高い学生を埋没させず、さらに幅広く深い外国語運用能力を備えた人材として活躍できるようなカリキュラムを考えていくことが重要であることは言を俟たない。今後の検討課題の一つである。

なお、初習外国語で推進してきた統一試験、及びCALL授業に関しては今回の調査で取りあげなかった。統一試験の評価については1年次生対象のアンケートで検証しているので参照されたい。また、CALL授業については毎年、各言語教育系で受講者に対してアンケート調査を実施し、結果を取りまとめて概要を報告しているが、現有設備の更新時期も視野に入れながら、近いうちに詳細な調査検証を実施すべきであろう。

最後に、英語と初習外国語と合わせて53問にも及ぶアンケートに丁寧な回答を寄せてくれた学生たちの真摯な「声」はまことに傾聴に値するものであった。外国語学習に夢や希望をもって取り組むそうした「声」に応えるためにも、今後様々な取り組みを模索していくのが大学の責務であるとの思いをあらためて強くした。

⁹ TF制度を活用した日本人学生と留学生との協調学習の場の創出の試みとして、外国語教育センター-外国語教育部門中国語教育系では、2012年度(平成24年度)の試行(注8参照)に続き、2013年度(平成25年度)も総長室事業推進経費の継続支援を受け、以下のような実験的研究を実施中である。「外国語科目『中国語Ⅱ』CALL授業におけるTF制度導入へ向けての実行可能性検証研究」(研究代表者:清水賢一郎)。

¹⁰ 東大TLPについては2013年12月18日、本報告の筆者である清水と増田が視察を行った。お忙しい中、授業見学・インタビューに丁寧にご対応くださった刈間文俊先生、石井剛先生、王前先生に、この場をお借りしてあらためて謝意を表します。

参考資料1. 英語習熟度テスト問題サンプル

Section 1 (Listening)

Part 1

“When are you going to New York?”

- (A) To visit my brother. (B) By plane. (C) Next Friday. (D) Yes, I am.

Part 2

“George has just returned home from his vacation.”

- (A) George is spending his vacation at home.
 (B) George has just finished his vacation.
 (C) George is just about to begin his vacation.
 (D) George has decided not to take a vacation.

Part 3

(man) “Are you still planning to leave for New York next Monday?”

(woman) “I’m afraid not. My husband just found out he’ll be in a meeting until late that afternoon, so we won’t be able to get started until the following morning.”

(3rd voice) “On what day does the woman expect to leave for New York?”

- (A) Sunday (B) Monday (C) Tuesday (D) Wednesday

Section 2 (Vocabulary)

Part 1

Though the flowers looked very real, they were actually _____.

- (A) artificial (B) prosperous (C) abundant (D) fundamental

Part 2

Empty

- (A) vivid (B) gross (C) slim (D) vacant

Section 3 (Structure)

“Did you get to see Professor Green today?”

“No, she was busy, _____ I’ll try to see her next week.”

- (A) so (B) although (C) because (D) that

参考資料2. 北海道大学全学教育英語カリキュラムに関するアンケート (教員アンケート)

※ マークシートの氏名欄に、所属部局名をご記入ください。また、自由記入用紙【英語】右上の欄にも所属部局名をご記入ください。

※ マークシートの1欄に、全学教育科目のご担当の有無を記してください。

- a. 全学教育科目を担当している・過去に担当したことがある
- b. 全学教育科目を担当したことはない

※ 以下の【英語】に関するアンケートは、マークシートの2～9欄および、自由記入用紙にご回答ください。

2. ご担当学部における英語カリキュラムの現状についてご存知のことはどれですか。(複数回答可)

- a. 必修単位数
- b. 英語授業の開講期 (どの期に何単位開講されているか)
- c. 英語開講科目の種類とその内容
- d. 英語科目のシラバス
- e. オンライン授業の実施
- f. TOEFL-ITP の実施
- g. 習熟度別クラス編成
- h. 英語の単位優秀認定制度
- i. 何も知らない

3. 学生に英語を履修させるのに望ましいかたちは次のうちどちらだとお考えですか。

- a. 低学年のうちに集中して履修させる
- b. 大学4年間ずっと継続して履修させる
- c. よくわからない

4. 学部レベルにおいてはどのような種類の英語力を学生に身につけさせたい、あるいは身につけさせなければならないとお考えですか。3つ選んでください。

- a. 海外旅行などで困らない程度の会話力
- b. 日本語字幕なしで映画やニュースを理解する力
- c. 時事的な記事を読みこなす力
- d. インターネットで英語資料を検索し情報収集する力
- e. 自分の研究に関する英語文献を読みこなす力
- f. 研究論文を英語で書く力
- g. 国際学会等で口頭発表する力
- h. 英語を使って人と議論したり交渉する力
- i. その他 (番号をマークした上で、自由記入用紙【英語】に具体的にご記入ください)

5. ご担当の授業(講義・ゼミ)の中で、英語を使ってどのような学習活動を行うことがありますか。(複数回答可)

- a. 教員自らが英語で講義を行う
- b. 授業のテーマに関わる (平易な) 英語の記事や文章を読ませる
- c. 英語の専門書や研究論文を読ませる
- d. 英語でレポート・(小) 論文を書かせる
- e. 英語で口頭発表をさせる
- f. 英語で議論をさせる
- g. 全くない
- h. その他 (番号をマークした上で、自由記入用紙【英語】に具体的にご記入ください)

6. 学生の英語力が今よりもっと高かったら、ご担当の授業(講義・ゼミ)の中で英語を使ってどのような学習活動を行いたいとお考えですか。(複数回答可)
- a. 教員自らが英語で講義を行う
 - b. 授業のテーマに関わる(平易な)英語の記事や文章を読ませる
 - c. 英語の専門書や研究論文を読ませる
 - d. 英語でレポート・(小)論文を書かせる
 - e. 英語で口頭発表をさせる
 - f. 英語で議論をさせる
 - g. 特にない
 - h. その他(番号をマークした上で、自由記入用紙【英語】に具体的にご記入ください)
7. 現在、一部の英語科目では、習熟度別クラス編成(英語IV[リーディング]:初級・中級、英語演習:初級・中級・上級)を導入しています。1学期に受験するTOEFL-ITPで一定のスコアに達しなかった学生には初級クラスの履修を勧めていますが、強制ではありません。また、英語演習については成績の良い学生が初級クラスを履修するケースも散見します。現在のこの措置についてどのようにお考えになりますか。
- a. 習熟度別にする必要はない
 - b. 現在のかたちで継続するのがよい
 - c. 現在よりも厳密なかたちで習熟度別にした方がよい
8. 英語演習(比較的少人数の英語科目)のクラスサイズとして、何人くらいが望ましいとお考えですか。
- a. 10人未満
 - b. 10~15人程度
 - c. 15~20人程度
 - d. 20~25人程度
9. TOEFL・TOEIC・英検対策の類の授業を増やすべきだとお考えですか。
- a. 賛成
 - b. 反対
 - c. どちらとも言えない
10. その他、北大の英語カリキュラムに望むことを自由記入用紙【英語】にお書きください。

(マークシート用紙の10欄は空欄のままにしてください)

ご協力ありがとうございました

参考資料3. 北海道大学全学教育初習外国語【英語以外】カリキュラムに関するアンケート (教員アンケート)

※ マークシートの氏名欄に、所属部局名をご記入(ご確認)ください。また、自由記入用紙【英語以外】右上の欄にも所属部局名をご記入ください。

※ 初習外国語(英語以外)に関するアンケートは、マークシートの11~22欄にご回答ください。

- 1 1. ご担当学部における英語以外の外国語カリキュラムの現状についてご存知のことはどれですか。(複数回答可)
 - a. 英語以外に「必修」科目としてご担当学部の学生が履修できる外国語(初習外国語)の種類
 - b. その修得単位数
 - c. その開講期(どの期に何単位開講されているか)
 - d. 統一試験の実施
 - e. オンライン授業(CALL)の実施
 - f. 再履修クラスが存在
 - g. 演習における習熟度別/技能別クラス編成の実施
 - h. 海外短期語学研修(演習の単位として成績評価し単位認定)の実施
 - i. 「必修以外」にご担当学部の学生が履修可能な外国語の種類
 - j. 何も知らない

- 1 2. 学生が英語以外の外国語を学習するのに適切な時期は、大学4年間のうちいつだとお考えですか。(複数回答可)
※例えば大学4年間ずっと継続して学習するべきと考える場合は1~4全てマークする)
 - a. 1年次 b. 2年次 c. 3年次 d. 4年次 e. よくわからない
 - f. その他(番号をマークした上で、自由記入用紙【英語以外】にご記入ください)

- 1 3. 英語以外の外国語について、どのような能力をご担当学部の学生に身につけさせたい、あるいは身につけさせなければならぬとお考えですか。(複数回答可)
 - a. その言語の基本的知識
 - b. その言語に関わる社会的・文化的な基本知識
 - c. 海外旅行などで困らない程度の会話力
 - d. 日本語字幕なしで映画やニュースを理解する力
 - e. 辞書を使えば、文献を読みこなせる力
 - f. 辞書なしで、文献を読みこなせる力
 - g. 議論したり、口頭発表したりする力
 - h. 論文を書く力
 - i. インターネットで資料検索し情報収集する力
 - j. その他(番号をマークした上で、自由記入用紙【英語以外】にご記入ください)

- 1 4. ご担当の授業(講義・ゼミ)の中で、英語以外のどのような外国語を使うことがありますか。(複数回答可)
 - a. ドイツ語 b. フランス語 c. ロシア語 d. スペイン語 e. 中国語 f. 韓国語
 - g. 全くない h. その他(番号をマークした上で、自由記入用紙【英語以外】にご記入ください)

- 1 5. ご担当の授業(講義・ゼミ)の中で、英語以外の外国語を使ってどのような学習活動を行うことがありますか。(複数回答可)
 - a. 文献を読ませる
 - b. レポート・(小)論文を書かせる
 - c. 口頭発表をさせる
 - d. 議論をさせる
 - e. インターネットでの資料検索や情報収集をさせる
 - f. 全くない
 - g. その他(番号をマークした上で、自由記入用紙【英語以外】にご記入ください)

16. 学生の初習外国語（英語以外）の運用能力が今よりもっと高かったら、ご担当の授業（講義・ゼミ）の中でその外国語を使ってどのような学習活動を行いたいとお考えですか。（複数回答可）
- 教員自らがその外国語で講義を行う
 - 授業のテーマに関わる（平易な）記事や文章を読ませる
 - 専門書や研究論文を読ませる
 - レポート・（小）論文を書かせる
 - 口頭発表をさせる
 - 議論をさせる
 - 特にない
 - その他（番号をマークした上で、自由記入用紙【英語以外】にご記入ください）
17. 英語以外の外国語についても各種の検定試験が行われています。各種検定試験の成績を単位として認定すべきだとお考えですか。
- 賛成
 - 反対
 - どちらとも言えない
18. 現代の日本社会において、英語以外の外国語を学ぶ必要性をお認めですか。
- 必要
 - 不要
 - どちらとも言えない
- 18-2. 上の問18で、そのように考える理由を、自由記入用紙【英語以外】にご記入ください。
19. もし、あなたが人生をやり直す機会を与えられ、今、18歳に戻り、大学に入学するとしたら、何語を学びたいですか。（複数回答可）
- ドイツ語
 - フランス語
 - ロシア語
 - スペイン語
 - 中国語
 - 韓国語
 - 英語
 - その他（番号をマークした上で、自由記入用紙【英語以外】にご記入ください）
- 19-2. 上の問19で選んだ外国語を学びたい理由を、自由記入用紙【英語以外】にご記入ください。
20. 今、あなたが、あらたに外国語を学ぶとしたら、どのような内容に重点を置いた授業を受けたいですか。（複数回答可）
- 文法を中心とした授業
 - 話すことに重点を置いた授業
 - 聞き取り重視の授業
 - 読解重視の授業
 - 読み書き話し聞く総合的な授業
 - 言語そのものよりも、その言語が話されている国の文化や歴史、社会生活などを知ることができるような異文化理解に重点を置いた授業
 - その他（番号をマークした上で、自由記入用紙【英語以外】にご記入ください）
21. 今、あなたが、あらたに外国語を学ぶとしたら、それをどのような形態で習いたいですか。（複数回答可）
- 従来通りの対面授業
 - コンピュータやインターネットを用いての授業
 - 毎週1、2回程度の授業
 - インテンシヴコース（短期集中授業）
 - 日本人教師が行う授業
 - ネイティブ教師が行う授業
 - 日本語を用いての授業
 - ほとんど日本語を用いないで、当該外国語だけで進める授業
 - その他（番号をマークした上で、自由記入用紙【英語以外】にご記入ください）
22. 英語以外の外国語演習（少人数クラス）のクラスサイズとして、何人くらいが望ましいとお考えですか。
- 10人未満
 - 10～15人程度
 - 15～20人程度
 - 20～25人程度
23. その他、北大の英語以外の外国語カリキュラムに望むことを自由記入用紙【英語以外】にお書きください。

ご協力ありがとうございました

参考資料4. 北海道大学全学教育英語・初習外国語カリキュラムに関するアンケート (1年次学生アンケート)

1. 英語アンケート

1. あなたの所属学部を教えてください。

文 教育 法 経済 理 医(医) 医(保健) 歯 薬 工
農 獣医 水産 文総合 理総合

2. あなたの英語力を自己評価してください。(所属学部の同学年中で5段階相対評価、5が最高)

5(上位20%) 4(やや上位) 3(平均的) 2(やや下位) 1(下位20%) わからない

3. あなたは1回の英語授業のために、復習も含めて、どれくらいの時間勉強をしていますか。

3時間以上 2時間以上、3時間未満 1時間以上、2時間未満 30分以上、1時間未満
30分未満 全くしていない

4. あなたは英語の授業とその予習・復習以外で、1日あたり平均でどれくらいの時間英語の勉強をしていますか。

2時間以上 1時間以上、2時間未満 30分以上、1時間未満 30分未満 全くしていない

5. あなたは授業とその予習・復習以外に、どのような形で英語に触れる機会がありますか。あてはまるものをすべて選んでください。

英語塾や英会話教室に通っている
テレビやラジオの英語講座で勉強する
英語の本や雑誌を読む
英語の映画やテレビ番組を視聴する
インターネットを通じて英語のサイトを読んだり英語音声を聴いたりする
英語でメールのやり取りをする
英語で会話をする

6. 大学4年間で英語を学習するのに適切な時期はいつだと思いますか。(複数回答可)

1年 2年 3年 4年

7. あなたはどのような種類の英語力を身に付けたい、あるいは身に付けなければならないと考えていますか。3つ選んでください。

海外旅行などで困らない程度の会話力
自分の研究に関する英語文献を読みこなす力
研究論文を英語で書く力
英語を使って人と議論したり交渉する力
国際学会等で口頭発表する力
日本語字幕なしで映画やニュースを理解する力
時事的な記事を読みこなす力
インターネットで資料検索し情報収集する力
その他(具体的に書いてください)

7-2. 上の問で、「その他」を選んだ方は、具体的にお書きください。

8. 仮に英語が選択科目となった場合、あなたは卒業までに何単位履修しますか。

選択しない 1~2単位 3~4単位 5~6単位 7~8単位 9単位以上

9. 英検・TOEFL・TOEIC 等対策の授業が、カリキュラムの一部として開講される場合、あなたは履修しますか。

履修する 履修しない どちらとも言えない

10. あなたが受けたいと思う英語の授業形態はどのようなものですか。(複数回答可)

- 少人数のゼミナール式授業
- 40人前後の講読型授業
- 英語Ⅱのようなオンライン教材等を利用した自習型授業
- 学生が英語で話す機会の多い授業
- 夏休みなどを利用して集中的に開講されるインテンシブ・コース
- 専門の内容を英語教材で学ぶ授業
- 専門の内容の講義が英語で行われる授業
- その他

10-2. 上の問で「その他」を選んだ人は、具体的にどのような授業かをお書きください。

11. あなたが英語を学ぶ動機は何ですか。以下の選択肢から、優先順位の高いものを最大3つまで選んでください。

- 必修単位だから
- 英語が好きだから
- 英語圏の国々の社会や文化に興味があるから
- 英語でなければ学べない情報や専門知識があるから
- 海外留学したいから
- 就職活動の際に有利になる可能性があるから
- 将来の研究や仕事で必要になる可能性があるから
- 日本での生活で将来必要になる可能性があるから
- 英語圏で将来生活する可能性があるから
- 教養として必要なものだと思うから

12. その他、北大の英語カリキュラムに望むことを自由にお書きください。

■アンケートは「初習外国語」(英語以外)に続きます

2. 初習外国語 (英語以外) アンケート

1. あなたが英語以外に必修科目として選択した外国語(「初習外国語」と呼ぶ)は何語ですか。(「2つ目の初習外国語」を選んだ人は2つとも選択してください。)

- a. ドイツ語 b. フランス語 c. ロシア語 d. スペイン語 e. 中国語 f. 韓国語 g. 日本語

2. 上の問1の外国語を選択した理由は何ですか。(複数回答可)

- a. その外国語が話されている地域の社会や文化に関心があるから
- b. 自分の専門の勉強をするうえで必要になるから
- c. 将来、役に立ちそうだから
- d. 他の外国語よりもやさしそうだから
- e. 以前、学習した経験があるから
- f. その他(次の問で具体的に書いてください)

2-2. 上の問2で「その他」を選択した場合は、具体的にお書きください。

3. 仮に外国語科目が選択科目であったなら、あなたはどのような選択をしていたと思いますか。入学時の自分を想定して答えてください。

- a. 英語と英語以外の外国語の双方を履修していた
- b. 英語だけを履修していた
- c. 英語以外の外国語だけを履修していた
- d. 外国語は履修しなかった
- e. その他(次の間で具体的に書いてください)

3-2. 上の問3で「その他」を選択した場合は、具体的にお書きください。

4. 実際に外国語の授業を受けてみて、北大生の外国語学習はどうあるべきだと思いますか。

- a. 英語を学ぶのは当然だが、英語だけでなく英語以外の外国語も学ぶべきである
- b. 英語以外の外国語は必ずしも学ぶ必要はない
- c. 英語に限らず複数の外国語を学ぶことが重要である
- d. 英語に限らず最低一つは外国語を学ぶべきである
- e. その他(次の間で具体的に書いてください)

4-2. 上の問4で「その他」を選択した場合は、具体的にお書きください。

5. 英語以外の外国語について、どのような能力を身につけたいと思いますか。(複数回答可)

- a. その言語の発音・文法・語彙などの基本的知識
- b. その言語に関わる社会的・文化的な基本知識
- c. 海外旅行などで困らない程度の会話力
- d. 日本語字幕なしで映画やニュースを理解する力
- e. 辞書を使えば、文献を読みこなせる力
- f. 辞書なしで、文献を読みこなせる力
- g. 人と議論したり、交渉したりする力
- h. 論文を書く力
- i. 国際学会等で口頭発表する力
- j. インターネットで資料検索し情報収集する力
- k. その他(次の間で具体的に書いてください)

5-2. 上の問5で「その他」を選択した場合は、具体的にお書きください。

6. 問5で選んだ能力を身につけるために、現在履修している授業に付け加えるとしたら、どのような授業が自分に必要だと思いますか。(複数回答可)

- a. 文法を強化する授業
- b. 話すことに重点を置いた授業
- c. 聞き取りに重点を置いた授業
- d. 読むこと(読解)に重点を置いた授業
- e. 書くことに重点を置いた授業
- f. 読み書き話し聞く総合的な授業
- g. 言語そのものよりも、その言語が話されている国の文化や歴史、社会生活などを知ることができるような異文化理解に重点を置いた授業
- h. インターネット等を利用して、日常生活や世界的なニュースや話題をテーマにする授業
- i. その他(次の間で具体的に書いてください)

6-2. 上の問6で「その他」を選択した場合は、具体的にお書きください。

7. あなたは英語以外の外国語(問1で選択した「初習外国語」)の授業で求められている到達目標をどの程度達成できましたか。
- a. 十分に達成できた b. ある程度達成できた c. どちらとも言えない
d. 十分でなかった e. まったく不十分だった
8. あなたは英語以外の外国語の授業1回のために、予習や復習の時間を平均してどのくらいかけていますか。
- a. 3時間以上 b. 2時間以上 c. 1時間以上 d. 30分以上 e. 30分未満
f. まったくしていない
9. 英語以外の外国語では成績評価の一環として統一試験が導入されています。あなたはこの試験方式をどう評価しますか。
- a. とても良い b. おおむね良い c. どちらとも言えない
d. やや不満である e. 大いに不満である
10. あなたは英語以外の外国語の成績評価が厳正に行われていると思いますか。
- a. そう思う b. おおむねそう思う c. どちらとも言えない
d. あまりそうは思わない(理由を下に書いてください)
e. まったくそうは思わない(理由を下に書いてください)
- 10-2. 上の問10で、「あまりそう思わない」あるいは「まったくそう思わない」を選んだ方は、そのように考える理由をお書きください。
11. 英語以外の外国語についても各種の検定試験が実施されています。もしこれらの検定試験の成績が単位として認定されるとしたら、あなたはそれを利用したいと思いますか。
- a. ぜひ利用したい b. 条件しだいで利用したい c. どちらとも言えない
d. さほど利用したいとは思わない e. まったく利用する気持ちはない
12. 外国の大学等で行われている語学研修に参加した場合、その成績が演習の単位として認定されることを知っていましたか。
- a. 知っていた b. 知らなかった
13. 問12に関連しておたずねします。外国の大学等で行われている語学研修に参加することを希望しますか。
- a. 強く希望する b. ある程度希望する c. どちらとも言えない
d. あまり希望しない e. まったく希望しない
14. 英語以外の外国語で開講されている選択科目(「初習外国語の演習」や「外国語特別演習(イタリア語、ラテン語、フィンランド語、広東語等のいわゆる第3外国語)」)のカリキュラムについてどのように考えますか。
- a. 高く評価できる b. おおむね評価できる c. どちらとも言えない
d. あまり評価できない e. まったく評価できない
- 14-2. 上の問14で、そのように考える理由をお書きください。
15. その他、北大の英語以外の外国語カリキュラムに望むことを自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました

参考資料5. 北海道大学全学教育英語・初習外国語カリキュラムに関するアンケート
(高年次学生アンケート)

1. 該当する学年をお選びください。(留年等により学年が重複している場合は、制度上の学年でお答えください。たとえば、3年目2年生の場合、2年生と回答してください。)

大学2年生 大学3年生 大学4年生 大学院修士1年生 大学院修士2年生
大学院博士1年生 大学院博士2年生 大学院博士3年生

2. あなたの所属学部・大学院をお選びください。

<学部>

文学部 教育学部 法学部 経済学部
理学部 医学部 歯学部 薬学部 工学部 農学部 獣医学部 水産学部

<大学院>

文学研究科 教育学院 法学研究科/法科大学院 経済学研究科/会計専門職大学院
理学院 総合化学院 医学研究科 保健科学院 歯学研究科 工学院 農学院
獣医学研究科 水産科学院 環境科学院 生命科学院
国際広報メディア・観光学院 情報科学研究科 公共政策大学院

■ 先ず、短期留学語学研修プログラムの単位認定についてお聞きします。

3. 外国の大学等で行われている語学研修(大学指定のプログラム)に参加した場合、その成績が演習の単位として認定されることを知っていましたか。

知っていた 知らなかった

4. 上の問3に関連してお聞きします。外国の大学等で行われている語学研修(大学指定で単位認定されるプログラム)に参加することを希望しますか。

強く希望する ある程度希望する どちらとも言えない
あまり希望しない まったく希望しない 実際に参加した

5. 上の問4で参加を「強く希望する」、「ある程度希望する」、あるいは「実際に参加した」と答えた方にお聞きします。以下のどの語学研修プログラムを希望しますか、あるいは実際に参加しましたか。(複数回答可)

英語の語学研修プログラム(英語圏以外にある大学を含む)を希望する
英語の語学研修プログラム(英語圏以外にある大学を含む)に参加した
英語以外の言語の語学研修プログラムを希望する
英語以外の言語の語学研修プログラムに参加した

■ 次に、英語教育についてお聞きします。

6. 本学の全学教育1年目の英語教育を履修しましたか。

はい いいえ

7. 上の問6で「はい」と答えた方にお聞きします。次の全学教育英語科目は、あなたの現在の学習・研究に役だっていると思いますか。役だっていると思うもの全てをお選びください。(複数回答可)

英語Ⅰ(パラグラフ・ライティングとオーラル・プレゼンテーションの基礎)
英語Ⅱ(オンライン授業による総合英語)
英語Ⅲ(技能別必修選択授業)
英語Ⅳ(リーディング)
英語演習(テーマ別の発展的英語授業)

8. 上の問7で役に立つ英語授業があったと答えた方にお聞きします。現在役だっていると思う内容を具体的にお答えください。

9. 全員にお聞きします。大学4年間で英語を学習するのに適切な時期はいつだと思いますか。(複数回答可)

1年 2年 3年 4年

10. 仮に英語が選択科目となった場合、あなたは卒業までに何単位履修しますか。

選択しない 1~2単位 3~4単位 5~6単位 7~8単位 9単位以上

11. あなたはどのような種類の英語力を身に付けたい、あるいは身に付けなければならないと考えていますか。3つ選んでください。

海外旅行などで困らない程度の会話力

自分の研究に関する英語文献を読みこなす力

研究論文を英語で書く力

英語を使って人と議論したり交渉する力

国際学会等で口頭発表する力

日本語字幕なしで映画やニュースを理解する力

時事的な記事を読みこなす力

インターネットで資料検索し情報収集する力

その他(次の間で具体的に書いてください)

12. 上の問11で「その他」と答えた方は、具体的にお答えください。

13. あなたが英語を学ぶ動機は何ですか。以下の選択肢から、優先順位の高いものを最大3つまで選んでください。

必修単位だから

英語が好きだから

英語圏の国々の社会や文化に興味があるから

英語でなければ学べない情報や専門知識があるから

海外留学したいから

就職活動の際に有利になる可能性があるから

将来の研究や仕事で必要になる可能性があるから

日本での生活で将来必要になる可能性があるから

英語圏で将来生活する可能性があるから

教養として必要なものだと思うから

14. 現在、あなたはどのような点で英語を必要としていますか。(複数回答可)

専門書・論文を原書で読む

インターネットで英語文献を検索したり、研究に関する情報を入手したりする

英語の講義、口頭発表、DVDや動画・音声ファイルなどでの英語資料を聞いて理解する

英語で授業のレジュメやレポート、学会の口頭発表の要旨、学術ジャーナルへの投稿論文を執筆する

国際学会等において英語で口頭発表し、質疑応答する

英語で留学生や海外の研究者と話し合う

留学、学会参加、研究のデータ収集を目的とした旅行の準備や実施で英語を使う

その他(次の間で具体的に書いてください)

15. 上の問14で「その他」と答えた方は、具体的にお答えください。

16. 現在、英語による講義や討議を行う授業を、どれくらい受講していますか。

週1コマ 週2コマ 週3コマ 週4コマ 週5コマ以上 ない

17. 現在、あなたが授業以外で英語を話したり、使ったりする機会はどれくらいありますか。もっとも近いと思うものを1つ選んでください。

ほぼ毎日、1日中

ほぼ毎日、1日の半分程度

ほぼ毎日、2、3時間以内

週に3日程度

週に1回程度

ない

18. あなたが受けたいと思う英語の授業形態はどのようなものですか。あるいは、あなたがこれまでに受けた授業の形態で、自分のためになったのはどのようなものですか。(複数回答可)

- 少人数のゼミナール式授業
- 40人前後の講読型授業
- 英語Ⅱのようなオンライン教材等を利用した自習型授業
- 学生が英語で話す機会の多い授業
- 夏休みなどを利用して集中的に開講されるインテンシヴ・コース
- 専門の内容を英語教材で学ぶ授業
- 専門の内容の講義が英語で行われる授業
- その他(次の間で具体的に書いてください)

19. 上の問18で「その他」と答えた方は、具体的にお答えください。

20. 2年生以降に英語力を補強する語学としての英語クラスが提供された場合、あなたは受講したいと思いますか。

- ぜひ受講したい
- 時間割の制約が許す範囲内で積極的に受講したい
- 受講したいが、他にやらなければならないことが多くて事実上無理やりたくない、あるいは必要がないので受講しない

21. 英検・TOEFL・TOEIC等の対策の授業がカリキュラムの一部として開講される場合、あなたは履修しますか。

- ぜひ受講したい
- 時間割の制約が許す範囲内で積極的に受講したい
- 受講したいが、他にやらなければならないことが多くて事実上無理やりたくない、あるいは必要がないので受講しない

22. 次のうち、あなたにあてはまるものをお答えください。(複数回答可)

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 英語単位優秀認定を受けた | 実用英語技能検定(英検) 準1級・1級に合格した |
| TOEFL-ITP及びPBTで530点以上を取得した | TOEFL-CBTで197点以上を取得した |
| TOEFL-iBTで71点以上を取得した | TOEIC(-IP)で680点以上を取得した |

23. 英語圏の地域への留学経験はありますか。

- | | | |
|----------------|---------------|----|
| 夏休み・春休みの短期語学留学 | 1セメスター以上の語学留学 | |
| 正規留学1年以内 | 正規留学1年より長期 | ない |

24. これから英語圏の地域に留学する予定あるいは希望はありますか。

- | | | | |
|-----------------------|--------------------------|------------|----|
| 夏休み・春休みの短期語学留学 | 1クォーター、あるいは1セメスター以上の語学留学 | | |
| 正規留学1クォーター、あるいは1セメスター | 正規留学1年 | 正規留学1年より長期 | ない |

25. 自分で英語に触れる機会を増やそうと努力していることがあったらお答えください。(複数回答可)

- 英語塾や英会話教室に通っている
- テレビやラジオの英語講座で勉強する
- 英語に関連したクラブ・サークル活動に参加する
- 英語の本や雑誌を読む
- 英語の映画やテレビ番組を視聴する
- インターネットを通じて英語のサイトを読んだり英語音声を聴いたりする
- 英語でメールのやり取りをする
- 英語話者を探して、英語で会話をする
- その他(次の間で具体的に書いてください)

26. 上の問25で「その他」と答えた方は、具体的にお答えください。

27. その他、北大の英語カリキュラムに望むことを自由にお書きください。

■以下、英語以外の外国語についてお聞きます。

28. あなたが北大の全学教育 1 年目で英語以外に必修科目として選択した外国語(初習外国語)は何語ですか。

(「2つ目の初習外国語」を選んだ人は2つとも選択してください。)

ドイツ語 フランス語 ロシア語 スペイン語 中国語 韓国語
日本語 北大では履修していない

29. 上の問28の外国語を選択した理由は何ですか。(複数回答可)

その外国語が話されている地域の社会や文化に関心があるから
自分の専門の勉強をするうえで必要になるから
将来、役に立ちそうだから
他の外国語よりもやさしそうだから
以前、学習した経験があるから
その他(次の問で具体的に書いてください)

30. 上の問29で「その他」を選択した場合は、具体的にお書きください。

31. 仮に外国語科目が選択科目であったなら、あなたはどのような選択をしていたと思いますか。入学時の自分を想定して答えてください。

英語と英語以外の外国語の双方を履修していた
英語だけを履修していた
英語以外の外国語だけを履修していた
外国語は履修しなかった
その他(次の問で具体的に書いてください)

32. 上の問31で「その他」を選択した場合は、具体的にお書きください。

33. 実際に外国語の授業を受けてみて、北大生の外国語学習はどうあるべきだと思いますか。

英語を学ぶのは当然だが、英語だけでなく英語以外の外国語も学ぶべきである
英語以外の外国語は必ずしも学ぶ必要はない
英語に限らず複数の外国語を学ぶことが重要である
英語に限らず最低一つは外国語を学ぶべきである
その他(次の問で具体的に書いてください)

34. 上の問33で「その他」を選択した場合は、具体的にお書きください。

35. 英語以外の外国語について、どのような能力を身につけたいと思いますか。(複数回答可)

その言語の発音・文法・語彙などの基本的知識
その言語に関わる社会的・文化的な基本知識
海外旅行などで困らない程度の会話力
日本語字幕なしで映画やニュースを理解する力
辞書を使えば、文献を読みこなせる力
辞書なしで、文献を読みこなせる力
人と議論したり、交渉したりする力
論文を書く力
国際学会等で口頭発表する力
インターネットで資料検索し情報収集する力
その他(次の問で具体的に書いてください)

36. 上の問35で「その他」を選択した場合は、具体的にお書きください。

37. 大学 4 年間で英語以外の外国語を学習するのに適切な時期はいつだと思いますか。(複数回答可)

1 年 2 年 3 年 4 年

38. 現在、英語以外の外国語で講義を受けたり、討議をする授業を受けていますか。

週1コマ 週2コマ 週3コマ 週4コマ 週5コマ以上 ない

39. 現在、どのような点で英語以外の外国語を必要としていますか。あてはまるものをすべて選んでください。

専門書・論文を原書で読む
インターネットで文献を検索したり、研究に関する情報を入手する
その外国語での講義、口頭発表、DVDや動画・音声ファイルなどの原語の資料を聞いて理解する
その外国語で授業のレジュメやレポート、学会の口頭発表の要旨、学術ジャーナルへの投稿論文を執筆する
その外国語で留学生や海外の研究者と話し合う
国際学会等で口頭発表し、質疑応答する
短期留学、学会参加、研究のデータ収集を目的とした旅行などの準備や実施をする
その他(次の間で具体的に書いてください)

40. 上の問39で「その他」と答えた方は、具体的にお答えください

41. あなたは授業や研究以外に、どのような形で英語以外の外国語に触れる機会がありますか。あてはまるものをすべて選んでください。

英語以外の外国語の会話教室等に通っている
テレビやラジオの講座で勉強する
クラブ・サークル活動に参加する
その外国語の本や雑誌を読む
その外国語の映画やテレビ番組を視聴する
インターネットを通じてその外国語のサイトを読んだり音声・動画を視聴したりする
その外国語でメールのやり取りをする
その外国語で会話をする
その他(次の間で具体的に書いてください)

42. 上の問41で「その他」と答えた方は、具体的にお答えください

43. 英語以外の外国語についても各種の検定試験が実施されています。もしこれらの検定試験の成績が単位として認定されるとしたら、あなたはそれを利用したいと思いますか。

ぜひ利用したい 条件しだいで利用したい どちらとも言えない
さほど利用したいとは思わない まったく利用する気持ちはない

44. 英語以外の外国語の検定試験を受験したことはありますか。

はい いいえ

45. 上の問44で「はい」と答えた方は、受験した試験の名称と具体的な級・スコア(だいたい結構です)をお書きください。

46. 英語圏以外の地域への留学経験はありますか。

夏休み・春休みの短期語学留学 1セメスター以上の語学留学
正規留学1年以内 正規留学1年より長期 ない

47. 英語圏以外の地域にこれから留学する予定や希望はありますか。

夏休み・春休みの短期語学留学 1セメスター以上の語学留学
正規留学1年以内 正規留学1年より長期 ない

48. 北大では英語以外の外国語で様々な選択科目(「初習外国語の演習」や「外国語特別演習(イタリア語、ラテン語、フィンランド語、広東語等のいわゆる第3外国語)」)が開講されていますが、そのカリキュラムについてどのように考えますか。

高く評価できる おおむね評価できる どちらとも言えない
あまり評価できない まったく評価できない よく分からない

49. 上の問48で、そのように考える理由をお書きください。

50. 2年次以降に英語以外の外国語運用能力を補強するクラスが提供された場合、あなたは受講したいと思いますか。

ぜひ受講したい

時間割の制約が許す範囲内で積極的に受講したい

受講したいが、他にやらなければならないことが多くて事実上無理

やりたくない、あるいは必要がないので受講しない

51. あなたが受けたいと思う英語以外の外国語の授業形態・内容はどのようなものですか。(複数回答可)

文法を強化する授業

聞き取りに重点を置いた授業

言語そのものよりも、その言語が話されている国の文化や歴史、社会生活などを知ることができるような異文化理解

に重点を置いた授業

インターネット等を利用して、日常生活や世界的なニュースや話題をテーマにする授業

学生が話す機会の多いスピーキングの授業

40人前後の講読型授業

その外国語で文章・論文などを執筆するライティングの授業

その外国語で発表するスキルを学ぶプレゼンテーションの授業

少人数のゼミナール式授業

オンライン教材等を利用した自習型授業

夏休みなどを利用して集中的に開講されるインテンシヴ・コース

専門の内容を英語以外の外国語の教材で学ぶ授業

専門の内容の講義が英語以外の外国語で行われる授業

その他(次の間で具体的に書いてください)

52. 上の問51で「その他」と答えた方は、具体的にお答えください。

53. その他、北大の英語以外の外国語カリキュラムに望むことを自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました

執筆者紹介

(五十音順)

- 河合 靖 (かわい・やすし) 大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授
外国語教育センター 外国語教育部門 英語教育系
- 清水賢一郎 (しみず・けんいちろう) 大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授
外国語教育センター 外国語教育部門 中国語教育系
- 園田 勝英 (そのだ・かつひで) 大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授
外国語教育センター 外国語教育部門 英語教育系
- 辻本 篤 (つじもと・あつし) 大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授
外国語教育センター 外国語教育部門 英語教育系
- 土田 映子 (つちだ・えいこ) 大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授
外国語教育センター 外国語教育部門 英語教育系
- 寺田 龍男 (てらだ・たつお) 大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授
外国語教育センター 外国語教育部門 ドイツ語教育系
- 原田 真見 (はらだ・まみ) 大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授
外国語教育センター 外国語教育部門 英語教育系
- 増田 哲子 (ますだ・のりこ) 大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授
外国語教育センター 外国語教育部門 言語文化教育系
[スペイン語]

全学教育外国語に関する意識調査と 北大生の英語力の変化

発行日——2014年3月28日

編 者——河合 靖・清水賢一郎

編 集——外国語教育センター 外国語教育将来構想ワーキンググループ

発 行——北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院

060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

(011) 716-2111 (代表)